

# 常呂川河口遺跡

—常呂川河口右岸掘削護岸工事に係る発掘調査報告書—

2005

北海道常呂町教育委員会



1. 発掘調査風景 (北側より撮影)



2. 121号墓穴埋土堆積状況 (カワシンジュ貝主体の貝層)



1. 122号竪穴住居跡 (擦文期)



2. 122号竪穴カマド・土器出土状況



1. 127b号竪穴住居跡 (統繩文期)



2. 137号竪穴住居跡 (トビニタイ文化期)



1. 781号土墳墓（統繩文後北C<sub>1</sub>・D式）



2. 781号土墳墓土器出土状況



1. 795号土墳墓（統繩文期）



2. 795土墳墓遺物出土狀況



1. 714号土墳墓 (統繩文期)



2. 714号土墳墓遺物出土狀況



1. 705号土墳墓 (統繩文字津内Ⅱa式)



2. 797a号土墳墓 (縄文晩期後葉幣舞式)





1. 783号土墳墓上部配石・土器出土状況



2. 783号土墳墓（細文晩期後葉幣舞式）



1. 711号土墳墓上部配石



2. 711号土墳墓（縄文晩期後葉）



1. 782号土壙墓 (縄文晩期後葉)



2. 782号土壙墓 櫛・勾玉・丸玉出土状況

## 序 文

北海道のオホーツク海沿岸には大小の湖沼が数多くあります。常呂町にもわが国3番目の面積をもつサロマ湖と幾つかの沼があります。湖沼は森林と一体となって残されているため野鳥、小動物が多く集まります。このような場所は狩猟・漁労を中心とした生活を行っていた先住民にとって最適な場所であり、周辺の台地には実に多くの遺跡が残されています。町内には竪穴総数2,500軒以上に及ぶ史跡常呂遺跡をはじめとして130箇所の遺跡が発見されています。この史跡常呂遺跡は本年11月に網走市モヨロ貝塚、斜里町朱円環状周壕墓、白滝村遺跡とともに「オホーツク海古代文化の遺跡群」として北海道遺産に選定されました。常呂町にはワッカ原生花園も平成13年に北海道遺産に選定されています。文化遺産としての遺跡と自然遺産である原生花園がサロマ湖畔の同一区域に遺されているわけです。全国的にみても稀な恵まれた町と言えるでしょう。遺跡とそれを取り巻く周辺環境は地域のかげがえのない財産であり、郷土学習や文化財理解のために活用していかなければならないと考えています。

今回の発掘調査は常呂川河口右岸掘削護岸工事に伴うもので昭和63年から継続してきたものです。その成果の一部は4巻の「常呂川河口遺跡発掘調査報告書」としてまとめられ、今回は5巻目となります。これまでの報告同様にお墓に埋納された遺物に特色がある様です。約2,000年前の墓からは漆製の櫛、新潟県糸魚川産のヒスイ製の飾り物が発見されています。赤く染られた櫛は常呂に住んでいた人々が製作したものだろうか。糸魚川産のヒスイ製の飾り玉はだれが作り、どの地域を經由して来たのだろうか。そしてこれらを身に付けていた人はどの様な人物だったのだろうか。素朴な疑問が思い浮かべれます。1,800年前のお墓からも琥珀製の装飾品が発見されています。常呂川河口周辺に住んでいた人々は実に多量の琥珀玉を持っていることが明らかになっています。道内各地から琥珀玉の装飾品は発見されていますが、どの地域の琥珀なのか不明とされています。まだまだ、多くが謎といっても過言ではありません。その謎を解き明かすために遺跡を守っていくことが現代社会の私たちの責務であり、地域住民の責任とも言えるでしょう。

最後に調査当初から北海道教育委員会、北海道埋蔵文化財センター、東京大学名誉教授（現国学院大学教授）藤本強氏、東京大学大学院人文社会系研究科教授宇田川洋氏をはじめ関係各位から多大なご協力を頂きました。衷心より感謝申し上げるしだいで。

平成17年3月

北海道常呂町教育委員会

教育長 谷 昭廣

## 例 言

1. 本書は、主に平成8年・9年に実施した常呂川河口右岸掘削護岸工事に係る常呂川河口遺跡（TK73遺跡）の緊急発掘調査の報告書である。各年度の調査面積は平成8年度2,200㎡、平成9年度8,000㎡である。このうち平成9年度の4,500㎡はアイヌ文化期の木製品が出土した低湿地のトレンチ調査であり、同様の遺物が出土した隣接地の平成13・14年度調査分と合わせ最終巻で報告する。
2. 本遺跡は北海道常呂町字常呂100-1番地先にある。遺跡の登録番号は「-16-128」である。
3. 発掘調査は網走開発建設部から委託を受けて、常呂町教育委員会が主体となって実施した。
4. 本書の執筆は武田修・佐々木寛。編集は武田修が行った。
5. 附編Ⅰの動物骨の分析については下記の方に依頼した。  
名古屋大学大学院人間情報学研究所 助教授 新美倫子
6. 写真撮影は遺構を渡部高士、遺物を武田修が行った。
7. 各種遺物の実測図、トレースは恒常的な整理員である吉田義子、加藤雪江、大西信子、矢萩友子、阿部真子が行った。
8. ビット847・849は欠番とした。
9. 平成8年度の調査体制

調査期間 平成8年5月9日～10月31日

調査担当者 武田 修

調査員 佐々木寛

調査補助員 渡部高士、井澤昭彦

事務 馬淵和恵

作業員 後藤幸三郎、後藤謙、水室福二、藤田伊玲、白井三郎、工藤清、大野正男、鈴木直、室田恵美、大谷俊子、高木貴美子、清永順子、齋田すみれ、栗原アツ子、近江谷光栄、武田美津子、日脇京子、三好昭子、後藤チエ子、矢野みどり、佐藤成子、佐藤美代、大沼篤子、杉田弘子、熊谷弘子

整理員 吉田義子、加藤雪江、大西信子、矢萩友子、日脇京子、中村萬亀子、清永順子、高木貴美子、近江谷さゆり、諸岡英子、夏川悦子、根本郁代、加藤幸恵、仙石京子、山口美紀、木村いづみ

10. 平成9年度の調査体制

調査期間 平成9年5月9日～10月31日

調査担当者 武田 修

調査員 佐々木寛

調査補助員 渡部高士

事務 林 尚美

作業員 後藤謙、水室福二、藤田伊玲、臼井三郎、工藤清、大野正男、鈴木直、原田聖吾、渡辺政彦、室田恵美、大谷俊子、高木貴美子、清永順子、栗原アサ子、近江谷光栄、武田美津子、武田寿子、日脇京子、後藤チエ子、佐藤成子、佐藤美代、佐々木清子、大沼篤子、杉田弘子、熊谷弘子、諸岡英子、阿部喜代子

整理員 吉田義子、加藤雪江、大西信子、矢萩友子、日脇京子、阿部真子、中島隆子、山田咲子、諸岡英子、根本郁代、加藤幸恵

11. 発掘調査及び報告書作成の整理作業には、下記の方々のご指導・助言を得た。記して感謝の意を表するしだいです。

国学院大学文学部 藤本強、東京大学大学院人文社会系研究科 宇田川洋、同 山田哲、東京大学大学院新領域創成科学研究科 佐藤宏之、日本学術振興会研究員 福田正宏、北海道教育委員会 大沼忠春、同 種市幸生、名古屋大学大学院人間情報学研究所 新美倫子、文化財サポート局 豊原照司、北海道埋蔵文化財センター 熊谷仁、紋別市立博物館 佐藤和利、斜里町知床博物館 合地信生、同 松田功、余市町水産博物館 乾芳弘

# 目 次

序 文	常呂町教育委員会 教育長 谷 昭 廣 ……	i
例 言	……………	ii
第Ⅰ章	調査に至る経過 ……	1
第Ⅱ章	遺跡の地形と基本土層 ……	3
第Ⅲ章	周辺の遺跡 ……	7
第Ⅳ章	竪穴住居 ……	13
第Ⅴ章	ピット ……	167
第Ⅵ章	まとめ ……	347

## 付 編

付編Ⅰ	常呂川河口遺跡平成8・9年度調査出土の動物遺体 ……	349
-----	----------------------------	-----

名古屋大学大学院人間情報学研究所

助教授 新美倫子

## 挿 図 目 次

第1図	基本層序模式図……………4	第31図	126号竪穴平面図……………45
第2図	地形模式図……………6	第32図	126号竪穴床面・埋土出土石器…46
第3図	常呂川河口遺跡の位置と周辺の遺跡……………8	第33図	126号竪穴埋土出土石器……………47
第4図	遺構配地図……………11	第34図	126号竪穴埋土出土石器……………48
第5図	121号竪穴平面図……………14	第35図	126号竪穴埋土出土石器……………49
第6図	121号竪穴床面・埋土出土石器・土製品……………15	第36図	126号竪穴埋土出土石器……………50
第7図	121号竪穴埋土出土石器……………16	第37図	125号竪穴埋土、126号竪穴埋土出土石器……………51
第8図	122号竪穴平面図……………18	第38図	126号竪穴埋土、126a号竪穴床面・埋土出土石器……………52
第9図	122号竪穴床面・カマド・埋土出土石器……………19	第39図	126a号竪穴床面・埋土出土石器……………53
第10図	122号竪穴埋土出土石器……………20	第40図	126a号竪穴平面図……………54
第11図	122号竪穴埋土出土石器……………21	第41図	127号竪穴平面図……………55
第12図	121号竪穴埋土、122号竪穴埋土出土石器・骨製品……………22	第42図	127号竪穴床面・埋土出土石器…57
第13図	123号竪穴、123a号竪穴、ビット765、767、768、770、771、775、844平面図……………24	第43図	127号竪穴埋土出土石器……………58
第14図	123号竪穴埋土出土石器……………25	第44図	127号竪穴床面・埋土、127a号竪穴床面・埋土出土石器……………59
第15図	123号竪穴埋土出土石器……………26	第45図	127a号竪穴平面図……………60
第16図	123号竪穴埋土出土石器……………27	第46図	127a号竪穴床面・埋土出土石器……………62
第17図	123a号竪穴埋土出土石器……………28	第47図	127a号竪穴埋土出土石器……………63
第18図	123a号竪穴埋土・内ビット出土石器……………29	第48図	127b号竪穴平面図……………65
第19図	123号竪穴床面・埋土・内ビット、123a号竪穴埋土出土石器……………30	第49図	127b号竪穴埋土出土石器……………66
第20図	123a号竪穴埋土、123b号竪穴埋土出土石器……………31	第50図	127b号竪穴埋土出土石器……………67
第21図	123b号竪穴、ビット892平面図…33	第51図	127b号竪穴埋土出土石器……………68
第22図	123b号竪穴埋土出土石器……………34	第52図	127b号竪穴床面・埋土出土石器……………69
第23図	123b号竪穴埋土出土石器……………35	第53図	128号竪穴、128a号竪穴、ビット773、774平面図……………72
第24図	124号竪穴、ビット763平面図…37	第54図	128号竪穴床面・埋土出土石器…73
第25図	124号竪穴床面・埋土出土石器…38	第55図	128号竪穴埋土出土石器……………74
第26図	124号竪穴埋土出土石器……………39	第56図	128a号竪穴床面・埋土出土石器……………75
第27図	124号竪穴埋土出土石器……………40	第57図	128号竪穴床面・埋土、128a号竪穴床面・埋土出土石器……………76
第28図	124号竪穴埋土出土石器……………41	第58図	129号竪穴平面図……………78
第29図	125号竪穴平面図……………42	第59図	129号竪穴床面・埋土出土石器…79
第30図	125号竪穴カマド・埋土出土石器……………43	第60図	129号竪穴埋土出土石器……………80
		第61図	129号竪穴床面・埋土出土石器…81



第62図	129号竪穴埋土出土石器	82	第93図	133号竪穴、ビット897、898 平面図	117
第63図	129a号竪穴平面図	84	第94図	133号竪穴床面・埋土出土石器	118
第64図	129a号竪穴床面・埋土出土 石器	85	第95図	133号竪穴埋土出土石器	119
第65図	129b号竪穴平面図	86	第96図	133号竪穴埋土出土石器	120
第66図	129b号竪穴床面直上出土石器	87	第97図	133号竪穴床面・焼土・埋土出土 石器	121
第67図	129b号竪穴床面直上・埋土出土 石器	88	第98図	133号竪穴埋土出土石器	122
第68図	129b号竪穴埋土出土石器	89	第99図	133a号竪穴、133b号竪穴 平面図	124
第69図	129c号竪穴平面図	90	第100図	133a号竪穴床面・埋土出土 石器	125
第70図	129c号竪穴床面出土石器	91	第101図	133b号竪穴床面・埋土出土 石器	126
第71図	129c号竪穴床面・床面直上・ 埋土出土石器	92	第102図	133a号竪穴床面・埋土、133b号 竪穴床面・埋土出土石器	127
第72図	129a号竪穴柱穴・埋土、129b号 竪穴埋土・表土、129c号竪穴埋 土出土石器	93	第103図	134号竪穴平面図	128
第73図	130号竪穴、ビット840、841、842、 842a、842b、843、845、846、 848平面図	95	第104図	134号竪穴床面直上・埋土出土 石器	129
第74図	130号竪穴 A 生活面・B 生活面 平面図	96	第105図	135号竪穴平面図	131
第75図	130号竪穴床面・炉址内・埋土 出土石器	97	第106図	135号竪穴床面出土石器	132
第76図	130号竪穴埋土出土石器	98	第107図	135号竪穴埋土出土石器	133
第77図	130号竪穴埋土出土石器	99	第108図	135号竪穴埋土出土石器	134
第78図	130号竪穴埋土出土石器	100	第109図	135号竪穴埋土出土石器	135
第79図	130号竪穴床面・炉址内・埋土 出土石器	101	第110図	134号竪穴埋土、135号竪穴床面 ・埋土出土石器	136
第80図	131号竪穴遺物出土状況	103	第111図	135号竪穴埋土出土石器	137
第81図	131号竪穴平面図	104	第112図	135a号竪穴、ビット796 平面図	139
第82図	131号竪穴カマド・埋土・表土 出土石器・土製品	105	第113図	135a号竪穴埋土出土石器	140
第83図	131号竪穴表土出土石器	106	第114図	135a号竪穴埋土出土石器	141
第84図	131号竪穴埋土・表土出土石器	107	第115図	135a号竪穴埋土出土石器	142
第85図	131a号竪穴平面図	108	第116図	135a号竪穴埋土出土石器	143
第86図	131a号竪穴埋土出土石器	109	第117図	135a号竪穴埋土出土石器	144
第87図	132号竪穴平面図・遺物出土 状況	110	第118図	135a号竪穴床面・埋土出土 石器	145
第88図	132号竪穴床面・埋土出土石器	111	第119図	135a号竪穴埋土出土石器	146
第89図	132号竪穴埋土出土石器	112	第120図	136号竪穴平面図	147
第90図	132号竪穴埋土出土石器	113	第121図	136号竪穴埋土出土石器	148
第91図	132号竪穴埋土出土石器	114	第122図	136号竪穴埋土出土石器	149
第92図	132号竪穴埋土出土石器	115	第123図	136号竪穴埋土出土石器	150
			第124図	137号竪穴平面図	152
			第125図	137号竪穴床面・埋土出土石器	

	・土製品 ……………153
第126図	137号整穴埋土、137a号整穴埋土出土石器 ……………154
第127図	137a号整穴平面図 ……………155
第128図	137a号整穴埋土出土石器 ……………156
第129図	138号整穴平面図 ……………157
第130図	138号整穴床面・カマド・埋土出土石器・土製品 ……………158
第131図	139号整穴平面図 ……………160
第132図	138号整穴埋土、139号整穴埋土出土石器・鉄製品 ……………161
第133図	139号整穴床面・カマド出土石器 ……………162
第134図	139号整穴床面・カマド・煙道上・埋土出土石器・土製品 ……………163
第135図	139号整穴埋土出土石器 ……………164
第136図	139号整穴埋土出土石器・土製品 ……………165
第137図	8号小竪穴、ビット820、821、822、823、824平面図 ……………166
第138図	ビット701平面図 ……………168
第139図	ビット701埋土出土石器 ……………169
第140図	ビット701a、701b、725、817平面図 ……………170
第141図	ビット703埋土、704埋土、705床面出土石器 ……………172
第142図	ビット705、718平面図 ……………174
第143図	ビット706埋土出土石器 ……………175
第144図	ビット702、707、707a、707b、708、723、724、724a、724b平面図 ……………176
第145図	ビット701埋土、702埋土・埋土下位、705床面、706埋土、709遺体上部・埋土、710埋土、711床面・埋土出土石器・琥珀玉・ガラス玉 ……………177
第146図	ビット709平面図 ……………179
第147図	ビット710平面図 ……………180
第148図	ビット711平面図 ……………182
第149図	ビット707b埋土、708埋土、709埋土、710埋土、711埋土、712埋土出土石器 ……………183
第150図	ビット714平面図 ……………185

第151図	ビット713埋土、714埋土、715埋土、716埋土、717埋土、719埋土出土石器 ……………186
第152図	ビット714床面出土石器 ……………187
第153図	ビット714埋土ベンガラ内・埋土上位、716埋土、717埋土出土石器 ……………188
第154図	ビット703、704、706、712、713、715、716、717、720、738、738a、739、740、831平面図 ……………190
第155図	ビット718床面・埋土出土石器・石製品・琥珀玉 ……………192
第156図	ビット722平面図 ……………195
第157図	ビット720埋土、722床面、723埋土、724床面、725埋土、726埋土出土石器 ……………196
第158図	ビット732、733、734、744、745、746、747、747a、751、752、753、753a、754、754a、755、757、757a平面図 ……………199
第159図	ビット737平面図 ……………201
第160図	ビット737床面・床面直上・埋土、738埋土、738a床面直上、739埋土出土石器 ……………202
第161図	ビット723埋土、726埋土、733埋土、736埋土、737埋土、739埋土、746埋土、747埋土、749a埋土、749b埋土、750埋土出土石器 ……………205
第162図	ビット741埋土、742埋土、743埋土、744埋土、745埋土、746埋土、747埋土、747a埋土、748埋土、749埋土、749b埋土、752埋土、753埋土、753a埋土、754埋土出土石器 ……………207
第163図	ビット735、736、741、741a、742、743、748、749、749a、749b、749c平面図 ……………209
第164図	ビット754a埋土、756埋土、757埋土、757a埋土、759埋土、760埋土、761埋土出土石器 ……………212
第165図	ビット750、756、758、759、760、761、762、762a平面図 ……………213

第166図	ビット762埋土、762a埋土、 764埋土、765埋土、766遺体上 出土土器 ……………215	791埋土、795埋土、797埋土出 土土器 ……………249
第167図	ビット752埋土、753埋土、 754埋土、756埋土、757a埋土、 760埋土、762埋土、767埋土、 772埋土、775床面、779埋土 出土石器 ……………216	第186図 ビット789c埋土、790遺体上、 791a埋土、797床面、797a床面 ・埋土、797b埋土出土土器・ 琥珀玉 ……………252
第168図	ビット766、769、769a平面図…220	第187図 ビット795平面図……………254
第169図	ビット767埋土、769床面直上・ 埋土、770埋土、771埋土、 772埋土出土土器……………222	第188図 ビット795床面・埋土出土石器 ・石製品・琥珀玉 ……………255
第170図	ビット772平面図……………224	第189図 ビット797、797a平面図 ……257
第171図	ビット777埋土、778埋土、 779埋土、780埋土、781床面直上、 781a埋土出土土器……………227	第190図 ビット797a床面・埋土出土 土器 ……………260
第172図	ビット781埋土、781a埋土、 782遺体上、783床面・埋土、 784埋土、785埋土、出土石器 ・勾玉・石製品・漆製品 ……228	第191図 ビット797a床面・埋土出土 土器 ……………260
第173図	ビット782平面図……………230	第192図 ビット797a床面・埋土出土 土器 ……………262
第174図	ビット783、786、786a平面図…233	第193図 ビット797b埋土出土土器……………263
第175図	ビット783床面・床面直上・ 埋土出土土器 ……………235	第194図 ビット719、721、721a、728、 729、730、730a、731、800、 801、801a、803、804、805、 806、807、807a平面図 ……265
第176図	ビット783周辺出土土器……………236	第195図 ビット801埋土、805埋土、 806埋土、807埋土、807a埋土 出土土器 ……………268
第177図	ビット783周辺出土土器……………237	第196図 ビット808平面図……………270
第178図	ビット783周辺出土土器……………238	第197図 ビット808埋土出土土器……………271
第179図	ビット783周辺出土土器……………239	第198図 ビット808埋土、809埋土、 810埋土、812埋土、813埋土、 814埋土出土土器……………272
第180図	ビット784平面図……………241	第199図 ビット726、727、802、809、810、 811、812、813、814、815、819 平面図 ……………274
第181図	ビット784埋土、786埋土出土 土器 ……………243	第200図 ビット815埋土、816埋土、 818床面、819埋土、820埋土、 821埋土出土土器……………277
第182図	ビット787、788、788a、788b、 788c、788d、789、789a、789b、 789c、790、791、791a、792、 793、793a、799、816、856、 856a、856b、858、894平面図…245	第201図 ビット822埋土、823埋土、 824埋土、825埋土、826埋土、 827埋土、828埋土出土土器 ……279
第183図	ビット786a埋土、787埋土、 788埋土、788b埋土、788c 埋土出土土器 ……………246	第202図 ビット799埋土、807a埋土、 808埋土、810埋土、814埋土、 819埋土、821埋土、823埋土、 829埋土、835埋土、836埋土出土 石器 ……………280
第184図	ビット786床面・埋土・床面直上、 786a埋土、788埋土、788d床面 ・遺体上・埋土出土土器 ……247	
第185図	ビット788d埋土、789埋土、	

第203図	ビット829平面図	284
第204図	ビット829床面・埋土、832埋土、833埋土、833a埋土、833b埋土、834埋土出土土器	286
第205図	ビット818、825、826、827、828、830、832、833、833a、833b、834、835、835a、838、838a、839平面図	287
第206図	ビット835埋土、835a埋土出土土器	289
第207図	ビット836、836a平面図	290
第208図	ビット836埋土出土土器	291
第209図	ビット836埋土、839埋土出土土器	292
第210図	ビット873平面図	294
第211図	ビット841埋土、842埋土、842a埋土、842b埋土、843埋土、844埋土、845埋土、846埋土、848埋土、850埋土、851埋土出土土器	297
第212図	ビット850平面図	300
第213図	ビット854、854a平面図	302
第214図	ビット764、776、777、778、779、780、851、851a、852、853、859、861、862、863、863b、864、865、867、871、875、876、877、880、880a、881、884、884a、884b、893、893a平面図	303
第215図	ビット852埋土、854a埋土出土土器	305
第216図	ビット836a埋土、839埋土、841埋土、844埋土、850床面・埋土、852埋土、856a埋土、856b埋土、863a遺体上、864埋土、868埋土、869埋土出土石器	306
第217図	ビット856埋土、857埋土、859埋土、861埋土、862埋土、863埋土、863a埋土、863b埋土、864埋土、866埋土出土土器	309
第218図	ビット863a平面図	311
第219図	ビット866平面図	313

第220図	ビット868埋土、869埋土、872床面・埋土出土土器	314
第221図	ビット868、868a、868b、870、870a、885、887平面図	316
第222図	ビット781、781a、784a、784b、785、794、794a、797b、798、855、857、860、860a、869、873、873a、873b、873c、874、879、883平面図	317
第223図	ビット872平面図	319
第224図	ビット873a埋土、873c埋土、877埋土、878埋土、880a埋土、881埋土出土土器	321
第225図	ビット878平面図	323
第226図	ビット872床面・埋土、873a埋土、876埋土、878床面直上・遺体上、880a埋土、882床面、883埋土、884遺体上、884a埋土出土土器・琥珀玉・管玉	324
第227図	ビット882平面図	327
第228図	ビット882埋土出土土器	329
第229図	ビット882床面・埋土、883埋土、884埋土、884a埋土出土土器	330
第230図	ビット890、890a平面図	334
第231図	ビット884b埋土、885埋土、886埋土、887埋土、888埋土、889埋土、890埋土、890a埋土出土土器	335
第232図	ビット889埋土、890床面・遺体上・埋土、890a埋土、895埋土、896a埋土、897埋土出土土器・琥珀玉	336
第233図	ビット886、888、889、891、891a、891b、891c、895、896、896a、899平面図	337
第234図	ビット891埋土、891b埋土、891c埋土、893埋土、893a埋土、894埋土、895埋土、896埋土、896a埋土出土土器	339
第235図	ビット899埋土出土土器	342
第236図	埋甕7・8平面図	344
第237図	埋甕7	345
第238図	埋甕8	346

## 図 版 目 次

- |   |   |
|---|---|
| <p>図版1 121号竪穴、121号竪穴出土床面・埋土出土土製品・土器</p> <p>図版2 122号竪穴、122号竪穴床面・カマド・埋土出土土器</p> <p>図版3 123号竪穴・123a号竪穴、123号竪穴埋土出土土器、123a号竪穴埋土出土土器</p> <p>図版4 124号竪穴、124号竪穴埋土出土土器、125号竪穴</p> <p>図版5 126号竪穴、126号竪穴床面・埋土出土土器</p> <p>図版6 126号竪穴埋土出土土器、126a号竪穴、127号竪穴</p> <p>図版7 127a号竪穴、127a号竪穴埋土出土土器、127b号竪穴</p> <p>図版8 127b号竪穴埋土出土土器、128号竪穴床面出土土器、128号竪穴、128a号竪穴</p> <p>図版9 128a号竪穴床面出土土器、129号竪穴床面出土土器、129a号竪穴床面出土土器、129号竪穴、129a号竪穴</p> <p>図版10 129b号竪穴床面直上出土土器、129c号竪穴床面直上出土土器、130号竪穴、130号竪穴埋土出土土器</p> <p>図版11 131号竪穴遺物出土状況、131号竪穴</p> <p>図版12 132号竪穴、132号竪穴床面出土土器、133号竪穴埋土出土土器、133号竪穴</p> <p>図版13 133a号竪穴、133a号竪穴床面出土土器、133b号竪穴</p> <p>図版14 134号竪穴、134号竪穴床面直上出土土器、135号竪穴埋土出土土器、135号竪穴</p> <p>図版15 135a号竪穴、135a号竪穴埋土出土土器、136号竪穴埋土出土土器</p> <p>図版16 137号竪穴、137号竪穴床面・埋土出土土器、138号竪穴</p> <p>図版17 138号竪穴アイヌ期送り場魚骨等出土状況、138号竪穴土器出土状況、138号竪穴床面・カマド・埋土出土土器・土</p> | <p>製品・鉄製品</p> <p>図版18 139号竪穴、139号竪穴遺物出土状況</p> <p>図版19 139号竪穴床面・カマド・煙道上・埋土出土土器・土製品</p> <p>図版20 ビット701埋土出土土器、702埋土出土土器・琥珀玉、704埋土出土土器</p> <p>図版21 ビット705、705床面出土土器</p> <p>図版22 ビット711配石、ビット711</p> <p>図版23 ビット711遺物出土状況、711床面・埋土出土土器・琥珀玉</p> <p>図版24 ビット714、714床面出土土器</p> <p>図版25 ビット714床面・埋土ベンガラ内・埋土上位出土土器</p> <p>図版26 ビット716、716埋土出土土器、ビット718</p> <p>図版27 ビット718遺物出土状況</p> <p>図版28 ビット718床面・埋土出土土器・琥珀玉・石製品</p> <p>図版29 ビット719、719埋土出土土器、722床面出土土器、ビット722</p> <p>図版30 ビット726埋土出土土器、736埋土出土土器、737埋土出土土器、ビット737、737床面・床面直上出土土器</p> <p>図版31 ビット738a、738a床面直上出土土器</p> <p>図版32 ビット749b埋土出土土器、752埋土出土土器、754埋土出土土器、754a埋土出土土器、756埋土出土土器、760埋土出土土器、762埋土出土土器</p> <p>図版33 ビット764埋土出土土器、ビット766、766埋土出土土器、ビット769、769床面直上出土土器</p> <p>図版34 ビット772、772埋土出土土器</p> <p>図版35 ビット781、781床面直上出土土器</p> <p>図版36 ビット782、782遺体出土勾玉・石製品・漆製品</p> <p>図版37 ビット783配石・周辺土器出土状況</p> <p>図版38 ビット783、783床面・床面直上・埋土出土土器・石器</p> <p>図版39 ビット783周辺出土土器、785埋土出土土器、786床面・床面直上・埋土出土</p> |
|---|---|

- 上器・石器
- 図版40 ビット786a 埋土出土石器、788埋土出土土器・石器、788b 埋土出土土器、788d 埋土出土土器、ビット788d
- 図版41 ビット788d 床面・遺体上・埋土出土石器、789c 埋土出土石器、ビット795
- 図版42 ビット795遺物出土状況、
- 図版43 ビット795床面・埋土出土石器・石製品
- 図版44 ビット797床面出土石器、797a 配石、ビット797a
- 図版45 ビット797a 遺物出土状況、797a 床面・埋土出土土器
- 図版46 ビット797a 床面・埋土出土石器、797b 埋土出土石器、799埋土出土石器
- 図版47 ビット808、808埋土出土土器・石器
- 図版48 ビット810埋土出土石器、814埋土出土石器、818床面出土土器、ビット829、829床面・埋土出土土器・石器
- 図版49 ビット836、836埋土出土土器・石器、
- 836a 埋土出土石器、841埋土出土石器、844埋土出土石器
- 図版50 ビット850、ビット851
- 図版51 ビット854a 埋土出土土器、856a 埋土出土石器、856b 埋土出土石器、859埋土出土土器、863a 遺体上出土石器、868埋土出土石器
- 図版52 ビット872、ビット872
- 図版53 ビット872遺物出土状況、872床面・埋土出土土器・石器・琥珀玉
- 図版54 ビット878床面直上・遺体上出土石器・琥珀玉、ビット882、882床面・埋土出土土器・石器
- 図版55 ビット884a 埋土出土石器・管玉、889埋土出土石器、ビット890、890床面・埋土出土土器・石器
- 図版56 ビット895、895埋土出土土器・石器、897埋土出土石器、899埋土出土土器
- 図版57 埋甕7 出土状況、埋甕8 出土状況

# 第 I 章 調査に至る経過

## 1

常呂川は十勝、石狩、北見の分水嶺である三国山（標高1,541m）に源を発し、流路延長120km、流域面積1,930km<sup>2</sup>に及ぶ一級河川である。

常呂川流域の気候は、オホーツク海高気圧の影響を受け雨の少ない地域であるが、明治30年頃からの開拓による森林伐採の結果、河川の水量調節機能は低下し洪水が起こりやすくなったと考えられている。明治31年、大正4、8、11年、昭和7、9、10、14、22、23、28、30、32、33、37、39、44、46、47、50年と相次いで記録的な洪水が発生している。発掘調査を行っている間の平成4年にも集中豪雨があり、強力な水流によるため遺跡の一部が削られることもあった。毎年のように起こる洪水の治水対策は大正10年から始められ現在も着々と続けられている。常呂川治水の完成は地域住民の悲願でもある。

今回、緊急発掘調査の対象となった地域は昭和50年の台風6号による出水の影響で堤防が決壊し、床上浸水等の被害を蒙った区域である。常呂川は河口幅が狭いうえ、本遺跡の付近で最も大きく蛇行しているため水の疎通が悪く、豪雨時は上流で溢水するなどの問題が指摘されていた。このため蛇行部をショートカットして新捷水路を設けるための工事計画が策定された。昭和52年から用地買収が進められ、昭和56年から工事着手の予定であった。しかし、工事着手の直前になって遺跡の存在することが明らかとなった。昭和56年11月4日に埋蔵文化財保護のための事前協議書が網走開発建設部から提出されたのをうけ、同年11月11日～12日に北海道教育委員会、財北海道埋蔵文化財センター、本町教育委員会の三者で包蔵地範囲確認調査を実施した。調査の結果、本遺跡の主体は標高4～5mの砂丘上と低地域にも竅穴の存在することが判明した。遺跡の総面積は約140,000m<sup>2</sup>に及び39,000m<sup>2</sup>が発掘必要区域である。考古学的には縄文中期・後期・晩期、統縄文、擦文・オホーツク、アイヌ文化にわたる複合遺跡であり、砂丘上にある縄文中期の包含層まで深度約1.50mに達することも確認された。これらの調査結果を踏まえて発掘調査を行うことも協議されたが、調査には莫大な経費と期間を要しなければならず早速の実施には至らなかった。

その後、網走開発建設部では常呂川下流域の堤防整備を構じていたが、本遺跡を回避した新水路の計画もありえるため、本来の計画地以外についても埋蔵文化財の有無が必要となった。昭和57年9月2日に事前協議書の提出を受け北海道教育委員会と本町教育委員会は昭和60、61、62年の3年間で周辺地域の包蔵地範囲確認調査を実施した。昭和60、61年調査地域は標高2～3mの常呂川の氾濫原と考えられる地域であり、全域に包含層が認められた。昭和62年の調査地域は常呂大橋下の中洲であるが、包含層は認められなかった。この様な背景とともに常呂川

下流域の堤防整備もほぼ完了したため、本来の計画どおり新捷水路工事を進めるために発掘調査の依頼があった。

しかし、調査にはかなりの歳月を要し、調査体制の問題もあるため本町教育委員会が独自に対応することは困難であるため北海道教育委員会に調査機関の照会を願ったものの、適した機関が無いとの回答があったので本町教育委員会が調査体制の充実を図り受諾することとなった。

新捷水路は護岸工事部分を含めると全幅300m、延長320mあるため調査には約10年間が予想された。協議者としてもそれまで事業の実施を延ばすのは困難であり、調査と並行して工事を着手したいので新捷水路幅80mのうちセンターから東側の幅40mについて調査を終了してほしいとの要望があった。その場合、幅20mの護岸部が後回しとなり、検出した遺構も半掘りのまま残されてしまう恐れもあるため護岸部を含めて調査することとなった。

調査を進めている過程で縄文中期の包含層よりも下層に縄文前期末葉の包含層があり、さらに下層には縄文前期中葉の包含層が検出された。また、標高0mの低湿地にはアイヌ文化期の木製品が新たに発見され当初の子定を大きく変更させるを得なかった。

## 2

調査グリッドは新捷水路センター杭のIP. No. 1～600を基準に4×4mで設定し、東西をアルファベット、南北を数字で示した。

### 参考文献

網走開発建設部 『常呂川治水史』 1987

常 呂 町 『常呂町史』 1969



## 第Ⅱ章 遺跡の地形と基本土層

常呂地域の地形・地質は標高70～75m以上の丘陵・高位段丘、標高20～30mの中位段丘、標高5～15mの低位段丘に分けられる。本遺跡は東側の中位段丘側から派生しており、地形的には標高4～5mの低位段丘とさらに下面にある標高2～3mほどの常呂川の氾濫原に存在している。昭和63年と平成1年はこの氾濫原と思われる区域を調査した。この区域の地盤は層厚30～40cmの黄褐色粘土であり、その下層は粒子の粗い砂と礫混じりの層が堆積している。黄褐色粘土層は常呂川岸の付近では層厚約3～4mに及んでいる。川岸に移行するにしたがい黄褐色粘土層の堆積は厚みを増すようである。昭和63年度に行った包蔵地帯調査では深度約3mのところから木杭が出土している。この区域では現在のところ縄文文化期の堅穴しか発見されていないが、木杭の出土から裏付けられるように下層には他の時期の包含層も残されている可能性がある。氾濫原と考えられるこの区域には大正期間に作られた築堤がある。盛土による築堤の上部を道路として利用されていたため原地形は捉えにくい、おそらく中位段丘側から常呂川に向かって緩く傾斜していたと思われる。

一方、平成2年から調査している標高4～5mの区域もトコロチャン跡付近から常呂川に向かって延びた砂丘である。調査当初は栄浦第二・第一遺跡、常呂堅穴群のある新砂丘Ⅰ、古砂丘と同一の海成砂丘台地と考えていたが、調査を進めるにつれて様々なことが明らかになった。一つはこの低位段丘面が常呂川の氾濫の繰り返しによる土砂の堆積で形成されたと考えられる。第1図の基本層序模式図に示すとおり基本的な土層は砂質土層であるが、この砂層の粒子は海成層のものよりも極めて粗く、海成層には含まれない大型の角礫を多量に含むことである。角礫混じりの砂層は特に第Ⅲ層において顕著である。この砂礫層・砂層は数枚の薄い文化層と交互に堆積を繰り返す。平成8年・9年度の調査では縄文中期のトコロ六類・五類の下層に第Ⅹa層の(古)トコロ六類とⅪ層の平底押型文Ⅱ群、平成10年の調査では第Ⅹa層の下層にある第Ⅹc層からも北筒式系の包含層、平成11年度の調査ではさらに第Ⅻ層から縄文前期網文式の包含層を確認した。

第Ⅳ層の砂礫層からは層厚約30cmの中から縄文前期中野式、シュブノツナイ式、押型文と中期のトコロ六類・五類の北筒式が満遍なく出土している。安定した遺物の出土状態をもつ第Ⅳ層とは明らかに異なった出方である。第Ⅳ層は河川の氾濫等による上砂流失の影響で本来は下層にある土器が上部に押し上げられ、時期が逆転したものと考えられる。平成2年から調査を行った低位面はこの様な洪水等による土砂の堆積が繰り返され、現在の地形に形成されたものであるが、そこには第2図の地形模式図に示すとおり少なくとも三次の変化が認められる。

第一次形成地は第Ⅳ層の縄文前期末の押型文から第Ⅳ層の縄文中期トコロ六類・五類のある礫・角礫を含む極めて硬質な黒色土である。層厚は薄い箇所では10～15cm、厚い箇所では20～30cm

である。Ⅷ層の西側部分が削り取られており、縄文前期末葉から中期初頭にかけてかなり激しい流勢のあったことを示している。

第二次形成地は第一次形成地を覆うもので、第Ⅰ層から第Ⅱ層が常呂川に向かってせり出ししている。せり出し幅は2～20mあり、常呂川に近い程広がっている。

第三次形成地には縄文期の堅穴と統縄文後北 C<sub>2</sub>・D 式の生活面、オホーツク文化期の包含層があるだけであり、それ以前の時期の遺構は全く認められない。第二次形成地と第三次形成地の間は自然の窪みが細長く延びている。特にオホーツク文化期の15号堅穴の付近では土器、獣骨等も散布されている。このことから第二次形成地は縄文中期後半から縄文晩期にかけて少なくとも6回の河川堆積の後に形成されたものと考えられる。第三次形成地はそれ以後のものであり、土質は第二次形成地と比較して粒子の細かい砂質土である。

層位ごとの時期区分は概ね次のとおりである。

第Ⅰ層	表土層	
第Ⅱ層	茶褐色砂層	縄文晩期、統縄文、 オホーツク文化
第Ⅲ層	褐色砂層	無遺物層
第Ⅳ層	黒色土層	縄文後期
第Ⅴ層	褐色砂層	無遺物層
第Ⅵ層	黒色砂層	縄文中期後葉
第Ⅶ層	褐色砂層	遺物包含層（砂・礫混じり）
第Ⅷ層	黒色土層	縄文中期中葉
第Ⅷ a 層	褐色砂層	無遺物層
第Ⅷ b 層	黒褐色砂層	遺物包含層
第Ⅸ層	褐色砂層	無遺物層
第Ⅹ層	明褐色砂層	無遺物層
第Ⅹ a 層	黒褐色砂層	縄文中期前葉
第Ⅹ b 層	褐色砂層	無遺物層
第Ⅹ c 層	黒褐色砂層	縄文中期前葉
第Ⅺ層	褐色砂層	無遺物層
第Ⅻ層	黒色砂層	縄文前期末葉
第Ⅼ層	褐色砂層	無遺物層
第Ⅽ層	黒色砂層	無遺物層
第Ⅾ層	明褐色砂層	無遺物層
第Ⅿ層	黒色土層	縄文前期

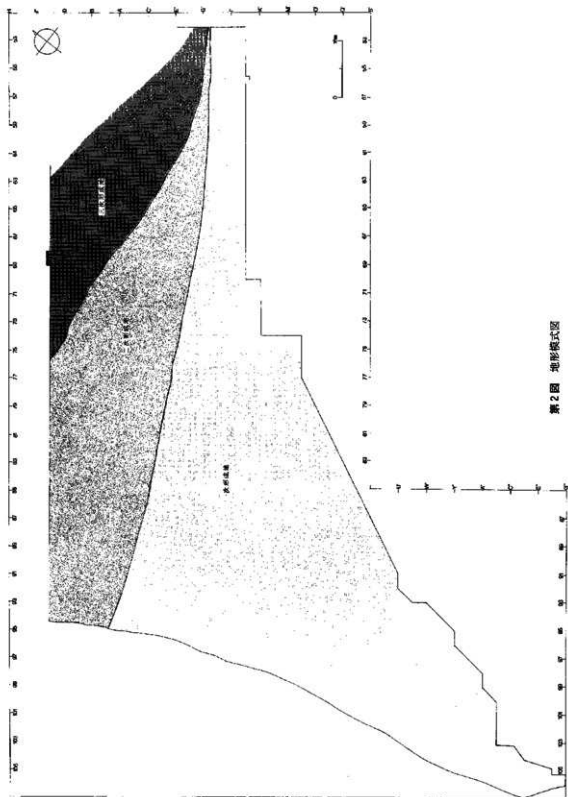


第1図 基本層序模式図

参考文献

- 1) 遠藤邦彦・上杉陽『常呂』所収 東京大学文学部 1972

常呂川河口遺跡



第2図 地形模式図

### 第Ⅲ章 周辺の遺跡

本遺跡の後背地にある標高20～30mの中位段丘には学史的にも有名な遺跡が多数存在する(第3図)。トコロチャシ跡遺跡は本遺跡から約100～150mの距離である。昭和35年に縄文文化期とアイヌ文化期の研究を目的とした調査が東京大学文学部により行われ、オホーツク文化期1号堅穴内側(藤本e群)、同外側の2軒が調査された。また、堅穴埋土中には近世アイヌ文化の遺構も検出されている。昭和38年にはアイヌ文化期の濠とオホーツク文化期堅穴との時間関係を解明するためオホーツク文化期2号堅穴(藤本e群)と新旧2本の濠が調査されている。平成3年から再度、トコロチャシ跡の濠の調査を実施しており、平成7年度の調査において刀子、中柄、青銅製円盤、矢筒、短刀、長刀を副葬するアイヌ墓のほかオホーツク文化期の屋外の骨塚も発見されている。平成8年度の調査ではチャシの出入り口と思われる橋状遺構(ルイカ)に類する箇所も検出され、先に認められていた欄柱穴とあわせチャシ跡の構造解明に大きな成果が得られた。

さらに東京大学は平成10年からオホーツク文化期の堅穴調査を開始した。トコロチャシ跡遺跡0地点としたチャシの濠の南側に位置する7号堅穴である。この堅穴の調査は平成11年も引き続き行われた。長軸13.5m、短軸9.7mの7a号堅穴と長軸8.5m、短軸7.5mの7c号堅穴の2軒重複住居である。いずれも火災を受けているが、特に7a号堅穴では白樺樹皮を巻かれた炭化材列などが確認され、住居内部の構造を解明する上で貴重な情報をもたらした。各種の出土遺物も豊富である。骨塚の前面から出土した十字形の青銅製品をはじめ、炭化木製品では大小の盆・椀・樹皮容器・櫛・杓子・スプーンなどがある。骨塚にははクマ・エゾシカ・タヌキ・キツネの動物骨が見られる。時期はゾーメン状貼付文(藤本e群)に比定される。平成12・13年に調査された8号堅穴は7号堅穴同様の火災住居である。壁面に樹皮をあてた後に板材を設置しており内部構造の一端が明らかにされた。骨塚はクマを主体としてキツネ、タヌキがある。平成13・14年に調査された9号堅穴も同様の構造をもった堅穴である。また、本遺跡の15号堅穴でも屋根材と思われる樹皮とそれを留めたと推測できる木釘、炭化木製品が発見されている。この様にトコロチャシ跡遺跡から南側に続く台地の縁辺部にはオホーツク文化期をはじめとした大型堅穴の空地が遺されている。常呂川河口遺跡を含むこの区域は栄宗第二遺跡に匹敵するオホーツク文化の集落遺跡である。

トコロチャシ跡遺跡と連続したトコロチャシ南尾根遺跡は標高60～80mの台地縁辺部にある。地表面から32軒の堅穴が観察され、昭和39年に東京大学文学部により縄文中期北筒式の1号堅穴が調査されている。昭和50年には「トコロバイパス建設」(国道238号線)工事に伴う緊急発掘調査が行われ、18軒の堅穴が発掘されている。この調査では特に縄文後期中葉の船泊上層式・籠闘式・ユリモB式が出土して注目された。昭和61年には最西端部で住宅建設工事に伴う



緊急発掘調査が行われ、8軒の堅穴が調査された。縄文文化期の17号堅穴埋土から頸部に「井」のヘラ記号と同転糸切りの底部をもつ五所川原産の須恵器である長頸壺が出土している。縄文晩期の5号ピットからは中葉と思われる刺突文の施された鉢型土器とボート形の浅鉢が出土している。トコロチャシ南尾根遺跡の対岸にはTK67遺跡がある。昭和47年に発見されたこの遺跡は昭和61・62年に北海道営畑総事業の農道改良工事に伴い緊急発掘されている。比較的急斜な北側斜面に縄文期の堅穴5軒、時期不明のピット群がありさらに奥まったところには続縄文期を主体とした堅穴4軒がある。據文期の堅穴は宇田川編年後期に比定されるもので、包含層から五所川原産の大甕の須恵器が出土している。他に須恵器は包蔵地範囲確認調査字軌阜127-6番地、表面採集による岐阜地区国有林、常呂川河口遺跡で発見されている。TK67遺跡と連続しているのがトコロ貝塚である。昭和33-36年に東京大学文学部による学術調査が実施されている。長さ約200m、幅約70mのカキ貝を主体とした縄文中期北筒式の貝塚である。トコロ六類と五類土器が層位的に確認されるとともに縄文早期の石刃鎌が類竹管文を3段めぐらしたトコロ14類土器と共存することが明確になった。

平成11-13年に東京大学大学院人文社会系研究科教授宇田川洋氏を研究代表として東京大学常呂研究室と常呂町による地域連携推進研究に伴う詳細分布調査がトコロチャシ跡遺跡とトコロチャシ南尾根遺跡で実施され、ほぼ全域から遺物が出土している。確認された遺構は縄文早期東側路系の堅穴、石刃鎌の石器集中域、縄文中期の集石、オホーツク文化期の土墳墓2基である。特にオホーツク文化期の土墳墓は予想されていたことであるが、堅穴群と土墳墓は分離されており基域を形成していたことが推測された。オホーツク文化期の社会組織・集落研究に果たす役割は大きいものがある。この二遺跡は平成14年9月に史跡常呂遺跡として追加指定を受けた。現在、常呂町ではこの地域の史跡整備に向けた基本構想を策定中であるが、平成15年から東京大学常呂研究室の協力をいただきオホーツク文化期の堅穴復元のための基礎資料を得るための調査を実施している。平成15・16年は10号堅穴を調査した。

この様に本遺跡の後背地の段丘上には大遺跡が多く、時期も縄文早期からアイヌ期まで連続しており、常呂川河口遺跡の性格を解明する上でも重要な地域である。例えばオホーツク文化期の堅穴をみてもトコロチャシ跡の4軒と常呂川河口遺跡の15号堅穴はツォーメン文状貼付文(藤本e群)の時期であり、両者に新旧関係があるのか同時併存するかなどの問題がある。據文期の堅穴も常呂川河口遺跡と同じで後期のものが多い。続縄文期の堅穴は宇津内系が多いようであり、後北C<sub>1</sub>・D式の土墳墓もある。縄文後期では本遺跡からは堅穴の発見はないがピット2基、集石4基あり、周辺に集落跡が予想される。段丘上の遺跡はごく一部分を調査されたに過ぎず各時期の全容を明らかにすることはできないものの、本遺跡とは比較的類似した時代構成である。しかし、個々の時代を見ると縄文晩期後葉の弊舞式から続縄文期初頭の興津式、宇津内Ⅱa式。中葉の宇津内Ⅱb式、後北C<sub>1</sub>式。後葉の後北C<sub>1</sub>・D式までほぼ全期間

にわたっている。擦文期は宇田川編年後期に比定できる堅穴が多くある。本遺跡は各時代で濃淡はあるものの生業活動の場として利用されたことは明らかである。特に統編文期は一時的な場として利用されたのではなく長期間定住していたであろうことが数多くの墓の存在から考えられる。統編文期の墓では興津系、宇津内系のものが特徴的である。統編文期の副葬品の消長についてすでに論じられているところであるが、琥珀玉をもつが興津系は原石に近い大型、宇津内Ⅱa式は平玉を多量に副葬している。前回までに報告したビット95・254・263a・301・470・545号墓がその例であり、今回の872号墓も追加される。宇津内Ⅱb式になると琥珀を副葬するものもあるが極端に減少し管玉が加わるなど変化が現れてくる。後北C<sub>1</sub>式では鉄製刀子を副葬するものもあるが石器が一般的である。後北C<sub>2</sub>・D式は鉄製品の他にガラス玉がある。副葬品の豊富さは生業活動の賜物であり、安定した食料源の獲得が定住をもたらしたのであろう。低地にも大規模遺跡は存在し、隣接する段丘上の遺跡群との相関関係を考える必要がある。

(武田 修)

#### 文 献

- 1) 東京大学文学部考古学研究室・常呂研究室「トコロチャシ跡遺跡」1995年度調査略報 1995.9
- 2) 東京大学大学院人文社会研究科・文学部考古学研究室・常呂災害施設「トコロチャシ跡遺跡0地点」1999年度調査略報 1999.9
- 3) 東京大学大学院人文社会研究科・常呂町教育委員会「トコロチャシ跡遺跡群の調査」トコロチャシ跡遺跡・同オホーツク地点及び「常呂遺跡」の史跡整備に関する調査概要報告 2002.2





第4圖 遺構配座図

## 第Ⅳ章 竪穴住居

### 121号 竪 穴

#### 遺 構 (第5図, 図版1-1)

本竪穴はW'98グリッド周辺の表土を剥いだ段階で礫を多く含んだ褐色砂の落ち込みが認められた。礫を含んだ褐色砂層は表上の間に挟まれているもので、一部に粘土が認められた。表土とその下の黒色土層の間には竪穴の中央から西側にかけて貝層があり、貝層の下からは粘土層が検出された。貝層の中から第12図-8の中柄が出土していることからアイヌ期のものと考えられる。黒色土層の下の黒褐色砂層からは炭化粒も確認されている。

竪穴の規模は一辺約4.80mの方形を呈する。各壁の長さは東壁が約4.80m、南壁が約4.20m、西壁が約5.00m、北壁が約4.90mを測る。壁高は確認面から約40cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。壁穴の中央には約70×40cmの範囲で炉跡の焼土が検出され、焼土の中から骨片が検出された。カマドは東壁中央にある。構築材は粘土であり、カマドから煙道口にかけての上面で平らな礫が3個認められた。煙道の長さは約0.90mあり、緩やかに立ち上がる。カマドの焼土にも骨片が含まれている。柱穴は主柱穴が径12~16cm、深さ12~17cmのものが4本、壁柱穴は径8~10cm、深さ7~12cmのものが西壁で5本、北壁で4本確認された。竪穴の北西隅から、第6図-1の紡錘車が、カマド北の壁際から2の紡錘車がそれぞれ出土している。

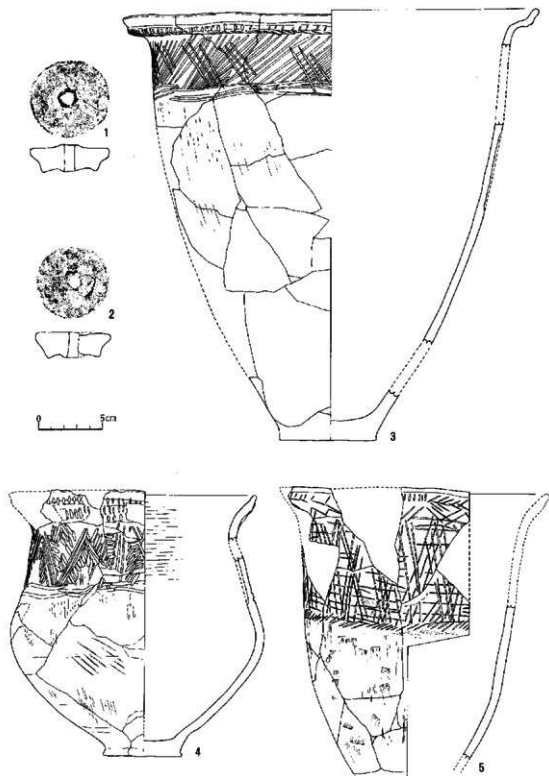
#### 遺 物 (第6図, 第7図, 第12図-1~8, 図版1-2~5)

床面からは第6図-1・2の紡錘車が出土している。1・2はともに無文の紡錘車。1は径6.4cm、重さ75g。2は径5.8cm、重さ70g。埋土から3は口径31.2cm、器高34.4cm。口縁部に2列の刻文を巡らし、胴部には斜めの沈線文に交差する2~3本の沈線を配する。4は擦文の壺形土器。口縁部は外反し、刻文を巡らす。胴部は鋸歯状文に列点文を施す。口径18.0cm、器高21.2cm。5は口縁部は外反し、胴部は横走する沈線文に2~4本の斜めの沈線文とそれに交差する3~4本の沈線文を配す。口径・器高は不明。

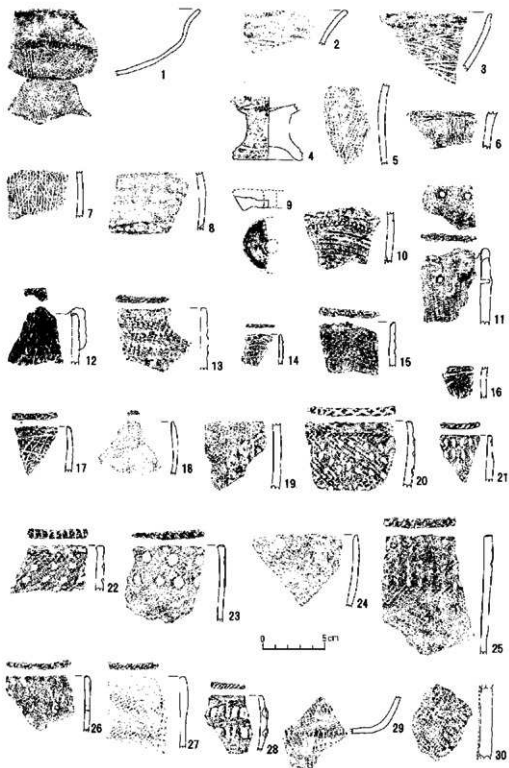
第7図-1~8は擦文土器。1~3は高杯の口縁部。4は高杯の胴部。9は紡錘車。10は後北C<sub>1</sub>・D式。11は字津内Ⅱa式。12~27・29は縄文晩期中葉。12・13・15は縄線文。14・16~19は沈線文。20・22は縄線文と刺突文。21・23は爪形状の刺突文。22・25・26は縄端庄模文。24・27は縄文の地文のみ。28は縄文晩期前葉の爪形文。30は縄文中期。

石器は埋土出土。第12図-1~5が有茎石鏃。6・7は削器。いずれも黒曜石製。8は貝層の中から検出された中柄。





第6圖 121号野穴床面(1・2)・埋土(3~5)出土土器・土製品



第7圖 121号壑穴埋土(1~30)出土土器

## 122号 竪 穴

## 遺 構 (第8図, 図版2-1)

本竪穴はT 99~U 99グリッドに位置する。規模は一辺約5.20mの方形を呈する。壁高は確認面から約40cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。竪穴中央には約50×40cmの範囲で炉跡の焼土が検出された。カマドは東壁ほぼ中央に構築された。構築材は粘土である。袖部には礫が用いられており、東側の礫は内側に倒れている状態であり、西側の礫は立った状態で検出された。燃焼部の礫の間からは粘土を貫通し、底部が焼土に達する第9図-3の土器が出土した。土器の下からは板状の炭化物が焼土の上に敷いた状態で検出された。煙道の長さは約1.20mあり、緩やかに立ち上がる。カマドの焼土からは骨片が検出されている。柱穴は主柱穴が径22~26cm、深さ28~33cmのものが4本、壁柱穴は径8~16cm、深さ8~16cmのものが南壁で7本、西壁で5本、北壁で5本確認されている。北壁近くの西壁で径約45cm、深さ約8cmのピットが検出された。竪穴の北寄りの床面から第9図-1の土器が伏せた状態で、さらにその北側から2の土器が倒れた状態でそれぞれ出土している。埋土で床面を覆っている暗褐色砂層中では西壁側から特に多くの炭化材が認められた。

## 遺 物 (第9図, 第10図, 第11図, 第12図-9~30, 図版2-2~5)

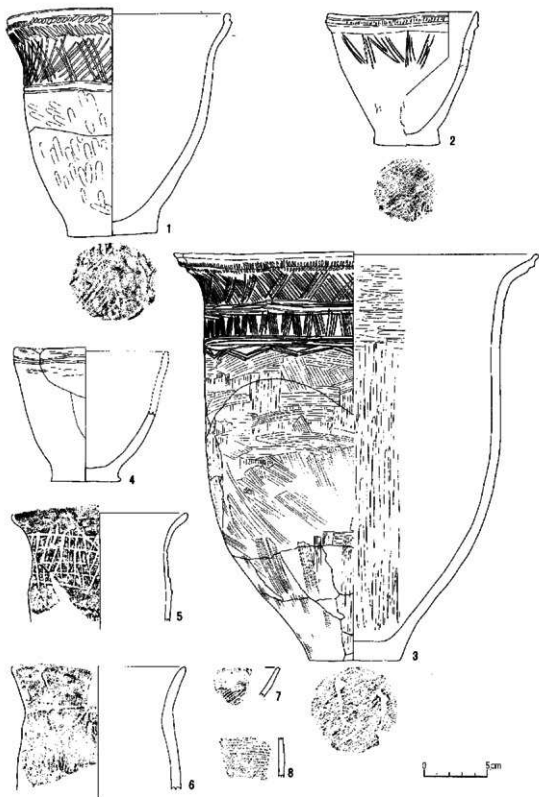
第9図-1・2は床面出土の擦文土器。1は口径17.9cm、器高18.0cm。口縁部に矢羽根状の短刻文を巡らせ、胴部は斜めに沈線文に交差する2・3本の沈線文を施す。2は向かい合う2箇所の口縁部に縦位の短刻文を配し、短刻文の下には2~4本1組の沈線文を縦位や斜めに施す。口径11.9cm、器高10.5cm。3はカマドから出土した擦文土器。口縁部に短刻文を2列巡らせる。胴部は斜めの沈線文に交差する4本の沈線文を施し、4~6本の横走る沈線文に区切られて、5・6本単位の鋸歯状文を施す。鋸歯状文の下にも6条の横走る沈線文を巡らせる。口径28.8cm、器高32.0cm。埋土からは4が口縁部に2本の隆帯を巡らし、胴部は無文の擦文土器。口径12.5cm、器高10.6cm。5は縦位と横位の沈線文を施す。6は縦位の刷毛の調整痕のみ。7は高杯の口縁部。5・6ともに擦文土器。

第10図-1は後北C<sub>2</sub>・D式。2・3は突瘤を持つ宇津内II a式。4・5は縄縄文初頭。6~28は縄文晩期中葉。7は沈線と刺突文。8~12・14は縄線文。13・15は縄線文と刺突文。16は縄線文と縄端山痕文。23は凹形刺突文。25・28は縄線文。

第11図-1~4は縄文晩期中葉。5・6は縄文晩期前葉。5は内側に斜め方向から施された突瘤文。6は爪形文。7~9は縄文晩期。8・9は低部。10は縄文後期。11は縄文中期。

石器は埋土出土。第12図-9~20が有茎石鏃。21は片面加工ナイフ。22~28は削器。29・30は泥岩製の打製石斧。29・30以外は黒曜石製。

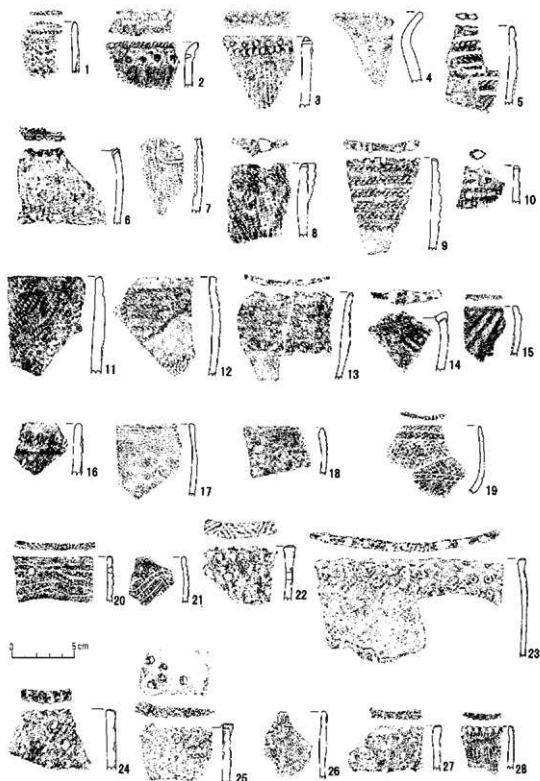




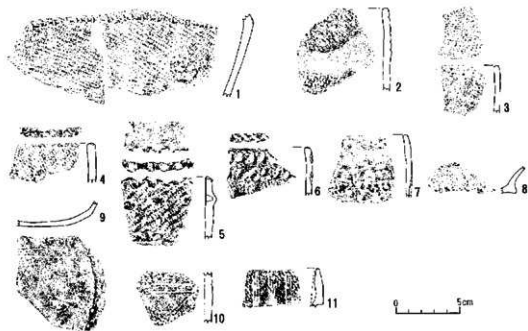
第9図 122号壑穴床面(1・2)・カマド(3)・埴土(4~8)出土土器



常呂川河口遺跡



第10圖 122号整穴埋土(1~28)出土土器

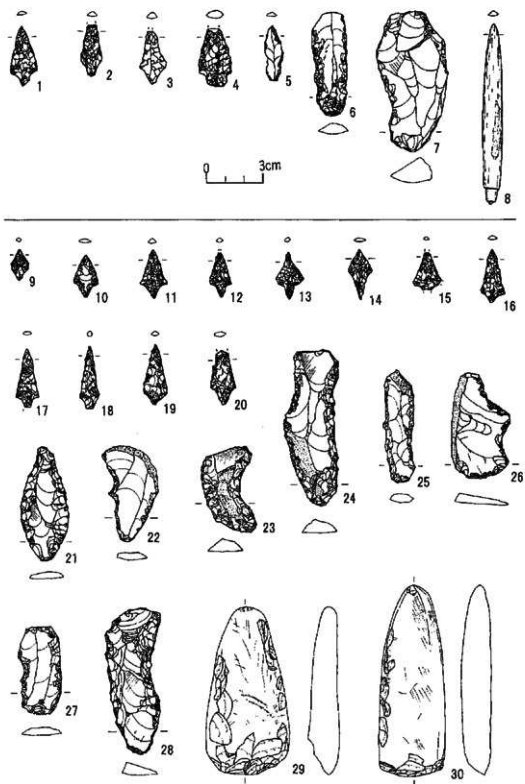


第11圖 122号竪穴埋土(1~11)出土土器

### 小 括

本竪穴は一辺約5.20mの方形を呈する縄文期の竪穴で床面直上に多くの炭化材が認められることから火災住居と考えられる。時期は宇田川編年晩期に比定される。(佐々木 寛)

常呂川河口遺跡



第12圖 121号壑穴埋土(1~8)、122号壑穴埋土(9~30)出土石器・骨製品

## 123号 竪 穴

## 遺 構 (第13図, 図版3-1)

本竪穴は117b号竪穴の北西約2.80mにある。規模は長軸約4.50m、短軸約4.00mの楕円形を呈し、壁高は確認面から70cmと深く、壁は斜めに立ち上がる。竪穴の東壁から西壁にかけて幅約1.10~0.80mで水道工事による攪乱を帯状に受けている。柱穴は径8~18cm、深さ8~20cmの壁柱穴が10本確認されている。炉跡の焼土は攪乱の北側に1箇所と南側に2箇所検出されているが、同一のものか3箇所に分れているものかは不明である。北壁近くの床面から約45×35cm、深さ約10cmとその東側に径約45cm、深さ約27cmのビットが検出されている。西側ビットの南側に黒曜石のフレーク・チップの集積が検出されている。また東側ビットと壁との間に約30×25cmの範囲でベンガラが認められた。

## 遺 物 (第14図, 第15図, 第16図, 第19図-1~19, 図版3-2)

床面から土器の出土はなく、すべて埋土出土。第14図-1は縦位の刷毛の調整痕のみの擦文土器。2は字津内式。3~7は字津内Ⅱb式。

第15図-1~4・6・7は突瘤をもつ字津内Ⅱa式。5は字津内式の底部。底部に2条の隆帯を巡らし、隆帯の内側に縄端止痕文を巡らす。

第16図-1・2は縄文初期。3・4は縄文晩期後葉幣舞式。5~17は縄文晩期中葉。6~9は沈線。8は底部。10は縄端止痕文。11・12は刺突文。19~22は縄文後期。19は口縁部に突瘤をもつ堂林式。20・21は縄文式。20は口径12.9cm、器高8.3cm。口縁部に5個の突起をもち、口唇部直下に1条沈線文を巡らせ、沈線文と口唇部の間に刻みを入れる。23は縄文中期。

石器は第19図-1の無茎石鏃が床面出土。埋土からは2~8が無茎石鏃。9・10は有茎石鏃。11~15はナイフ。16は削器。17・18は磨製石斧。17は泥岩製。18は砂岩製。17・18以外は黒曜石製。19は竪穴内のビットから出土した黒曜石製の削器。

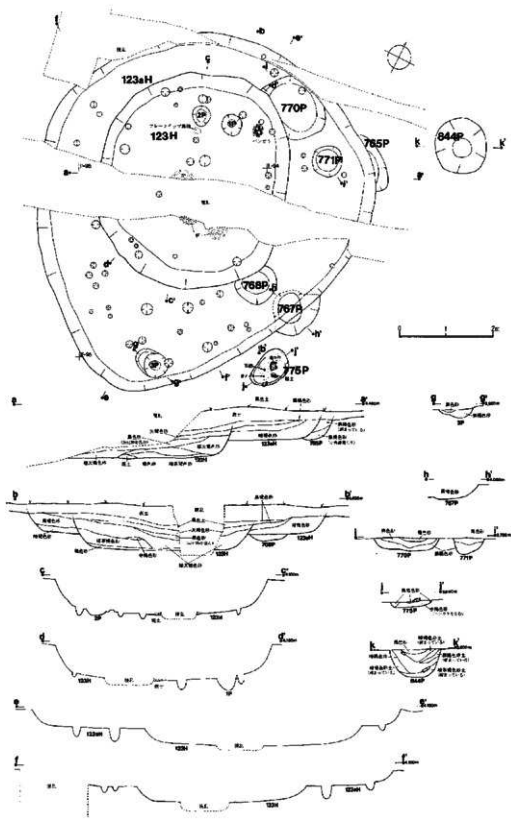
## 小 括

本竪穴は床面から土器が検出されなかったため詳細な時期は不明である。(佐々木 寛)

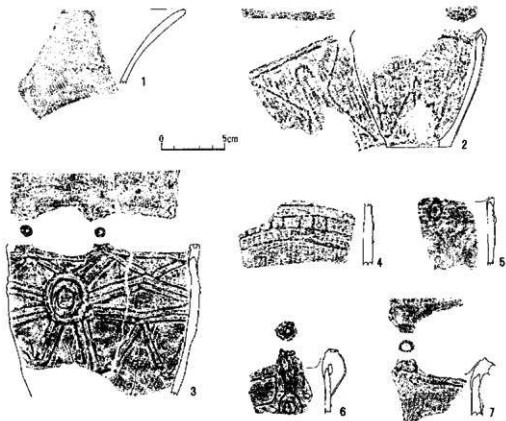
## 123a号 竪 穴

## 遺 構 (第13図, 図版3-1)

本竪穴は123号竪穴の外側に重複して検出された竪穴で、規模は長軸7.80m、短軸6.80mの卵形を呈し、壁高は確認面から約40cmを測る。壁は斜めに立ち上がる。中央と北壁の一部に攪乱を受けている。柱穴は径20~24cm、深さ17~31cmの主柱穴と思われるものが3本と壁柱穴と思われる径10~14cm、深さ7~15cmのものが5本確認された。中央部が123号竪穴によって破壊されているため炉跡は検出されていない。南側の壁際に長軸約70cm、短軸50cm、深さ約17cm



第13圖 123号竈穴、123a号竈穴、ピット765、767、768、770、771、775、844平面図



第14図 123号壙穴埋土(1~7)出土土器

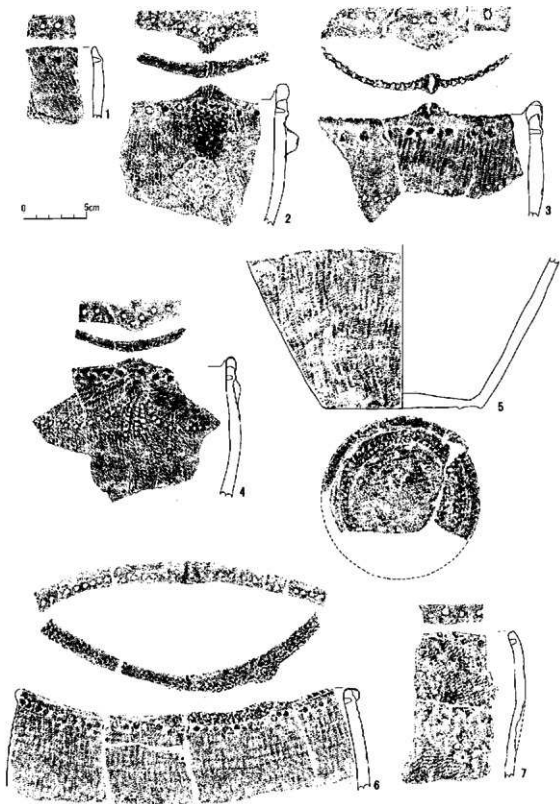
のビットが検出されている。また東壁際の床面からビット768、壁際からビット767がそれぞれ検出され、北東壁際の床面からもビット770と771、壁際からビット765が検出されている。

**遺物** (第17図, 第18図, 第19図-20~33, 第20図-1~7, 図版3-3・4)

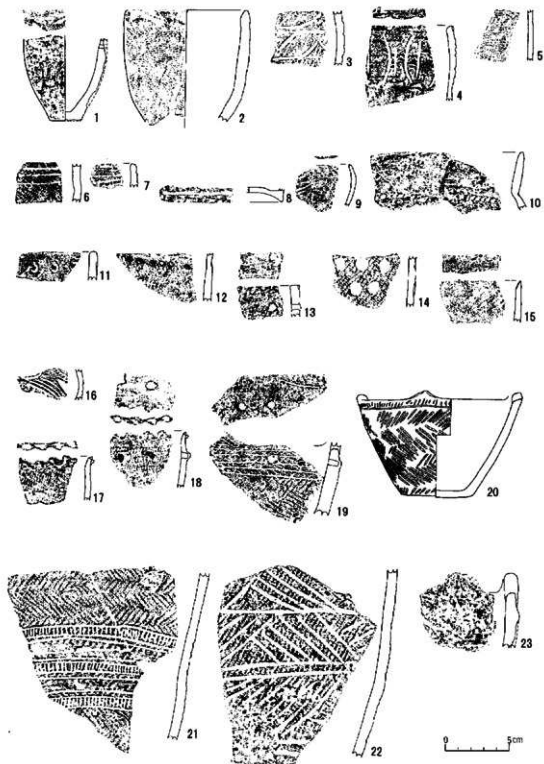
土器はすべて埋土から出土。第17図-1は外からの突瘤をもち、微隆起線を垂下させる。北大式。2~4は後北C<sub>1</sub>・D式。5は宇津内式の底部。6~8は宇津内Ⅱb式。8は口径7.9cm、器高11.8cm。口唇部に4つの突起をもち、口縁部に隆帯を巡らす。9・10は突瘤をもつ宇津内Ⅱa式。11~15は統縄文初頭。12は口径8.7cm、器高8.4cm。口縁部に5個の突起をもち、突起から斜めに縦縄隆帯を垂下させる。突起と突起の間からも縦縄隆帯を垂下させ3本の隆帯が交わるところに円形の縦縄隆帯を配し、それぞれを連結している。15は底部。

第18図-1~4は沈線をもつ統縄文初頭。6・7は縄文晩期幣舞式。8・9は縄線文。10~12・17は沈線。13~15は縄線文と縄端疋痕文。16は爪形状の刺突文。19・23は縄文晩期中葉。21は後北C<sub>1</sub>・D式の底部。22は縄文後期堂林式。

石器はすべて埋土出土。第19図-20~22が無茎石鏃。23・24は有茎石鏃。25~27が片面加工

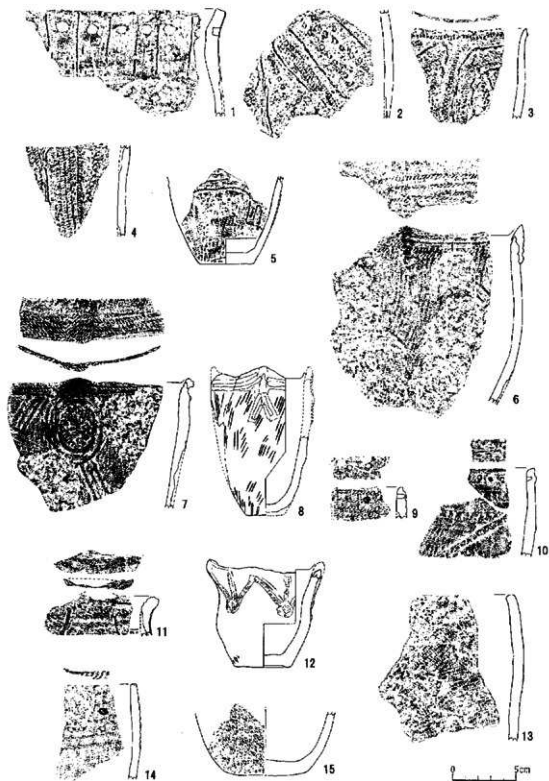


第15圖 123号墓穴埋上(1~7)出土土器

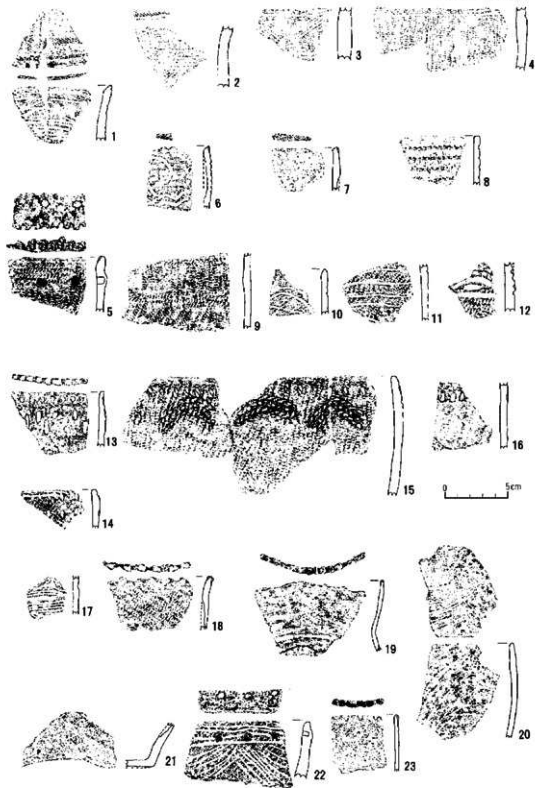


第16图 123号竖穴埋土(1~23)出土土器



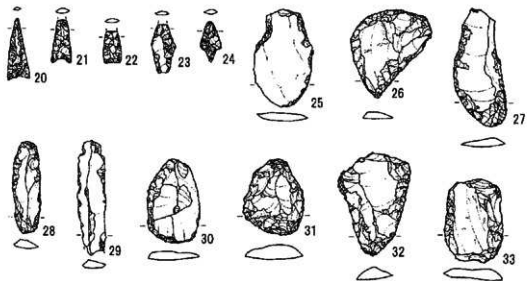
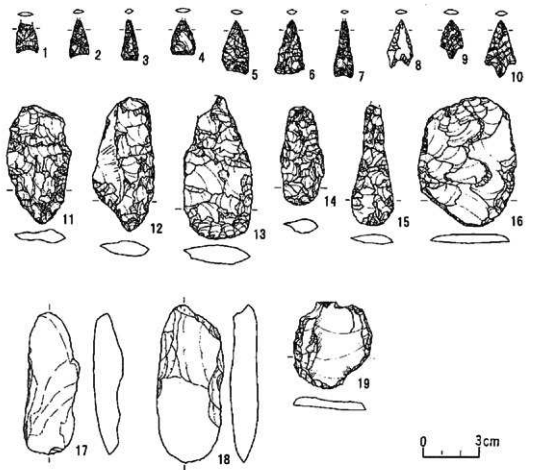


第17圖 123a号壑穴埋土(1~13)出土土器

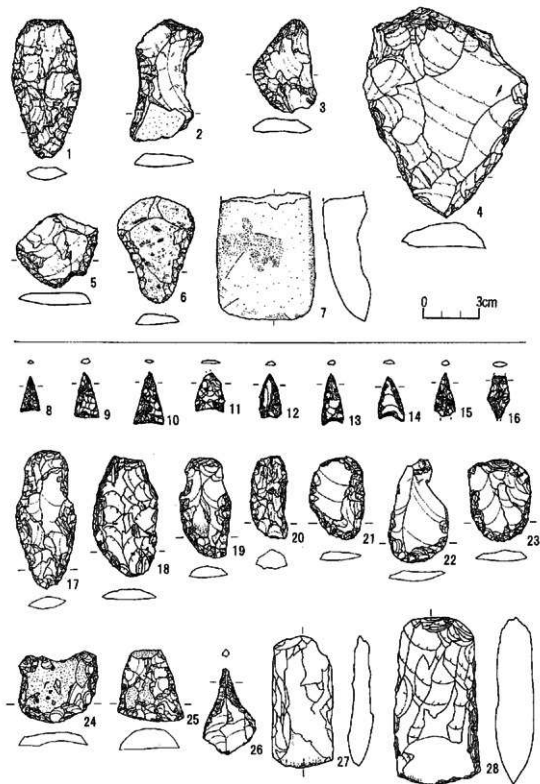


第18圖 123a号竪穴埋土(1~22)・内ビット(23)州土土器

常呂川河口遺跡



第19図 123号壑穴床面(1)・埋土(2~18)・内ビット(19)、123a号壑穴埋土(20~33)出土石器



第20图 123a号聚穴埋土(1~7)、123b号聚穴埋土(8~28)出土石器

のナイフ。25は文武岩製の。28～30・32・33は削器。31は撻器。25以外は黒曜石製の。

第20図-1が両面加工のナイフ。2～6は削器。4は玄武岩製の。7は砂岩製の磨製石斧。4・7以外は黒曜石製の。

### 小 括

本堅穴は123号堅穴より古いものであるが詳細な時期は不明である。(佐々木 寛)

## 123b号 堅 穴

### 遺 構 (第21図)

本堅穴は123a号堅穴の西側に接して検出された堅穴である。規模は長軸約5.20m、短軸約4.80mのほぼ円形を呈し、壁高は確認面から40cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。この堅穴も123a号堅穴と同様に堅穴の中央部を東壁から西壁にかけて水道工事による帯状の攪乱を受けており、北壁の一部も攪乱を受けている。柱穴は径10～18cm、深さ7～20cmのものが13本検出された。中央部が攪乱を受けているため炉跡は検出されなかった。堅穴床面直上に黒曜石のフレーク・チップの集積が認められた。床面精査中に堅穴北西側の床面からピット892が検出されている。

### 遺 物 (第22図, 第23図, 第20図-8～28)

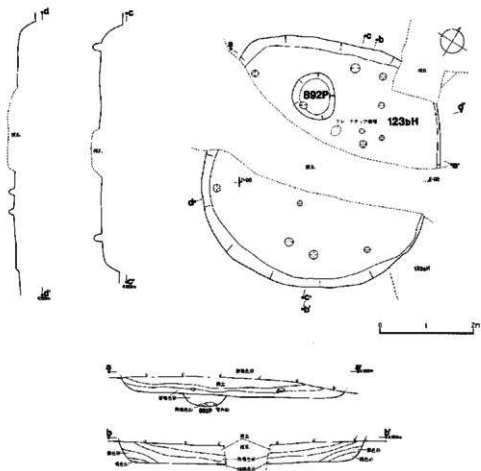
床面から遺物は出土していない。埋土からは第22図-1は後北C<sub>1</sub>・D式。2も後北C<sub>1</sub>・D式の無文の小型十器。器高3.6cm、口径は大半が欠失しているため不明。3～6は宇津内Ⅱb式。7・8は統縄文初頭。7は口縁部に2対の吊り耳をもち、4本の縄線文を巡らす。8は口縁部に突瘤をもつ。口径4.0cm、器高6.0cm。9・10は突瘤をもつ宇津内Ⅱa式。

第23図-1は宇津内Ⅱa式。口縁部に突瘤を巡らし、その下に8条の縄線文を配する。縄線文の下には縄端痕文を2列巡らす。口径33.5cm、器高は底部が欠失しているため不明である。2・4は統縄文初頭。3は宇津内式の底部。5～8は縄文晩期中葉。5は縄線文。6は刺突文。7は沈線文。8は縄端庄痕文。9は縄文後期常林式。

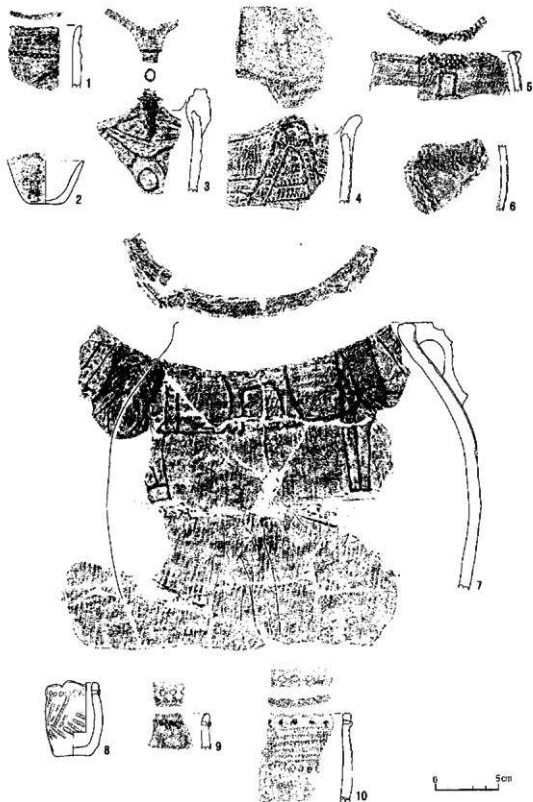
石器は埋土出土。第20図-8～14が無茎石鏃。15・16は有茎石鏃。17～19は片面加工ナイフ。18は頁岩製の。20～23は削器。24・25は撻器。26は石錐。27は緑色泥岩製の磨製石斧。28は青色泥岩製の磨製石斧。18・27・28以外は黒曜石製の。

### 小 括

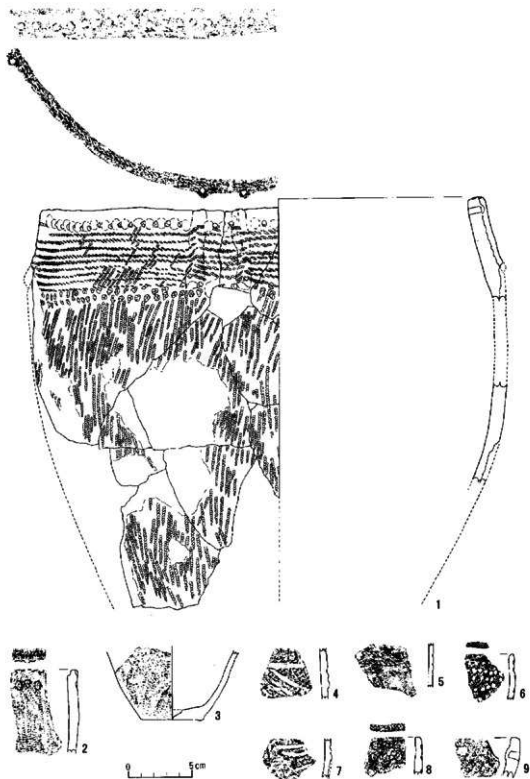
本堅穴は123a号堅穴より古い。床面から遺物が出土していないため詳細な時期は不明である。(佐々木 寛)



第21図 123b号竪穴、ピット892平面図



第22圖 123b号墓穴埋土(1~10)出土土器



第23图 123b号窑穴埋土(1~9)出土土器



## 124号 竪 穴

### 遺 構 (第24図, 図版4-1)

本竪穴は118号竪穴の西側約2.00mに位置する。規模は長軸約5.90m、短軸約5.20mの長方形を呈する。壁高は確認面から約50cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。南西側の壁の一部は攪乱によって破壊されている。竪穴中央も攪乱を受けているため炉跡の残土は半分検出されただけである。カマドは東壁中央に構築され、構築材は粘土で、袖部には礫が用いられている。煙道の上部からも礫が検出されている。煙道の長さは約1.00mであり、緩やかに立ち上がる。カマドの焼十からは竹片が多少検出されている。柱穴は主柱穴が径18~20cm、深さ12~22cmのものが3本、壁柱穴は径10~22cm、深さ7~20cmのものが南壁で2本、西壁で5本、北壁で6本検出確認されている。床面を覆っている黒褐色砂層中から炭化材が認められた。

### 遺 物 (第25図, 第26図, 第27図, 第28図, 図版4-2)

床面からは第25図-1の高杯の脚部が出土している。埋土からは2の高杯の口縁部。3~10は埴文土器。10は底部。11~15は突瘤をもつ宇津内Ⅱa式。

第26図-1・2は突瘤をもつ宇津内Ⅱa式。3は宇津内式の口縁部、4・5は縄文初頭。4は口径8.1cm、器高11.0cmの無文。6~8は縄文晩期幣舞式。9~22は縄文晩期中葉。9~15は縄線文。16・17は縄線文と爪形の刺突文。18・22は沈線文と刺突文。19~21は沈線文と縄端止痕文。

第27図-1~15は縄文晩期中葉。1は沈線文。2は沈線文と縄線文。3~13は刺突文。14・15は縄端止痕文。16・17は縄文晩期前葉。16は内側に斜め方向から施された突瘤文。17は爪形文。18~21は縄文晩期。22は縄文後期。

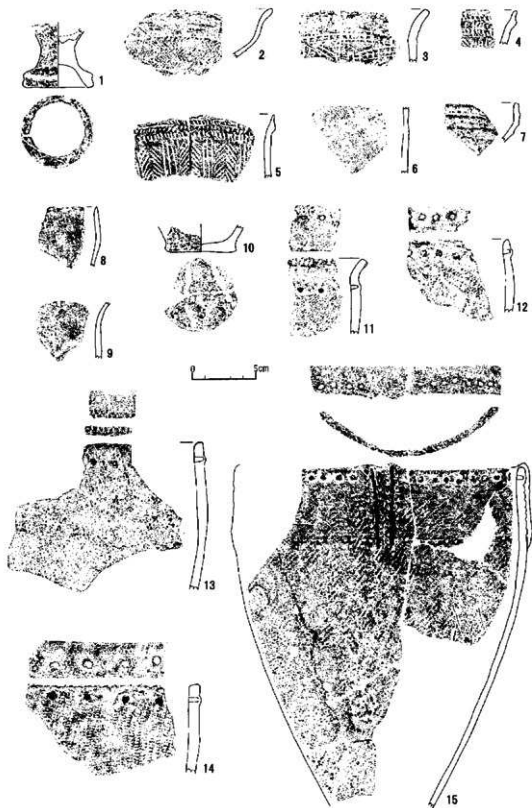
石器は埋土出土。第28図-1~4は無茎石鏃。5~16は有茎石鏃。17・18は石槍。19~25はナイフ。20・23は頁岩製。26~32・34は削器。26は玄武岩製。33は搔器。35は石槍状の砂岩に擦痕を付ける。石槍状に削ったものか自然石か不明。

### 小 括

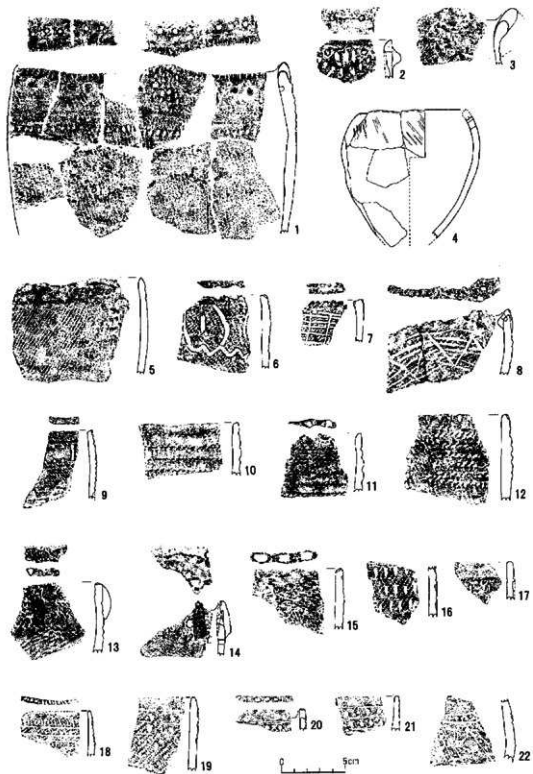
本竪穴は埴文期の竪穴で床面直上に炭化材が認められることから火災住居と考えられる。時期は宇田川編年後期に比定される。

(佐々木 寛)



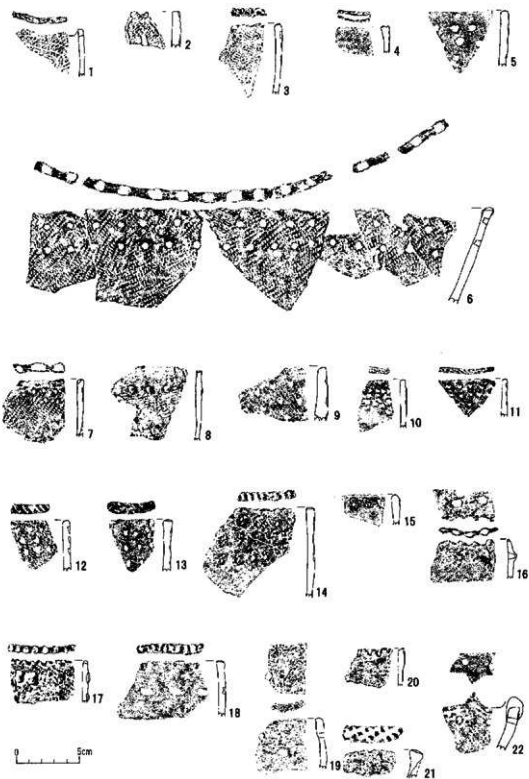


第25图 124号整穴床面(1)・埋土(2~15)出土土器

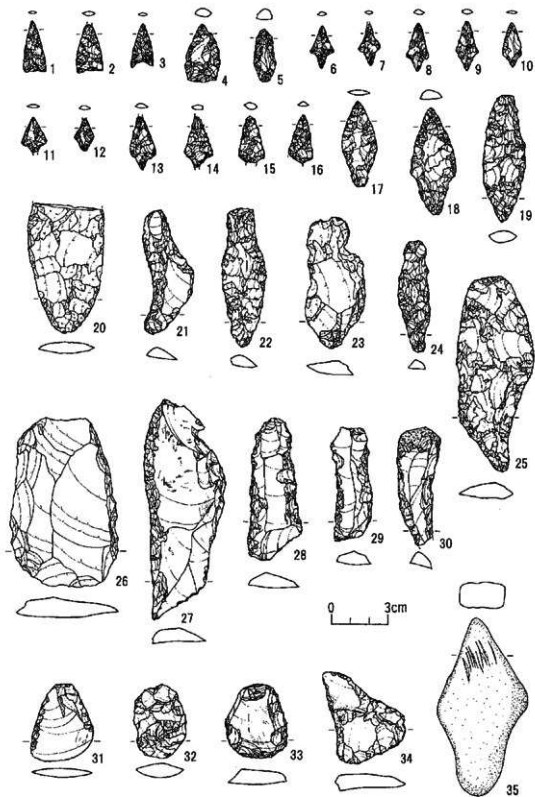


第26图 124号墓穴埋土(1~22)出土土器

常呂川河口遺跡



第27圖 124号塚穴埋土(1~22)出土土器



第28圖 124号塚穴埋土(1~35)出土石器

## 125号 竪穴

### 遺 構 (第29図, 図版4-3)

本竪穴はP' 92グリッドに位置する。規模は一辺約3.00mの方形を呈するが、西壁の南側の部分が多少外側に膨らんでいる。壁高は確認面から約30cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。伊跡は竪穴のほぼ中央にある。カマドは東壁中央より北寄りに構築され、構築材は粘土であるが、袖部には礫も用いられている。煙道の長さは約0.70mであり、斜めに立ち上がる。カマドの焼土からは骨片が検出されている。柱穴は主柱穴が径12~16cm、深さ径10~15cmのものが3本、壁柱穴は径8~10cm、深さ7~12cmのものが南壁で3本、西壁で3本確認されている。焼土の南西側約20cmのところに30×20cmの浅いピットが検出されている。床面を覆っている黒褐色砂層中からは炭化材が認められた。床面から遺物は検出されていない。

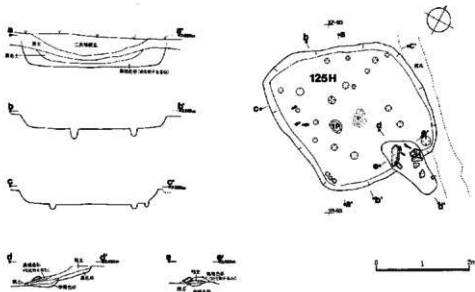
### 遺 物 (第30図, 第37図-1~3)

第30図-1はカマドから出土の縄文晩期。埋土からは2が擦文土器。3は字津内Ⅱa式。4は字津内式の底部。5~11は縄文晩期。

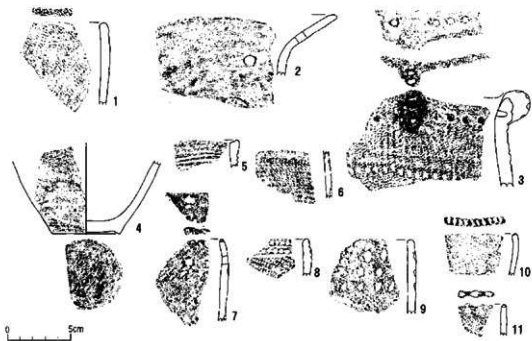
石器は埋土出土。第37図1~3が黒曜石製の石鏃。

### 小 括

本竪穴は擦文期の竪穴で床面直上に炭化材が認められたことから火災住居と考えられる。詳細な時期は不明である。 (佐々木 寛)



第29図 125号竪穴平面図



第30圖 125号壑穴カマド(1)・埋土(2~11)出土土器



## 126号 竪 穴

## 遺 構 (第31図, 図版5-1)

本竪穴はM'95・96, N'95・96グリッドに位置する。規模は長軸約7.30m、短軸約6.40mの楕円形を呈する。壁高は確認面から50cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。柱穴は壁柱穴が径10~20cm、深さ7~21cmのものが13本検出されている。竪穴の中央より多少北東寄りに径約50cmの範囲に炉跡の焼土が認められた。また西壁近くの床面直上からも40×30cmの範囲とその北側にも50×40cmの範囲で骨片を含んだ焼土が検出されている。床面直上からは少量ではあるが炭化材が認められ、一部にはカヤ材も確認されていることから焼失住居と考えられる。

## 遺 物 (第32図, 第33図, 第34図, 第35図, 第36図, 第37図-4~36, 第38図-1~3, 図版5-2~6, 図版6-1・2)

床面からは第32図-1~5が出上している。1は口縁部に内側から突瘤をもつ縄文初頭の土器。口径11.0cm、器高10.1cm。2はミニチュアの無文土器。口径3.2cm、器高1.4cm。3は4条の縄線文と1条の縄端疋文を巡らす字津内Ⅱb式。4は口縁部に突瘤をもつ字津内Ⅱa式。5は字津内式の底部。埋土からは6は口径16.1cm、器高15.6cm、無文の坏形撥文土器。7は無文の撥文土器。口径10.0cm、器高9.7cm。8~10は撥文土器。10は底部。

第33図-1は口径15.8cm、器高は底部が欠失しているため不明である。無文で口縁部に外からの突瘤をもち、微隆帯を3条巡らす北大式。2~6は後北C<sub>1</sub>・D式。5は注口土器。7~9は字津内Ⅱb式。

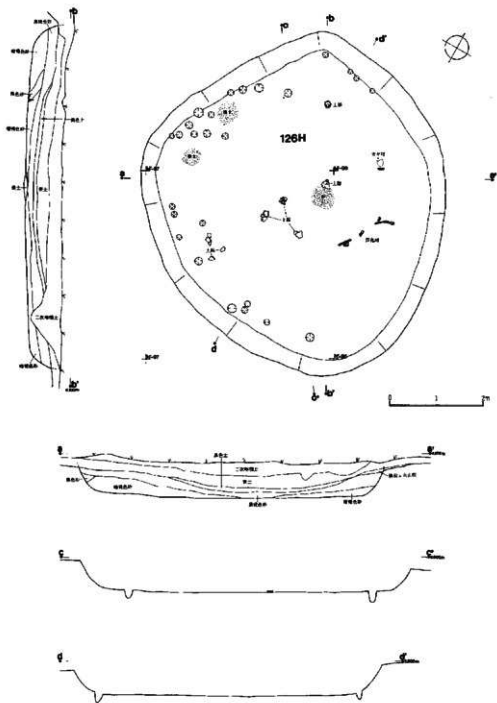
第34図-1~3はいずれも字津内Ⅱb式。1は1対の突起と2個1対の小突起をもち、それぞれの突起から隆帯をハの字状に垂下させ、横走する隆帯で連結する。口縁と横走する隆帯の間に4条の縄線文を巡らす。口径27.0cm、器高は底部が欠失しているため不明である。2は1対の吊り耳と2個1対の小突起をもち、口縁部に3~7条の縄線文を巡らす。口径21.4cm、器高22.0cm。3は1対の突起と2個1対の小突起をもち、突起と突起の間から隆帯を垂下させその下に同心門文を配し、それぞれの同心門文を横走する隆帯で連結する。口縁と横走する隆帯の間に6~7条の縄線文を巡らす。口径20.4cm、器高は底部が欠失しているため不明。

第35図-1~3は字津内Ⅱa式。1は口縁部に1対の吊り耳をもち、内側から突瘤を巡らす。吊り耳の下に隆帯を垂下させる。口縁部には5条の縄線文を配し、その下に縄端疋文を1条巡らす。口径25.0cm、器高は底部が欠失しているため不明。4・5は縄文初頭。6~11は縄文晩期。

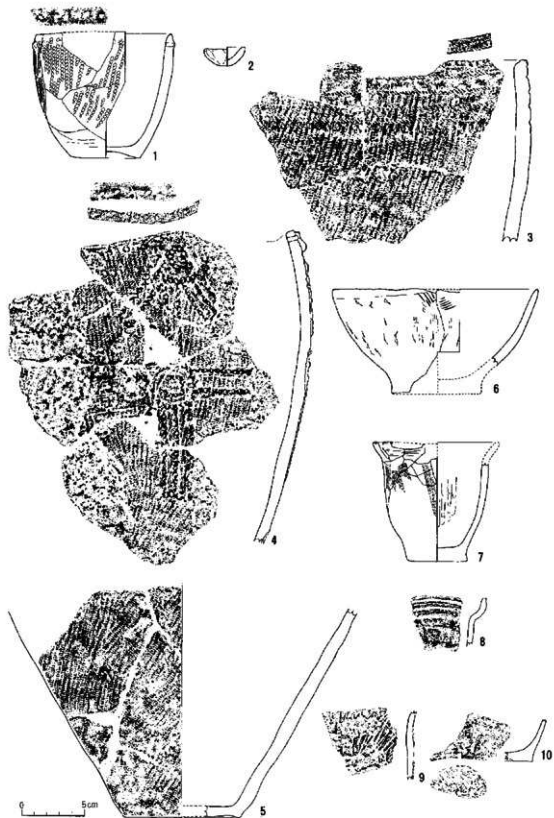
第36図-1~8は縄文晩期。9~11は縄文後期。9・10は堂林式。12は縄文中期。

石器は第37図-4~6が無茎石鏃。7~17が有茎石鏃。18は片面加工ナイフ。19~24は両面加工ナイフ。25~35は削器。36は搔器。すべて黒曜石製。

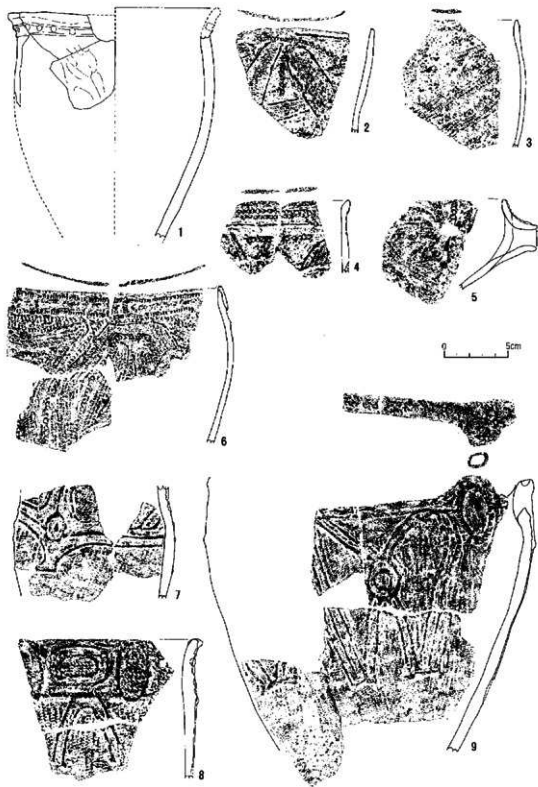
第38図-1は丸く新磨した石剣の端部。2・3はたたき石。1・2は泥岩製。3は安山岩製。



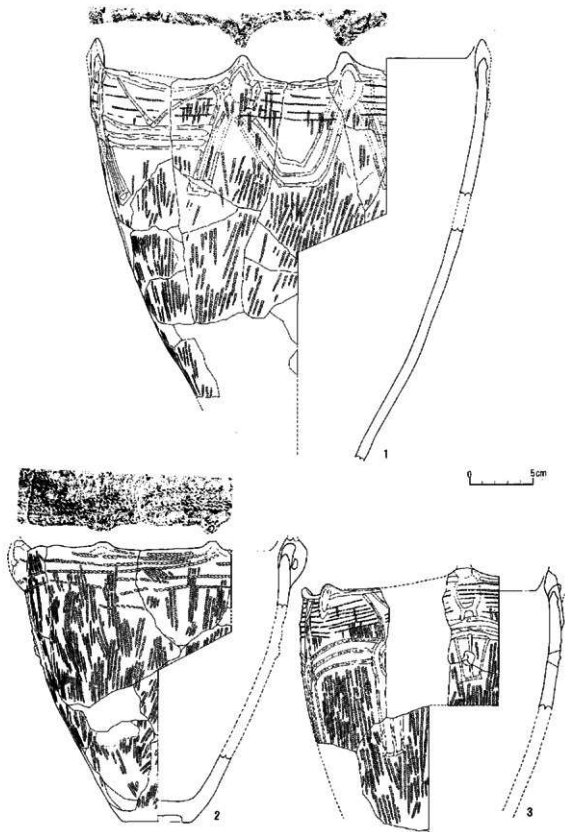
第31图 126号竖穴平面图



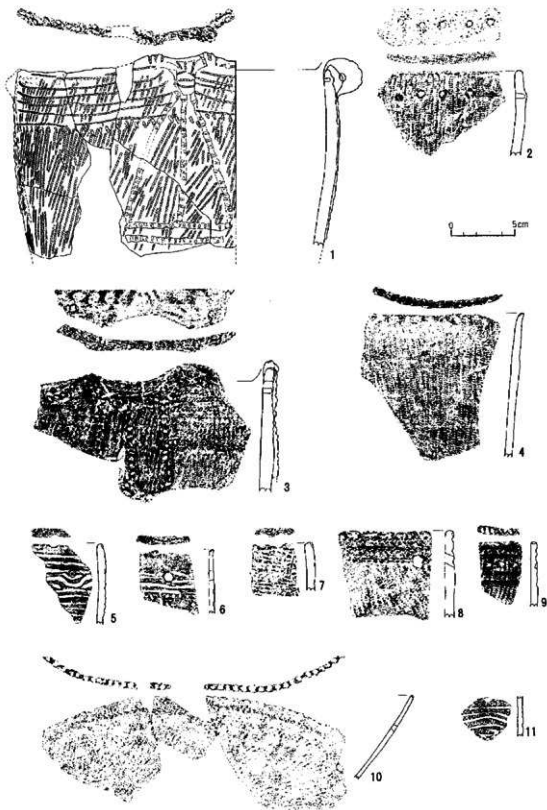
第32圖 126号整穴床面(1~5)・埋土(6~10)出土土器



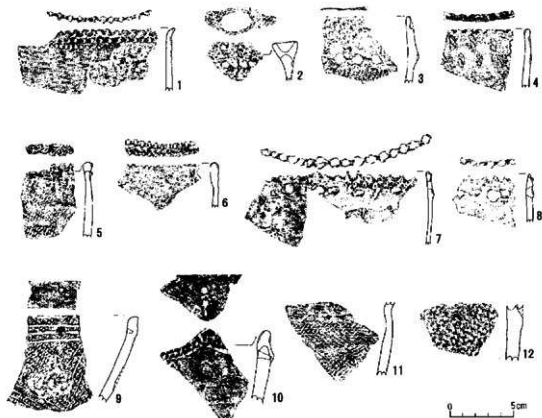
第33图 126号墓穴出土(1~9)出土土器



第34图 126号整穴埋土(1~3)出土器



第36圖 126号壙穴埋土(1~11)出土土器

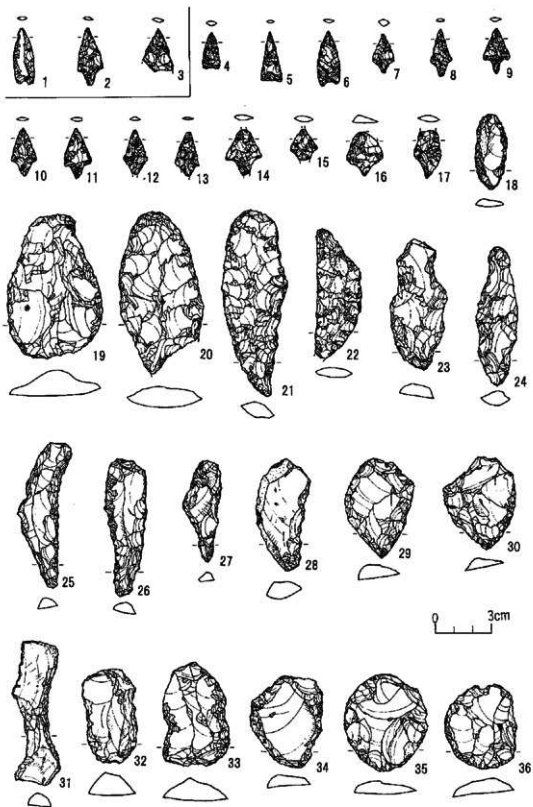


第36圖 126号竪穴埋土(1~12)出土土器

### 小 括

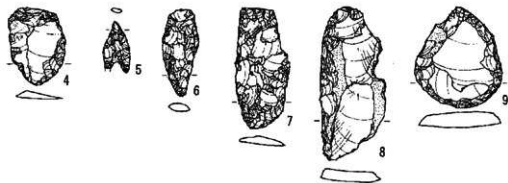
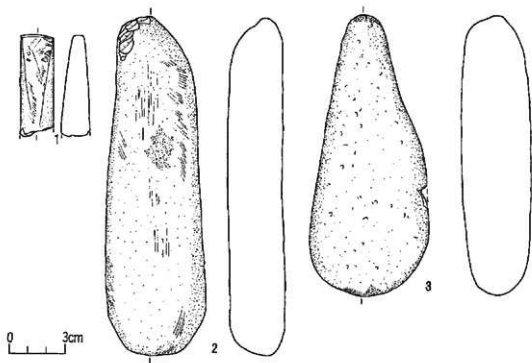
本竪穴は床面の土器と126a号竪穴との関係から統編文字津内Ⅱb式期と考えられる。

(佐々木 寛)



第37图 125号竖穴埋土(1~3)、126号竖穴埋土(4~36)出土石器





第38圖 126号竅穴燧土(1~3)、126a号竅穴床面(4)・燧土(5~9)出土石器

## 126a号 竪穴

## 遺構 (第40図, 図版6-3)

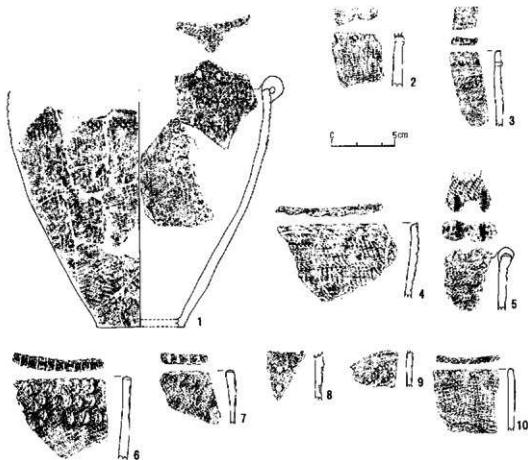
本竪穴は126号竪穴の床面精査中に検出したもので、規模は長軸約5.00m、短軸約4.00mの楕円形を呈する。壁高は126号竪穴床面から約15cmで斜めに立ち上がる。主柱穴は径16~18cm、深さ11~18cmのものが4本、壁柱穴は径8~12cm、深さ4~11cmのものが11本検出された。伊跡と思われる焼土は竪穴の中央より多少南東寄りにあつて径約80×70cmと、その北側約30cmのところにも約70×50cmの範囲に認められた。どちらの焼土からも少量の骨片が検出されている。

## 遺物 (第39図, 第38図-4~9)

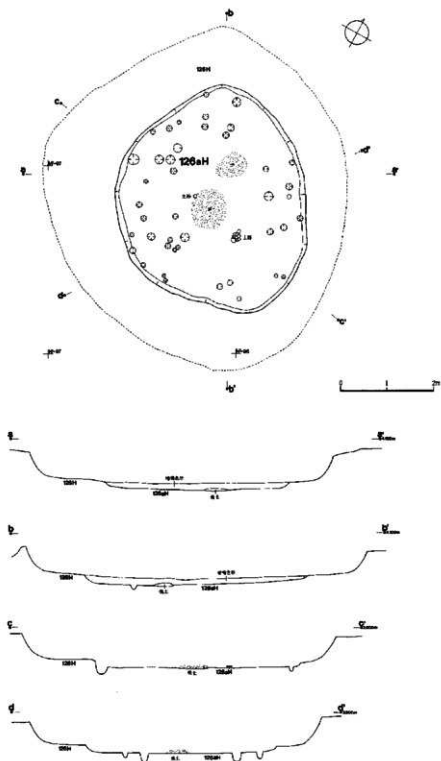
第39図-1・2は床面から出土。1は吊り耳をもち、口縁部に2条の縄線文と1条の縄端庄痕文を巡らす。宇津内Ⅱb式。2は突瘤をもつ宇津内Ⅱa式。埋土からは3が宇津内Ⅱa式。

4が幣舞式。5~10は縄文晩期中業。7は縄端庄痕文。8・9は刺突文。

石器は第38図-4は床面出土の刮器。5は埋土出土の無茎石鏃。深い抉りが入る。6・7は



第39図 126a号竪穴床面(1・2)・埋土(3~10)出土土器



第40圖 126a号整穴平面図

両面加工ナイフ。8は削器。9は搔器。すべて黒曜石製。

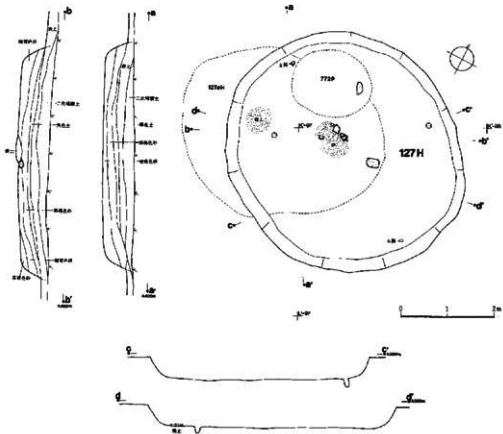
### 小 括

本竪穴は床面出土の土器から縄文文字津内Ⅱb式期のものと考えられる。（佐々木 寛）

## 127号 竪 穴

### 遺 物（第41図，図版6-4）

本竪穴はL' 96グリッドに位置する。規模は長軸約4.30m、短軸約3.70mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約40cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。ほぼ中央に約80×50cmの範囲で炉跡がある。炉跡の周辺に大きな礫が2個認められていることから石囲み炉であったと考えられる。また西壁際にも約60×50cmの範囲に焼土が検出された。柱穴は径10～12cm、深さ15～17cmのも



第41図 127号竪穴平面図

のが2本検出されている。床面精査中にビット772を確認したが、このビットは本堅穴より新しいもので堅穴の埋土中から構築されたものであった。

**遺物** (第42図, 第43図, 第44図-1~19)

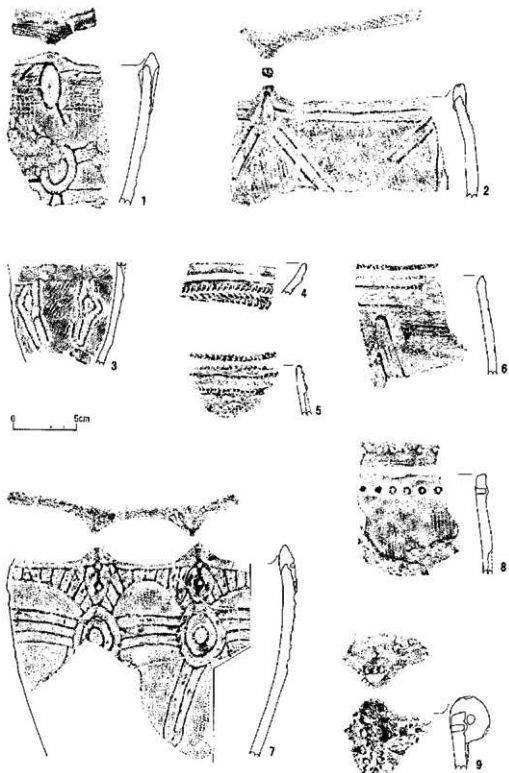
床面からは第42図-1~3が出土している。いずれも字津内Ⅱb式。埋土からは4が櫛文式。5・6は後北C<sub>1</sub>・D式。7は同心円文をもつ字津内Ⅱb式。8・9は突瘤をもつ字津内Ⅱa式。

第43図-1・2は字津内Ⅱb式。3・4は幣舞式。5~11・13は縄文晩期中葉。5・6は縄線文。8~11・13は刺突文。12・14は縄文晩期前葉。12は爪形文。14は内側から斜め方向の突瘤。15は縄文後期堂林式。

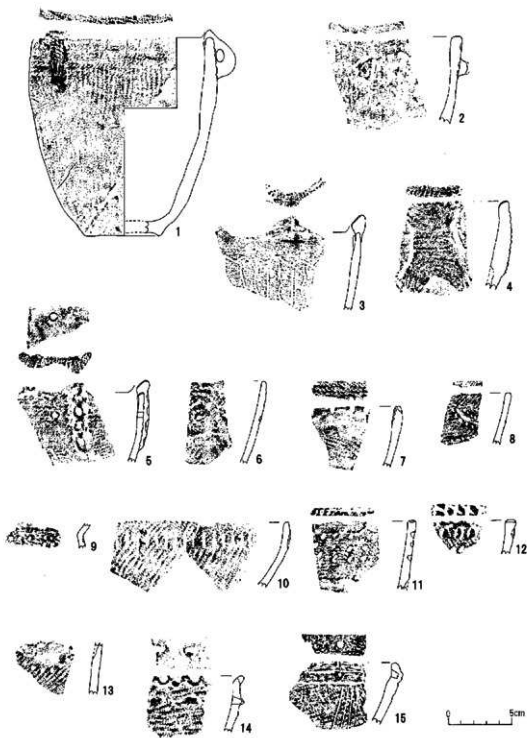
石器は第44図-1は床面から出土した削器。埋土から2~11は石鏃。12・13・16・17はナイフ。14・15は削器。18・19は泥岩製の磨製石斧。19は刃部の表裏の上端と石斧上部に浅く細い1条の溝を入れる。18・19以外は黒曜石製

**小括**

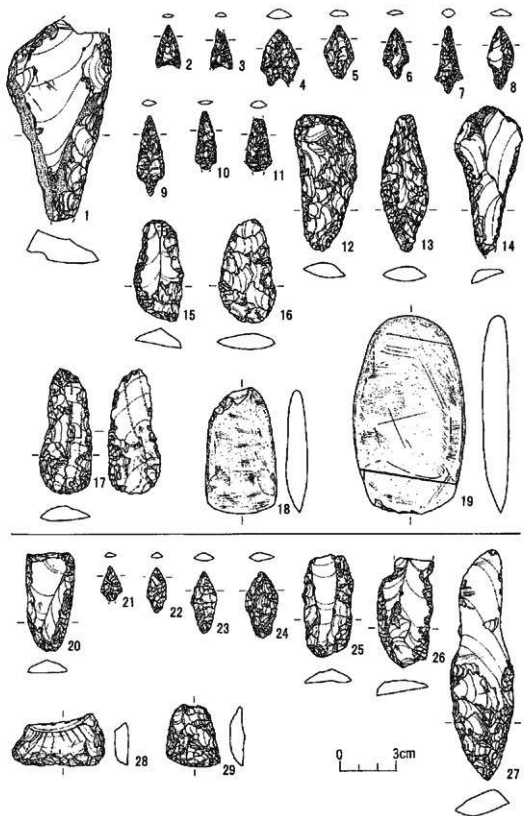
本堅穴の時期は床面の出土土器から統縄文字津内Ⅱb式期と考えられる。(佐々木 覚)



第42图 127号窑穴床面(1~3)·埋土(4~9)出土土器



第43圖 127号壑穴埋土(1~15)出土土器



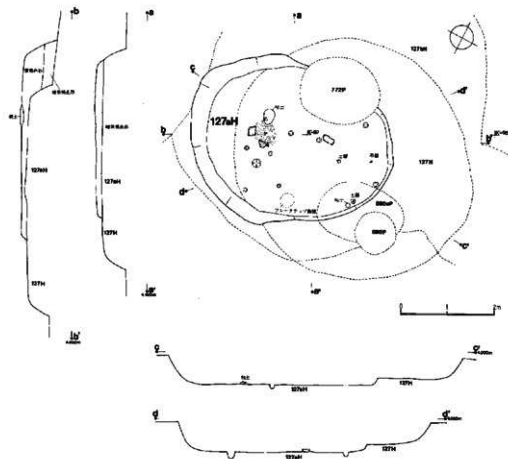
第44圖 127号壑穴床面(1)・埋土(2~19)、127a号壑穴床面(20)・埋土(21~29)出土石器



## 127a号 竪穴

## 遺 構 (第45図, 図版7-1)

本竪穴は127号竪穴と重複した竪穴で西側にずれて検出された。規模は長軸約4.50m、短軸約3.60mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約55cm、127号竪穴床面から約15cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。北壁にはピット772が床面を貫いて構築されている。竪穴の中央より西側に約60×40cmの範囲で炉跡が認められた。炉跡の周囲から礫が2個検出されていることから石囲み炉とも考えられる。壁柱穴は主柱穴と思われる径18cm、深さ16cmのものが1本、径8～10cm、深さ8～11cmの壁柱穴が2本、その他に径8～10cm、深さ8～9cmの柱穴が5本検出



第46図 127a号竪穴平面図

されている。炉跡直上と東壁際の床面から粘土塊が検出された。竪穴埋土からは黒曜石のフランク・チップの集積が認められている。

#### 遺物 (第46図, 第47図, 第44図-20~29, 図版7-2・3)

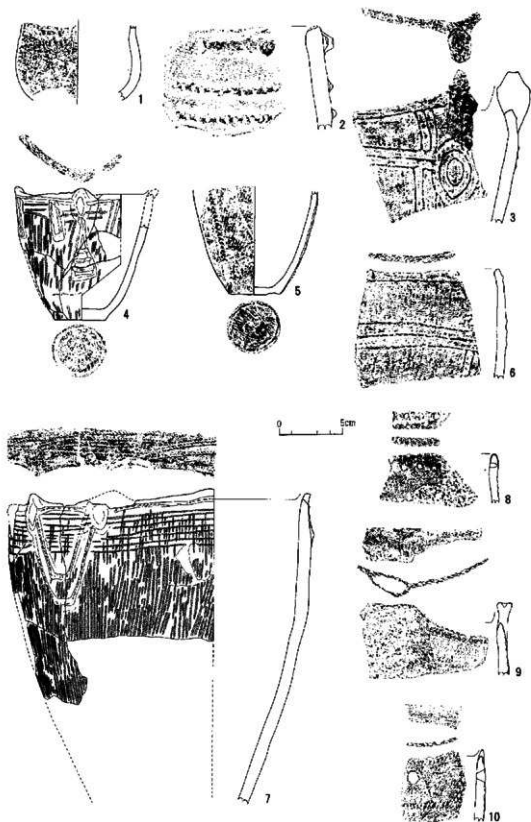
床面からは第46図-1・2の土器が出土している。1は統縄文初頭。2は宇津内Ⅱb式。埋土からは3・4・6・7は宇津内Ⅱb式。4は4個の突起をもち口縁部に1条の隆帯と2~3条の縄線文を巡らす。突起からは三角形に隆帯を垂下させる。口径10.9cm、器高10.6cm。5は宇津内式の底部。7は2個1対の突起と1対の小突起をもち、2個1対の突起の下には「V」字状に隆帯を垂下させる。口縁部には7条の縄線文を巡らす。8は宇津内Ⅱa式。9・10は統縄文初頭。

第47図-1は口縁部が外反し、口縁部から胴部にかけて3~5条の斜め方向の縄線文を交差させる。宇津内系。口径19.6cm。器高は底部が欠失しているため不明。2~4は宇津内式の底部。2は底部に隆帯を巡らす。5は統縄文初頭。6は幣舞式。7~11は縄文晩期中葉。7~9は縄線文。10は沈線文。11は底部。12は内側に斜め方向の突瘤をもつ縄文晩期前葉。13・14は縄文晩期。15は縄文後期堂林式。16も縄文後期。

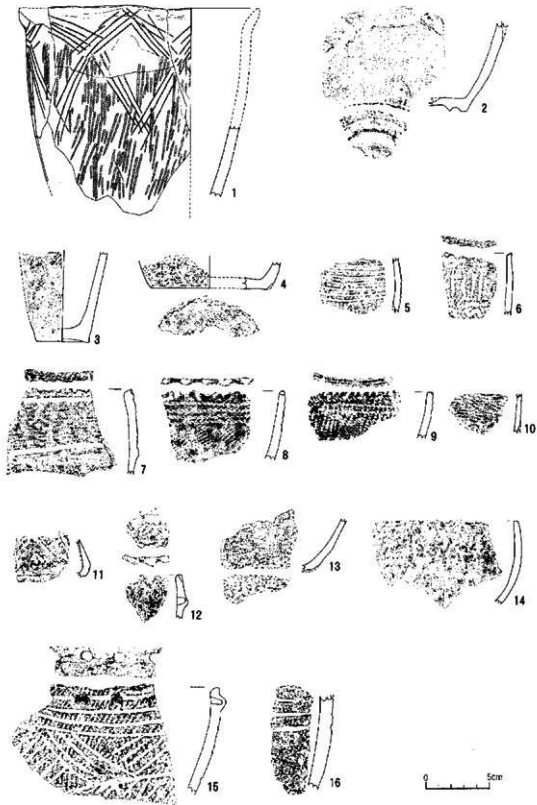
石器は第44図-20は床面出土の削器。21~24は有基石鏃。25~27は削器。28・29は槌器。全て黒曜石製。

#### 小括

本竪穴は埋土から宇津内Ⅱb式の土器が出土しているものの床面からは2点の宇津内Ⅱa式の土器が見られるのみであるので詳細な時期は不明である。(佐々木 寛)



第46圖 127a号整穴床面(1・2)・埋土(3~10)出土土器



第47图 127a号竖穴埋土(1~16)出土土器

## 127b号 竪穴

### 遺 構 (第48図, 図版7-4)

本竪穴は127号竪穴と127a号竪穴の外側に重複して検出された。竪穴の西側が川岸の崩落によって破壊されているため正確な規模、形態は不明であるが、径約7.00mの不整形円形を呈するものと思われる。竪穴の東側に幅約2.50m、長さ約3.00mの張り出し部をもつ。壁高は確認面から約70cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。竪穴中央部はビット772が床面を貫いている。また、南東壁にもビット890・890aが構築されている。ビット772の西側に跡跡と思われる焼土が認められ、焼土中には多少の骨片が検出された。ビット772の北西側の床面に65×45cmの範囲で、ビット772の南側床面に30×20cmの範囲でそれぞれ焼土が認められ、北西側の焼土中には多少の骨片が検出されている。柱穴は主柱穴と思われる径18～30cm、深さ18～25cmのものが4本、径8～16cm、深さ6～20cmの壁柱穴が14本、その他に径6～30cm、深さ6～25cmの柱穴が44本確認されている。竪穴の東側床面と西側床面からは黒曜石のフレーク・チップの集積が認められている。

### 遺 物 (第49図, 第50図, 第51図, 第52図, 図版8-1)

床面から土器は出土していない。第49図はすべて字津内Ⅱb式。1は1対の吊り耳と2個1対の小突起をもち、隆帯を巡らす。口径13.7cm、器高15.6cm。2は1対の突起と2個1対の小突起をもち、突起の下と小突起の間に同心円文を配する。同心円文は隆帯で連結され、同心円文の下には「ハ」の字状に隆帯を垂下させる。口径18.5cm、器高21.8cm。3は1対の突起と2個1対の突起をもつと考えられ、突起の下に「X」状に隆帯を垂下させる。口縁部には5条の縄線文を巡らす。口径約9.5cm、器高約13.5cm。

第50図-1・2は字津内Ⅱb式。3・4は字津内Ⅱa式。5は字津内式。6～8は字津内式の底部。9は縄文初頭。10～13は縄文晩期中葉。14・15は縄文晩期幣舞式。

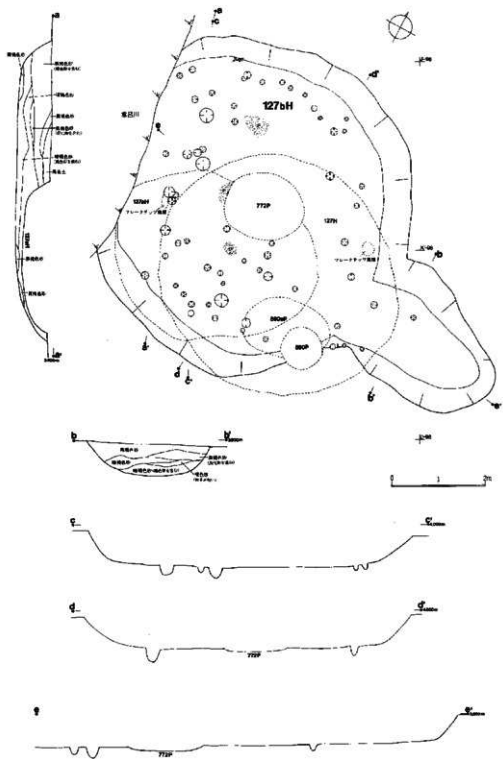
第51図-1～14は縄文晩期中葉。1～4は縄線文。5・6は沈線文。8・11は刺突文。7・9・10は縄端汗痕文。15～17は縄文晩期前葉。15・16は爪形文。17は内側に斜め方向の突瘤をもつ。18～23は縄文後期。18は虻轔式。19・22は堂林式。

石器は第52図-1は床面出土の有茎石鏃。埋土から2～10は無茎石鏃。11～22は有茎石鏃。23～29は両面加工ナイフ。30～34は削器。35～40は搔器。20は頁岩製。41は泥岩製の磨製石斧。20・41以外は黒曜石製。

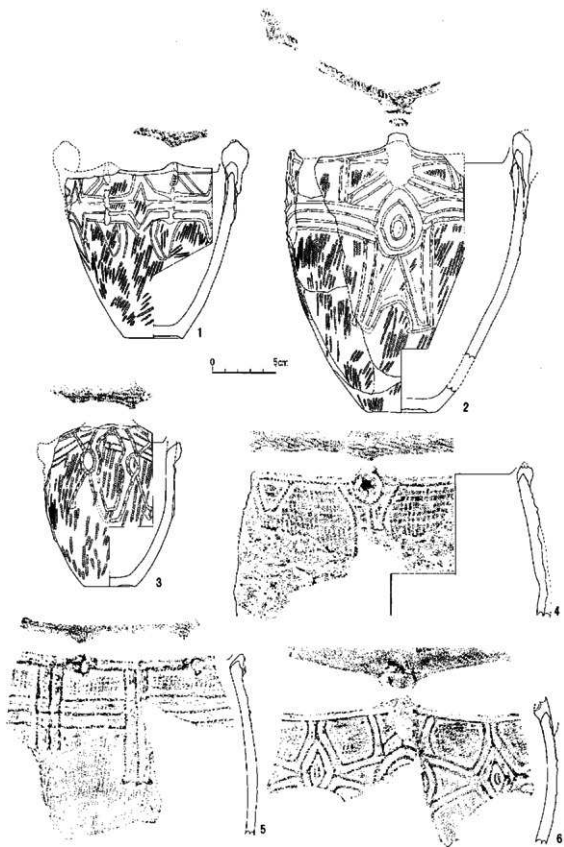
### 小 括

本竪穴の時期は床面から土器が出土していないため詳細な時期は不明である。

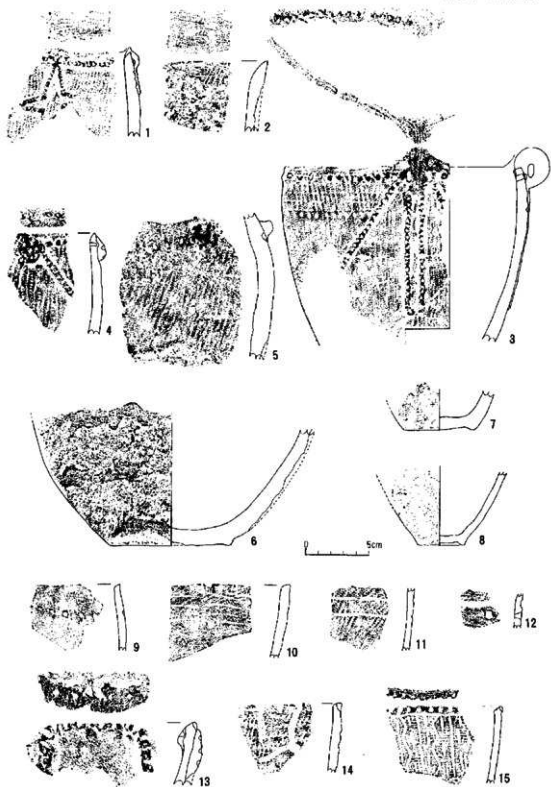
(佐々木 賢)



第48图 127b号窑穴平面图

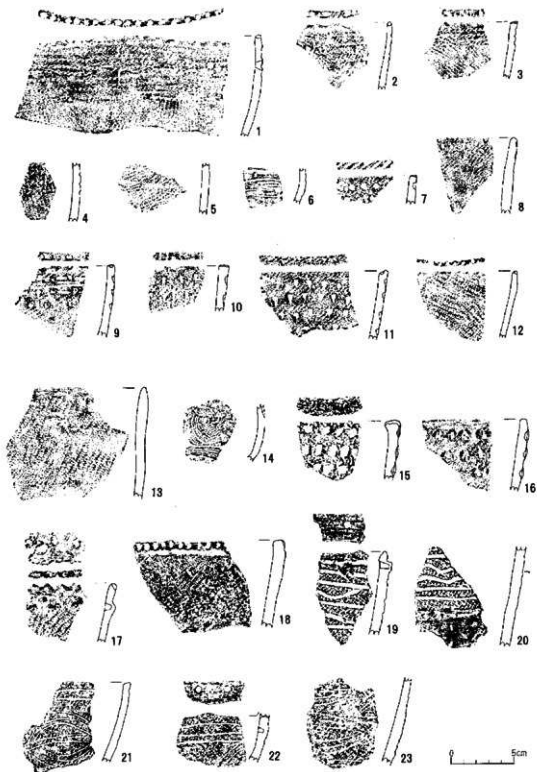


第49图 127b号竖穴埋土(1~6)出土土器

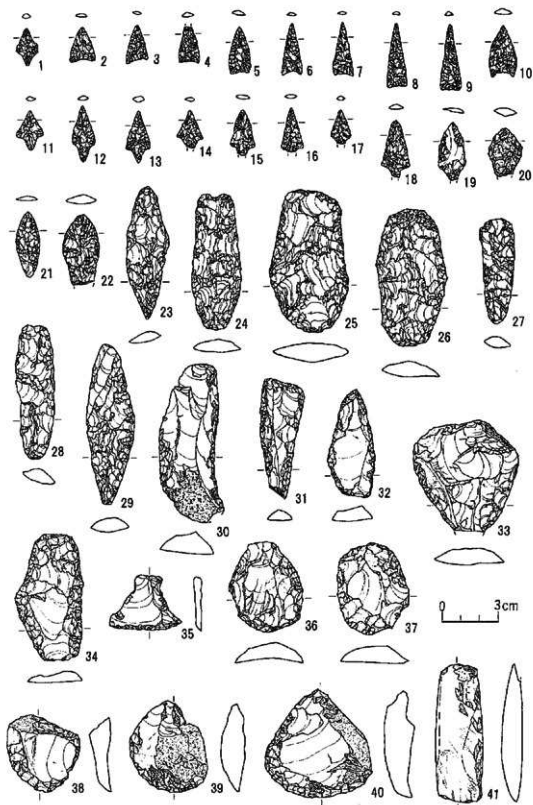


第50图 127b号窑穴出土(1~15)出土土器





第51圖 127b号竈火壇土(1~23)出土土器



第52图 127b号墓穴床面(1)·塋土(2~41)出土石器

## 128号 竪 穴

## 遺 構 (第53図, 図版8-3)

本竪穴はQ'96グリッドに位置する。規模は長軸約4.30m、短軸約3.80mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約40cmを測り、斜めに立ち上がる。南壁の一部に擾乱を受けている。埋土の黒色土層と黒褐色砂層の間に摩岡bと思われる火山灰が検出された。柱穴は径8~10cm、深さ7~14cmの壁柱穴が東壁で5本、西壁で1本検出され、その他に径8~12cm、深さ7~12cmのものが東側で6本、南側で1本認められた。床面からは伊跡の焼土は検出されなかった。竪穴中央より南側で礫5個の集積が認められている。

## 遺 物 (第54図, 第55図, 第57図-1~16, 図版8-2)

床面から第54図-1~8が出土。1は1対の突起と2個1対の小突起をもち、突起の下に隆帯を垂下させる。口唇部直下にも隆帯を1条横走させる。器面には全体に摩耗が激しい。口径19.0cm。器高は底部が欠失しているため不明。2は1対の吊り耳をもち、口縁部に1条の縄端圧痕文を巡らす。口径5.7cm、器高5.4cm。いずれも字津内Ⅱb式。3も字津内Ⅱb式。4は字津内式。5は突瘤をもつ字津内Ⅱa式。6・7は字津内式の底部。8は縄線文を巡らす縄文晩期中葉。埋土からは9が撥文土器。10~12が字津内Ⅱa式。

第55図-1はフシココタン下層式並行期。2は縄文初頭。3は口縁部が欠失しているため口径、器高ともに不明であるが、口縁部に1段と胴部に1段の膨らみをもたせ、膨らみの上部に縄端圧痕文を巡らす。幣舞式の舟形土器であろう。4~18は縄文晩期中葉。5は沈線文。6・7は縄線文。8~12・14・15は刺突文。13・16・17は縄端圧痕文。18は底部。19は内側に斜め方向の突瘤をもつ縄文晩期前葉。

石器は第57図-1~3が床面出土。1・2は石鏃。3は泥岩製の磨製石斧。埋土から4~11が石鏃。12~14は刮器。15は搔器。16は緑色泥岩製の磨製石斧。3・16以外は黒曜石製。

## 小 括

本竪穴の時期は床面からの出土土器から統縄文字津内Ⅱb式期と考えられる。

(佐々木 寛)

## 128a号 竪 穴

## 遺 構 (第53図, 図版8-4)

本竪穴は128号竪穴の床面に検出されたもので規模は長軸約2.80m、短軸約2.40mの楕円形を呈する。壁高は128号竪穴床面から約10cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。竪穴のほぼ中央部に90×50cmの範囲で大小9個の礫に囲まれた伊跡が確認され、伊跡の焼土の中から骨片が検出されている。伊の南側から第56図-1の土器が一括出土している。柱穴は径8~10cm、深さ

6～8cmの壁柱穴が3本、その他に径8～10cm、深さ6～9cmのものが2本検出されている。伊跡の東側には径約30cm、深さ14cmのピットが認められた。

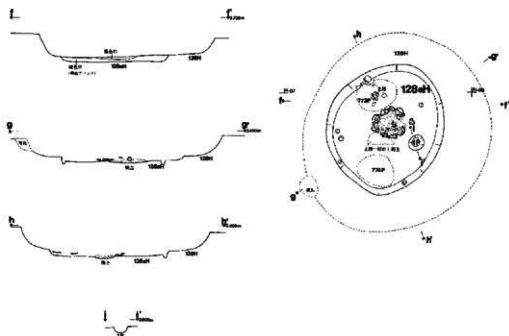
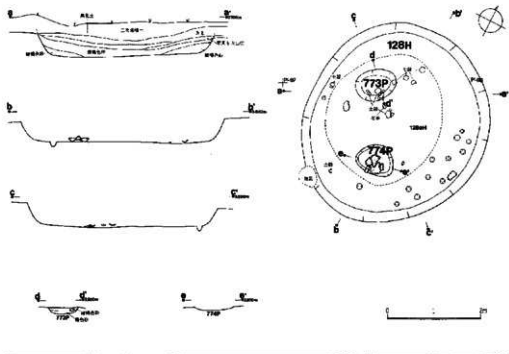
#### 遺物 (第56図、第57図-17～23、図版9-1)

第56図-1～7は床面からの出土。1は伊跡南側の床面に一括して出土した土器で口径16.8cm、器高21.5cm。口唇部に刻みをもち、口縁部に突瘤を巡らす。宇津内Ⅱa式。2も口唇部に刻みをもち、口縁部に突瘤を巡らす。突瘤の下には5条の縄線文と1条の縄端疋痕文を巡らす。宇津内Ⅱa式。3・4は縄文初頭。5は薄手の無文土器で赤色顔料が付着する。6は宇津内式の底部。7は縄文晩期。埋土からは8が口径10.5cm、器高9.8cm。縦方向の縄文のみで貼瘤を1対もつ。底部に縄端疋痕文を施す。縄文初頭と考えられる。9～13は縄文晩期。

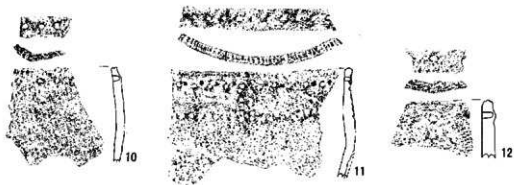
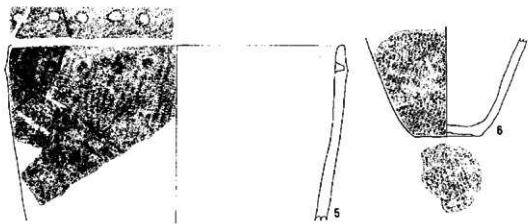
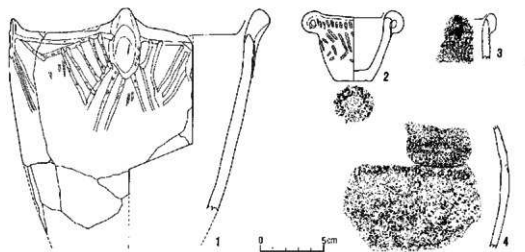
石器は第57図-17～21が床面出土。17・18は石鏃。19は両面加工ナイフ。20は削器。21は棒状原石。22は削器。23は玄武岩製の搔器。23以外は黒曜石製。

#### 小括

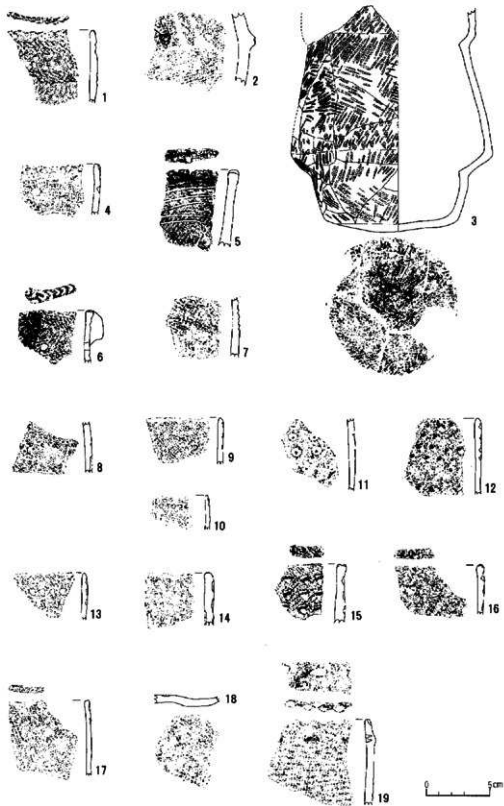
本竪穴の時期は出土土器から縄文宇津内Ⅱa式期と考えられる。(佐々木 寛)



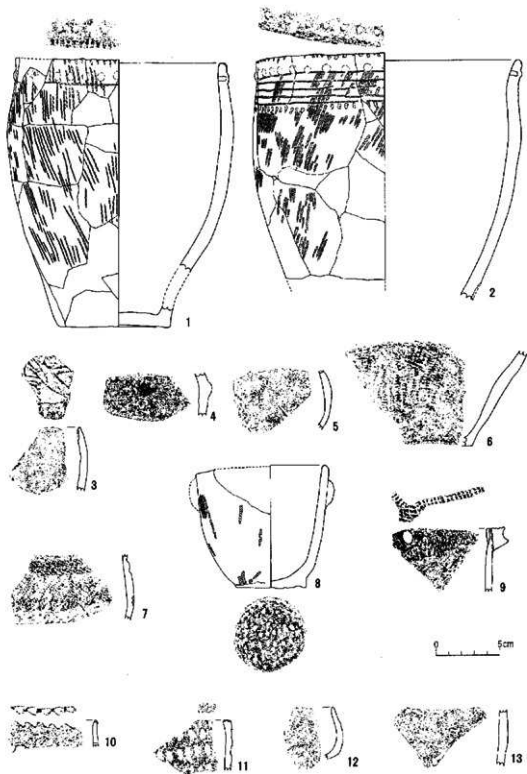
第53図 128号竪穴、128a号竪穴、ピット773、774平面図



第54图 128号窖穴床面(1~8)·埋土(9~12)出土玉器

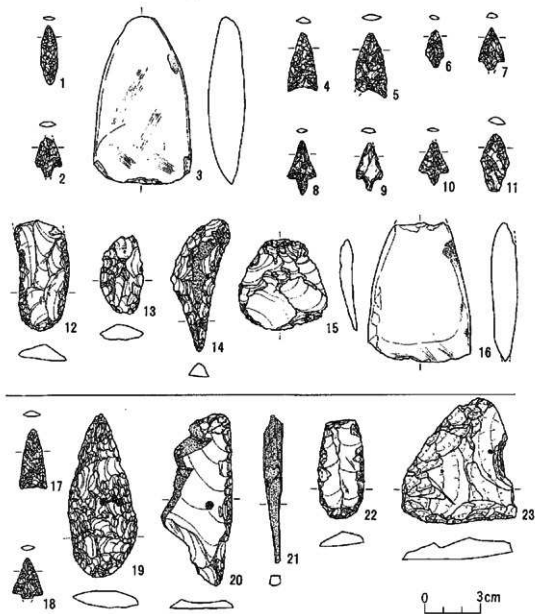


第55图 128号墓穴粗土(1~19)出土土器



第56图 128a号竖穴床面(1~7)・埴土(8~13)出土土器





第57圖 128号竪穴床面(1~3)・埋土(4~16)、128a号竪穴床面(17~21)・埋土(22・23)出土石器

## 129号 竪 穴

## 遺 構 (第58図, 図版9-4)

本竪穴は117b号竪穴の南西側に位置する。一部117b号竪穴によって切られており、北西側は123a号竪穴と接している。規模は長軸約8.00m、短軸約7.40mの不整形円形を呈するが、北側から南西側にかけて水道工事による帯状の擾乱を受けている。また床面2箇所に擾乱を受けている。壁高は確認面から約30cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。柱穴は壁柱穴が径10~20cm、深さ8~20cmのものが南壁で1本、西壁で4本、北壁で4本確認された。炉跡は検出されなかった。西壁際の床面から第59図-1の土器が、南壁際の床面からは3の土器が出土している。南壁際から出土した土器の下から粘土塊が検出された。

## 遺 物 (第59図, 第60図, 第61図, 第62図, 図版9-2)

床面から第59図-1~4が出土している。1は口縁部の4分の3が欠失しているが、1対の突起と2個1対の突起をもつものと考えられる。それぞれの突起の下には同心円文を配し、横走する縦線隆帯で連結している。同心円文の下にも隆帯を底部まで垂下させる。口径約30.0cm、器高12.8cmの縄文土津内Ⅱb式。2は土津内Ⅱb式。3は土津内式。底部に7本深く刻みを入れる。4は縄線文をもつ縄文晩期中葉。埋土から5~7は撥文土器。8~12は後北C<sub>2</sub>-D式。10・12は注口土器。13・15は土津内Ⅱb式。14・16は土津内式の底部。

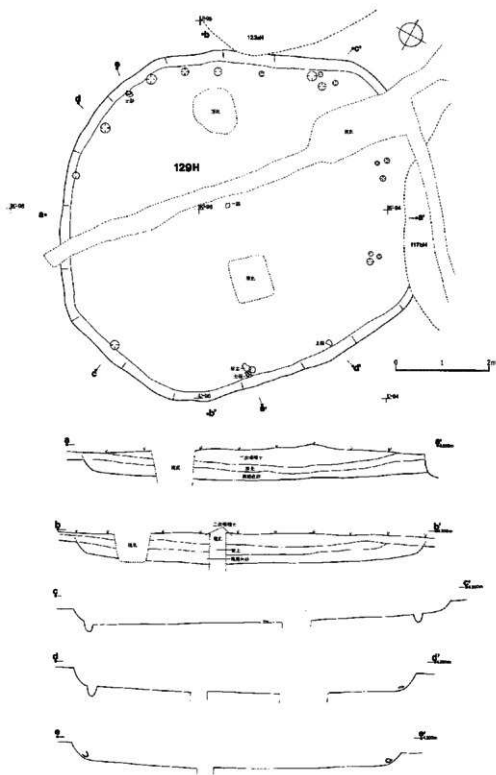
第60図-1・2は土津内Ⅱa式。3は土津内式。4は口径4.8cm、器高4.8cmのミニチュア土器。1対の突起と2個1対の小突起をもつ。5~13は縄文初頭。14・15は磨石式。16・17は縄文晩期中葉。

石器は第61図-1は床面出土の青色泥岩製の磨製石斧。埋土からは2~16が無茎石鏃。17~27が有茎石鏃。28~35はナイフ。36~39は削器。33・36は玄武岩製。それ以外は黒曜石製。

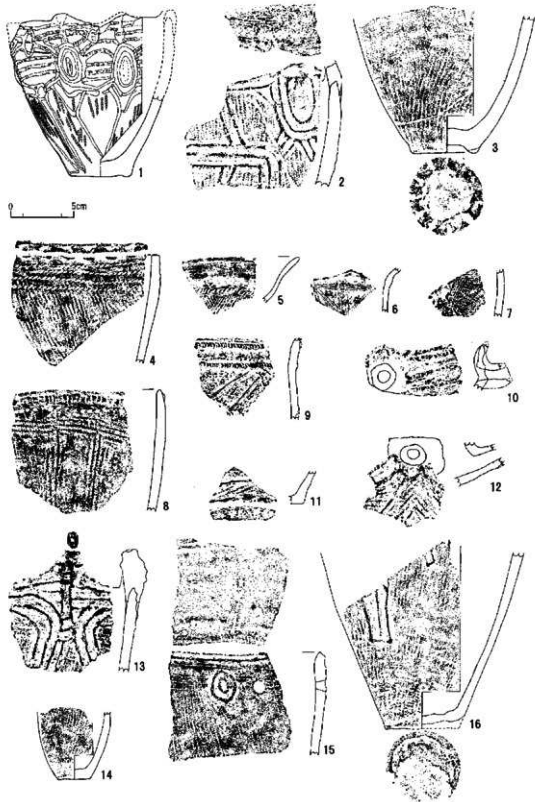
第62図-1~7は削器。4は玄武岩製。8・9は靴形状の削器。10は搔器。11は石錐。12は三日月形石器。13は石核。14は砂岩製の石鏃。15・16は石斧。15は泥岩製。16は緑色泥岩製。17は安山岩製のたたき石。4・14~17以外は黒曜石製。

## 小 括

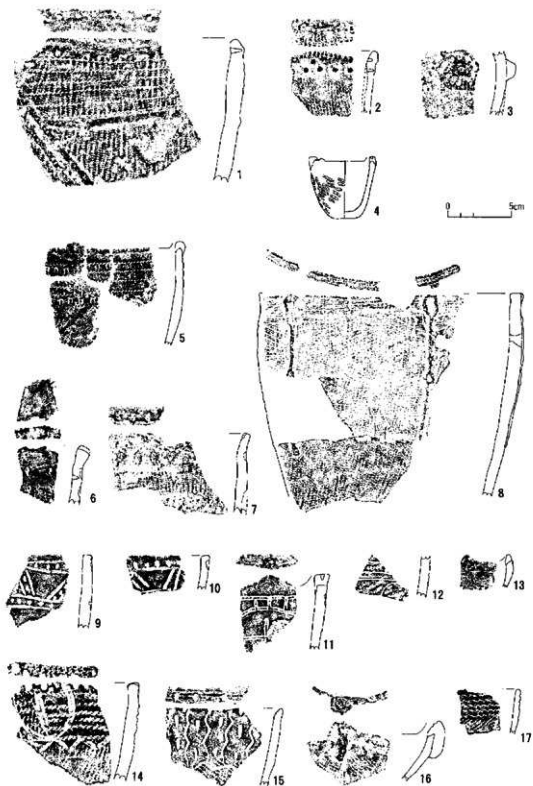
本竪穴は床面出土の土器から縄文土津内Ⅱb式期と考えられる。 (佐々木 寛)



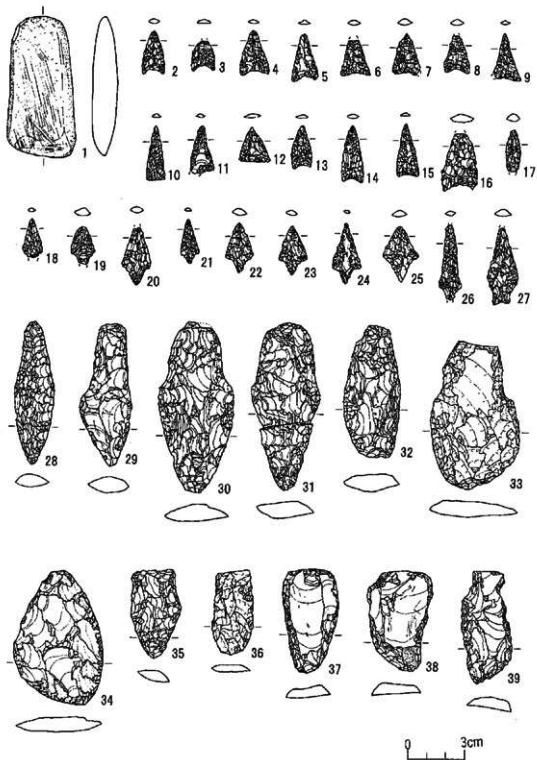
第58图 129号窟穴平面图



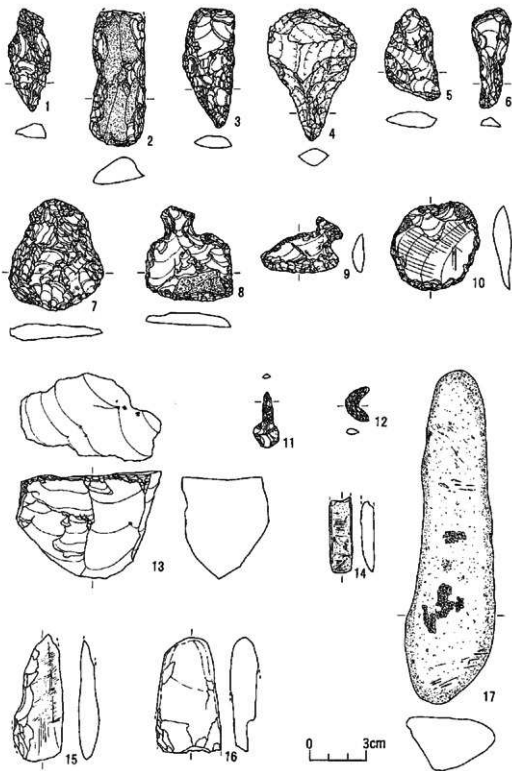
第59圖 129号整穴床面(1~4)・埋土(5~16)出土土器



第60圖 129号墓穴埋土(1~17)出土土器



第61图 129号竖穴床面(1)・埋土(2~39)出土石器



第62圖 129号墓穴埋土(1~17)出土石器

## 129a号 竪穴

## 遺構 (第63図, 図版9-5)

本竪穴は129号竪穴の床面に検出され、規模は約6.20mの不整形を呈する。壁高は129号竪穴床面から約10cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。竪穴の北側から南西側にかけて水道工事による帯状の攪乱を受けている。竪穴中央には径約60cmの範囲で炉跡の焼土が検出された。柱穴は径16~18cm、深さ16~20cmの主柱穴と思われるものが3本、壁柱穴は径10~16cm、深さ8~18cmのものが8本検出された。炉跡の南側の床面からは第64図-1の土器が出土している。

## 遺物 (第64図, 第72図-1~10, 図版9-3)

床面からは第64図-1~3の土器が出土。1は口径23.8cm、器高35.5cm。1対の吊り耳をもち、口縁部に4条の縄線文を巡らす。吊り耳の下と吊り耳と吊り耳の中間に「U」字状に刻みを入れた隆帯を垂下させる。字津内Ⅱb式。2は口縁部に突瘤をもち、その下に6条の縄線文と縄端圧痕文を巡らす。3は縄文晩期。埋土からは4・5は捺文。5は高杯の脚部。6は2個1対の小突起をもち、小突起から隆帯を垂下させる。口縁部に4~5条の縄線文を巡らす。口径12.3cm、器高12.8cm。字津内Ⅱb式。7も字津内Ⅱb式。8・9は突瘤をもつ字津内Ⅱa式。10は縄文初頭。11~14は縄文晩期。

石器は第72図-1は柱穴から出土した石鏃。埋土からは2~9が石鏃。10は泥岩製の磨製石斧。10以外は黒曜石製。

## 小括

本竪穴は床面出土土器から縄文文字津内Ⅱb式期であるが、129号竪穴より古い時期と考えられる。(佐々木 寛)

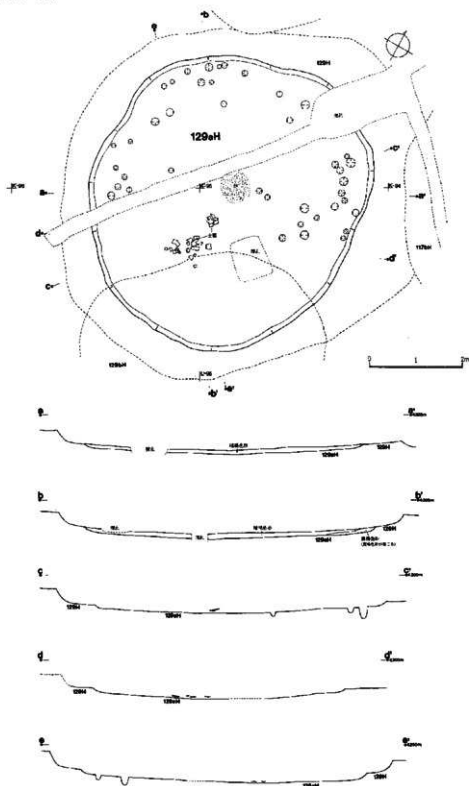
## 129b号 竪穴

## 遺構 (第65図)

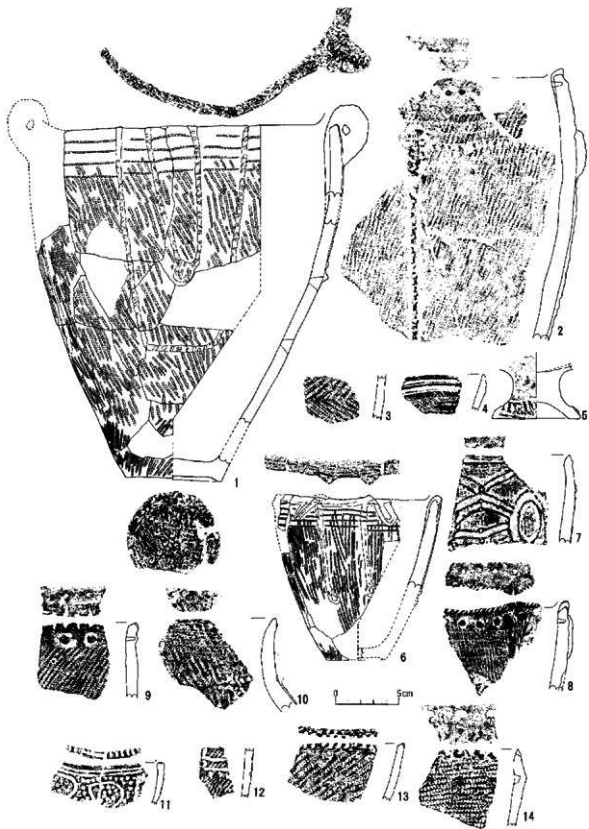
本竪穴は129号竪穴の南側に検出された。規模は長軸5.20m、短軸4.00mの楕円形を呈する。壁高は北側で129号竪穴床面から6cm、南側で確認面から15cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。本来は第Ⅱ層から掘り込まれていたものであろうが、この段階まで竪穴の輪郭は確認できなかった。そのため壁高は非常に浅いものとなっている。竪穴の浅い埋土を掘り下げると東壁際から50×60cmの範囲で大小18個の礫に囲まれた炉跡が認められている。さらに掘り下げると炉跡の西側の床面からも70×110cmの範囲で焼土が検出された。焼土の周辺に5個の礫があることから石囲み炉と考えられる。南壁際の床面からベンガラを含んだ赤褐色砂とすぐ隣から炭化物と、南西壁際の床面から黒曜石のフレーク・チップの集積が検出されている。

## 遺物 (第66図, 第67図, 第68図, 第72図-11~33, 図版10-1)

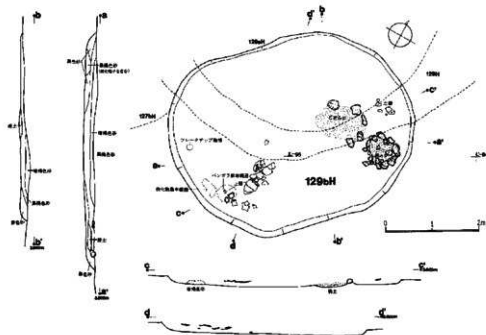




第63圖 129a号竪穴平面図



第64图 129a 马整穴床面(1~3)·埋土(4~14)出土:土器



第65図 129b号竪穴平面図

第66図-1~3は床面直上から出土。1は口径約35.0cm、器高44.5cm。口縁部に貼瘤をもち、胴部にも小さな貼瘤を施す。口縁部に5条の縄線文と1条の縄端圧痕文を巡らす。底部に「十」字状に縄端圧痕文を配する。字津内Ⅱb式。2も字津内Ⅱb式。3は縄文初頭。

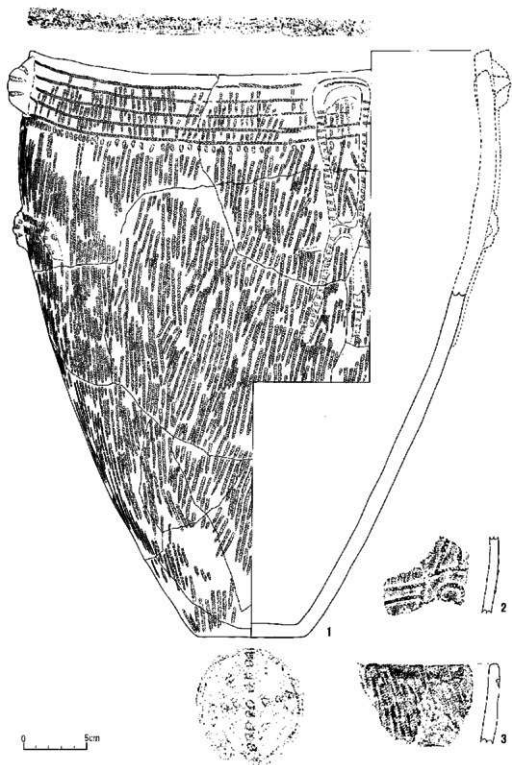
埋土からは第67図-1・2も床面直上出土。1は字津内Ⅱb式。2は字津内式の胴部。3は口縁部に貼瘤と6条の縄線文を巡らせる。口径37.5cm、器高は底部が欠失しているため不明。字津内Ⅱb式。

第68図-1・2は字津内Ⅱa式。3・4は縄文初頭。5~14は縄文晩期。

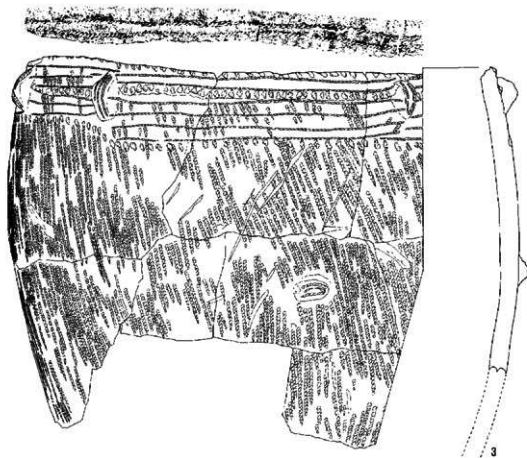
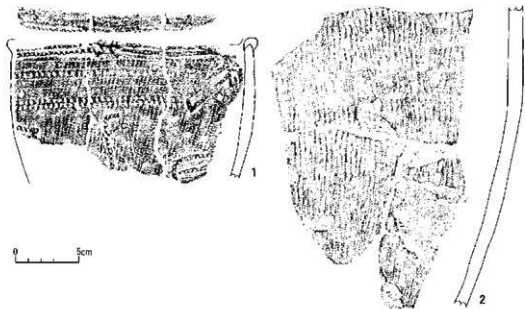
石器は埋土から第72図-11~16は石鏃。17~19は両面加工のナイフ。20・21は片面加工ナイフ。22~27は削器。28~33は表土から出土したもので28~32は石鏃。33は削器。いずれも黒曜石製。

#### 小 括

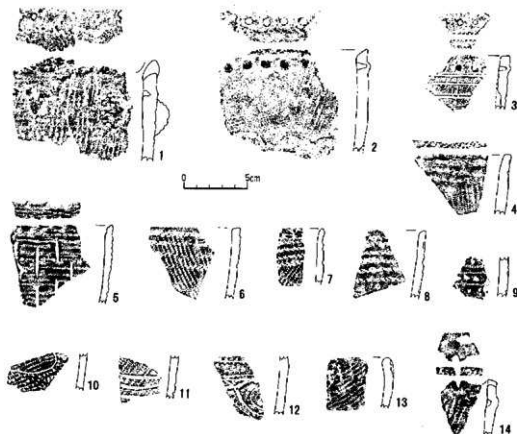
本竪穴の時期は床面出土の土器から縄文文字津内式期で129a号竪穴よりも古い時期と考えられる。(佐々木 寛)



第66图 129b号竖穴床面直上(1~3)出土土器



第67图 129b 号墓穴床面直上(1·2)·埋上(3)出土土器



第68図 129b号竪穴埋土(1~14)出土土器

## 129c号 竪 穴

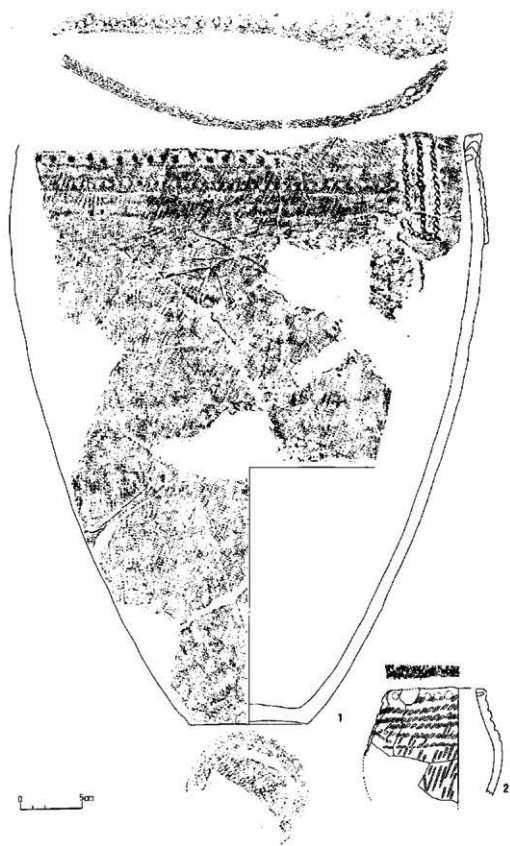
## 遺 構 (第69図)

本竪穴は129b号竪穴の床面精査中に黒褐色砂の落ち込みが認められて発見した竪穴で、規模は長軸4.10m、短軸3.80mの不整形形を呈する。壁高は129b号竪穴床面から15cmを測り、緩やかに立ち上がる。竪穴の埋土中の黒褐色砂層には炭化粒が含まれている。竪穴の中央付近に90×140cm、北壁近くに50×75cmの範囲でそれぞれ焼土が検出された。中央付近の焼土には骨片が含まれている。柱穴は主柱穴が径14~20cm、深さ18cmのものが2本検出され、その他に径6~16cm、深さ5~12cmのものが14本確認された。南壁から粘土と大型礫が出土した。中央の焼土の北西側と南東側、西壁近くと南壁近くにもピットが検出されている。南壁近くのピットに接して黒曜石のフレーク・チップの集積が検出されている。

## 遺 物 (第70図, 第71図, 第72図-34・35, 図版10-2・3)

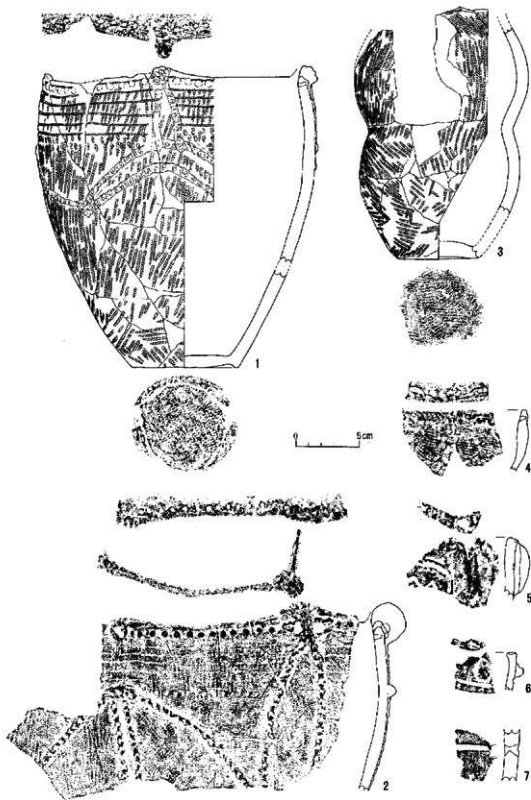
床面から第70図-1・2、第71図-1が出土している。第70図-1は口縁部に突瘤と網線文



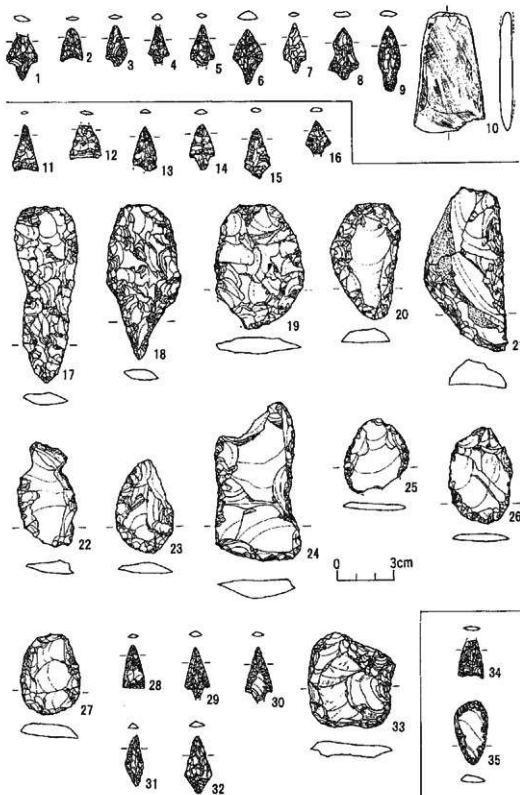


第70图 129c号影穴床面(1·2)出土土器





第71圖 129c号墓穴床圈(1)・床面直上(2・3)・埋土(4~7)出土土器



第72圖 129a 号鄂穴柱穴(1)・埋土(2~10)、129b 号鄂穴埋土(11~27)・  
表上(28~33)、129c 号鄂穴埋土(34・35)出土石器

## 130号 竪穴

遺 構 (第73図, 第74図, 図版10-4)

本竪穴は G' 92, H' 92 グリッドに位置する。表上下には白色を呈した樽前 a 火山灰を含む黒色土が堆積しており、竪穴を予想させた。約12cm掘り下げた暗褐色砂層の下面から焼土が認められた。この面の焼土は竪穴の中央部に位置するものが最も大きく約70×110cmであり、東壁近くに約40×35cmのものがある。北壁にフレーク・チップ集積、東壁近くに骨片の集積が認められ、隣接して第76図-1の土器が出土した。竪穴の窪地を利用した生活面と思われる(A面)。さらにこの面から約20~30cm下げるとさらに約150×35cmの大きな焼土があり、周囲に3個の小さな焼土が見られた。焼土群の東側にはフレーク・チップの集積がある。この面もまた生活面の可能性が高く、焼土は炉跡であろう(B面)。この面を約8cm下げると本竪穴の床面が現れた。埋土各層は全体的に多くの礫と炭化材を混入する。

竪穴の規模は直径約4.50mの不整形円形を呈する。比較的緩く立ち上がった壁高は確認面から約80cmを測る。ほぼ中央部に約65×50cmの炉跡をもつ。主柱穴と思われるものは炉跡に接する径約8~15cm、深さ約12~25cmの3本であろう。壁柱穴は各壁際に沿ってほぼ等間隔に整然と配置される。径約4~10cm、深さ約4~16cmである。

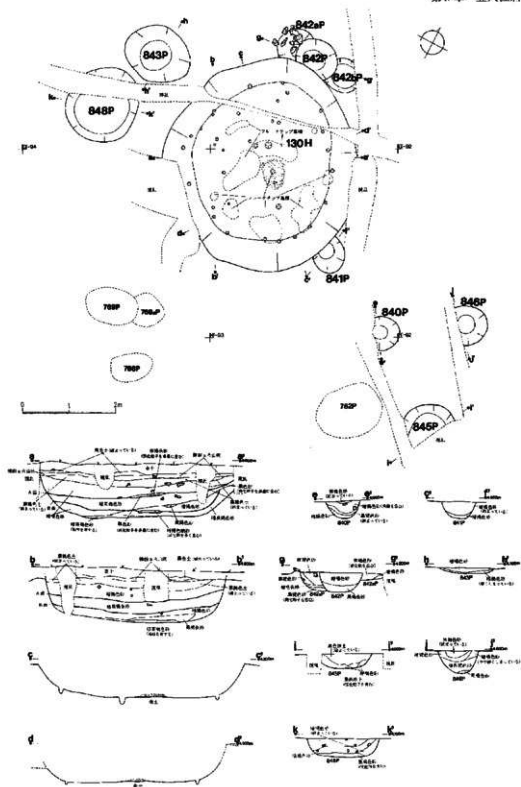
遺 物 (第75図, 第76図, 第77図, 第78図, 第79図, 図版10-5・6)

第75図-1~4は床面出土。1は口径8cm、器高9cmの小型土器。半完形品である。口唇部に山形突起をもち、口縁部は突瘤文が施される。捺糸文を地文とし、内面にはベンガラが付着する。縄文土津内Ⅱ a 式。2は内削ぎ状の口唇部に刻みが施される。器形は小型浅鉢か碗と思われる。縄文晩期前葉から中葉の無文土器。3は同前葉。4は縄文初頭。5は炉跡出土。細く鋭い菱形沈線文と幅広く浅い横走沈線文があり、横走縄文とは刺突文で区画される。縄文初頭。6は胴下部で大きく湾曲するもので注口土器と思われる。縄文後北 C<sub>2</sub>・D 式。7は同 C<sub>1</sub> 式。8~10は土津内Ⅱ b 式。10は口径18cm、器高19.5cmの中型土器。埋土出土は少量であり、大半は周辺グリッド出土のものと同接合した。4箇所の小突起下部の円形状隆帯があり、縦位と横位の隆帯が連結する。

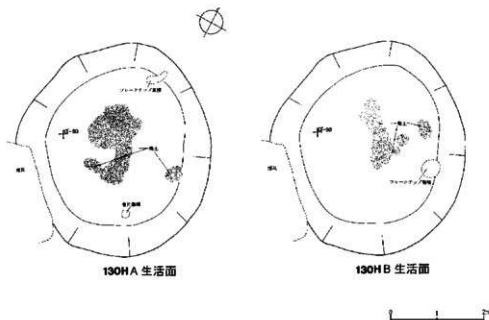
第76図-1~6は口縁部に突瘤文が施された土津内Ⅱ a 式。1は口径13cm、器高18cmの中型土器。2個の吊り耳を縦帯が横走する。5は「く」字状の口縁部であり突瘤は貫通する。地文は捺糸文が施される。6の胴部には1条の隆帯が横走する。7は口縁下部に2条の縄端圧痕文が施される。土津内系の土器であろう。8の口唇部は凹状を呈し、山形小突起から隆帯が垂下する様である。無文部には鋭い横走沈線文と突瘤文が施された興津式相当。

第77図-1は口径40cm、現存部の器高が48cmを測る特大土器。口縁下部に2条の微隆起帯が横走し、胴下部とは帯縄文で区画される。後北 C<sub>2</sub>・D 式。

第78図-1は縮約した口唇部をもち、器面は斜縄文が施される。内面は煤が付着する。興津



第73図 130号竪穴、ピット840、841、842、842a、842b、843、845、846、848平面図



第74図 130号竪穴A生活面・B生活面平面図

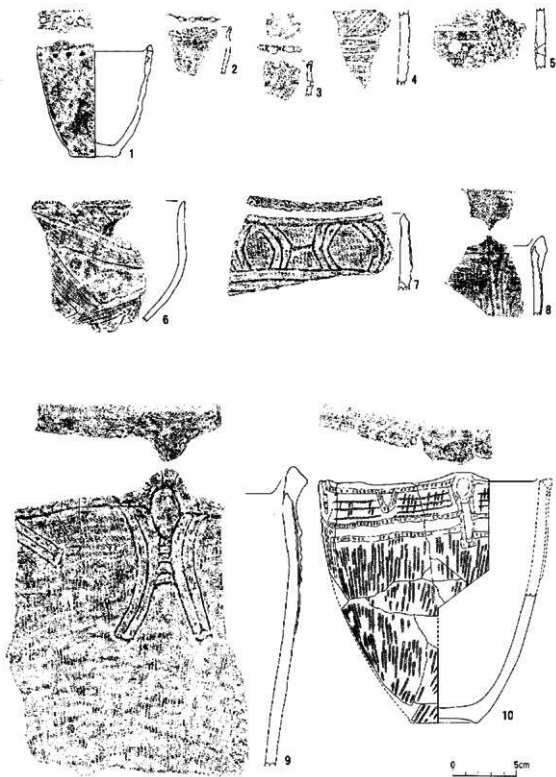
式相当であろう。2～5は統縄文の底部。2は燃糸文を地文とし、楕円形の底部をもつ。3には燃糸と思われる圧痕がみられる。6～9は統縄文初頭。6は細沈線文と刺突文が密に施され、7は工字文である。8は無文部に沈線文と右方向から刺突が施される。9は無文部に縦位の隆帯と刺突文があり、下部の縦走縄文とは横位の沈線・刺突・縄文で区画される。10・11は縄文晩期弊舞式。12は「V」字状と弧線状の細沈線文、13は円形刺突文が施される。縄文晩期中葉であろう。14は同晩期の底部。15は同晩期の前葉。16は縄文前期末葉の平底押形文。

第79図-1は床面出土の無茎石鏃。2は炉跡出土の磁石。埋土からは3～8は無茎石鏃。9～14は有茎石鏃。15・17は両面加工ナイフ。16・18は刮器、19は搔器。20～22は磨製石斧、21は両側縁が敲打調整されている。22は擦り切り手法による。23は磨石。表裏面を使用しており、表面のほぼ全面に赤色顔料が付着する。2は砂岩製。20・22は緑色泥岩製。21は安山岩製。23は泥岩製であり、他は黒曜石製である。

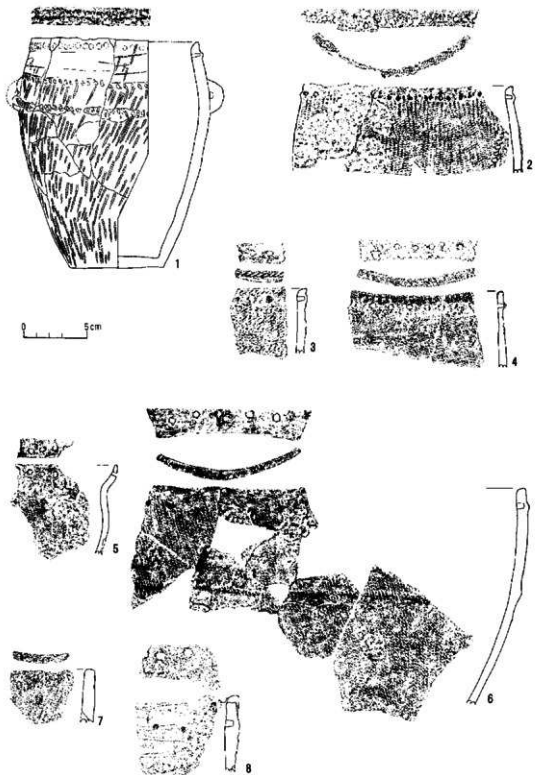
### 小 括

本竪穴の時期は床面出土土器から統縄文字津内Ⅱa式と考えられる。A面からも第76図-1に示した突瘤文をもつ字津内Ⅱa式が出土しており、竪穴床面出土の土器はやや古手に位置づけられるかもしれない。また、竪穴床面の炉跡の周辺には黒曜石のフレイク・チップ集積群がある。屋内の石器製作跡であろう。

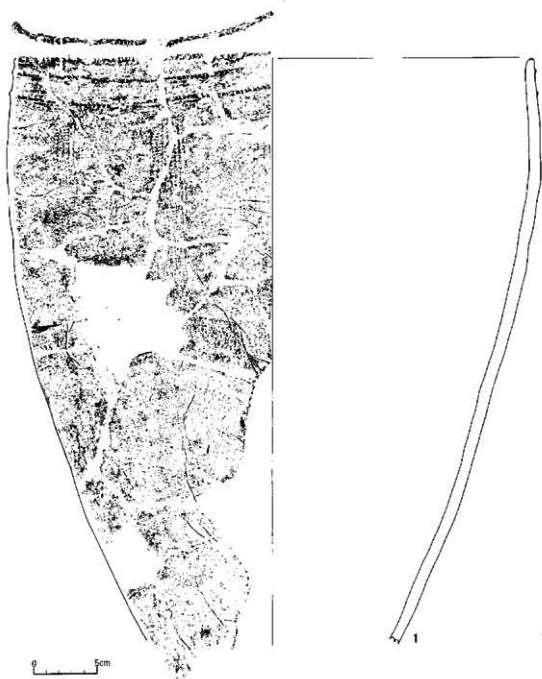
(武田 修)



第75图 130号竖穴床面(1~4)・炉址内(5)・埋土(6~10)出土土器



第76圖 130号壺穴埋土(1~6)出土土器

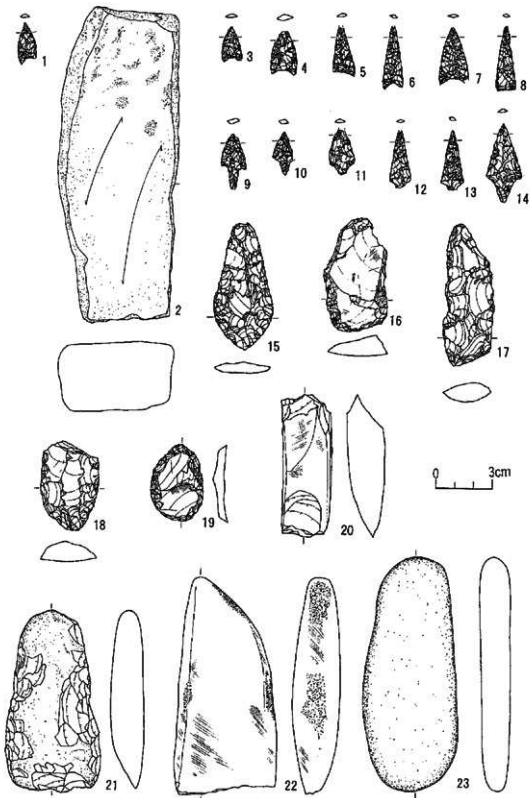


第77圖 130号竖穴埋土(1)出土土器





第78圖 130号墓穴埋土(1~16)出土土器



第79圖 130号墓穴床面(1)・炉址内(2)・埋土(3~23)出土石器

## 131号 竪 穴

## 遺 構 (第80図, 第81図, 図版11-1・2)

本竪穴は地表面が方形に窪んでおり昭和56年度に実施した包蔵地範囲確認調査の際に発見したものである。この区域は標高約3.00mであり、本遺跡の中でも比較的低位にある。発掘区ではS' 93・94, T' 93・94グリッドに位置する。調査は竪穴のほぼ中央に設定されるグリッドラインを土層ベルトとして残し開始した。表土を剥した直後から大小の礫が出土しはじめた。層位的には表土の中位から第Ⅱ層の黒色土上部に集中している。第80図、図版に示すとおり北西側から東側に向かって出土する。礫は横石されたものではなく、窪みに平坦に敷き詰められている様であり、明らかに人為的である。礫は大型のもので直径約30cm、小型のもので直径約2cmである。礫の中には66点のくぼみ石が混入するほかに出土遺物は認められない。

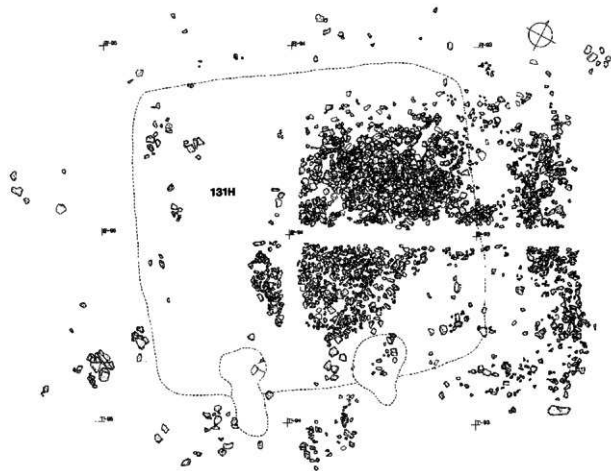
埋土は基本的に表土、黒色土、暗褐色砂の3層に分層されるが、これまで他の竪穴埋土に顕著に見られた白色の樽前a火山灰は堆積しておらず、セクションに見られるとおり平坦なS' 95, T' 95グリッドに堆積が確認された。一見すると竪穴が火山灰を切っている様にも見受けられる。大小の礫群が遺される過程で層厚の薄い火山灰が欠失したとも考えられたが、礫群の無い部分でも火山灰は認められない。また、他の竪穴に堆積する火山灰は黒色土層より下位にあるものがほとんどであり、礫群によって欠失したとは考えにくい。欠失したとすると本竪穴の床面の一部は第Ⅱ層の黒色土であり水捌けが悪く、竪穴に雨水が滴まりやすいことにより水溶化されたことが考えられる。火山灰と竪穴の切り合い関係は擦文期の終末など多くの問題点をもつものであり、ここでは事実のみを記載する。

竪穴の規模は一辺約7.00mの方形を呈する大型住居である。壁高はほぼ垂直に立ち上がり、確認面から約60cmを測る。床面は粒子の細かい砂質面にあり、この面を約5cm下げると黒色土層が現れ、一部は床面となる。カマドは東壁に二基構築されている。二基とも黄褐色粘土と明茶褐色土で構築しており、左側のカマドは両袖部に角礫を用いている。右側のカマドと比較してやや小さい。煙道は二基とも燃焼部からやや角度を持って立ち上がり、壁外に緩く延びている。燃焼部の焼土はサラサラした土質をもち赤化はそれほどではないが、直上の焼土は粘性をもつ。二基のカマド内から炭化材が出土しているが出土状態からみていずれも燃焼材と考えられるものの、左側のものは横位、右側のものは縦位に置かれているなど変化がある。炉跡は検出できなかった。

主柱穴と思われるものは直径約10~17cmと小さいものがあるが、深さは約10~31cmである。配置位置から判断して8本の主柱穴をもつものと思われる。壁柱穴は直径約6~10cm、深さ約6~12cmのもので北西壁隅に7本が集中するものの、他の壁は2~3本あるだけである。

## 遺 物 (第82図, 第83図, 第84図)

第82図-1~9は擦文期のものである。1はカマドから出土した格子目状の刻線が施された



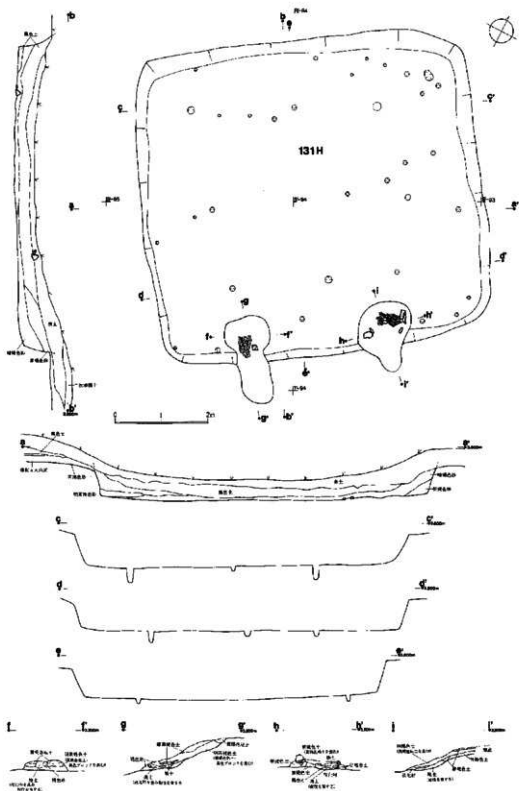
第80図 131号壑穴遺物出土状況

擦文土器。2～4は高杯と脚部。9は刻線文と円形刺突文が放射状に施された紡錘車。65g。

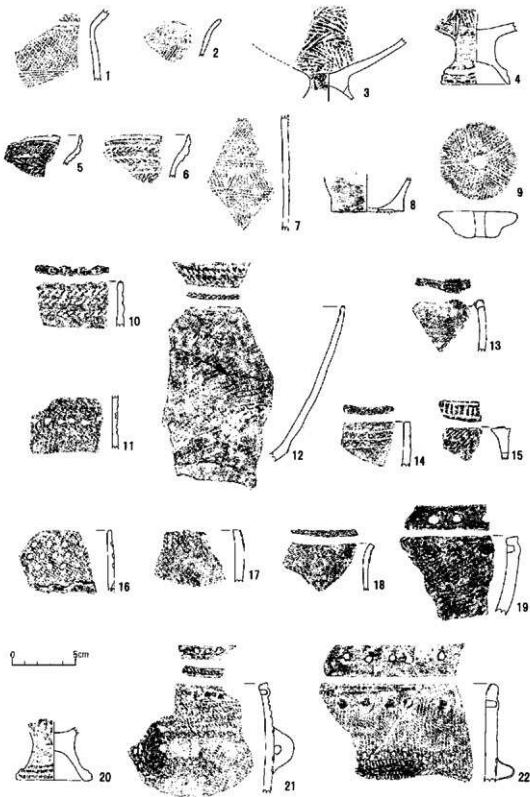
10～13は縄線文が施され、11には円形刺突文が加わる。14は横走沈線文間に下方、右方向から刺突文が施される。15は幅広い口唇部に刻み、16は刺突文、17は縦位の短縄文、18は縄文が施される。10～18は縄文晩期中葉であろう。19は縄文後期堂林式。20～22は表土出土。20は擦文期の高杯脚部。21・22は縄文土津内Ⅱa式。

第83図は表土出土。1は鋸歯状の沈線文をもつ塚ヶ丘式。2は弊舞式。3は沈線文と刺突文、4は曲線・直線状の沈線文、5は横位の沈線文と内側に短縄文を施す。6・7は縄端丘痕文、8は半載状施文具による刺突文、9は右方向、10は下方からの刺突文が施される。12は突瘤文、13・14は盛り上がりの爪形文。3～11は縄文晩期中葉、12～14は阿前葉であろう。

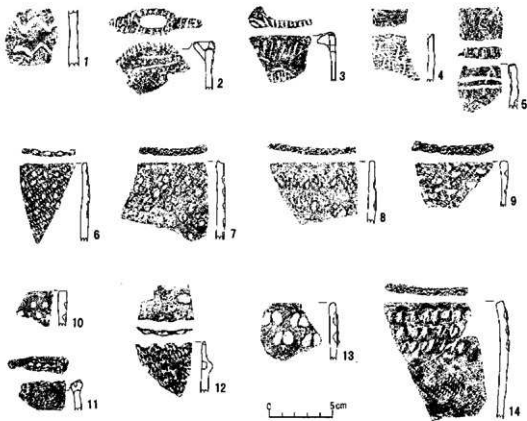
第84図-1は無茎石鏃。2～6は有茎石鏃。7・8・10～12は削器。9は両面加工ナイフ。13は円形搔器。14は片刃磨製石斧。15は自然稜の端部を敲打調整して刃部とした石斧。16は右



第81图 131号彩穴平面图



第82図 131号堅穴カマド(1)・埋土(2~19)・表土(20~22)出土土器・土製品



第83図 131号竪穴表土(1~14)出土土器

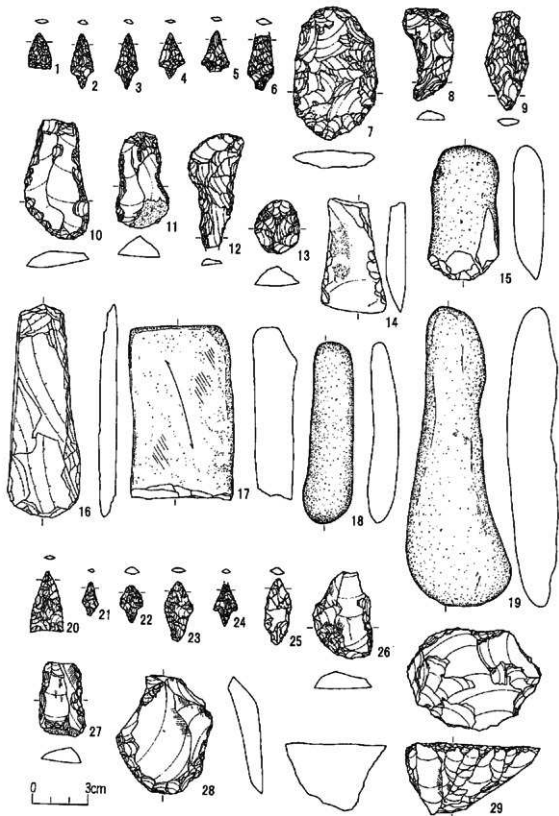
側縁部と下部を敲打調整し凸刃状の刃部としている。17は砥石。18・19は擦石。20~29は表土出土。20は無基石鏃。21~25は有基石鏃。26・28は搔器。26は左下端部に急斜な刃部をもつ。27は削器。29は石核。14・15・18・19は泥岩製。16は玄武岩製。他は黒曜石製である。

### 小 括

本竪穴の上部には人為的な礫群が見られる。この礫群の詳細な時期は不明であるが、層位からアイヌ期の可能性がある。隣接する121号竪穴や138号竪穴の埋土には貝、魚骨等があり竪穴の窪地を利用した送り場と考えられる。この礫群も同種のもと思われる。

竪穴の時期は擦文期であるが、規模は同時期の中でも最大の部類である。詳細な時期は不明であるが宇田川縄文後期に比定されるのであろう。

(武田 修)



第84圖 131号壑穴埴土(1~19)・表土(20~29)出土石器



## 131a 号 竪 穴

### 遺 構 (第85図)

本竪穴は131号竪穴の西側に位置する。131号竪穴によって大半が削られており、検出できたのは西壁と北壁・南壁の一部である。このため全体の規模・形態は不明であるが、残存部から判断すると径約5.80mの方形を呈すると思われる。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約50cmを測る。

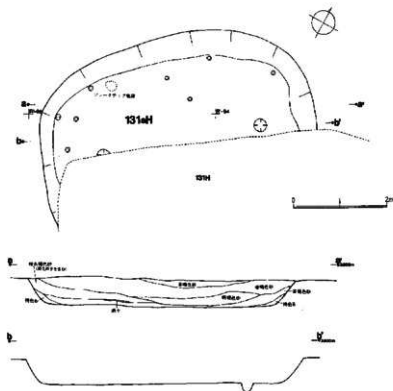
支柱穴と思われる径約20～30cm、深さ約20cmのものが西壁から約1.00m内側に2本ある。径約10cm、深さ約3～11cmの壁柱穴は各壁際を中心に認められる。西壁際には黒曜石のフランク・チップ集積がある。

### 遺 物 (第86図)

全て埋土出土である。第86図-1・2は縄文が施され、2の口唇部には縄編圧痕文がある。3は縄線文、4は無文。5は下方向からの刺突文が施される。この5点は縄文晩期中葉であろう。

### 小 括

概文期より古い時期であることは確実であるが詳細は不明である。 (武田 修)



第85図 131a号竪穴平面図



第86図 131a号竪穴埋土(1~5)出土土器

## 132号 竪 穴

### 遺 構 (第87図, 図版12-1)

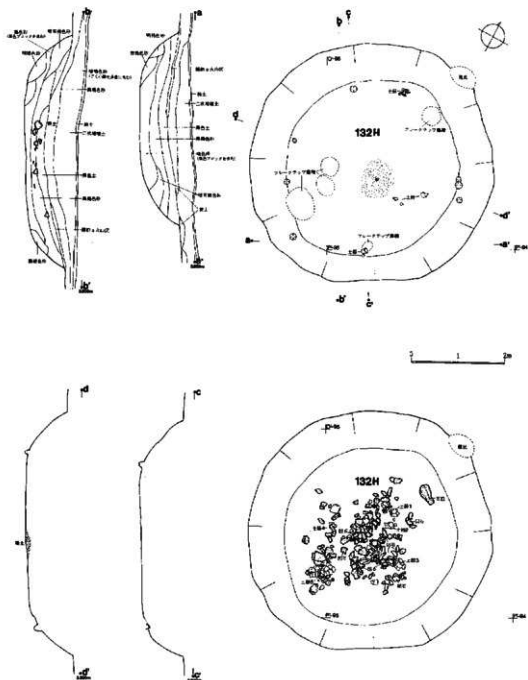
本竪穴はP 94グリッド周辺の表土を剥土した段階で検出された。表土の下には樽前aと考えられる火山灰が検出され、火山灰の下に黒色土層が認められた。黒色土層の下には黒色土を多少含み粘性をもった黒褐色砂層が認められ、黒色土層と黒褐色砂層の間に礫が廃棄されたように多数出土している。礫層中やその直下から土器が出土し、礫の中には凹石8点、砥石1点、石皿1点などの石器類も認められた。

竪穴の規模は径約5.20mの円形を呈し、壁高は確認面から90cmと深く、壁は斜めに立ち上がる。柱穴は径約8~16cm、深さ9~16cmの壁柱穴が7本検出された。竪穴のほぼ中央の床面に80×70cmの範囲で炉跡の焼土が認められ、焼土に骨片が検出されている。炉跡と西壁の間に2箇所、南西壁際に1箇所、南東壁際に1箇所、北壁際に1箇所に黒曜石のフレーク・チップの集積が認められた。

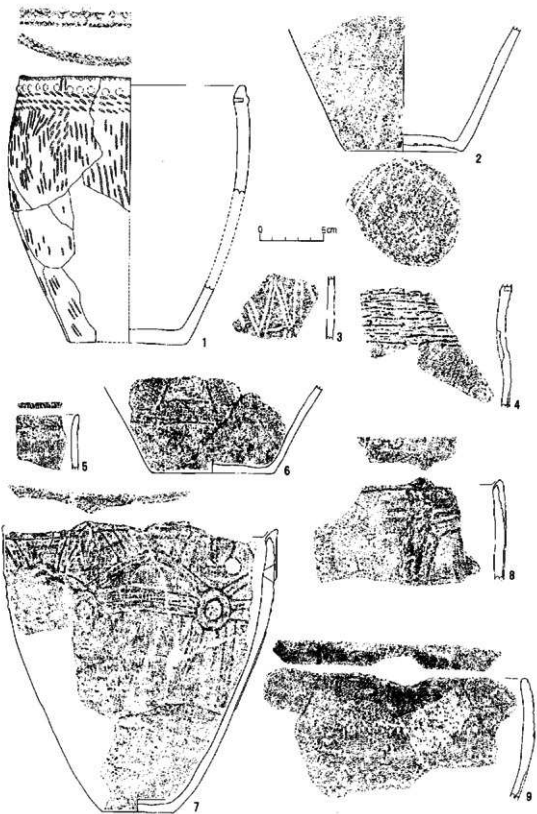
### 遺 物 (第88図, 第89図, 第90図, 第91図, 第92図, 図版12-2)

床面からは第88図-1・2が出土している。1は口径18.0cm、器高21.0cm。口縁部に突瘤をもち、3条の縄端瓦痕文を巡らす。字津内Ⅱa式。2は字津内式の底部で、底部に縄端瓦痕文を施す。埋土からは3が擦文。4は口縁部に外からの突瘤と微隆帯を巡らす北大式。5・6は後北C<sub>2</sub>・D式。7~9は字津内Ⅱb式。6は黒色土層の下層からの出土。7・9は礫層から出土した。

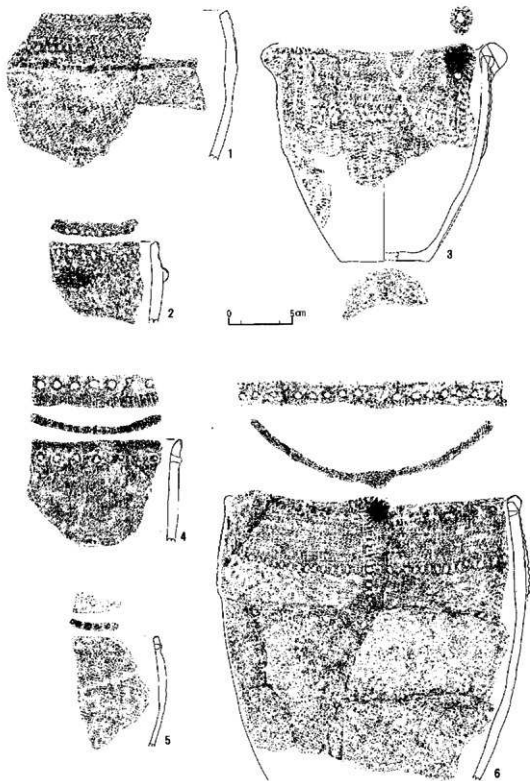
第89図-1~3は字津内Ⅱb式。3は口縁部に突起をもち、縄線文と縄端瓦痕文列を巡らす。4・6は突瘤をもつ字津内Ⅱa式。6は小突起をもち、小突起から刻みを入れた隆帯を垂下させ、口縁部に縄線文と縄端瓦痕文を巡らす。5は縄文初頭。3・6も礫層から出土した。



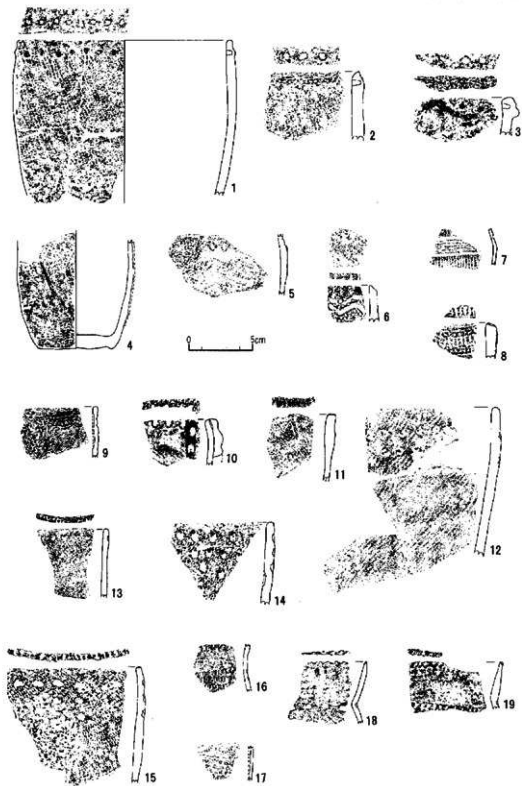
第87図 132号窖穴平面図・遺物出土状況



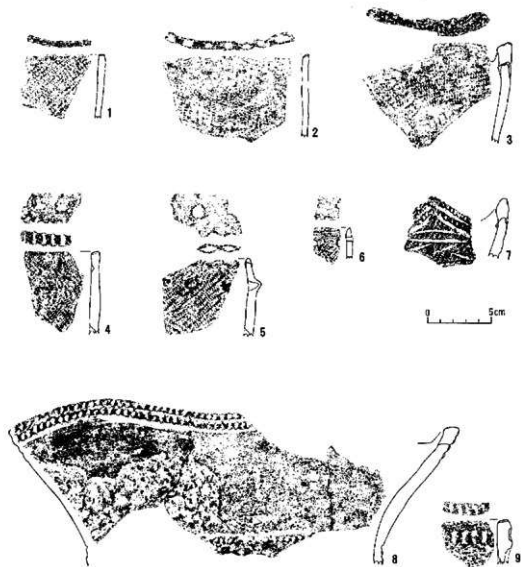
第88图 132号墓穴床面(1·2)·埋土(3~9)出土土器



第89圖 132号墓穴埋土(1~6)出土土器



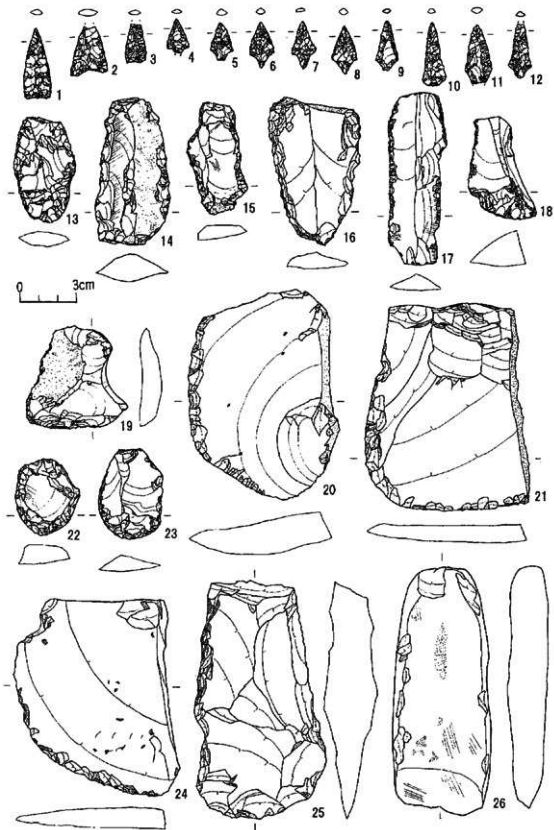
第90图 132号竖穴埋土(1~19)出土土器



第91圖 132号塚穴埋土(1~9)出土土器

第90図-1~3は突瘤をもつ字津内Ⅱa式。4は字津内式の底部。5~19は縄文晩期中葉。  
5は縄線文と縄端庄模文。6~8・11は沈線文と刺突文。9は縄線文。12~19は刺突文。

第91図-1~3も縄文晩期中葉。4・5は内側から斜め方向の突瘤をもつ縄文晩期前葉。6



第92圖 132号壘穴埋土(1~26)出土石器



～8は縄文後期。6は堂林式。7はエリモB式。8は縄濶式。9は縄文中期。

石器はすべて埋土から出土したもので第92図-1～12は石鏃。13は両面加工ナイフ。14～17・20～25は削器。18～23は掻器。26は泥岩製の磨製石斧。16・20・21・24・25は玄武岩製。それ以外は黒曜石製。

## 小 括

本竪穴は床面出土の土器から縄文文字津内Ⅱa式期と考えられる。(佐々木 寛)

# 133号 竪 穴

## 遺 構 (第93図, 図版12-4)

本竪穴は126号竪穴の南側約0.80mに位置する。規模は約6.70mの隅丸方形を呈し、南西側が擾乱を受け破壊されている。壁高は確認面から北西側で約60cm、南東側で約30cmあり、壁は斜めに立ち上がる。竪穴を覆っている表土と黒褐色砂層の間から焼土が2箇所と一括土器が2箇所、骨が1箇所から検出されている。北壁上の焼土は70×60cmの範囲である。竪穴中央より南東側の焼土は40×30cmの範囲で大小11個の裸に囲まれており、焼土の中から骨片が検出されている。竪穴中央の床面からは径60cmの範囲で炉跡が認められ、焼土には少量の骨片が検出されている。柱穴は径18cm、深さ20cmの主柱穴と思われるものが1本、壁柱穴は径8～18cm、深さ7～12cmのものが15本検出された。炉跡の南側と北壁近くから黒曜石のフレーク・チップの集積が確認され、北西壁近くのフレーク・チップの集積の中には骨片が検出されている。

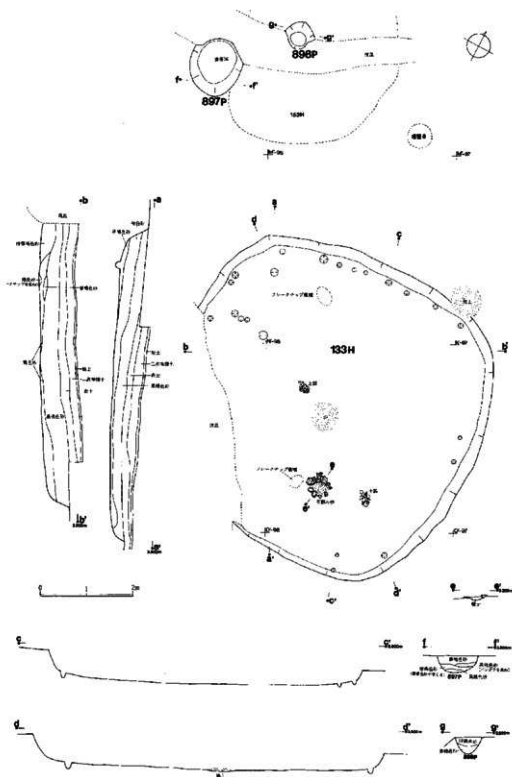
## 遺 物 (第94図, 第95図, 第96図, 第97図, 第98図, 図版12-3)

床面から第94図-1・2の土器が出土している。1は口縁部に縄線文を4条巡らし、縄線文の上と下に逆「U」字状の縄端瓦痕文を1列ずつ巡らせる。縄文初頭と考えられる。2は口縁部に突瘤と縄線文を巡らし、口唇部の突起から刻みを入れた隆帯を垂下させる。字津内Ⅱa式。3は埋土中から一括出土した土器。口径16.2cm、器高17.7cm。口縁部はやや反し、太い沈線文の鋸歯状を2列巡らせる。擦文晚期。4・5は外からの突瘤をもつ北大式。6は後北C<sub>1</sub>・D式。7～10は字津内Ⅱb式。11・12は字津内Ⅱa式。13は縄文初頭。

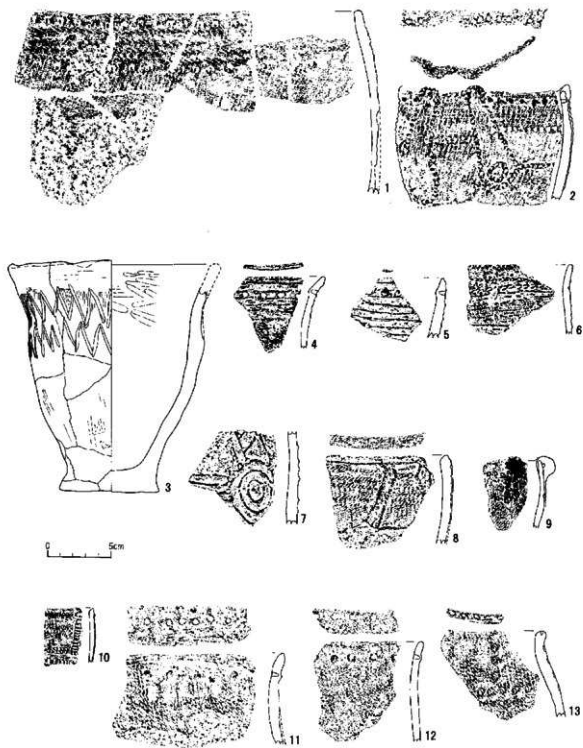
第95図-1・2は縄文初頭。3・4は縄文晚期後葉。幣舞式。6は縄文晚期中葉。5・7・9・10は縄線文。8・13・15～18は半載状施工具による刺突文。12は沈線文。14は底部。19は短刻文。

第96図-1～5は縄文晚期中葉。6・7は縄文晚期前葉。6は内側から斜め方向の突瘤をもつ。7は爪形文。8～16は縄文後期。8～10は堂林式。17は縄文中期。

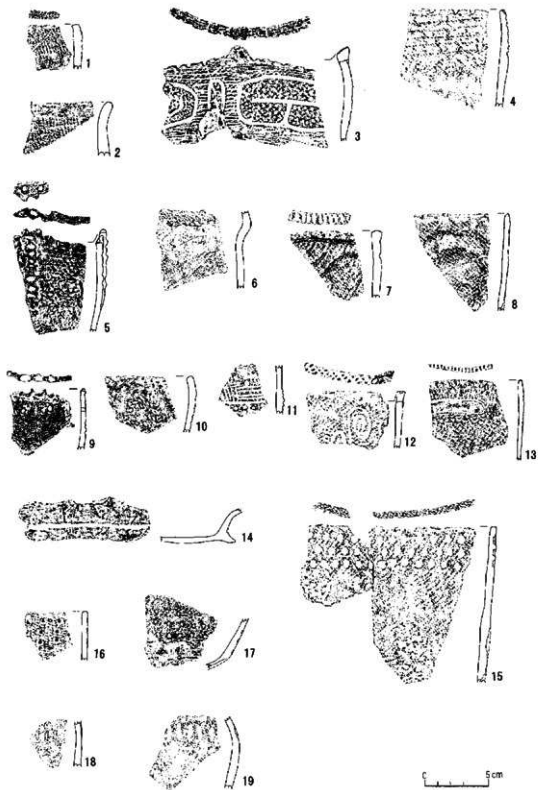
石器は第97図-1は床面から出土した削器。2・3は床面の焼土から出土した石器。2は削器。3は石鏃。埋土からは4～10が無茎石鏃。11～26が有茎石鏃。27～32は両面加工ナイフ。33～42は削器。43は石匙。31は玄武岩製。37は頁岩製。それ以外は黒曜石製。



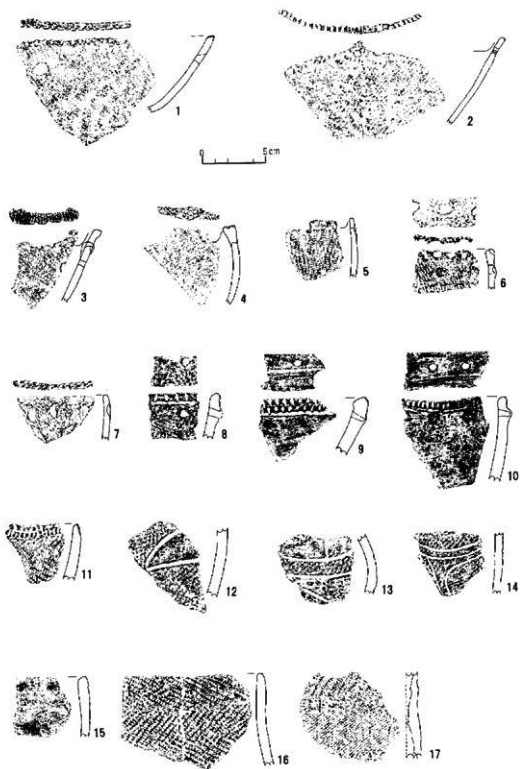
第93圖 133号竪穴、ピット897、898の平面図



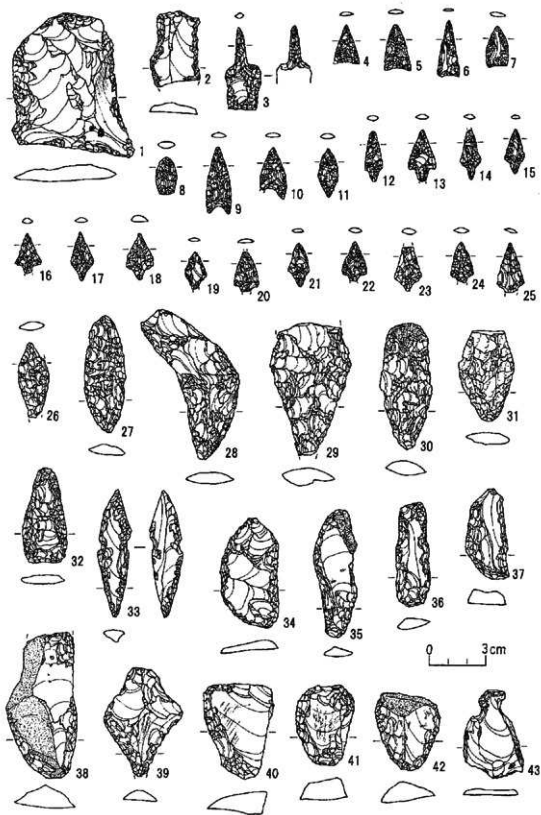
第94図 133号野穴床面(1・2)・埋土(3~13)出土土器



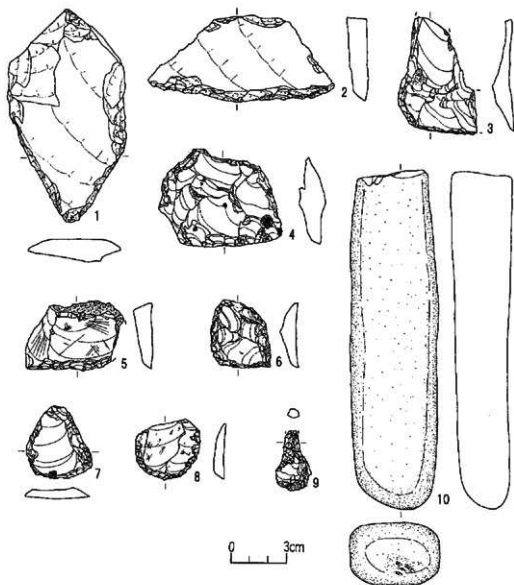
第95图 133号影穴埴土(1~19)出土土器



第96圖 133号型穴埴土(1~17)出土土器



第97图 133号整穴床面(1)·燧石(2·3)·埋土(4~43)出土石器



第98図 133号竪穴埋上(1~10)出土石器

第98図-1は削器。2~8は楔器。1・2は玄武岩製。9は石錐。10は砂岩製のたたき石。  
1・2・10以外は黒曜石製。

### 小 括

本竪穴の時期は床面の出土土器から統縄文字津内Ⅱa式期と考えられる。(佐々木 覚)

## 133a号 竪穴

## 遺 構 (第99図, 図版13-1)

本竪穴は133号竪穴床面精査中に検出された竪穴で、規模は約5.20mの隅丸方形を呈するが、南西側の一部が攪乱を受けている。壁高は133号竪穴床面から約20cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。柱穴は径18~20cm、深さ12~16cmの主柱穴と思われるものが2本、壁柱穴は8~16cm、深さ7~15cmのものが9本確認された。炉跡は検出されなかった。黒曜石のフレーク・チップ集積が埋土では東隅と西壁近くから、床面では西隅と南壁近くから検出された。

## 遺 物 (第100図, 第102図-1~21, 図版13-2)

床面から第100図-1~5が出土。1は口径7.1cm、器高16.0cm。口縁部がすぼまり、胴部が張り出す。口縁部に1条と胴部の張り出した部分に2条の縄端瓦文列を巡らせる。2~4は突瘤をもつ字津内Ⅱa式。5は字津内式。埋土からは6・7・9が字津内Ⅱa式。8は統縄文初頭。10~18は縄文晩期中葉。10~12・14は縄線文。13は刺突文。19は内側から斜め方向の突瘤をもつ縄文晩期前葉。20は縄文中期。

石器は第102図-1~4が床面出土。1・2は石鏃。3は両面加工のナイフ。4は泥岩製のたたき石。埋土からは5~10が石鏃。11・12は両面加工のナイフ。13~17は削器。18は掻器。19は頁岩製の石錐。20は「X」状の異形石器。21は砂岩製の凹石。4・19・21以外は黒曜石製。

## 小 括

本竪穴の時期は床面の出土器から統縄文初頭又は統縄文字津内Ⅱa式期の初頭と考えられる。(佐々木 寛)

## 133b号 竪穴

## 遺 構 (第99図, 図版13-3)

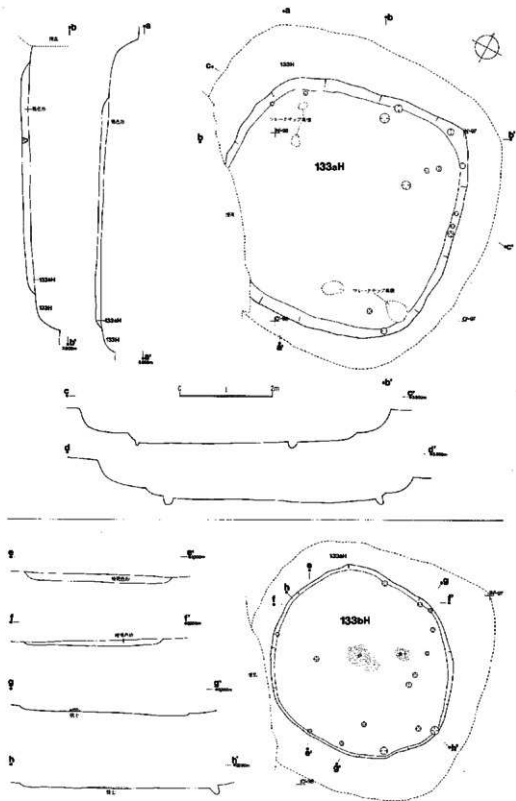
本竪穴は133a号竪穴床面精査中に検出された竪穴で、規模は長軸約4.20m、短軸3.70mの楕円形を呈する。壁高は133a号竪穴床面から約10cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。竪穴中央に約75×45cmの範囲で炉跡の焼土が認められ、焼土には骨片が検出された。炉跡の北東側にも30cm×20cmの範囲で焼土が認められている。柱穴は壁柱穴が8~18cm、深さ6~17cmのものが15本検出された。

## 遺 物 (第101図, 第102図-22・23)

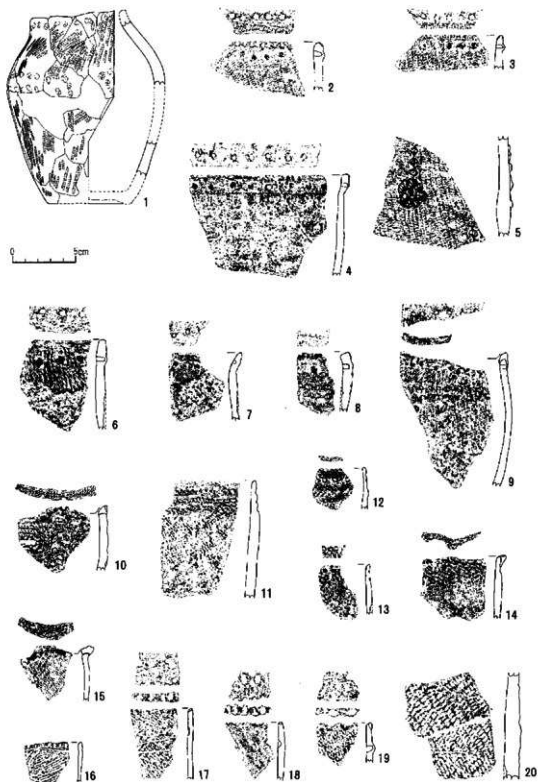
床面から第101図-1が出土。縄文晩期。埋土からは2が後北C<sub>2</sub>・D式。3は縄文晩期。4は縄文後期。5~7は縄文中期。

石器は第102図-22は床面出土の削器。23は埋土出土の削器。いずれも黒曜石製。

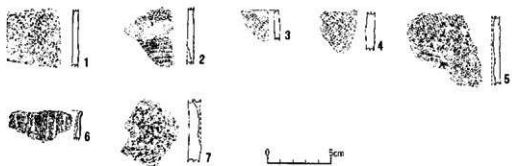




第99圖 133a号整穴、133b号整穴平面图



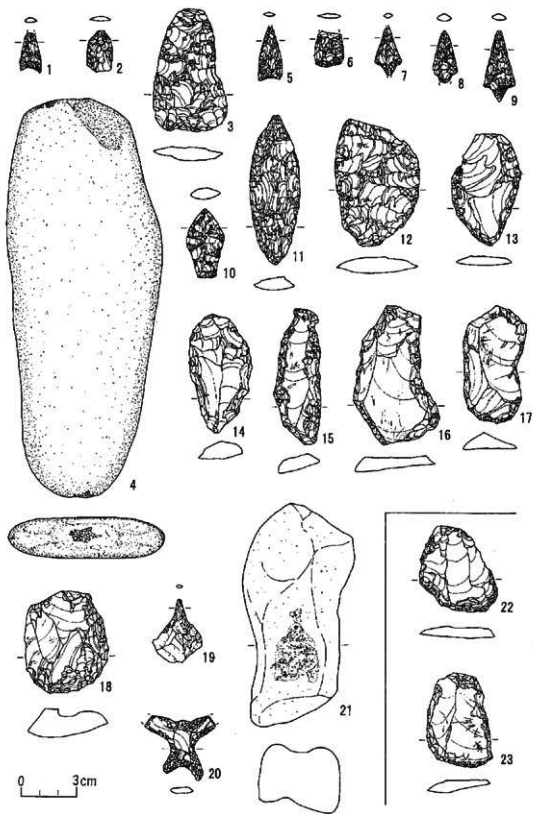
第100图 133a号竖穴床面(1~5)・埋土(6~20)出土土器



第101圖 133b号壙穴床面(1)・埋土(2~7)出土土器

### 小 括

本壙穴の時期は不明であるが、133a号壙穴よりも古いものと考えられる。(佐々木 寛)



第102图 133a号整穴床面(1~4)·埤土(5~21)、133b号整穴床面(22)·埤土(23)出土石器

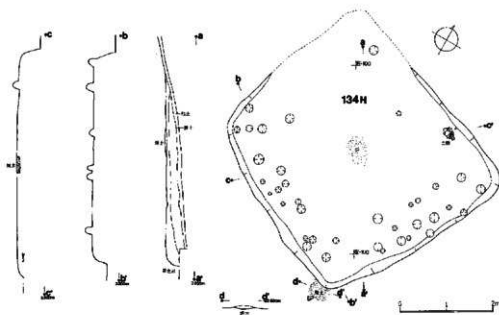
## 134号 竪穴

## 遺 構 (第103図, 図版14-1)

本竪穴は120号竪穴の北側約1.00mにある。規模は約4.50mの方形を呈すると思われるが、北西側が攪乱を受けている。壁高は確認面から約30cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。竪穴の中央には70×50cmの範囲で炉跡の焼土が検出された。柱穴は主柱穴が径18~22cm、深さ5~15cmのものが4本、壁柱穴は径8~18cm、深さ9~15cmのものが西壁で2本、南壁と東壁でそれぞれ3本確認された。主柱穴の深さ5cmのものは床面が攪乱を受けているため確認面からの深さは、元来は15cm前後ではないかと考えられる。カマドは認められなかった。北壁近くの床面直上から第104図-1の土器が出土している。竪穴の南壁外側に竪穴に切られて径約50cmの焼土が検出されている。

## 遺 物 (第104図, 第110図-1~7, 図版14-2)

床面直上から第104図-1が出土している。口径、器高は口縁部及び底部が欠失しているため不明である。口縁部下に3~4本1組の縦の沈線文を配し、その間を4~5本1組の斜めの沈線文で埋める。1本の沈線文で区切られた下には欠羽根状の沈線文を巡らし、短刻線文を施



第103図 134号竪穴平面図

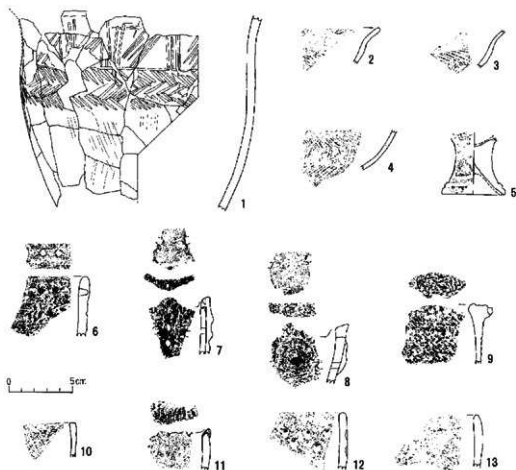
す。擦文後期。埋土からは2～4が高杯。5は高杯の脚部。6は突瘤をもつ津内Ⅱa式。7～13は縄文晩期。8・9は縄線文。12は刺突文。

石器は埋土出土。第110図-1～5は有基石鏃。6は両面加工ナイフ。7は石匙。すべて黒曜石製。

### 小 括

本竪穴はカマドをもたない擦文期のものと考えられる。詳細な時期は北壁近くの床面直上から擦文後期の土器が出土していることからこの時期のものとも考えられるが断定はできない。

(佐々木 寛)



第104図 134号竪穴床面直上(1)・埋土(2～13)出土土器

## 135号 竪 穴

## 遺 構 (第105図, 図版14-4)

本竪穴は125号竪穴の西側に接している。規模は長軸約4.00m、短軸約3.50mの不整楕円形を呈するが、東壁の一部は125号竪穴に切られている。壁高は確認面から約40cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。竪穴埋土の黒褐色砂層中には摩周bと考えられる火山灰が認められた。竪穴のはば中央に約170×60cmの範囲で焼土が検出された。柱穴は径12~14cm、深さ10~14cmの主柱穴と思われるものが3本、径10~18cm、深さ6~12cmの壁柱穴が7本検出されている。埋土からは3箇所です器が一括出土し、黒曜石のフレーク・チップ集積も3箇所で見出されている。

## 遺 物 (第106図, 第107図, 第108図, 第109図, 第110図-8~28, 第111図, 図版14-3)

床面からは第106図の土器が出土している。1は口縁部に突瘤をもつ字津内Ⅱa式。口径約28.5cm、器高は底部が欠失しているため不明。2は地文は縄文のみ。統縄文初頭と考えられる。

埋土からは第107図-1は同心円文をもつ字津内Ⅱb式。2も隆帯を垂下させる字津内Ⅱb式。3・4は突瘤をもつ字津内Ⅱa式。4は口縁部は楕円形を呈し、長軸上に吊り耳状の隆帯を垂下させ、短軸上にも太い隆帯を垂下させる。それぞれの隆帯の下には刻みを入れた隆帯を「ハ」字状に広げ更に途中から真下に垂下させる。底部には4つの突起が施され、突起の間には縄端圧痕文を配す。口径19.0×14.0cm、器高21.2cm。

第108図-1は突瘤と縄線文を巡らせる字津内Ⅱa式。2は字津内式の底部。3は口径6.8cm、器高10.2cmの肩部が張り出す壺形土器。口縁部に突瘤をもち、胴部は縦縄文の地文。統縄文初頭。4~21は縄文晩期中葉。5・6は縄線文。7は縄線文と沈線文。8~10は沈線文。11は刺突文。12~14は縄端圧痕文。21は底部

第109図-1~3は内側から斜め方向の突瘤をもつ縄文晩期前葉。

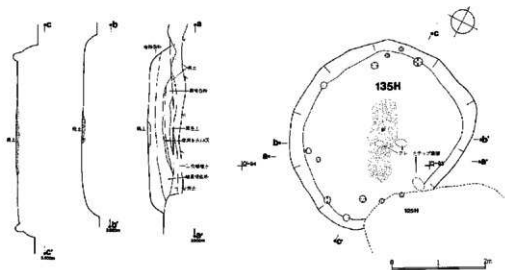
石器は第110図-8・9は床面出土。8は石匙。9は泥岩製の石斧。埋土からは10~14が石鏃。15~18は両面加工ナイフ。19~21・23~28は削器。22は石匙。17・28は玄武岩製。それ以外は黒曜石製。

第111図-1・2は削器。3~6は搔器。1~6は黒曜石製。7・8は玄武岩製の搔器。9~11は石鏃。9は黒曜石製。10は頁岩製。11は玄武岩製。12・13は石斧。12は泥岩製。13は青色泥岩製。14は安山岩製のたたき石。

## 小 括

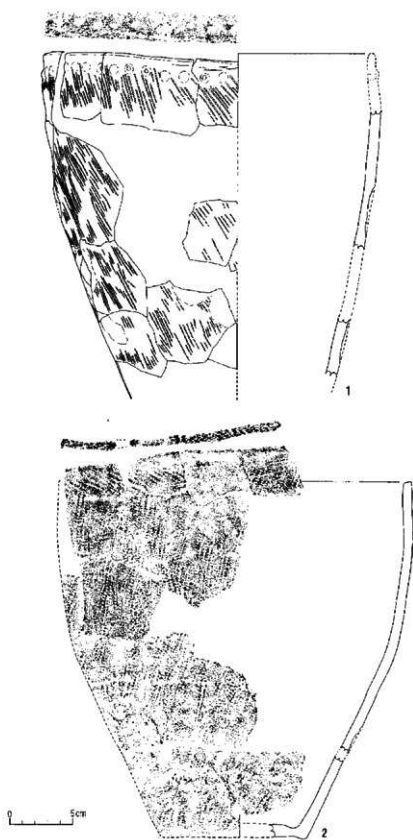
本竪穴の時期は床面出土の土器から統縄文初頭または統縄文字津内Ⅱa式初め頃のものと考えられる。

(佐々木 覚)

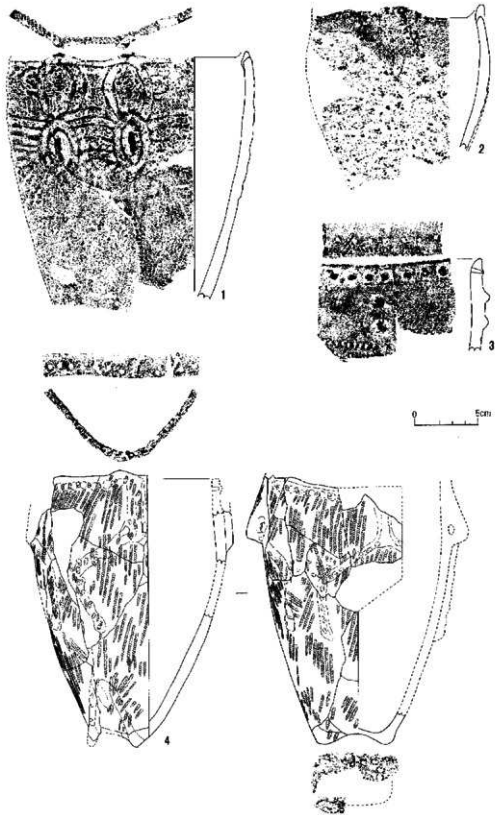


第105图 135号竖穴平面图

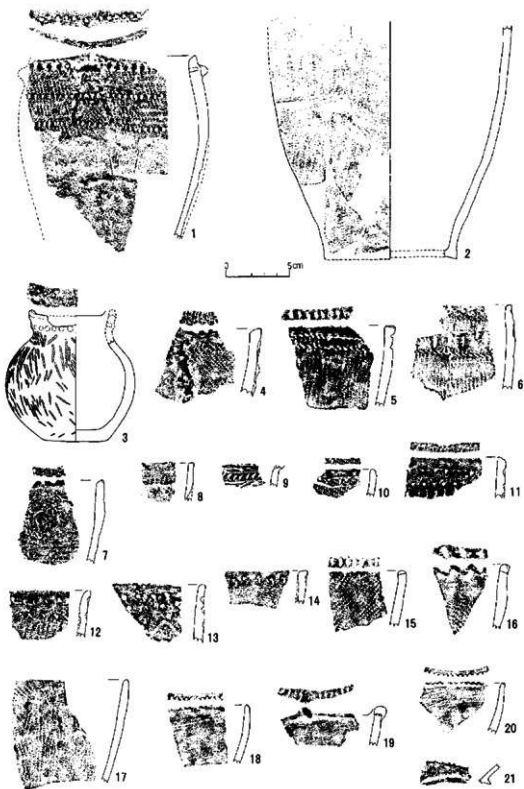




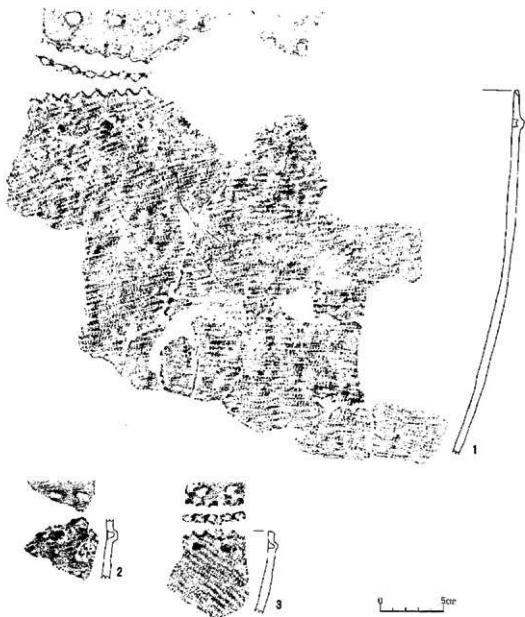
第106圖 135号整穴床面(1·2)出土土器



第107圖 135号墓穴埋土(1~4)出土之器

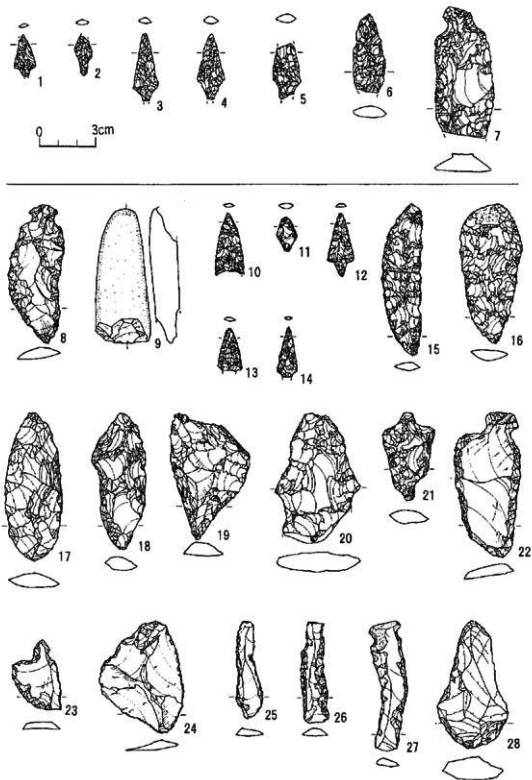


第108圖 135号墓穴埋土(1~21)出土土器

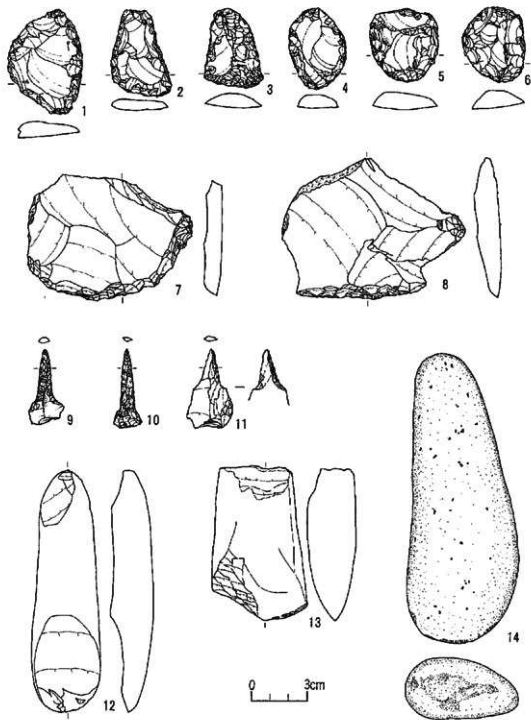


第109圖 135号壑穴埋土(1~3)出土土器

常呂川河口遺跡



第110図 134号塚穴埋土(1~7)、135号塚穴床面(8・9)・埋土(10~28)出土石器



第111圖 135号整穴埋土(1~14)出土石器

## 135a号 竪穴

## 遺構(第112図, 図版15-1)

本竪穴は135号竪穴の西側に位置する。東側を135号竪穴に南側を132号竪穴にそれぞれ切られているが、規模は長軸約8.00m、短軸約6.00mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から約40cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。竪穴の中央より多少西側には径約80cmの範囲で炉跡の焼土が検出され骨片が検出されている。また炉跡の北側にも70×50cmの範囲で焼土が認められたが焼土の中から骨片は検出されなかった。柱穴は径16~22cm、深さ12~25cmの主柱穴と思われるものが4本、壁柱穴は8~16cm、深さ6~18cmのものが6本確認されている。

## 遺物(第113図, 第114図, 第115図, 第116図, 第117図, 第118図, 第119図, 図版15-2~6)

床面から土器は出土しておらず、全て埋土出土。第113図-1~4は捺文。3・4は底部。5は1対の突起をもち、口縁部に6~7条の縄線文と1条の縄端片痕文を巡らせる。口径9.3cm、器高11.5cm。6は1対の突起をもち、突起から隆帯を垂下させ、途中から隆帯を横走させて連結する。口縁部に4~5条の縄線文を巡らせる。口径8.9cm、器高10.7cm。5・6ともに字津内Ⅱb式。7は突瘤をもつ字津内Ⅱa式。8は続縄文初頭。9は壺形の土器で頸部がくびれ、胴部は膨らむ。くびれた部分には向かい合わせに孔を穿っている。口径10.1cm、胴部径15.5cm、器高17.2cm。興津式。10は続縄文初頭。11は縄文晩期帯舞式。12~18は縄文晩期中葉。13は沈線文。14~17は縄線文。

第114図も全て縄文晩期中葉。1は縄線文・縄端片痕文・刺突文の組み合わせ。2は縄線文と沈線文。3は縄線文・縄端片痕文・沈線文の組み合わせ。4は縄線文。5~10は沈線文。11~13は沈線文と刺突文。14は沈線文と縄端片痕文。15~25は刺突文。

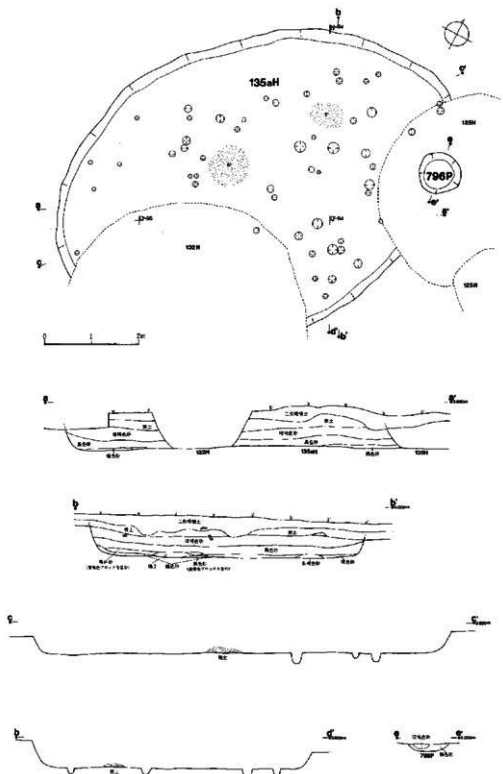
第115図も全て縄文晩期中葉。1は刺突文。2は口縁部の突起に2つの孔を穿ち内側に刺突文を施す。3~5は爪形の刺突文。18は頸部に沈線文。19は頸部に爪形の刺突文。

第116図-1は内側から斜め方向の突瘤をもつ縄文晩期前葉。2は爪形文をもつ縄文晩期前葉。3~7は縄文後期。3・4は栗沢式。5・7は突瘤をもつ堂林式。

第117図-1は6個の突起をもち、3~5条の弧線状の平行沈線文を巡らせる。弧線状の沈線文で区画された間に磨消縄文を施す。縄文後期エリモB式。2は縄文後期縄溝式。3は縄文中期。

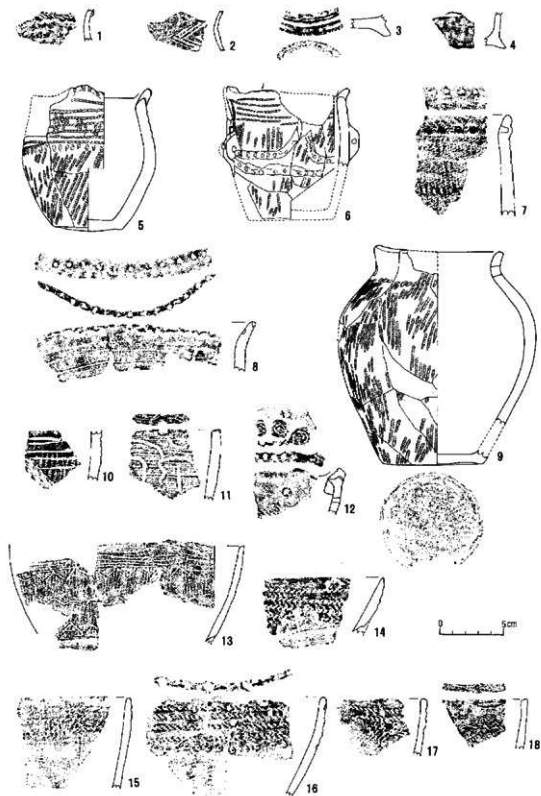
石器は第118図-1は床面出土のナイフ。埋土からは2~7無茎石鏃。8~47は有茎石鏃。48・49は両面加工ナイフ。50~58は削器。59・60は搔器。57は玄武岩製。それ以外は黒曜石製。

第119図-1~3は石鏃。1は頁岩製。2・3は黒曜石製。4~6・8・9は石斧。5は安山岩製。それ以外は泥岩製。7は石剣の一部と考えられる。3条の横方向の溝の中央に「X」状の溝を施す。泥岩製。10は石斧の未完品。泥岩製。11・12は砂岩製の凹石。13は泥岩製のた

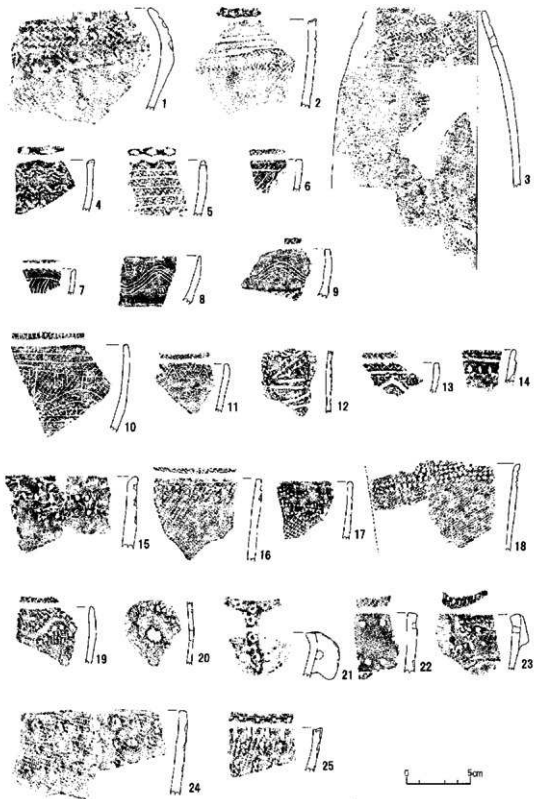


第112図 135a号竪穴、ピット796平面図

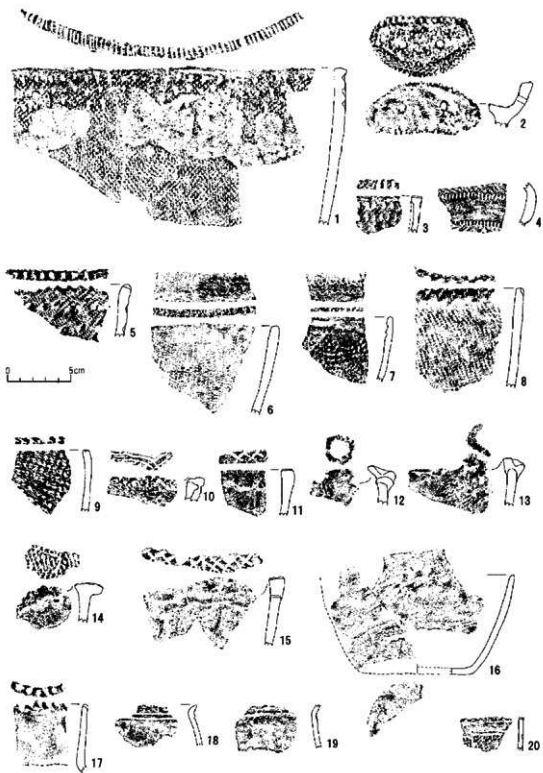




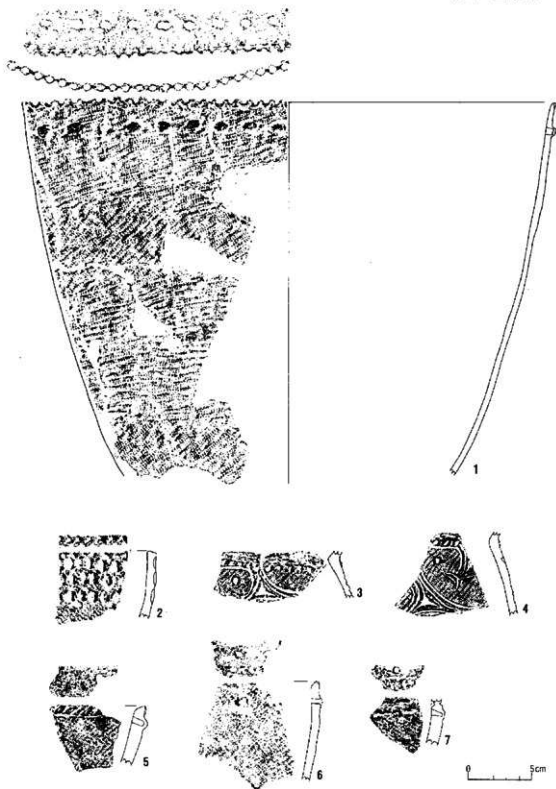
第113图 135a号窑穴出土(1~18)出土器



第114图 135a 号墓火葬土(1~25)出土器



第115圖 135a号壑穴埋土(1~20)出土土器

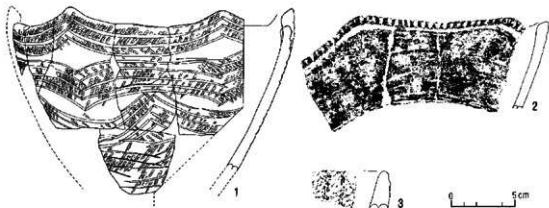


第116图 135a号墓穴出土(1~7)出土土器

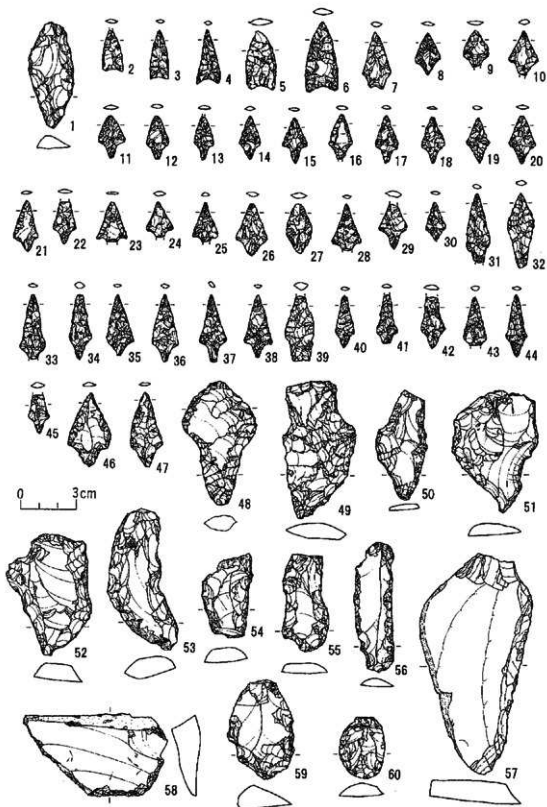
たき石。

小 括

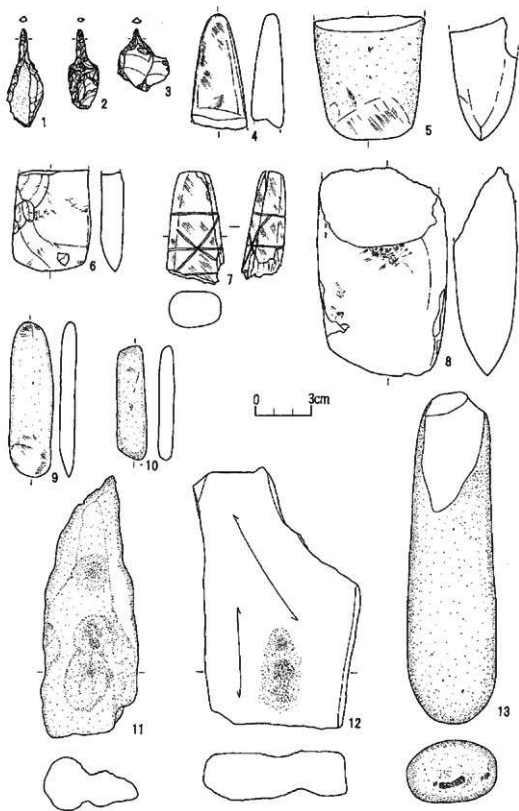
本堅穴は床面からの土器の出土がないため詳細な時期は不明であるが、135号堅穴よりも古いものと考えられる。  
(佐々木 寛)



第117図 135a号堅穴出土(1~3)出土土器



第118圖 135a号墓穴床面(1)・埋上(2~60)出土石器



第119圖 135a号壑穴埋土(1~13)出土石器

## 136号 竪 穴

## 遺 構 (第120図)

本竪穴は134号竪穴の西側約1.20mに位置する。竪穴の大部分が川岸の崩落によって破壊されているため東壁の一部が検出されたのみである。そのため規模、形態ともに不明である。床面から120×70cm、深さ約10cmのピットが検出されている。

## 遺 物 (第121図, 第122図, 第123図, 図版15-7)

埋土から第121図-1~4が擦文。1は高杯。4は回りに三角の切込みを入れた底部。5は縄文初頭。6は突瘤をもつ字津内Ⅱa式。口径24.0cm器高は底部が欠失しているため不明。1対の突起をもち、縄端尻底文を巡らす。7~9は縄文晩期中葉。7は沈線文。8は縄線文。9は縄線文と刺突文。

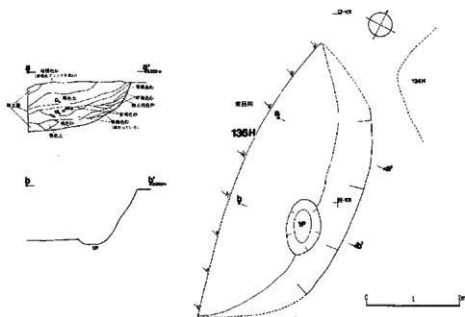
第122図-1~19は縄文晩期中葉。1~4は縄線文。5~11沈線文。12は刺突文。15は爪形の刺突文。16・17は刺突文。18・19は縄端尻底文。20・21は縄文晩期前葉。20は爪形文。21は内側に斜め方向からの突瘤をもつ。

石器はすべて埋土出土。第123図-1~5は石鏃。6は石槍。7・8は両面加工ナイフ。9は片面加工ナイフ。10は削器。11はノッチ状石器。12・13は石鏃。14は削器。15は搔器。16は玄武岩製の打製石斧。17は砂岩製の磨製石斧。16・17以外は黒曜石製。

## 小 括

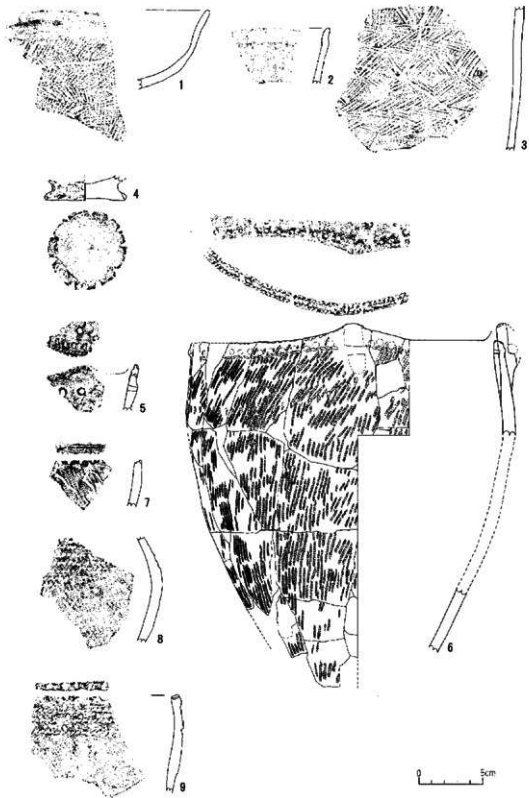
本竪穴は規模、形態、時期ともに不明である。

(佐々木 寛)

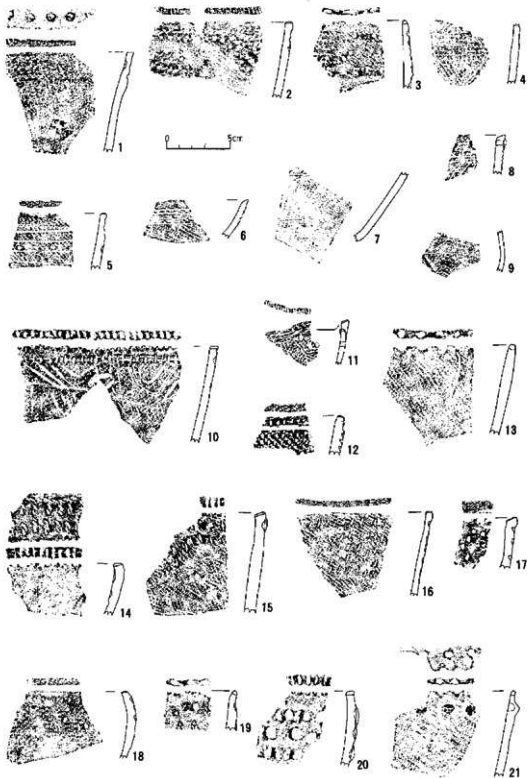


第120図 136号竪穴平面図

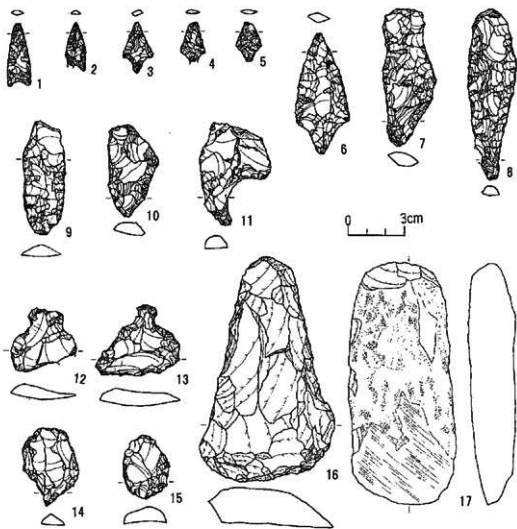




第121圖 136号墓穴埋土(1~9)出土土器



第122圖 136号壑穴埋土(1~21)出土上器



第123圖 136号墓穴埋上(1~17)出土石器

## 137号 竪穴

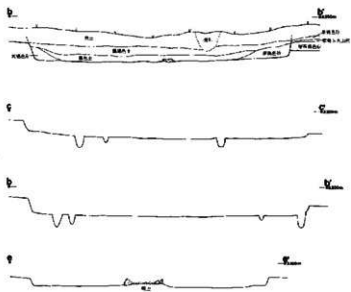
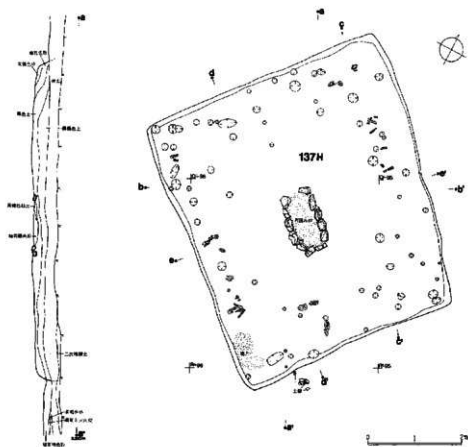
## 遺構 (第124図, 図版16-1)

本竪穴はQ' 94・95, R' 94・95グリッドに位置する。表土を剥土すると黒褐色土の落ち込みを確認した。輪郭を確認するため発掘区を広げるとS' 94グリッド周辺に黄褐色を呈した厚周b火山灰の堆積がみられ、隣接して第125図-2に示すトビニタイⅡ式土器が出土した。竪穴の内部では黒褐色土の下に黒色土が堆積し床面に続いている。火山灰の堆積は認められなかった。規模は東西約5.90m、南北約5.90mを測り、東西にやや長い長方形を呈する。ほぼ中央部には竪穴の形態と同様な長さ約1.40m、幅約0.80mの長方形の石囲み炉が配置されている。比較的大型の角礫を用いているが西側は抜けている。内部は良く焼けている。壁はほぼ垂直に立ち上がり壁高は確認面から約25~35cmを測る。主柱穴と思われるものは直径約20~25cm、深さ約14~27cmのもの、長軸約20~35cm、深さ約12~24cmのものがある。主柱穴は西壁、南壁、東壁のものは比較的壁際にあるものの、北壁側ではやや内側にある。各柱穴は壁側を基準に配置されていたのであろう。これら主柱穴と近接して直径約5~18cm、深さ約6~18cmの壁柱穴が認められる。炭化材は幅約4~6cmの小木であり、各壁から1m以内の区域から並行な状態で出土している。南壁隅には焼土が広い範囲に遺されており、焼失住居と判断された。

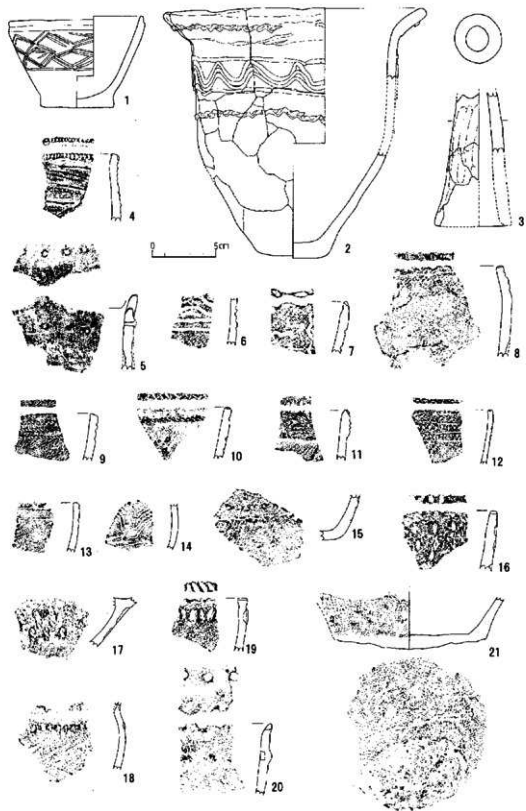
## 遺物 (第125図, 第126図-1~22, 図版16-2・3)

第125図-1は東壁側の床面から斜めの状態で出土した口径11.0cm、器高7.5cmの杯形土器。口縁部に1条の沈線文が横走させることにより立ち上がった口唇部となる。刷毛による器面調整の後に2本単位の山形文を描き、その下端部に2段目の山形刻線文を連結させ、3段目は下方から「V」字状の山形刻線文を施し菱形の文様としている。内外面とも丁寧に成形・調整されている。2は口径20.5cm、器高21cmの中型鉢形土器。波状を呈した幅広いソーメン状貼付文は口縁部と胴部の縦縞貼付文によって区画され、頸部には刻文が施される。底部は不安定。トビニタイⅡ式である。3はフイゴの羽口。先端部は僅かに欠失するが、現存長は10.5cm。極く外反した基部の直径は約5cmである。器面は無文であるが部分的に煤が付着し、先端部は灰褐色を呈する。4は縄文後北C・D式。5は同宇津内Ⅱa式。6は縄文初頭。7は縄文晩期常舞式。8~11は縄線文を施し、10には細い刺突文が加えられている。12~14は沈線文が主体であり、12は刺突文が加わる。15は円形刺突文、16は縄線文の下部に半載状施文具による刺突文が施される。17は口縁部が欠失しているため定かでないが、幅広い突起をもった浅鉢と思われる。縄文後期文が押捺される。18は無文部は屈曲し、半載状施文具による刺突文が施される。19は盛り上がりのある爪形文、20は突瘤文が施される。21は縄文晩期の底部。

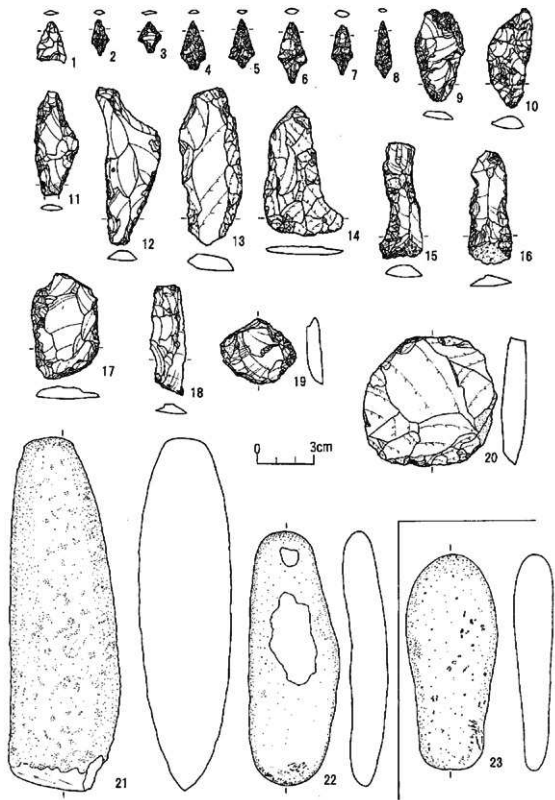
石器は第126図-1が無基石鏃。火熱を受け発泡スチロール化している。2~8は有基石鏃。9・11~17・20は削器。10は両面加工ナイフ。18は左側縁部に刃こぼれ状の使用痕をもつ。19は槌器。21は表裏面、側面とも打調整され、刃部のみ研磨した磨製石斧。22は磨石。下端部の



第124圖 137号整穴平面図



第125图 137号磁穴床面(1)・埋土(2~21)出土土器・土製品



第126图 137号墓穴埋土(1~22)、137a号墓穴埋土(23)出土石器

表面のみ煤が付着している。使用痕は右下端部にある。

### 小 括

本竪穴は形態と内部に石囲み炉をもつことからトビニタイ期のもつと判断できる。南壁の上部に近接してトビニタイⅢ式が出土しておりこの時期の可能性が高い。焼失住居である。しかし、床面出土の第125図-1の杯形土器は明らかに擦文期のものである。杯は宇田川編年中期、藤本編年c・d期に比定できる。(武田 修)

## 137a 号 竪 穴

### 遺 構 (第127図)

本竪穴は137号竪穴の北側に位置する。137号竪穴によって人半が削られており、検出できたのは北壁と西壁・東壁の一部である。このため全体の規模・形態は不明であるが、残存部から判断すると径約3.10mの楕円形を呈すると思われる。壁は皿状に浅く立ち上がり、高さは確認面から約20cmを測る。

中央部に径約40cmの炉跡がある。主柱穴と思われる径約20cm、深さ約15cmのものが1本、壁柱穴は径約10~16cm、深さ約11~18cmのものを4本検出した。

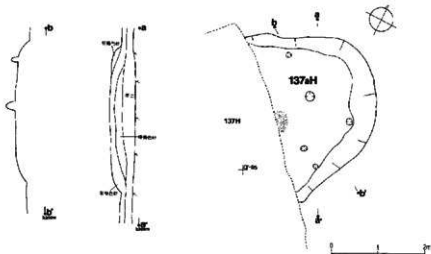
### 遺 物 (第128図、第126図-23)

全て埋土出土である。第128図-1は統縄文宇津内Ⅱa式。2・3・5は縄線文、4は縄文、6は円形刺突文、7は縄端瓦痕文、8は無文。2~8は縄文晩期中葉であろう。

石器は第126図-23が泥岩製の擦石。

### 小 括

トビニタイⅡ群より古い時期の竪穴であるが詳細は不明である。(武田 修)



第127図 137a号竪穴平面図





第128図 137a号竪穴埋土(1~8)出土土器

## 138号 竪 穴

遺 構 (第129図, 図版16-4, 図版17-1・2)

本竪穴はA'90・91グリッドに位置する。規模は東西3.50m、南北3.60mの方形を呈した小型の竪穴である。竪穴埋土の上層である黒褐色砂には白色灰が1cm程のブロック状となって混入し魚骨、貝類が直径60~70mmの範囲から出土した。灰状のブロックは0.5~2cm程のもので、硬質化している。竪穴のほぼ中央部に位置する。竪穴の窪みを利用したアイヌ期の灰送り場と思われる。壁高は確認面から約36cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。カマドは東壁中央部にある。黄褐色粘土を構築材としており、両袖部の上から約20~24cmの角礫もあることから補強材として使用されたと考えられる。煙道の傾斜はきついものしだいに平坦となって煙道に続く。燃焼部上の焼上は粘性をもち微細な骨片を混入する。支柱穴は直径約16~20cm、深さ約23~32cmの四本柱である。直径約6~12cm、深さ約6~16cmの小柱穴は各壁際にあるものの規則性はない。伊跡は竪穴のほぼ中央部にある。

遺 物 (第130図, 第132図-1~3, 図版17-3~8)

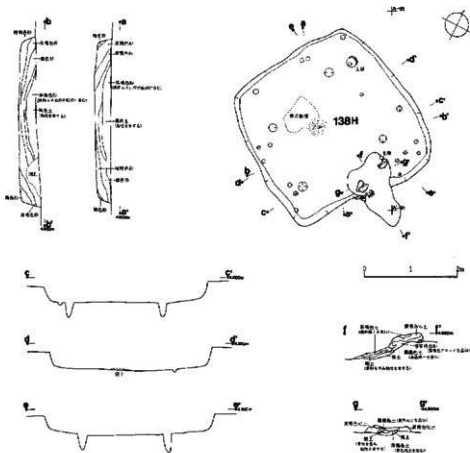
第130図-1は北壁側の床面から伏せた状態で出土した口径22.5cm、器高29.5cmの大型鉢形土器。刷毛により整形された後に、胴下部では篋により再調整されている。口縁部の5段の隆帯には短刻文が施される。胴部は「×」字状の刻線文を連続させて格子目状としたもので欠羽根状刻線文との複段文様となる。器面には煤が付着する。2・3はカマド出土。2は口径7.5cm、器高5.3cmの杯形土器。手塩手法による圧痕がみられ、鋸歯状の刻線が二段施される。底部と口縁部の粘土のつなぎ目は篋状の工具により圧痕している。3は大型鉢形土器の底部。4・5は高杯。6は口径14.5cm、器高14cmの中型鉢形土器。無文。内外面とも丁寧に調整されている。7は大型鉢形土器。無文。8は底部の縁周部を中心に植物繊維と思われる圧痕がある。9・10は紡錘車。9は篋状施工具による刺突文が放射状に施される。60g。10は無文であるが

「V」字状の刻みが2箇所に見られる。65g。11は内側からの突瘤文をもち、2本単位の横位の沈線文を3条、凸部に縄端疋真文を施す。胎土は砂粒が顕著に含まれる。綾縄文初頭與津式であろう。12は2本単位の横走沈線文が施される。縄文晩期中葉であろう。

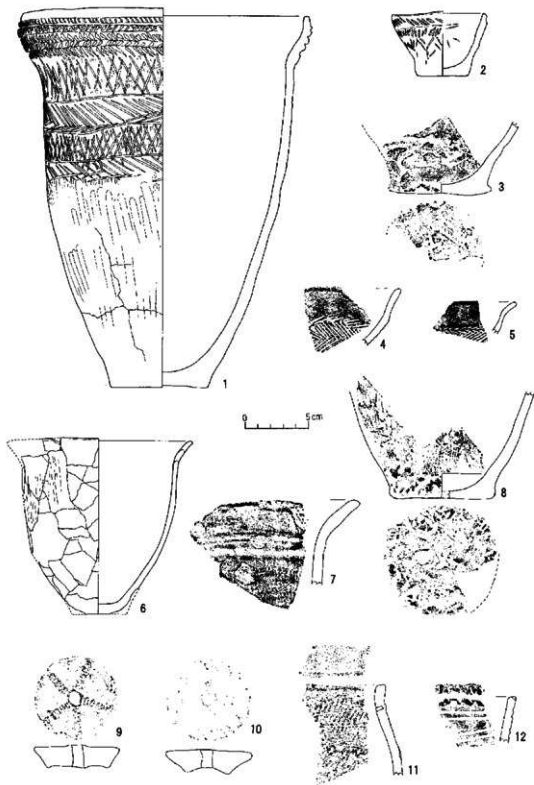
第132図-1は西側近くの床面の約10cm上部から出土した鉄製刀子。中央から先端部にかけて欠失するため長さは不明である。幅約1.2cm、厚さ約2mm。木質柄部は5.7cm。2は両面加工ナイフ。3は片面加工ナイフ。2点とも黒曜石製。

### 小 括

本竪穴の埋土からは魚骨と貝類が出土している。竪穴の窪地を利用したアイヌ期の送り場と考えられる。竪穴の時期は床面上上の土器から擦文期の藤本福年h期、宇田川福年後期に比定される。焼失住居である。(武田 修)



第129図 138号竪穴平面図



第130図 138号整穴床山(1)・カマド(2・3)・埋土(4~12)出土土器・土製品

## 139号 竪 穴

## 遺 構 (第131図, 図版18-1・2)

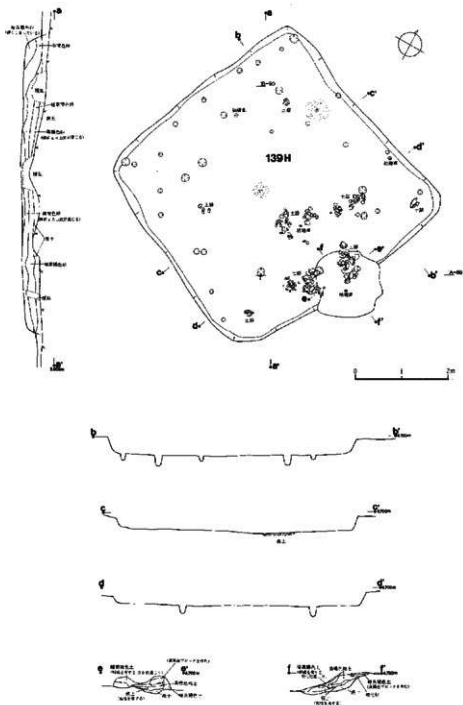
本竪穴はA89・90グリッドに位置する。攪乱等による起伏に富んだ表土を剥土すると、暗茶褐色砂の落ち込みがあり、その下層は樽前a火山灰がブロック状に混入する黒褐色砂が床面まで堆積している。平面図に示す出土遺物の大半はこの黒褐色砂からのものであり、床面約5~10cm上部から出土のものである。規模は東西約5.30m、南北約5.20mの方形を呈する。掘り込みは浅く、確認面から南壁が約20cm、北壁が約30cmを測る。カマドは東壁中央部を大きく掘り込み構築している。煙道の傾斜は緩い。袖部は暗茶褐色土と白色粘土を混合している。主柱穴は直径約15~18cm、深さ約16~23cmを測る。基本的には4本柱穴である。壁柱穴は直径約8~12cm、深さ約4~16cmのものが南壁と西壁では狭い間隔で配置されるもの、北壁では広がり、東壁では全く検出出来なかった。炉跡は竪穴の中央部と北壁寄りに直径約45cm程の大きなものがある。

## 遺 物 (第133図, 第134図, 第135図, 第136図, 第132図-4~10, 図版19-1~14)

第133図-1~5は床面出土。1は高杯、2は高杯脚部。3はカマドと炉跡のはぼ中央部から出土。口径17cm、器高17.5cmの中型鉢形土器。口縁部は2段の隆帯があり胴上部は矢羽根状刻線と山形刻線文の複段文様となる。4はカマドの全面から東壁側にかけて出土した。口径29cm、器高36.5cmの大型土器。口縁部は施文具を押しつけた天塩手法となる。胴上部は5~6本単位の山形刻線文と矢羽根状刻線との複段文様となる。5は第134図-5の土器と近接したカマド右袖部近くから出土した。口縁直下に細い刻線文を雑に施す。刷毛による調整は粗い。6はカマド出土。刷毛により調整されている。

第134図-1~3は床面上上の紡錘車。1・2は中央部から円形刺突文、3は半載状刺突文を放射状に施す。1は55g。2は60g。3は残存部の重量が25g。4はカマド、6・7は煙道上部出土。4は放射状に施されて円形刺突文間に変形針葉樹状文を施す。51g。6は外周部に半載状刺突文が全周し、中央部から「V」状の列点文を2段施す。60g。7は側面及び表面の外周部と内周部に「ハ」字状の刻線文があり、2本単位の山形刻線文から列点文を垂下させ、それぞれ8分割させている。施文は極めて丁寧である。65g。8は埋土出土。7と同様の文様割付であるが、側面は楕円状の刺突文が施される。残存部重量は40g。5は口径31cm、器高42cmの大型土器。カマド炊口部と右袖部に大きく分かれて出土したものが接合した。無文であり、器面は篋により縦方向に調整されている。

第135図-1は口径19cm、器高10cmの高杯。矢羽根文が向きを換えて交互に施される。2~4は無文土器。2は口径11cm、器高10.5cmの中型鉢形土器。胴上部は篋により調整され、底面に1条の刻線が施される。4の底面には浅い刻線文が雑に施される。5は格子目文と縦位刻線の複段文様。6の口縁部は3本の隆帯があり、1本は手塩手法により施文されている。変形針



第131圖 139号整穴平山図

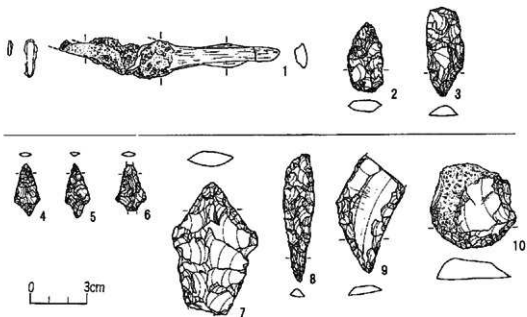
葉樹状文と矢羽根文が施された大型鉢形土器。7も大型鉢形土器。8は大型鉢形土器の底部。

第136図-1は口径26.0cm、器高36.0cmの大型土器。器面は刷毛により調整され、底面中央には「ニ」の刻線をもつ。2はフイゴの羽口。3は後北C<sub>1</sub>・D式。4・5は宇津内Ⅱa式。6は口縁部に2条の縄線文が施される。7は曲線的な沈線文、8は1条の沈線文をもつ。6～8は縄文初頭であろう。9は裏面に刺突文、10は底部に爪形文が施される。11は円形土製品。表面は浅い凹面を呈し、裏面の中央部は溝状の凹面となる。時期・用途は不明である。9は縄文晩期中葉、10は同前葉であろう。

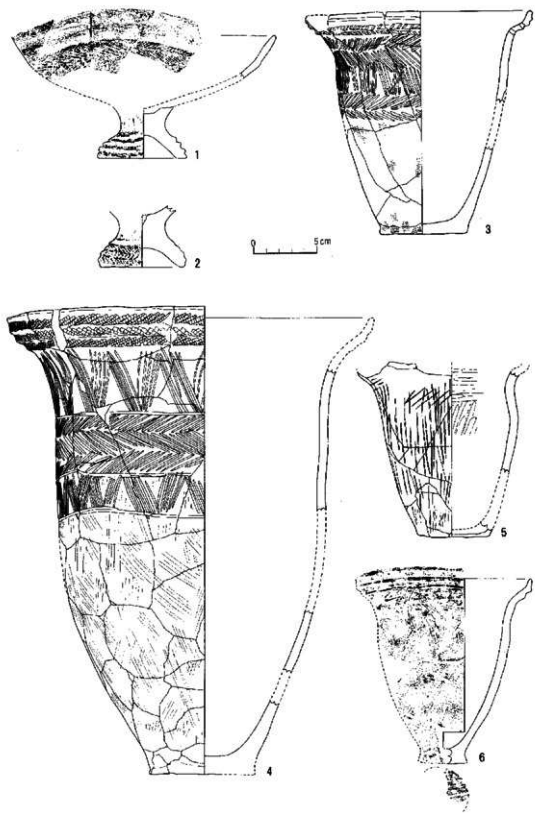
石器は第132図-4～6は有基石鏃。7は石銛。8は両面加工ナイフ。9は切り出し状の刃部をもつ削器。10は搔器。全て黒曜石製。

### 小 括

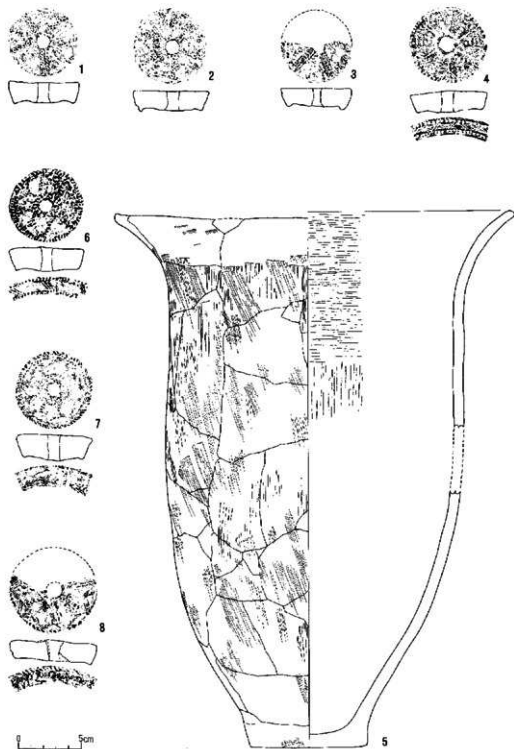
本竪穴は縄文期の竪穴である。比較的遺物の出土は多く、大小の無文土器がカマド周辺から出土している。時期は藤本編年h期、宇田川編年後期に比定される。(武田 修)



第132図 138号竪穴埋土(1～3)、139号竪穴埋土(4～10)出土石器・鉄製品

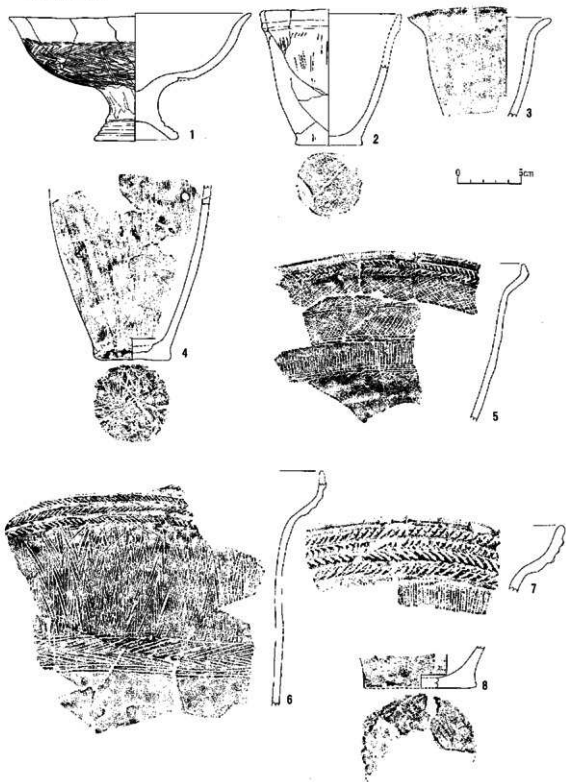


第133图 139号墓穴床面(1~5)・カマド(6)出土土器

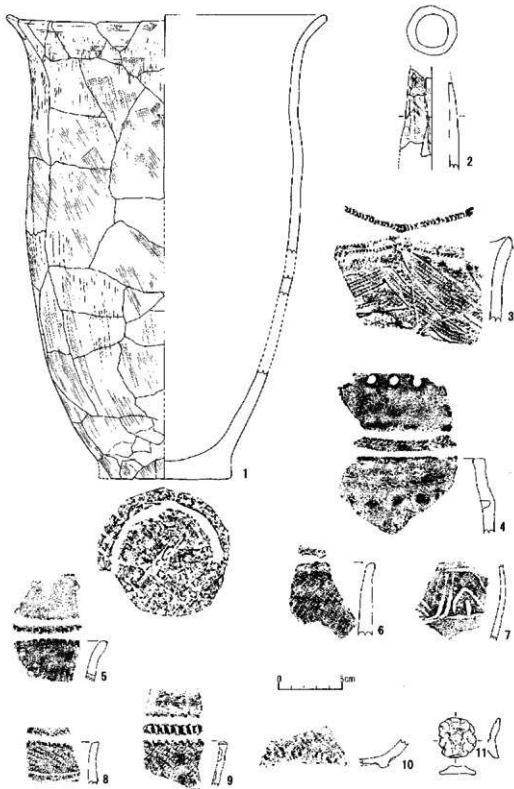


第134図 139号竪穴床面(1~3)・カマド(4・5)煙道上(6・7)・壘土(8)出土土器・土製品





第135圖 139号墓穴埋土(1~8)出土土器



第136图 139号影穴埋土(1~11)出土土器・土製品

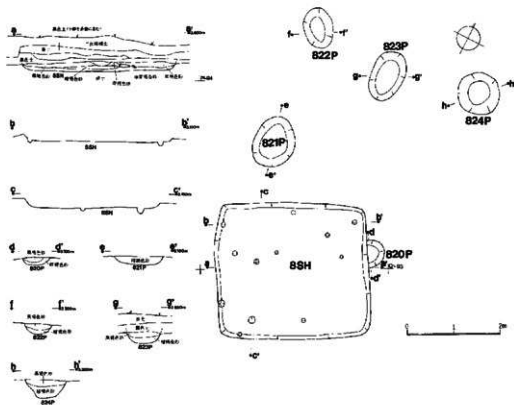
## 8号 小竪穴

## 遺 構 (第137図)

本竪穴はQ' 93, R' 93グリッドに位置する。二次堆積土を除去し、表土下の黒色土を剥土すると黒褐色砂の落ち込みを確認した。規模は東西2.90m、南北3.25mの南北にやや長い方形を呈する。掘り込みは極めて浅く確認面から約20cmである。明確に支柱穴と思われるものは無いが、配置は南壁際と西壁際のもの規則的である。検出された柱穴は直径約6~13cm、深さ約5~15cmのものである。炉跡は認められない。

## 小 括

本竪穴の時期は擦文期のもと思われるが詳細な時期は不明である。 (武田 修)



第137図 8号小竪穴、ピット820、821、822、823、824平面図

## 第V章 ピ ッ ト

## ピ ッ ト 701

## 遺 構 (第138図)

本ピットはB80グリッドに位置する。83a号堅穴の調査中に発見したものでピット701bと南側で重複する。規模は長軸約1.95mの不整形を呈する。床面より約18cm上部から第139図-1・3の土器が10~20cm程度の角礫の直下から出土した。壁はほぼ垂直に立ち上がり高さは83a号堅穴の床面から約30cmを測る。

## 遺 物 (第139図, 第145図-1, 図版20-1~3)

第139図-1は口径13.0cm、器高12.0cmの小型土器。2個の吊り耳と小突起をもつ。小突起から底部には2個の円形貼付文があり、隆帯で連結される。縄縄文宇津内Ⅱb式。2は口径18.0cm、器高22.0cmの中型土器。2個1対の大小突起の下部には円形貼付文があり、縄縄文が横走る。宇津内Ⅱb式。3は口径約20.5cmの中型鉢形土器。口縁部に5条の縄縄文をもち、4個の突起から大小4本の擬縄隆帯が垂下する。縄縄文宇津内Ⅱb式。4~6も同Ⅱb式。7は宇津内Ⅱa式。8は胴部に縄端疋痕文が施されている。宇津内系であろう。

石器は第145図-1は埋土出土の削器。黒曜石製。

## 小 括

床面出土土器が無いため正確な時期は不明であるが、第139図-1~3に示した土器である縄縄文宇津内Ⅱb式期の可能性がある。(武田 修)

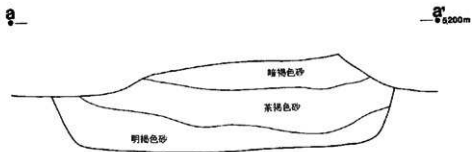
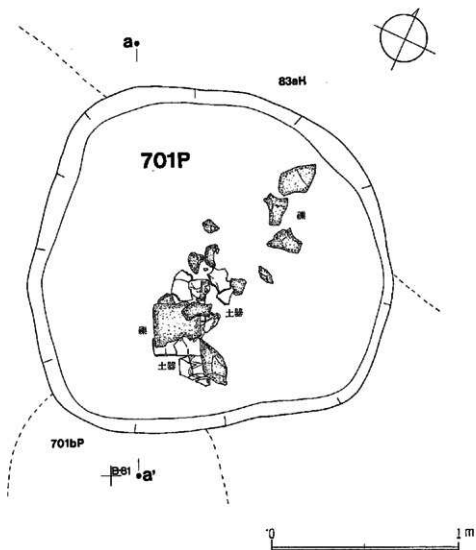
## ピ ッ ト 701a

## 遺 構 (第140図)

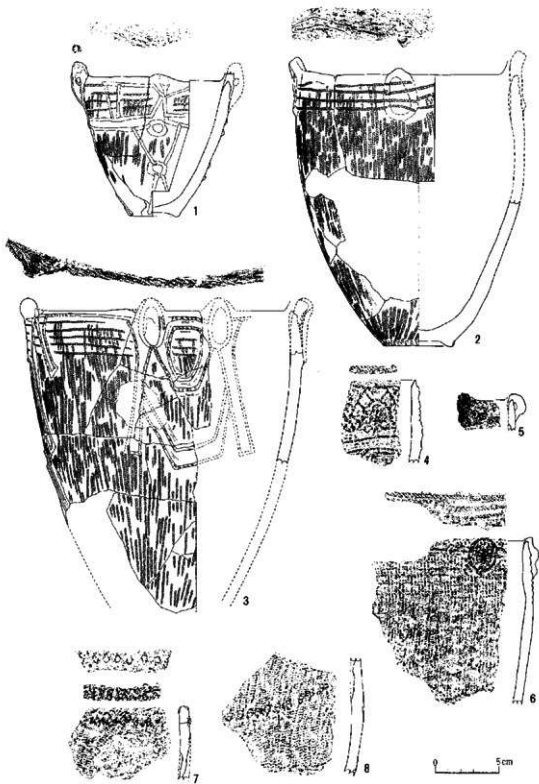
本ピットはA80グリッドに位置する。ピット701bの東壁を切り込んで構築されている。規模は直径約1.15mの浅い不整形を呈する。中央部がやや深く確認面から約18cmの皿状を呈する。

遺物は出土しておらず詳細な時期は不明である。

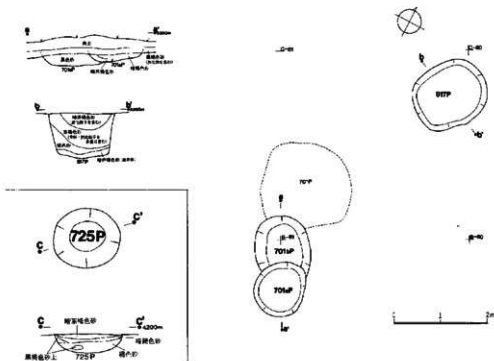
(武田 修)



第138圖 ピット701平面図



第139圖 ビット701埴土(1~8)出土土器



第140図 ピット701a、701b、725、817平面図

## ピット 701b

### 遺構 (第140図)

本ピットはピット701の東壁上部を切り込んで構築されている。東壁側はピット701aに切られているため正確な規模は不明であるが、約1.60mの楕円形を呈すると思われる。壁は皿状に立ち上がり、高さは確認面から約22cmである。(武田 修)

## ピ ッ ト 702

## 遺 構 (第144図)

本ピットは72d号堅穴の床面精査中に検出した。72d号堅穴の北壁に近い、E' 81・82グリッドにまたがった位置にある。上部は72d号堅穴に破壊されている。したがって正確な規模は不明であるが、遺存体と思われる粘性のある暗茶褐色土の範囲から推測すると長軸約1.10m、短軸約0.90mの楕円形を呈すると思われる。南壁側に寄った遺存体の上部からは第145図-2～5に示す石器、琥珀玉が出土している。

## 遺 物 (第145図-2～5、図版20-4～6)

第145図-2～5は全て埋土出土である。2・3は無茎石鏃。3は幅広い基部をもつ。4は有茎石鏃。5は琥珀玉。中央部を表裏面から穿孔する。2は黒曜石製。3はチャート製。4は硬質頁岩製。

## 小 括

土器の出土が無いため正確な時期は不明である。72d号堅穴からは宇津内Ⅱb式の破片が出土しており、これ以前であろう。また、第145図-5に示す大型の琥珀玉は絨縄文字津内Ⅱa式には伴わず、より以前の興津式系などに見られる。本ピットは興津式系の可能性が高い。

(武田 修)

## ピ ッ ト 703

## 遺 構 (第154図)

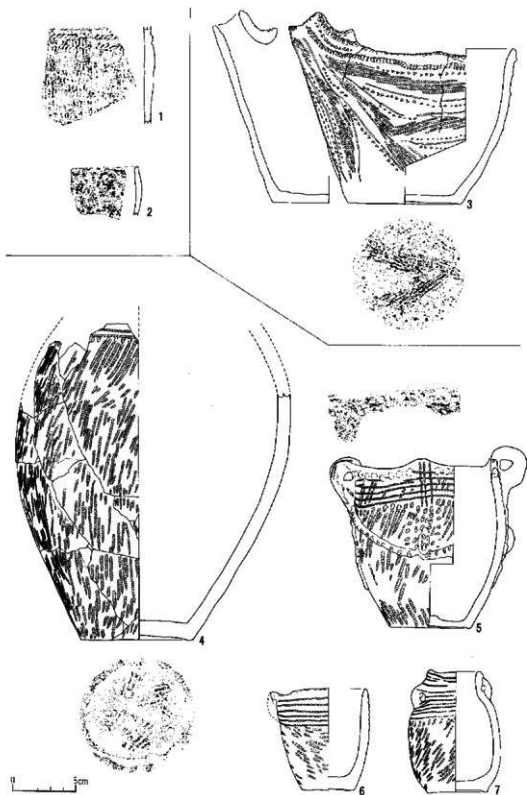
本ピットはE' 84グリッドに位置する。東南壁上部がやや開くものの規模は直径約1.30mの円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり高さは確認面から約50cmを測る。床面中央部は各壁から約10cm下がり、粘性のある黒褐色土が堆積する。その上部にも褐色砂と暗褐色砂の間層を挟み、1cm程の炭化物と焼土を含む黒褐色土がある。ピット上部の黒褐色土にも炭化物と炭化粒が多く混入する。東壁際の床面には直径20cm程の焼土がある。これらの炭化物、焼土はピット内の焚火を意味している。

## 遺 物 (第141図-1・2)

第141図-1・2は埋土出土である。1は2条の縄線文が施されている。縄文初頭であろう。2は無文。縄文晩期中葉であろう。

(武田 修)





第141図 ビット703埴土(1・2)、704埴土(3)、705床面(4~7)出土土器

## ピ ッ ト 704

## 遺 構 (第154図)

本ピットはF'84グリッドに位置する。表土を剥土した直後に第141図-3の注口土器が出土し、周辺を精査すると暗褐色砂の落ち込みを確認した。規模は長軸約1.35m、短軸約1.00mの楕円形を呈する。壁は且状に立ち上がり、高さは確認面から約20cmを測る。

## 遺 物 (第141図-3、図版20-7)

第141図-3の土器は西壁上部から出土した口径13.0cm、器高12.0cmの注口土器。口縁直下に1条の縦線隆帯が横走する。胴部は微隆起線文で区西され帯高文、列点文が施される。統縄文後北C<sub>2</sub>・D式。

## 小 括

床面に遺存体の痕跡は認められなかった。統縄文後北C<sub>2</sub>・D式の注口土器が西壁上部から出土しているが、他の同時期の土壇墓の土器は東壁側の頭部に接して正立の状態と判断されるのが大半である。西側から出土することはあるがその例は少なく、上部から出土する例はない。

ピットの形態、長軸方向から後北C<sub>2</sub>・D式の土壇墓の可能性のあるものの土器の出土位置に変化がある。 (武田 修)

## ピ ッ ト 705

## 遺 構 (第142図、図版21-1)

本ピットはC76グリッドに位置する。第Ⅱ層の茶褐色砂を掘り下げた直後に検出した。規模は直径約0.80mの小整円形を呈する。北壁中央部に直径約30cm程の大型角礫が立てた状態であり、南壁上部にも直径約20cmの角礫が遺されていた。床面のほぼ全面から大型角礫の上部にかけてベンガラ泥じりの赤褐色砂質土が認められた。赤褐色砂質土に粘性は無いものの遺存体と思われ、上部から大小の土器が出土した。壁高は緩く立ち上がり、高さは確認面から約20cmである。南東壁際の床面には直径4cm、深さ5cmの小柱穴がある。

## 遺 物 (第141図-4~7、第145図-6、図版21-2~5)

第141図-4は南壁側の床面から遺存体上部にかけて出土した胴部径約21.5cmの大型土器である。本来は正立の状態で置かれていたと思われるが、破片は土器内部に落ち込む様な状態で検出された。口縁部は欠失する。宇津内Ⅱa式であろう。5は西壁際から内側に向かって倒れた状態で出土した。口径11.0cm、器高13.0cmの中型土器である。口縁部に突瘤文が施され、1個1対の吊り耳から小突起下部のボタン状貼付文に向かって「U」字状の隆帯をもつ統縄文字津内Ⅱa式である。6・7は口縁部に数珠の縄線文と吊り耳をもつ。6は口径7.5cm、器高8.0cmの小型土器。7は縮約した口縁部となるもので口径4.0cm、器高9.5cmの小型土器。2点と



も字津内Ⅱ a式である。

石器は第145図-6は遺存体上部から出土した両面加工ナイフ。黒曜石製。

### 小 括

本ピットは平面図には図示されていないが床面に小柱穴をもつ土壌基である。時期は床面及び遺存体上部出土土器から統縄文字津内Ⅱ a式に比定される。 (武田 修)

## ピ ッ ト 706

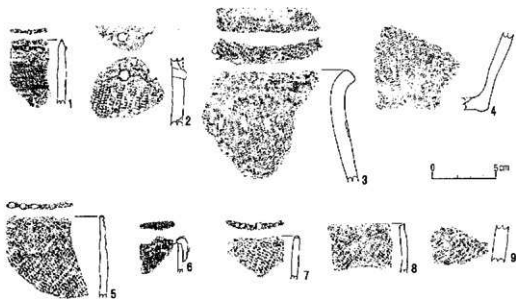
### 遺 構 (第154図)

本ピットはD' 85, E' 85グリッドにまたがって位置する。表土を剥した段階で発見したもので、規模は直径約1.63mの不整形円形を呈する。壁は比較的緩く立ち上がり、高さは確認面から北壁側が約50cm、南壁側が約60cmを測る。

### 遺 物 (第143図, 第145図-7・8)

第143図-1は後北C<sub>1</sub>・D式。2は統縄文字津内Ⅱ a式。3は外反した口縁部に刺突文が施される。統縄文初頭であろう。4は字津内系の底部。5・6は縄線文、7・8は縄文が施される。5～8は縄文晩期中葉であろう。9は縄文後期。全て埋土出土。

石器は第145図-7は削器。8は両面加工ナイフ。2点とも黒曜石製。 (武田 修)



第143図 ビット706埋土(1~9)出土土器

## ピット 707

### 遺構 (第144図)

本ピットはF'81グリッドに位置する。72d号堅穴舌状部の南側にある。西側のピット707aと東側のピット707bを切り込んで構築している。規模は直径約0.70mの不整形円形を呈する。壁は丸みをもって緩く立ち上がり、高さは確認面から約28cmを測る。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

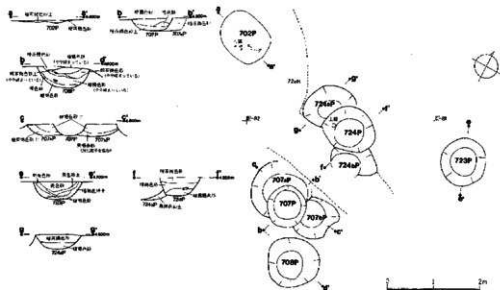
## ピット 707a

### 遺構 (第144図)

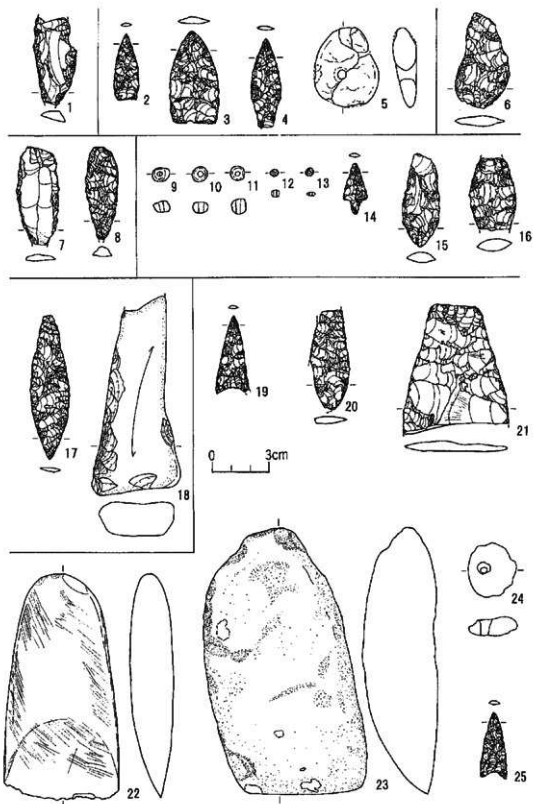
本ピットはF'81グリッドに位置する。72d号堅穴舌状部の南側にある。東側をピット707、北壁側を72d号堅穴に削られているため正確な規模は不明であるが、円形を呈するのであろう。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約30cmを測る。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)



第144図 ピット702、707、707a、707b、708、723、724、724a、724b平面図



第145図 ビット701埋土(1)、702埋土(2~4)・埋土下位(5)、705床面(6)、706埋土(7・8)、709遺体上部(9~13)・埋土(14~16)、710壁土(17・18)、711床面(19~24)・埋土(25)出土石器・琥珀玉・ガラス玉

## ピ ッ ト 707b

### 遺 構 (第144図)

本ピットはF' 81グリッドに位置する。72d号堅穴舌状部の南側にある。西壁側をピット707、北壁側を72d号堅穴に削られているため正確な規模は不明であるが、円形を呈するのであろう。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約25cmを測る。

詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第149図-1~4)

第149図-1~4は埋土出土である。1は縄線文、2は無文部に1条の沈線文、3は縄文が施される。4は無文。1~4は縄文晩期中葉であらう。(武田 修)

## ピ ッ ト 708

### 遺 構 (第144図)

本ピットはD' 81グリッドに位置する。72d号堅穴舌状部の南側にある。規模は直径約1.10mの不整形円形を呈する。壁は丸みをもって緩く立ち上がり、高さは確認面から約46cmを測る。埋土には数センチの角礫が多量に混入する。

### 遺 物 (第149図-5~7)

第149図-5~7は埋土出土である。5は統縄文宇津内式、6は縄線文と刻み、7は横位の細沈線文が施される。6・7は縄文晩期中葉であらう。(武田 修)

## ピ ッ ト 709

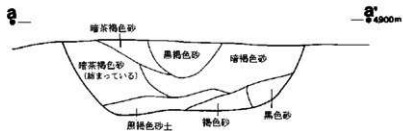
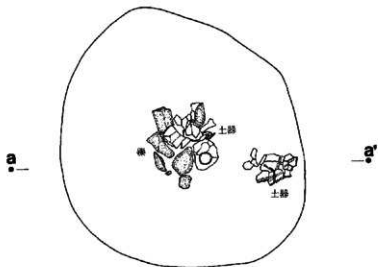
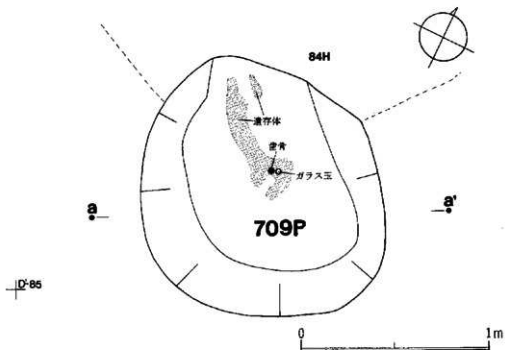
### 遺 構 (第146図)

本ピットはD' 84グリッドに位置する。北西壁側が擦文期の84号堅穴に切られているものの長軸約0.90m、短軸約0.65mの楕円形を呈する。長軸面を東西方向にもつ。壁高は確認面から約40cmを測る。ピット中央部の埋土上部から図示していないが土器が10~15cm程の小角礫とともに出土し、やや下げた段階で北壁際からも土器が出土した。床面に遺存体である暗褐色土が東西方向に遺され、ピットの中央部から黄骨と濃紫色と淡青色を呈したガラス玉が出土した。

### 遺 物 (第149図-8~12, 第145図-9~16)

第149図-8~12は埋土出土。8は統縄文宇津内Ⅱa式。9は宇津内系の底部であらう。10の口唇部は小波状を呈し、口縁直下に円形刺突文が施される。11は無文。10・11は縄文晩期中葉であらう。12は無文部に刺突文をもつ縄文前期末葉の平底押型文。

第145図-9~13は遺体上部出土のガラス玉。14~16は埋土出土。14は有基石。15・16は



第148図 ビット709平面図



両面加工ナイフ。3点とも黒曜石製。

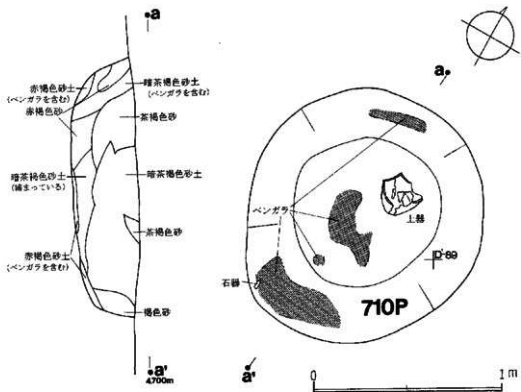
小 括

本ピットの床面から土器は出土していないが、遺存体からガラス玉が出土しており、時期は埋土土器とあわせ統縄文後北C・D式と考えられる。 (武田 修)

## ピ ッ ト 710

### 遺 構 (第147図)

本ピットはD'89グリッドに位置する。第Ⅱ層茶褐色砂層を精査中にベンガラ混じりの暗茶褐色砂の落ち込みを確認した。規模は径約0.65mの円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は確認面から約30cmを測る。ベンガラは埋土各層にも混入しており量も多く、北壁際から流れ込む様に堆積している。床面には遺存体である粘性のある暗赤褐色土が南壁から中央部に薄く遺されている。土器は北壁際からつぶれた状態で出土している。口縁部は欠失しており破壊されて副葬された可能性がある。



第147図 ピット710平面図

## 遺 物 (第149図-13~15, 第145図-17・18)

全て埋土出土である。第149図-13は底部が揚げ底となり器面に捺糸文が施される。続縄文宇津内系であろう。14は口縁部の内側に2条の縄線文、15は口唇部に刻みが施される。14・15は縄文晩期中葉であろう。

第145図-17は表面及び裏面の先端部と基部を入念に加工する。断面は基部から先端部にかけて緩い弧状を呈したナイフ。黒曜石製。18は左側縁部が調整剥離された擦り石。泥岩製。

(武田 修)

## ビ ッ ト 711

## 遺 構 (第148図, 図版22, 図版23-1)

本ビットはC'89・90グリッドにまたがって位置する。表上及び第Ⅱ層の茶褐色砂の上面を掘り下げた段階で平面図に示すとおり直径約40~65cmに及ぶ大型の角礫3点が東壁から北壁にかけて配置され、さらに20cmほど下げると径約8~20cmほどの小型の角礫が認められた。大小の角礫がビット北側の上面を囲み、小型の角礫がその内部を埋めるようなあり方である。角礫の除去後に輪郭を確認した。規模は長軸約1.35mを測る。短軸は西壁側が上部から中位部にかけて大きく開くため約1.05mと幅広い楕円形となっている。床面は不整形円形を呈する。壁高は確認面である第Ⅱ層の下位から約85cm、大型礫の出土した上位からでは約1.05mを測る深いものである。埋土は基本的に暗褐色砂が堆積しており、混入物の状況でセクション図に示すとおり分層された。特にベンガラ散布がビットの中位から下部にかけて認められる。ベンガラ散布に濃淡があり、1~2cmのベンガラ塊も数点含まれる。床面にはベンガラを含み、粘性のある暗褐色土を呈した遺存体のみられた。遺存体の上部に石鏃、石斧、剥片があり、床面からは琥珀玉、剥片が出土している。副葬品は石器が主体を占めているが、これらは遺体の安置前後に置かれたものである。

## 遺 物 (第149図-16・17, 第145図-19~25, 図版23-2~8)

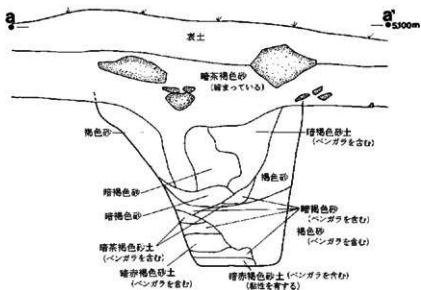
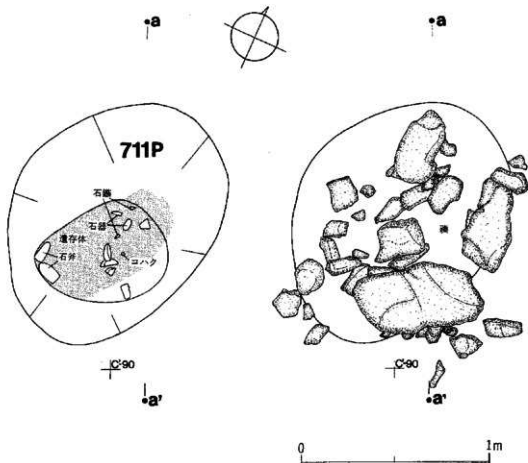
第149図-16・17は埋土出土である。16は縄文晩期。17は縄文後期経潤式。

第145図-19~24の石器は床面出土。19は無茎石鏃。20・21は両面加工ナイフ。21は大型ナイフの柄部。22・23は片刃磨製石斧。22の基部は敲打調整されている。24は琥珀玉。中央よりやや左側で穿孔されている。表表面のほぼ全面に黒色状のものが付着する。もともと琥珀に含まれているものか、人工的な黒漆、タール状のものか素材は不明である。25は無茎石鏃。22は緑色泥岩製、23は珪質泥岩製であり、他は黒曜石製である。

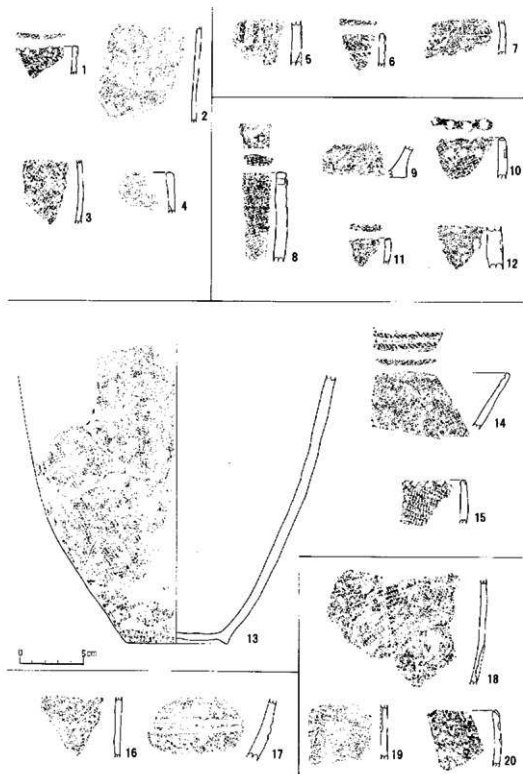
## 小 括

本ビットは上部に配石をもつ土墳墓である。土器が出土していないため時期は不明であるが、石鏃の形態等から続縄文期と思われる。

(武田 修)



第148図 ビット711平面図



第149圖 ビット707b 埋土(1~4)、708埋土(5~7)、709埋土(8~12)、710埋土(13~15)、  
711埋土(16・17)、712埋土(18~20)出土土器

## ピ ッ ト 712

### 遺 構 (第154図)

本ピットはD' 83, E' 83グリッドにまたがって位置する。表土を剥した段階で落ち込みを確認した。規模は長軸約1.20m、短軸約1.05mの楕円形を呈する。床面が南壁から北壁にかけて傾斜するため高さは異なる。南壁は約45cm、北壁は約30cmを測る。

詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第149図-18~20)

第149図-18・19は縄文、20は刺突文。3点とも縄文晩期。埋土出土である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 713

### 遺 構 (第154図)

本ピットはE' 84グリッドに位置する。ピット中央部から南壁側が破壊されているため形態は不明である。残存部では径約1.00mを測る。壁は垂直に立ち上がり、壁高は確認面から約35cmである。埋上に少量であるがベンガラを混入しているため土壌墓と思われる。時期は不明である。

### 遺 物 (第151図-1・2)

第151図-1は統縄文字津内系であろう。2は縄文晩期中葉であろう。2点とも埋土出土である。

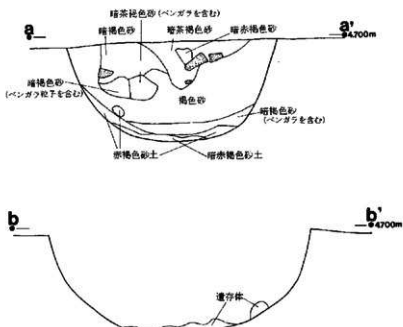
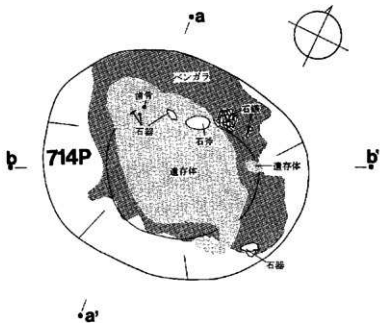
(武田 修)

## ピ ッ ト 714

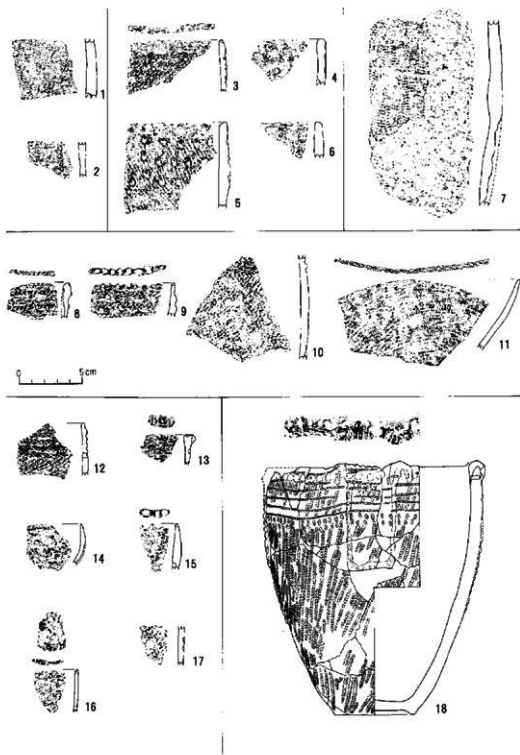
### 遺 構 (第150図, 図版24-1)

本ピットはE' 85グリッドに位置する。第Ⅱ層の茶褐色砂層の精査中にベンガラを含む暗褐色砂の落ち込みを確認した。規模は長軸約1.40m、短軸約1.15mの楕円形を呈する。床面から壁にかけて丸みをもって立ち上がる。壁高は確認面から約50cmを測る。セクション図に示すとおり埋土にはベンガラの散布が多量に混入する。特に遺体上では床面のほぼ全域にベンガラが散布され、遺体を覆っている。この面の北壁側から石鏃の一括、石斧等が出土している。石鏃は直径約12cmの範囲に丸くまとまった状態で出土した。先端部の方向性もバラバラであり何らかの容器に収納されたのかもしれない。この3~4cm程のベンガラを除去すると粘性のある暗赤褐色上を呈した遺存体を検出した。西壁側に歯骨が残存しており、頭部と思われる。

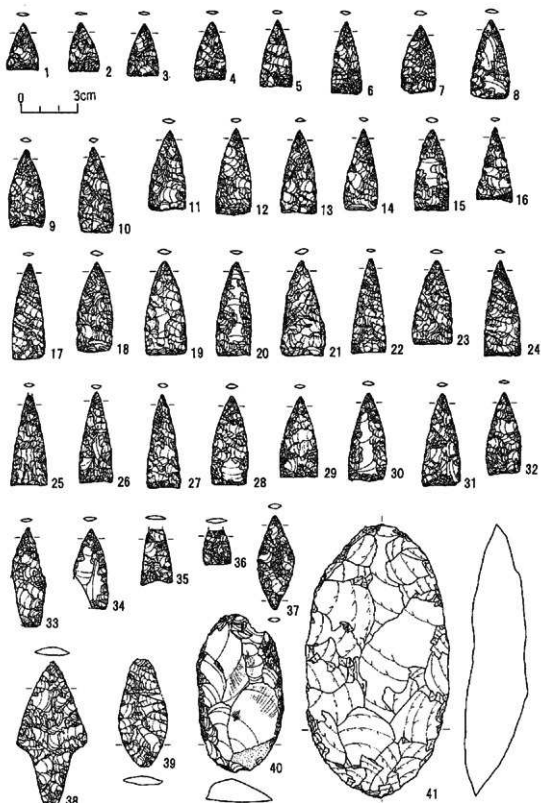
### 遺 物 (第151図-3~6, 第152図, 第153図-1~4, 図版24-2~23, 図版25)



第150圖 ビット714平面図



第151図 ペット713埋土(1・2)、714埋土(3~6)、715埋土(7)、716埋土(8~11)、717埋土(12~17)、719埋土(18)出土土器



第152圖 ビット714床面(1~41)出土石器



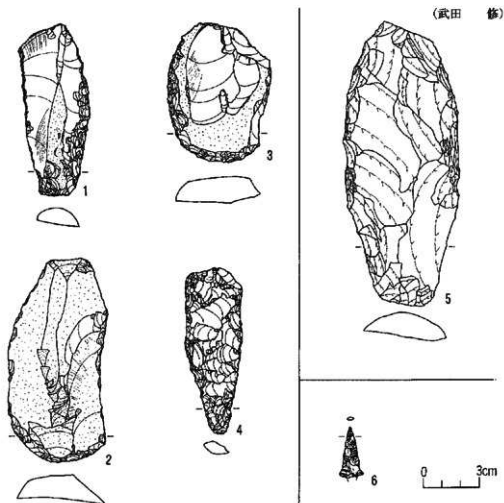
第151図-3~6は埋土出土。3は縄文文と円形刺突文、4は刺突文、5は下方からの刺突文、6は縄文が施される。これらは縄文晩期中葉であろう。

石器は第152図-1~36が大小の無茎石鏃。37は菱形の石鏃。38は石槍。39は両面加工ナイフ。40は削器であるが、左下端部は急斜な刃部をもつ。41は肉厚で表裏面とも大きな剝離面を残し、楕円形状の大型石器。部分的に赤色顔料が付着する。41は頁岩製であり、他は黒曜石製である。

第153図-1~3は埋土層中にあるベンガラ内から出土した。3点とも縦長剥片を素材としたもので原石面をもち、下端部に急斜な刃部をもつ搔器。4は埋土出土の両面加工ナイフ。4点とも黒曜石製。

### 小 括

本ピットは床面から土器が出土していないため正確な時期は不明であるが、無茎石鏃は統縄文期のもと思われる。西頭位でベンガラを多量に散布しており、統縄文初頭の可能性が高い。



第153図 ピット714埋土ベンガラ内(1~3)・埋土上位(4)、716埋土(5)、717埋土(6)出土石器

## ピット 715

## 遺構 (第154図)

本ピットはE' 83・84グリッドにまたがって位置する。表土を剥土した段階で暗褐色砂の落ち込みを確認した。規模は径約0.50mの小円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は確認面から約38cmである。

詳細な時期は不明である。

## 遺物 (第151図-7)

第151図-7は統縄文津内系の胴部片であろう。埋土出土である。(武田 修)

## ピット 716

## 遺構 (第154図, 図版26-1)

本ピットはE' 83・84グリッドにまたがって位置する。表土下に薄く堆積した暗褐色砂を剥土した段階で暗褐色砂の落ち込みを確認した。規模は径約1.00mの円形を呈する。床面は丸みをもち、壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は確認面から最深部まで約58cmを測る。ピットの中位部から炭化粒と角礫が散見され、床面全域を覆う様に4~5cmの小角礫と10~20cmの大角礫が遺されている。用途等は不明である。墓壇以外のピットであろう。

## 遺物 (第151図-8~11, 第153図-5, 図版26-2)

第151図-8は統縄文後北C<sub>2</sub>・D式。9・10は縄線文、11は縄文が施される。この3点は縄文晩期中葉であろう。全て埋土出土。

第153図-5の石器は埋土出土である。大きく粗い剥離の玄武岩製の片面加工ナイフ。上部に原石面をもつ。(武田 修)

## ピット 717

## 遺構 (第154図)

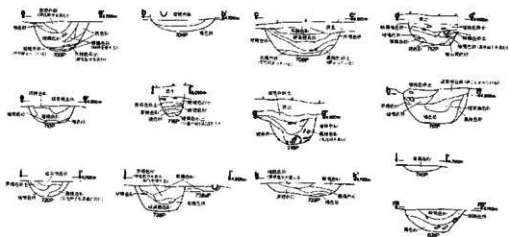
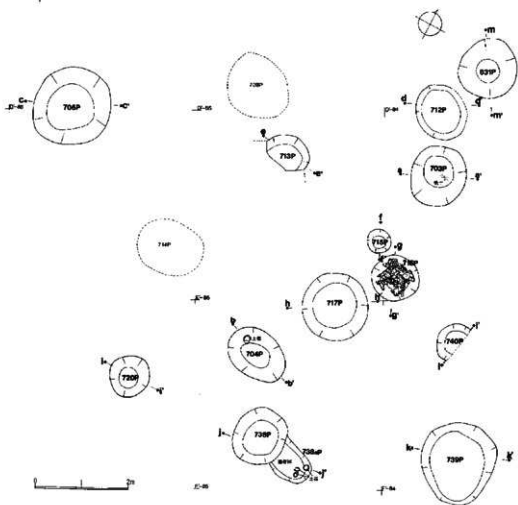
本ピットはD' 84, E' 84グリッドにまたがって位置する。表土を剥土した段階で暗褐色砂の落ち込みを確認した。規模は径約1.40mの円形を呈する。

詳細な時期は不明である。

## 遺物 (第151図-12~17, 第153図-6)

第151図-12・13は縄線文、14・15は無文、16は縄文、17は刺突文が施される。これらは縄文晩期中葉であろう。全て埋土出土。

石器は第153図-6の石器は有基石。黒曜石製である。埋土出土。(武田 修)



第154図 ビット703、704、706、712、713、715、716、717、720、738、738a、739、740、831平面図

## ピット 718

## 遺構 (第142図, 図版26-3, 図版27)

本ピットはC76グリッドに位置する。第Ⅱ層の茶褐色砂層の精査中に発見したもので、統縄文字津内Ⅱa式の土壇墓であるピット705の西側約0.70mにある。規模は径約1.10mの不整形を呈するが、東西がやや伸びる。壁は北壁が緩く傾斜する他はほぼ垂直の立ち上がりであり、壁高は確認面から約15~20cmである。埋土の暗褐色砂層を取り除くと粘性のある暗赤褐色土が現れた。ベンガラが散布された遺存体である。遺存体を検出中に南壁側から各種の石器が壁と縦列した状態で出土した。一部は遺存体の上に置かれている。南骨は東壁際であり、5cm程離れたところから琥珀玉が出土している。それぞれの琥珀玉の孔は一定の向きをもっているのが、首に巻かれているのではなく首の部分に置かれたものと判断できる。

床面精査中に径約8~10cm、深さ約2~5cmの小柱穴を南壁で3本、北壁で2本検出した。

## 遺物 (第155図, 図版28)

第155図-1~15は無茎石鏃。16は銚先であろう。17~22は両面加工ナイフ。21は上部が欠失しているものの他の5本同様に柄部が作出されていると思われる。23~32は琥珀の原石を利用した垂飾。33・34は滑石製の垂飾。35~38は埋土出土の無茎石鏃。床面出土の無茎石鏃と同一形態であり、本ピットに伴うのであろう。

## 小括

本ピットから土器は出土していないため正確な時期は不明であるが、床面の小柱穴と大型の琥珀玉をもつことから統縄文初頭の土壇墓と考えられる。字津内Ⅱa式の土壇墓は西頭位を基調としており、琥珀は平玉を主体とする。本例の様に大型の琥珀玉は多量にもたず、出土位置もピット400に代表されるとおり胸部付近が多い。本ピットは床面に小柱穴をもつなど字津内Ⅱa式の土壇墓と類似するものの頭位、琥珀玉の形態に差異がある。字津内Ⅱa式よりも古手の時期の可能性が考えられる。

(武田 修)

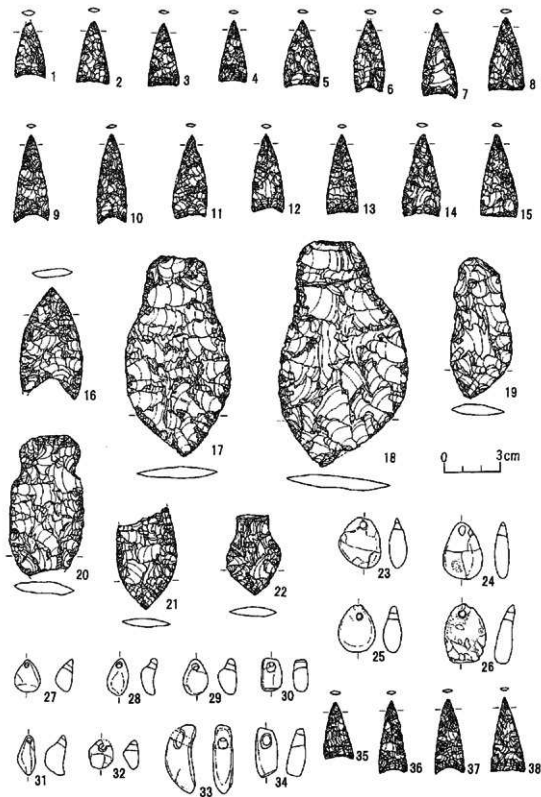
## ピット 719

## 遺構 (第194図, 図版29-1)

本ピットはF'86グリッドに位置する。第Ⅱ層の茶褐色砂を掘り下げ直後に確認したもので、東壁上部から第151図-18に示す土器がつぶれた状態で出土した。規模は直径約1.45mの円形を呈する。掘り込みは浅く皿状に立ち上がる。壁高は確認面から約10~20cmを測る。

## 遺物 (第151図-18, 図版29-2)

第151図-18は床面から15cmほど上部の東壁側から出土した。口径約17.0cm、器高約19.5cmの中型土器。口縁部に突縮文、縄線文と2個1対の小突起から降帯が垂下した統縄文字津内Ⅱ



第155図 ピット718床面(1~34)・埋土(35~38)出土石器・石製品・琥珀玉

a式。

### 小 括

ピット上部から統縄文字津内Ⅱa式土器が出土しておりこの時期と思われる。

(武田 修)

## ピ ッ ト 720

### 遺 構 (第154図)

本ピットはF'85グリッドに位置する。規模は直径約0.90mの円形を呈する。壁は床面から丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から約30cmを測る。東壁側から流れ込む黒褐色土には炭化粒が多量に混入する。

詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第157図-1~3)

第157図-1・2は縄端疋文が施される。縄文晩期中葉であろう。3は内側からの突瘤文と沈線文が施される。縄文後期。3点とも埋土出土。

(武田 修)

## ピ ッ ト 721

### 遺 構 (第194図)

本ピットはD'79グリッドに位置する。規模は直径約0.70mの円形を呈し、ピット721aの上部を僅かに切って構築されている。床面は小さく、壁は「V」字形に開く。高さは確認面から約22cmを測る。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 721a

### 遺 構 (第194図)

本ピットはF'79・80グリッドにまたがって位置する。ピット721とは北壁上部で僅かに重複する。規模は長軸約1.98m、短軸径約1.50mの楕円形を呈する。床面は起伏をもち、各壁は緩く立ち上がる。高さは確認面から約60cmを測る。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピット 722

### 遺構 (第156図, 図版29-4)

本ピットはA'78グリッドに位置する。規模は長軸約0.90m、短軸約0.70mの円形を呈する。掘り込みは極めて浅く確認面から約10~15cmである。南壁を除くほぼ全面に粘性のある暗茶褐色土が薄く堆積しており、東壁に接してベンガラが見られる。暗茶褐色土は遺存体と思われるもので、これを取り除くと北壁に直径約13cm、深さ4cm、西壁に直径10cmの小柱穴(黒色土)が内側に向かって短く延びており、柱材の可能性が考えられる。西壁の遺存体上部には第157図-4の土器が口縁部をやや内側に向けた状態で出土している。本ピットに伴うのであろう。

### 遺物 (第157図-4, 図版29-3)

第157図-4は口径12.0cm、器高14.0cmの小型土器。2個1対の大小の突起から2本の隆帯が垂下する。大突起には吊り耳があったと思われるが欠失する。内面には多量の煤が付着する。統縄文字津内Ⅱb式。

### 小括

本ピットは遺存体上部の土器から判断して統縄文字津内Ⅱb式の土壌墓と考えられる。

(武田 修)

## ピット 723

### 遺構 (第144図)

本ピットはD'80グリッドに位置する。規模は直径約0.95mの円形を呈する。壁は床面から弧状の丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から約39cmを測る。

詳細な時期は不明である。

### 遺物 (第157図-5, 第161図-1)

第157図-5は縄文が施され、口唇部に刻みをもつ。縄文晩期中葉であろう。埋土出土。

第161図-1は有蓋石罌。黒曜石製。埋土出土。

(武田 修)

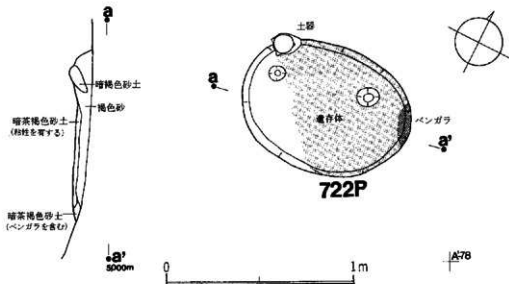
## ピット 724

### 遺構 (第144図)

本ピットはE'81, F'81グリッドにまたがって位置する。南壁側を72d号堅穴に切られるものの規模は直径約1.10mの円形を呈する。

詳細な時期は不明である。

### 遺物 (第157図-6)



第156図 ピット722平面図

第157図-6は縄文が施され、口唇部に刻みをもつ。縄文晩期中葉であろう。埋土出土。

(武田 修)

## ピット 724a

### 遺 構 (第144図)

本ピットはE' 81, F' 81グリッドにまたがって位置する。南壁側をピット724に切られるものの規模は直径約1.15m、短軸約0.85mの楕円形を呈する。壁は床面から墳口部にかけて大きく開き、高さは確認面から約30cmを測る。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピット 724b

### 遺 構 (第144図)

本ピットはE' 81, F' 81グリッドにまたがって位置する。北西壁側をピット724、南壁側を72d号堅穴に切られているため正確な規模・形態は不明である。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)



## ピット 725

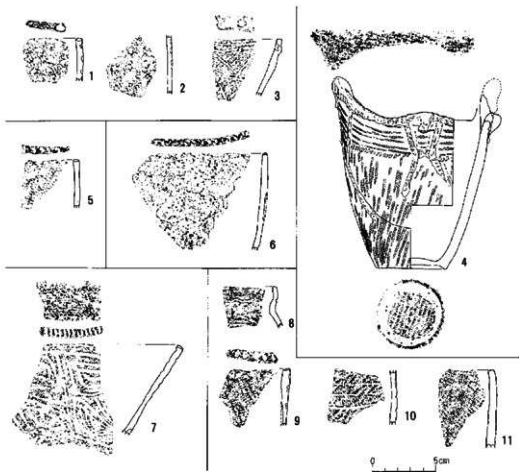
### 遺構 (第140図)

本ピットは G' 75, H' 75 グリッドにまたがって位置する。規模は直径約 1.00m の円形を呈する。埋上の各層には炭化粒や細い炭化材が混入する。壁は丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から約 30cm を測る。

詳細な時期は不明である。

### 遺物 (第157図-7)

第157図-7 は器面には幾可学的な曲線状の沈線文、内側には縄線文を横・斜位に施す。焼成は良い。縄文晩期中葉であろう。埋土出土。(武田 修)



第157図 ピット720埋上(1-3)、722床面(4)、723埋上(5)、724床面(6)、725埋上(7)、726埋土(8-11)出土土器

## ピ ッ ト 726

## 遺 構 (第199図)

本ピットはD'76グリッドに位置する。規模は直径約1.80mの円形を呈する。西壁側は比較的緩く立ち上がるものの、他の壁はほぼ垂直である。高さは確認面から約40cmを測る。埋土は概ね3層に分層され、角礫を多量に含む。ピットのほぼ中央部には有機質の痕跡と思われる暗茶褐色土が「V」字形に広がり、その端部から図示していないが縄文晩期の底部が出土した。

## 遺 物 (第157図-8~11, 第161図-2・3, 図版30-1・2)

第157図-8は口縁部が縮約した無文土器。輪贖み痕が残る。9は円形刺突文、10は横位・斜位の沈線文と短刻線、11は縄文が施される。これらは縄文晩期中葉であろう。埋土出土。

第161図-2・3は削器。黒曜石製。埋土出土。

## 小 括

本ピットは縄文晩期の土壌墓の可能性がある。

(武田 修)

## ピ ッ ト 727

## 遺 構 (第199図)

本ピットはF'75グリッドに位置する。規模は直径約0.95mの円形を呈する。床面中央部が約20cmと深く、壁に向かって皿状に浅く立ち上がる。埋土には炭化材と5~6cmの角礫を多量に含む。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 728

## 遺 構 (第194図)

本ピットはF'74グリッドに位置する。規模は直径約0.70mの円形を呈する。壁は緩く立ち上がり、壁高は確認面から16cmを測る。

(武田 修)

## ピ ッ ト 729

## 遺 構 (第194図)

本ピットはE'74グリッドに位置する。規模は長軸約1.05m、短軸約0.86mの楕円形を呈する。壁高は確認面から36cmを測る。

(武田 修)

## ピ ッ ト 730・730a

### 遺 構 (第194図)

ピット730はF'78グリッドに位置する。規模は西側が攪乱を受けているが長軸約1.30m、短軸約1.14mの楕円形を呈すると思われ、壁高は確認面から25cmを測る。

ピット730aはピット730の北側にある。人半が攪乱を受けているため規模、形態は不明である。壁高は確認面から30cmを測る。遺物は出土していない。(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 731

### 遺 構 (第194図)

本ピットはF'78グリッドに位置する。規模は径約0.70mの円形を呈する。壁高は確認面から14cmを測る。(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 732

### 遺 構 (第158図)

本ピットは91号堅穴の南西側に位置する。長軸は91号堅穴に切られて不明であるが短軸0.32mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から20cmを測る。

遺物は出土していない。(佐々木 覚)

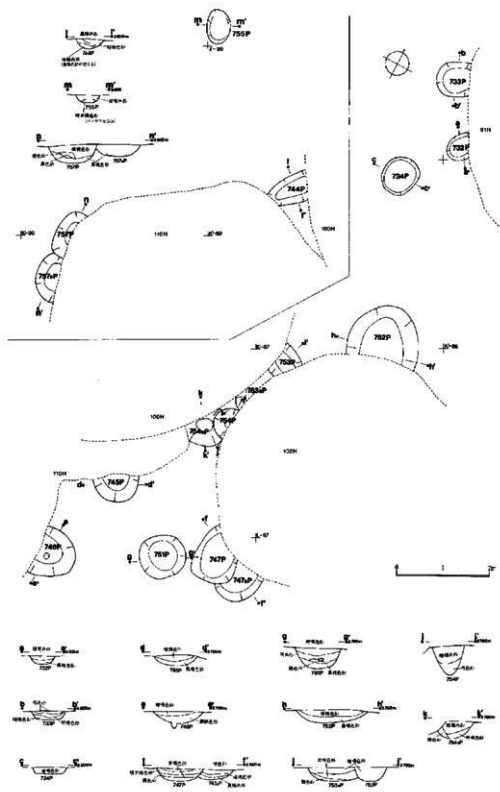
## ピ ッ ト 733

### 遺 構 (第158図)

本ピットは91号堅穴の西側に位置する。長軸は91号堅穴に切られて不明であるが短軸0.72mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から約20cmを測る。

### 遺 物 (第161図-4)

第161図-4は黒曜石製の刮器。(佐々木 覚)



第158図 ビット732、733、734、744、745、746、747、747a、751、752、753、753a、754、754a、755、757、757a平面図

## ピ ッ ト 734

### 遺 構 (第158図)

本ピットは91号竪穴の南西約1.10mに位置し、径約0.80mの円形を呈する。壁高は確認面から13cmと浅い。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 735

### 遺 構 (第163図)

本ピットは99号竪穴の東側に位置する。規模、形態ともに不明である。壁高は確認面から36cmを測る。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 736

### 遺 構 (第163図)

本ピットはI'90グリッドに位置する。長軸は攪乱を受け不明であるが短軸約0.84mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から20mを測る。

### 遺 物 (第161図-5, 図版30-3)

第161図-5は黒曜石製の両面加工ナイフ。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 737

### 遺 構 (第159図, 図版30-5)

本ピットはH'89グリッドに位置する。規模は長軸1.00m、短軸0.73mの楕円形を呈する。壁高は確認面から23cmを測り、緩やかに立ち上がる。埋土は黒褐色砂1層のみで、埋土上層から大きな礫が2個出土した。床面直上の西壁際から第160図-3の土器が出土し、中央付近の床面から1、南側の床面からは2の土器が出土している。遺存体は認められなかったが、西側の礫の下から歯骨が検出されている。

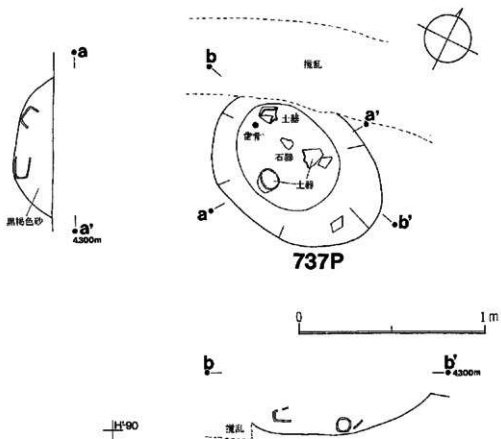
### 遺 物 (第160図-1~4, 第161図-6, 図版30-4・6・7)

第160図-1は床面出土の土器で、口径9.9cm、器高10.6cm。口縁部に大突起1個と小突起3個をもつ。大突起の向かい側の小突起1個は打ち欠かされている。胴部は縦位の縄文のみである。縄文文字津内Ⅱb式。2も床面出土で縄文文字津内式の底部。3は床面直上出土の縄文文字津内Ⅱb式。口径10.4cm、器高10.1cm。1対の大突起と小突起をもち、胴中央部の大きい4個の同心円文とその上下の小さい同心円文を施し隆帯で連結する。小突起の1個は打ち欠かされている。

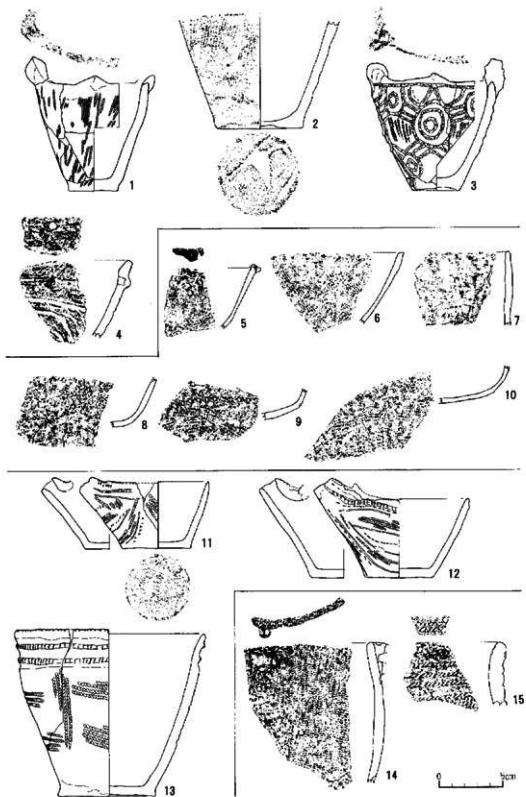
石器は第161図-6は黒曜石製の掻器。

### 小 括

本ビットに遺存体は検出されていないが歯骨が検出されていることから西頭位の上墳墓と考えられる。時期は統繩文字津内Ⅱb式期である。 (佐々木 覚)



第159図 ビット737P平面図



第160図 ビット737床面(1・2)・床面直上(3)・埋土(4)、738埋土(5~10)、738a床面直上(11~13)、739埋土(14・15)出土上器

## ピ ッ ト 738

## 遺 構 (第154図)

本ピットはF'84グリッドに位置し、規模は径約1.20mの不整円形を呈する。壁高は確認面から55cmを測る。埋土上層の黒褐色砂層には炭化粒が含まれている。

## 遺 物 (第160図-5~10)

第160図-5~10は埋土出土。全て縄文晩期。9は底部の周辺に縄端圧痕文を巡らす。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 738a

## 遺 構 (第154図, 図版31-1)

本ピットはピット738の東側にある。長軸はピット738に切られて不明であるが短軸0.70mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から10cmを測るが、本来はもっと深かったものと考えられる。床面には遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出され、床面直上からは第160図-11・12の注口土器2点と13の上器が出土している。

## 遺 物 (第160図-11~13, 図版31-2~4)

第160図-11~13は床面直上から出土。11・12はいずれも口唇部に擬縄隆帯を巡らし、胴部は隆起線文、縞縄文、三角形点状文列を施した統縄文後北C<sub>1</sub>・D式の注口土器。11は口径8.7cm、器高5.4cm。12は口径9.7cm、器高7.8cm。13も口唇部に刻みをもち、口縁部に2条の擬縄隆帯を巡らし、胴部に縞縄文を施した統縄文後北C<sub>1</sub>・D式。口径15.5cm、器高13.0cm。

## 小 括

本ピットは統縄文後北C<sub>1</sub>・D式の土墳墓であるが、頭位は不明である。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 739

## 遺 構 (第154図)

本ピットはF'83グリッドにあり、規模は径約1.85mの不整円形を呈し、壁高は確認面から27cmを測る。

## 遺 物 (第160図-14・15, 第161図-7)

第160図-14・15は統縄文初頭。

石器は第161図-7は黒曜石製の搔器。

(佐々木 寛)



## ピ ッ ト 740

### 遺 構 (第154図)

本ピットはD' 83グリッドにあるが、東側に攪乱を受けているため規模、形態ともに不明である。壁高は確認面から12cmと浅い。遺物は出土していない。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 741・741a

### 遺 構 (第163図)

ピット741は94a号堅穴の南東壁にある。規模は長軸約1.20m、短軸約0.75mの楕円形を呈し、壁高は確認面から約30cmを測る。

ピット741aはピット741の東側にあり、規模は径約0.60mの円形を呈する。壁高は94a号堅穴の床面から4cmと浅い皿状である。

### 遺 物 (第162図-1)

ピット741からは第162図-1の縄文晩期の土器が出土している。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 742

### 遺 構 (第163図)

本ピットはI' 89グリッドにある。規模は北側が攪乱によって破壊されているため不明である。壁高は確認面から約55cmを測る。ピットの床面の南側からは遺存体と思われる粘性をもった暗茶褐色砂が見られる。土墳墓と考えられるが時期は不明である。

### 遺 物 (第162図-2)

第162図-2は埋土出土の続縄文。(佐々木 寛)

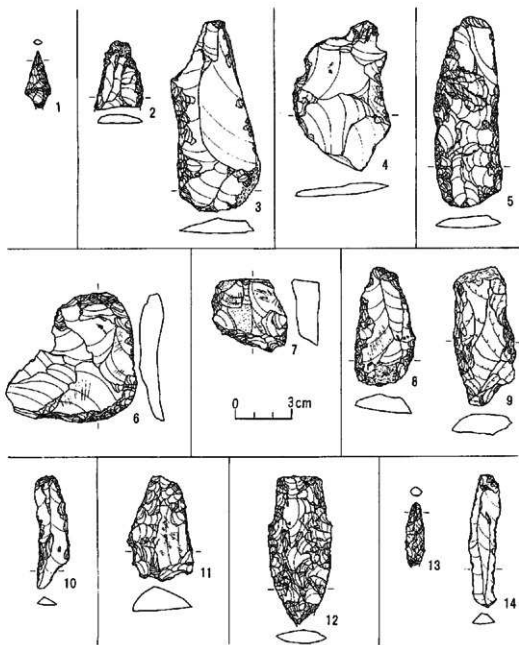
## ピ ッ ト 743

### 遺 構 (第163図)

本ピットはH' 89グリッドにある。規模は長軸0.64m、短軸0.52mの不整楕円形を呈し、壁高は約12cmを測る。ピット床面には遺存体と思われる粘性をもった暗茶褐色砂がみられる。土墳墓と考えられるが時期は不明である。

### 遺 物 (第162図-3)

第162図-3は埋土出土。内側からの突瘤をもつ縄文晩期前集。(佐々木 寛)



第161図 ビット723埋上(1)、726埋土(2・3)、733埋上(4)、736埋土(5)、737埋土(6)、739埋土(7)、746埋土(8・9)、747埋土(10)、749a埋土(11)、749b埋上(12)、750埋土(13・14)出土石器

## ピ ッ ト 744

### 遺 構 (第158図)

本ピットは100号堅穴と110号堅穴の間にあるピットで正確な規模は不明であるが、規模は短軸0.60mの長円形を呈すると思われる。壁高は確認面から約20cmを測る。

### 遺 物 (第162図-4)

第162図-4は埴土出土の縄線文をもつ縄文晩期。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 745

### 遺 構 (第158図)

本ピットは110号堅穴の張り出し部南側にあるピットで半分以上を110号堅穴に切られているため規模は不明である。壁高は確認面から22cmを測る。

### 遺 物 (第162図-5・6)

第162図-5・6は埴土出土の縄文後期。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 746

### 遺 構 (第158図)

本ピットは110号堅穴の東側にある。西側半分を110号堅穴に切られているため規模は不明である。壁高は確認面から約24cmを測る。床面に径12cm、深さ9cmの柱穴が1本検出されている。

### 遺 物 (第162図-7~11, 第161図-8・9)

第162図-7~10は縄文晩期中葉。7は縄線文と縄端圧痕文、8は縄線文、9・10は円形刺突文、11は突瘤文をもつ縄文後期堂林式。全て埴土出土。

石器は第161図-8・9が刮器。8は黒曜石製。9は玄武岩製。埴土出土。

(佐々木 寛)

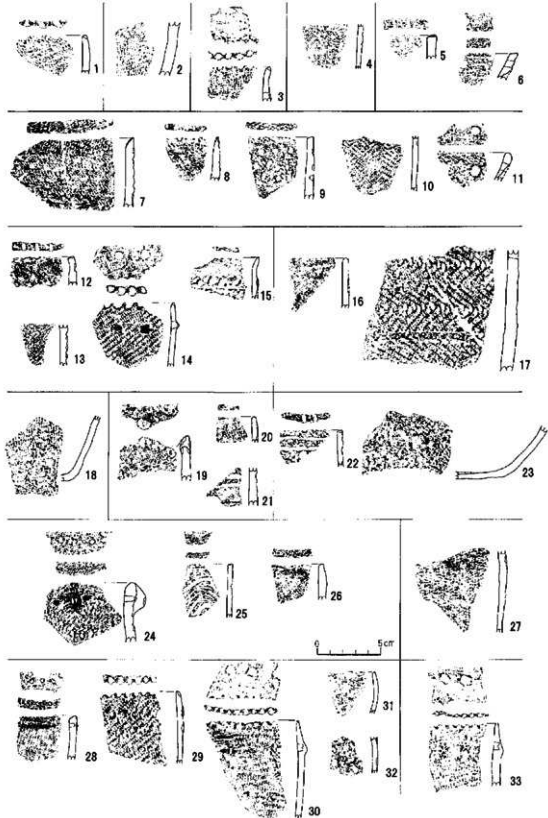
## ピ ッ ト 747

### 遺 構 (第158図)

本ピットは102号堅穴の南側にあり、規模は不明であるが楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から28cmを測る。

### 遺 物 (第162図-12~15, 第161図-10)

第162図-12・13は縄端圧痕文をもつ縄文晩期中葉。14・15は縄文晩期前葉。14は突瘤文、15



第162圖 ビット741埋土(1)、742埋土(2)、743埋土(3)、744埋土(4)、745埋土(5・6)、746埋土(7～11)、747埋土(12～15)、747a埋土(16・17)、748埋土(18)、749埋土(19～21)、749b埋土(22・23)、752埋土(24～26)、753埋土(27)、753a埋土(28～32)、754埋土(33)出土上器

は爪形文をもつ。

石器は第161図-10は黒曜石製の削器。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 747a

遺 構 (第158図)

本ピットはピット747の東側に検出された。規模は不明である。壁高は、確認面から20cmを測る。

遺 物 (第162図-16・17)

第162図-16は縄文晩期。17は縄文中期。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 748

遺 構 (第163図)

本ピットは95号竪穴の東側にある。規模は不明である。壁高は確認面から28cmを測る。

遺 物 (第162図-18)

第162図-18は埴土出土の縄文晩期。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 749・749a

遺 構 (第163図)

ピット749は95号竪穴の北東側にある、95号竪穴によって破壊を受けているが、形態は楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から24cmを測る。

ピット749aはピット749の北西側にあるが、規模は不明である。壁高は確認面から約10cmと浅いピットである。

遺 物 (第162図-19~21, 第161図-11)

ピット749の埋土から第162図-19~21が出土。19・20は縄文晩期。21は縄文後期。

ピット749aの埋土からは第161図-11が黒曜石製の削器。

(佐々木 寛)

## ビット 749b・749c

## 遺構 (第163図)

ビット749bはビット749の南東側にある。規模は不明であるが形態は楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から22cmを測る。

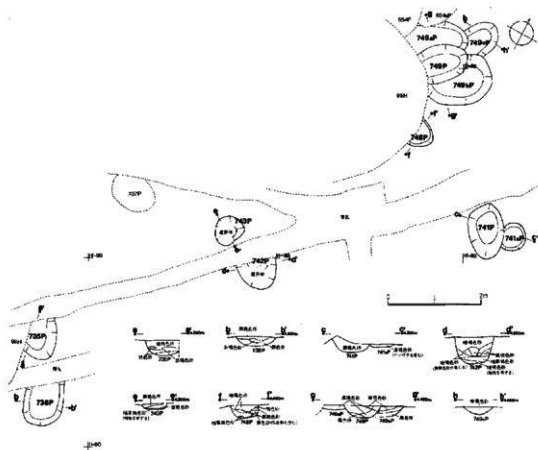
ビット749cはビット749bの北側にある。長軸は不明であるが、短軸66cmの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から15cmと浅い。

## 遺物 (第162図-22・23, 第161図-12, 図版32-1)

ビット749bの埋土から第162図-22・23が縄文後期。

石器は第161図-12は黒曜石製の両面加工ナイフ。

(佐々木 寛)



第163図 ビット735、736、741、741a、742、743、748、749、749a、749b、749c平面図

## ピ ッ ト 750

### 遺 構 (第165図)

本ピットは114a号竪穴の床面精査中に発見した。規模は長軸1.00m、短軸0.88mの楕円形を呈する。壁高は確認面から25cmを測る。床面には径12cm、深さ18cmの柱穴が検出された。

### 遺 物 (第161図-13・14)

第161図-13は石鏃。14は削器。いずれも黒曜石製。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 751

### 遺 構 (第158図)

本ピットはM' 87グリッドにある。規模は径約1.00mの円形を呈する。壁高は確認面から約40cmを測る。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 752

### 遺 構 (第158図)

本ピットは102号竪穴の北側に位置するが、規模は不明である。壁高は確認面から27cmを測る。

### 遺 物 (第162図-24~26, 第167図-1~5, 図版32-2~16)

埋土から第162図-24は統縄文字津内Ⅱa式。25・26は縄文晩期。

石器は第167図-1・2は石鏃。3・4は削器。5は石皿。1はメノウ製、5は砂岩製、それ以外は黒曜石製。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 753

### 遺 構 (第158図)

本ピットは100号竪穴と102号竪穴の間にあるが、規模は不明である。壁高は確認面から28cmを測る。

### 遺 物 (第162図-27, 第167図-6・7)

第162図-27は埴土出土の統縄文。

石器は第167図-6は黒曜石製の石鏃。7は玄武岩製の搔器。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 753a

## 遺 構 (第158図)

本ピットも100号堅穴と102号堅穴の間にあり、規模は不明である。壁高は確認面から26cmを測る。

## 遺 物 (第162図-28~32)

埋土から第162図-28は縄文文字津内Ⅱa式。29~32は縄文晩期。29は爪形文。30は内側の斜め方向からの突瘤文。  
(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 754

## 遺 構 (第158図)

本ピットは102号堅穴の西側にあるが、規模は径約0.70mの円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から60cmを測る。

## 遺 物 (第162図-33, 第167図-8, 図版32-7)

第162図-33は埋土出土の縄文晩期前葉。内側の斜め方向からの突瘤文をもつ。

石器は第167図-8は黒曜石製の石鏃。  
(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 754a

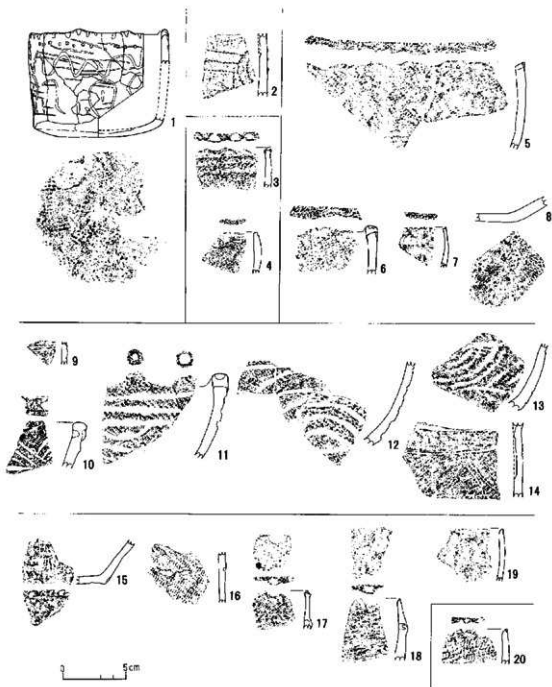
## 遺 構 (第158図)

本ピットはピット754と100号堅穴の間にあるが、規模は不明である。壁高は確認面から36cmを測る。

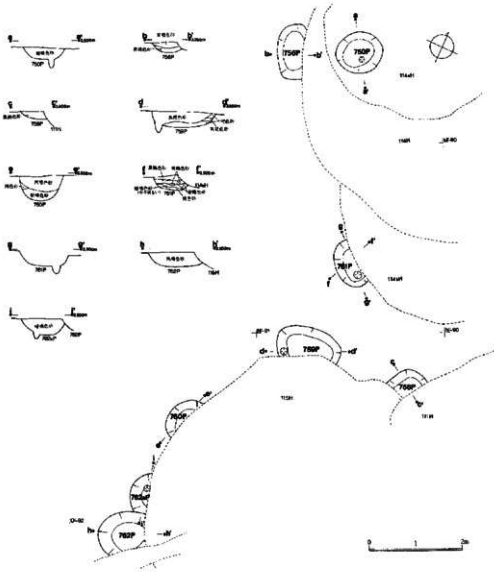
## 遺 物 (第164図-1, 図版32-8)

第164図-1は横走する沈線と波状沈線を巡らし、口縁部下に円形刺突文を施す。口径11.2cm、器高8.2cm。縄文晩期常舞式。埋土出土。  
(佐々木 寛)





第164図 ビット754a埋土(1)、756埋土(2)、757埋土(3・4)、757a埋土(5~8)、759埋土(9~14)、760埋土(15~19)、761埋土(20)出土土器



第165図 ビット750、756、758、759、760、761、762、762a 平面図

## ピット 755

### 遺構 (第158図)

本ピットはJ 88グリッドに位置する。規模は長軸約0.70m、短軸約0.49mの楕円形を呈する。床面には遺存体と思われるベンガラを含んだ暗赤褐色砂が認められる。壁高は確認面から約20cmを測る。

土壌墓と思われるが詳細な時期は不明である。(武田 修)

## ピット 756

### 遺構 (第165図)

本ピットは114号堅穴の西側に検出された。規模は長軸約1.18m、短軸約0.75mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から20cmを測る。

### 遺物 (第164図-2, 第167図-9・10, 図版32-9・10)

第164図-2は埋土出土の統縄文字津内Ⅱb式。

石器は第167図-9・10が黒曜石製の削器。(佐々木 寛)

## ピット 757

### 遺構 (第158図)

本ピットは110号堅穴の西側にあるが、規模は不明である。壁高は確認面から37cmを測る。

### 遺物 (第164図-3・4)

第164図-3・4は縄線文をもつ縄文晩期中葉。(佐々木 寛)

## ピット 757a

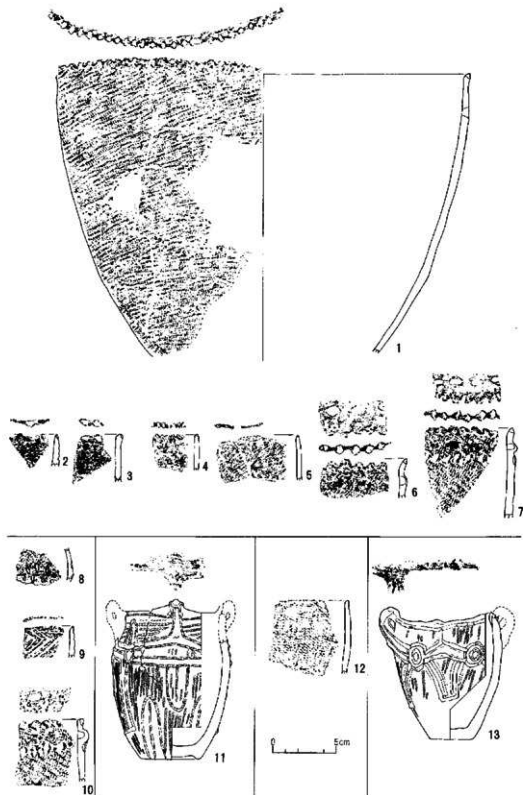
### 遺構 (第158図)

本ピットはピット757の南側にあるが、規模は不明である。壁高は確認面から22cmを測る。

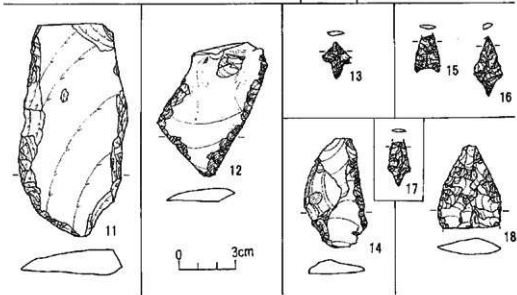
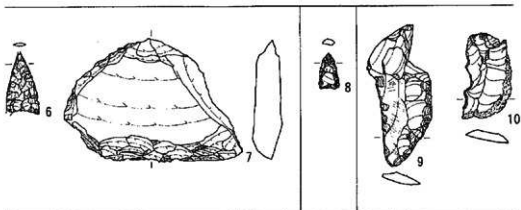
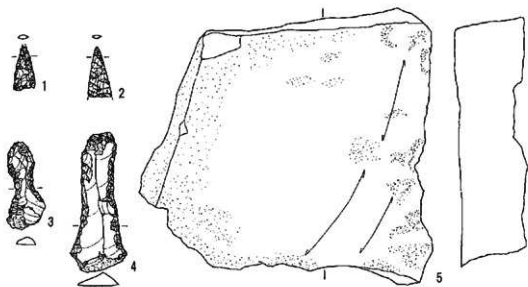
### 遺物 (第164図-5~8, 第167図-11)

第164図-5~8は埋土出土の縄文晩期。8は底部。

石器は第167図-11が玄武岩製の削器。(佐々木 寛)



第166圖 ビット762埋土(1~7)、762a埋土(8~10)、764埋土(11)、765埋土(12)、766遺体上(13)出土土器



第167圖 ビット752埋土(1~5)、753埋土(6・7)、754埋土(8)、756埋土(9・10)、757a埋土(11)、760埋土(12)、762埋土(13)、767埋土(14)、772埋土(15・16)、775床面(17)、779埋土(18)出土石器

## ピ ッ ト 758

## 遺 構 (第165図)

本ピットは115号堅穴の北側にあるが、規模は不明である。壁高は確認面から15cmと浅い。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 759

## 遺 構 (第165図)

本ピットは115号堅穴の北側に検出された。短軸は不明であるが、長軸は1.40mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から約30cmを測る。床面の西側には径16cm、深さ15cmの柱穴が1本検出された。

## 遺 物 (第164図-9~14)

第164図-9は沈線文をもつ縄文晩期。10~14は縄文後期。10は堂林式。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 760

## 遺 構 (第165図)

本ピットは115号堅穴の西側に検出され、規模は径約1.10mの円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から50cmを測る。

## 遺 物 (第164図-15~19, 第167図-12, 図版32-11)

第164図-15~19は埋土出土。いずれも縄文晩期。17・18は内側の斜め方向からの突瘤文をもつ。

石器は第167図-12が黒曜石製の刮器。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 761

## 遺 構 (第165図)

本ピットは114b号堅穴の南西側にあり、短軸は不明であるが長軸は1.02mの楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から約30cmを測る。床面の南東側からは径16cm、深さ16cmの柱穴が検出されている。

## 遺 物 (第164図-20)

第164図-20は埋土出土の縄文晩期 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 762

### 遺 構 (第165図)

本ピットは115号竪穴の南西側に検出された。規模は不明であるが、壁高は確認面から30cmを測る。

### 遺 物 (第166図-1~7, 第167図-13, 図版32-12)

第166図-1~7は埋土出土の縄文晩期。6・7は内側の斜め方向からの突瘤文をもつ。

石器は第167図-13が黒曜石製の石鏃。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 762a

### 遺 構 (第165図)

本ピットはピット762の北側にあるが、規模は不明である。壁高は確認面から34cmを測る。

ピットの床面の西側には径14cm、深さ12cmの柱穴が検出されている。

### 遺 物 (第166図-8~10)

第166図-8~10は埋土出土の縄文晩期。8は縄端庄痕文。9は沈線文。10は爪形文と内側の斜め方向からの突瘤文をもつ。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 763

### 遺 構 (第24図)

本ピットは118号竪穴の西側に検出され、東側の半分以上が118号竪穴に切られているため規模は不明であるが、壁高は18cmを測る。

遺物は出土していない。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 764

### 遺 構 (第214図)

本ピットはH'94グリッドに位置する。規模は長軸0.84m、短軸0.57mの不整形円形を呈し、壁高は確認面から16cmを測る。ピットの南西側上面からは第166図-11の土器が出土している。床面からは遺存体は検出されていない。

## 遺 物 (第166図-11, 図版33-1)

第166図-11は埋土出土の土器で口径8.50cm、器高12.6cm。口縁部に吊り耳を1対もち、縄線文を巡らす。胴部に同心円文を施し、隆帯で連結されている。縄文文字津内Ⅱb式。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 765

## 遺 構 (第13図)

本ピットは123a号堅穴の北東壁に検出され、短軸は不明であるが長軸約1.24mの長円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から42cmを測る。

## 遺 物 (第166図-12)

第166図-12は埋土出土の縄文晩期。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 766

## 遺 構 (第168図, 図版33-2)

本ピットは1'93グリッドにあり北西側の一部に攪乱を受けているが、規模は長軸約0.91m短軸約0.57mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から13cmを測る。床面からは遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められその上から第166図-13の土器が出土している。

## 遺 物 (第166図-13, 図版33-3)

第166図-13は遺体上から出土した土器で口径8.5cm、器高10.2cm。口縁部に1対の吊り耳と小突起をもつ。吊り耳と小突起の間の下には同心円文を施し、隆帯で連結している。縄文文字津内Ⅱb式。

## 小 括

本ピットは床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出されていることから土壌墓と考えられるが、頭位は不明である。時期は縄文文字津内Ⅱb式期である。

(佐々木 寛)

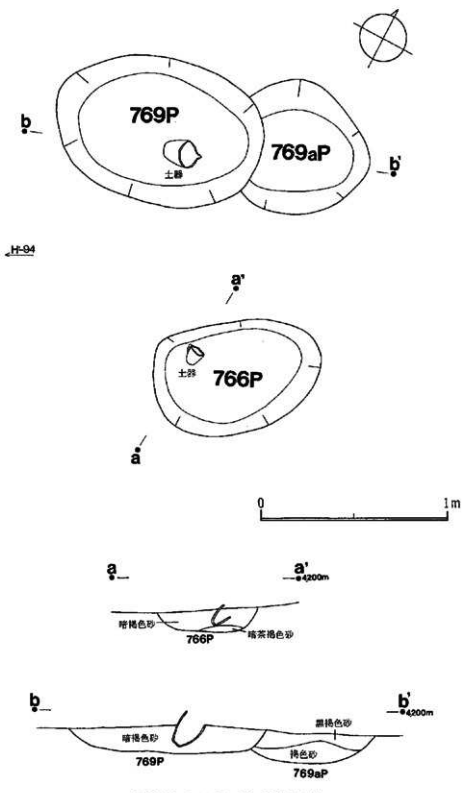
## ピ ッ ト 767

## 遺 構 (第13図)

本ピットは123号堅穴の東壁にあり、規模は不明であるが、壁高は確認面から32cm測る。

## 遺 物 (第169図-1, 第167図-14)





第168図 ビット766、769、769aP 平面図

第169図-1は埋土出土。内側の斜め方向から突瘤文をもつ縄文晩期前葉。

石器は第167図-14は黒曜石製の削器。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 768

### 遺 構 (第13図)

本ピットは123a号竪穴の床面精査中に検出され、規模は長軸約0.88m、短軸約0.82mの不整円形を呈する。壁高は123a号竪穴床面から14cmを測る。

遺物は出土していない。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 769

### 遺 構 (第168図, 図版33-4)

本ピットはH<sup>1</sup> 93グリッドにあり、規模は長軸約1.13m、短軸約0.77mの楕円形を呈し、壁高は14cmを測る。ピット中央から多少東側よりに第169図-2の土器が出土している。埋土は暗褐色砂1層のみで床面から遺存体は検出されていない。

### 遺 物 (第169図-2・3, 図版33-5)

第169図-2は床面直上から出土。口径14.0cm、器高17.2cm。口縁部に吊り耳と小突起を各1対もち、縄線文を巡らす。吊り耳と小突起の下に同心円文を施し、隆帯で連結し、同心円文の下にも隆帯を垂下させる。縄文文字津内Ⅱb式。3は縄文文。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 769a

### 遺 構 (第168図)

本ピットはピット769の東側にあり、規模は径約0.70mの不整円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から16cmを測る。

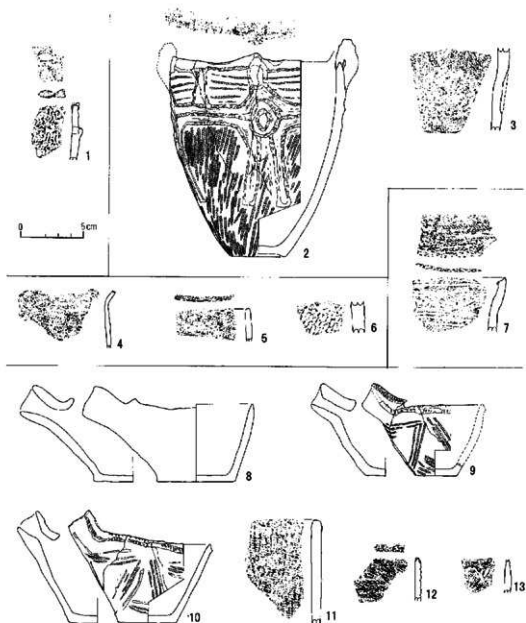
遺物は出土していない。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 770

### 遺 構 (第13図)

本ピットは123a号竪穴の床面に検出され、規模は長軸約1.55m、短軸約1.20mの楕円形を呈する。壁高は確認面から26cmを測る。ピット北側の床面から径14cm、深さ15cmの柱穴が1本



第169図 ビット767埋土(1)、769床面直上(2)・埋土(3)、770埋土(4~6)、771埋土(7)、772埋土(8~13)出土土器

検出されている。

#### 遺物 (第169図-4~6)

第169図-4・5は縄文晩期。6は縄文中期。

(佐々木 寛)

## ピット 771

#### 遺構 (第13図)

本ピットは123a号竪穴の床面に検出され、規模は径約0.35mの円形を呈する。壁高は確認面から32cmを測る。

#### 遺物 (第169図-7)

第169図-7は沈線を施された縄文初頭。

(佐々木 寛)

## ピット 772

#### 遺構 (第170図, 図版34-1)

本ピットは127号竪穴の埋土中に構築されたピットであるが、同竪穴の床面精査中に検出された。規模は長軸約1.70m、短軸約1.40mの楕円形を呈する。壁高は同竪穴床面から35cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。ピット上面から第169図-8~10の注口土器3点と礎が出土している。床面から遺存体と思われる粘性をもった暗茶褐色砂が検出された。遺存体の周辺から遺物は確認されなかった。遺存体上層の褐色砂層中に炭化粒が認められた。

#### 遺物 (第169図-8~13, 第167図-15・16, 図版34-2~4)

第169図-8~10は縄文後北C<sub>1</sub>・D式の注口土器である。8は無文。口径10.2cm、器高6.0cm。9は口縁部に擬縄隆帯を巡らし、胴部には縄文を施す。口径7.0cm、器高5.5cm。10は口縁部に擬縄隆帯を巡らし、胴部は隆起線文と縄文を施す。口径8.8cm器高6.5cm。11は縄文初頭。12・13は縄線文をもつ縄文晩期中葉。

石器は第167図-15が無茎石鏃。16は有茎石鏃。いずれも黒曜石製。

#### 小括

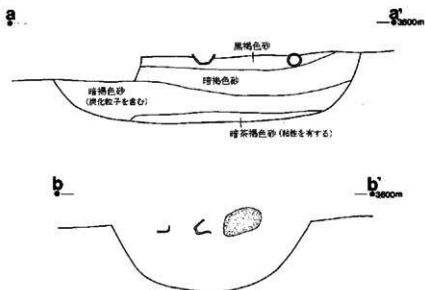
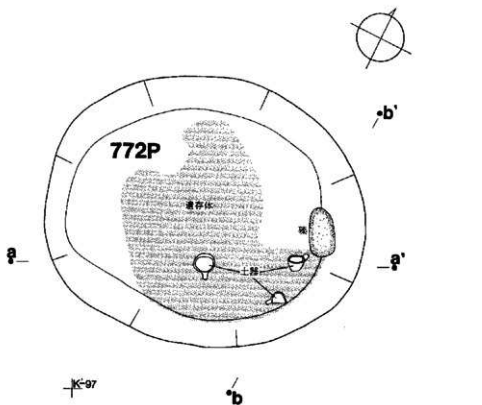
本ピットは127号竪穴の埋土中に構築された縄文後北C<sub>1</sub>・D式期の土壇である。

(佐々木 寛)

## ピット 773

#### 遺構 (第53図)

本ピットは128a号竪穴の床面精査中に検出されたピットである。規模は長軸約0.87m、短



第170図 ピット772平面図

軸約0.65mの楕円形を呈し、壁高は同整穴床面から13cmを測る。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 774

### 遺 構 (第53図)

本ピットは128号整穴床面精査中に検出された。規模は長軸約0.80m、短軸約0.60mの不整楕円形を呈し、壁高は同整穴床面から7cmと浅い。

遺物は出土していない。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 775

### 遺 構 (第13図)

本ピットはJ'94グリッド枕の下部に位置する。規模は長軸約0.94m、短軸約0.60mの不整楕円形を呈する。壁高は確認面から約12cmを測る。床面のほぼ全面に遺存体であるベンガラ混じりの赤褐色砂が認められた。遺存体に粘性はなく、南壁側で骨片を検出した。中央部よりやや北側寄りに径15cm程の角礫をもつ。

### 遺 物 (第167図-17)

石器は第167図-17は床面出土の黒曜石製の有茎石鏃。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 776

### 遺 構 (第214図)

本ピットはH'94グリッドにあり、規模は長軸約0.95m、短軸約0.80mの楕円形を呈する。壁高は確認面から20cmを測る。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 777

### 遺 構 (第214図)

本ピットはH'94グリッドにあり、規模は径約0.80mの円形を呈するが、北東壁が一部攪乱を受けている。壁高は確認面から30cmを測る。埋土中から礫が4点検出された。

### 遺 物 (第171図-1~6)

第171図-1~5は縄文晩期。6は縄文後期堂林式。埋土出土。

(佐々木 寛)

## ピット 778

### 遺構 (第214図)

本ピットはH'94グリッドにあり、規模は長軸約1.20m、短軸約0.96mの楕円形を呈する。壁高は確認面から38cmを測る。一部に攪乱を受けており、埋土中から礫が1点検出された。

### 遺物 (第171図-7)

第171図-7は埋土出土。縄文後期常林式。

(佐々木 寛)

## ピット 779

### 遺構 (第214図)

本ピットはH'94グリッドにあり、規模は長軸約1.60m、短軸約1.37mの楕円形を呈する。壁高は確認面から40cmを測る。

### 遺物 (第171図-8~14, 第167図-18)

埋土からは第171図-8は統縄文。9は統縄文字津内式。10・11は統縄文初頭。12~14は縄文晩期。

石器は第167図-18は黒曜石製のナイフ。

(佐々木 寛)

## ピット 780

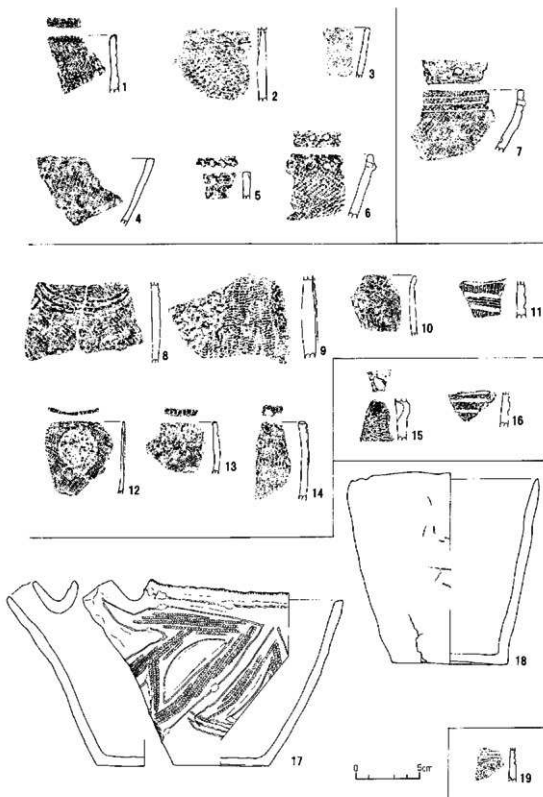
### 遺構 (第214図)

本ピットはH'94グリッドにあり、ピット776に接している。規模は長軸約1.40m、短軸約1.00mの楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から32cmを測る。床面からは遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出された。埋土から礫が4点出土している。遺存体の周辺から遺物は検出されなかった。

### 遺物 (第171図-15・16)

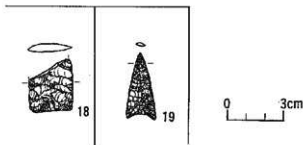
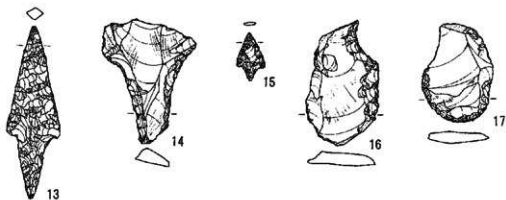
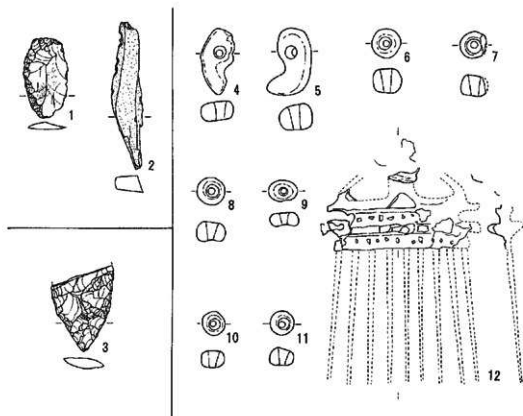
第171図-15は内側の斜め方向から突瘤文をもつ縄文晩期後葉。16は縄文後期。

(佐々木 寛)



第171図 ビット777埋土(1~6)、778埋土(7)、779埋土(8~14)、780埋土(15・16)、781床  
面直上(17・18)、781a埋土(19)出土土器





第172図 ビット781埋土(1・2)、781a埋土(3)、782遺体上(4~12)、783床面(13・14)・埋土(15~17)、784埋土(18)、785埋土(19)出土石器・勾玉・石製品・漆製品

## ピット 781

## 遺構 (第221図, 図版35-1)

本ピットはG'93グリッドにあり、規模は長軸1.10m、短軸約0.60mの楕円形を呈する。壁高は確認面から23cmを測り、壁は斜めに立ち上がる。埋土は黒褐色砂層1層で床面直上から第171図-17の注口土器と18の土器が出土している。床面から遺存体は認められない。

## 遺物 (第171図-17・18, 第172図-1・2, 図版35-2・3)

第171図-17は床面直上から出土した注口土器。口径16.0cm、器高14.0cm口唇部に刻みをもち、口縁部に擬縄隆帯を巡らし、胴部に隆起線文と縄縄文を施す。縄縄文後北C<sub>1</sub>・D式。

18も床面直上から出土した無文の縄縄文後北式土器。口径15.4cm、器高15.1cm。

石器は第172図-1は削器。2は棒状原石。いずれも黒曜石製。 (佐々木 寛)

## ピット 781a

## 遺構 (第222図)

本ピットはピット781の西側に検出された。規模は長軸約2.14m、短軸1.70mの楕円形を呈し、壁高は確認面から15cmと浅く、壁は緩やかに立ち上がる。

## 遺物 (第171図-19, 第172図-3)

第171図-19は埋土出土の縄文晚期。

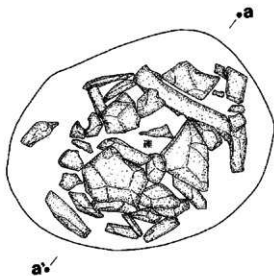
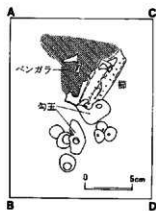
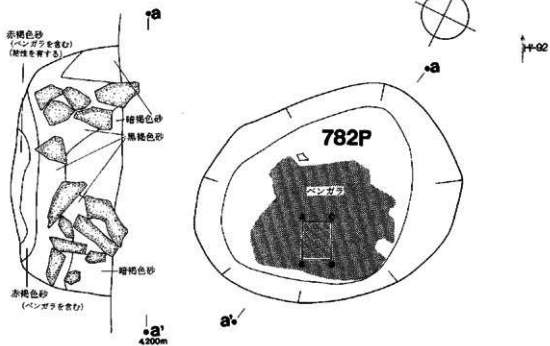
石器は第172図-3は良岩製の両面加工ナイフ。 (佐々木 寛)

## ピット 782

## 遺構 (第173図, 図版36-1)

本ピットはI'92グリッドに検出された。規模は長軸約1.43m、短軸約1.07mの楕円形を呈し、壁高は確認面から58cmを測る。確認面に礫がみえていたが、埋土の暗褐色砂層を剥土すると大型の角礫が多数検出された。角礫は暗褐色砂層下の黒褐色砂層まで入っている。これらの礫はピット上面に配石されたものがピット埋土の陥没によって入ったものか、また最初からピットの埋土中に入れたものかははっきりしないが、礫の出土状態をみると最初から埋土中に入れたものと考えられる。黒褐色砂の下に床面にはベンガラを多量に含んだ赤褐色砂層を剥土していると遺体が糊状になった遺存体が見られた。遺存体もベンガラのため赤く染まっており、その上から薄緑色の翡翠製の勾玉2点第172図-4・5と同じく翡翠製の玉6点、6~11が出土している。また、翡翠製の勾玉の下からは遺存体と同じように赤彩された櫛と思われる漆製品の一部12が検出された。遺存体の中からは歯骨が検出されていないため頭位は不明である。

常呂川河口遺跡



第173圖 ビット782平面図

## 遺 物 (第172図-4~12, 図版36-2~10)

第172図-4・5は翡翠製の勾玉。6~11は翡翠製の玉。12は櫛と思われる漆製品。

## 小 括

本ピットの長軸は北東-南西方向である。床面からベンガラと遺存体が検出されていることから土壌墓であるが、頭位は不明である。時期はピット内から土器は出土していないが遺体上から翡翠が出土していることや埋土中に多数の櫛が認められていることから縄文晩期幣舞式期と考えられる。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 783

## 遺 構 (第174図, 図版37, 図版38-1)

本ピットはG92グリッドに位置する。上面に大型の角礫16点がピットの周辺を囲むように配置されている。配石の西側からは第176図~第179図に示す縄文晩期の土器が出土している。ピットの規模は径約0.85mの円形を呈する。壁高はほぼ垂直に立ち上がり、確認面から約90cmを測る非常に深いピットである。ピットの最上層の暗褐色砂層中からは第175図-3の土器が一括出土している。床面には遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出された。床面の南西側から1の土器が遺存体に接して出土している。北東側の床面直上からは2の土器が出土しており、上器の下から土器が2点検出され、さらに石器の下からは黒曜石のフレイクが1点検出されている。

## 遺 物 (第175図, 第176図, 第177図, 第178図, 第179図, 第172図-13~17, 図版38-2~8, 図版39-1~13)

第175図-1は床面から出土。口径10.0cm、器高13.7cmで上面観は隅丸の長方形を呈する。4つの角にはそれぞれ突起をもち、突起の下には小孔を穿つ。小孔はいずれも内側から穿孔されている。口唇部には刻みをもつ。胴部は2本の横走する太い沈線で3つに区画され、それぞれ細い横走する沈線と太い曲線が施される。2は床面直上から出土。口径11.3cm、器高13.8cm。上面観は多少楕円形を呈し、長軸上の両側に3個1対の突起があり、中央の突起が大きい。大きな突起から隆帯が垂下し、隆帯の両側に小孔を穿つ。小孔は内側から穿孔されている。短軸上にも3個1対の小突起をもつ。口唇部は1条縄線文を巡らし、口縁部には3条の縄線文を施す。胴部は中央部がわずかにくびれており、地紋の縄文が施文されているのみである。いずれも縄文晩期幣舞式である。埋土からは3が一括出土した縄文晩期の底部。

第176図-1は口径約46cm、器高約42.5cmの特大土器。底部から口縁部にかけて大きく開いた深鉢である。口縁部は一部、欠失するが5個の台状突起をもつ。本来は6個有していたと思われる。8条の縄線文に円形文を施し、胴部とは鋸歯状の沈線文で区画する。

第177図-1は口径約42cm、器高約40.0cmの特大土器。第176-1の土器ほどでないが口縁部

が開いた深鉢である。現存7個の小突起から縦位の隆帯が垂下し、刺突文が加えられる。文様は縦位の沈線文状に横位の沈線文を主体に鋸歯状・円形文を施す。

第178図-1は口径約37cmの大形土器。底部は欠失する。口縁部には横位の擦痕状沈線文に渦巻き文を施す。

第179図-1は口径約45.5cmの特大土器。台状突起から2本の隆帯が垂下する。口縁部は横位の擦痕状沈線文に横位・波状沈線文が施される。2は口径約29cmの中形土器。口縁部に2個1対の小突起をもつ。口縁部には波状、短沈線のほか曲線的な幾何学文様を施し、円形刺突文を加える。

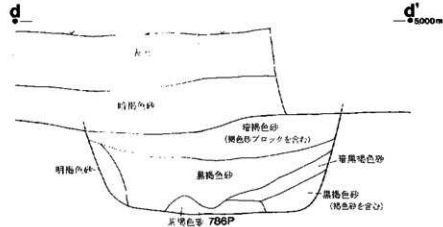
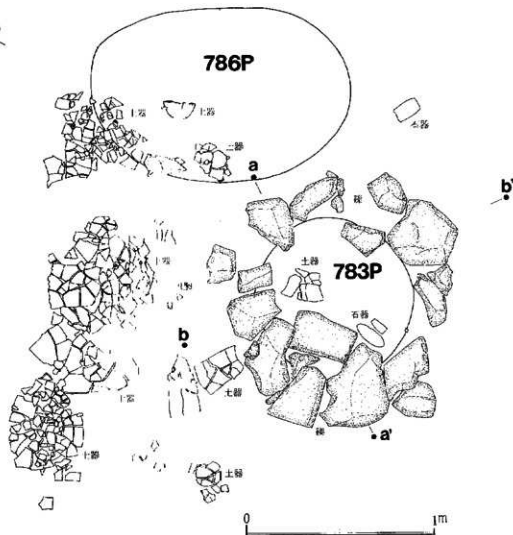
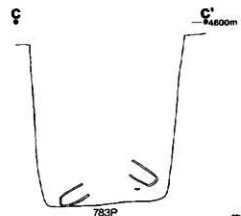
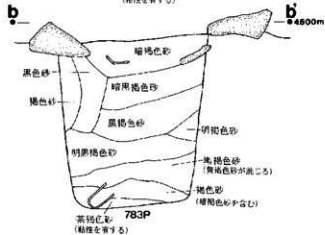
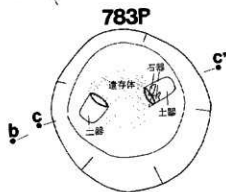
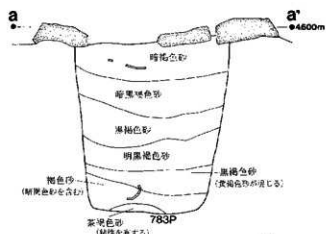
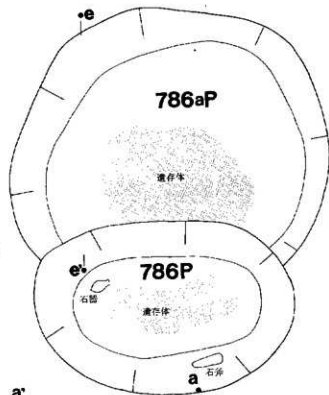
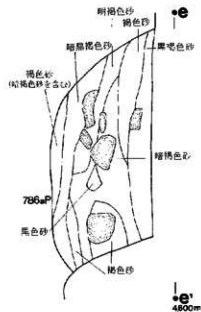
第176図から第179図に示した土器は縄文晩期幣舞式である。

石器は第172図-13は石槍、14は削器。床面出土。埋土からは15が有茎石鏃、16は削器、17は接器、いずれも黒曜石製。

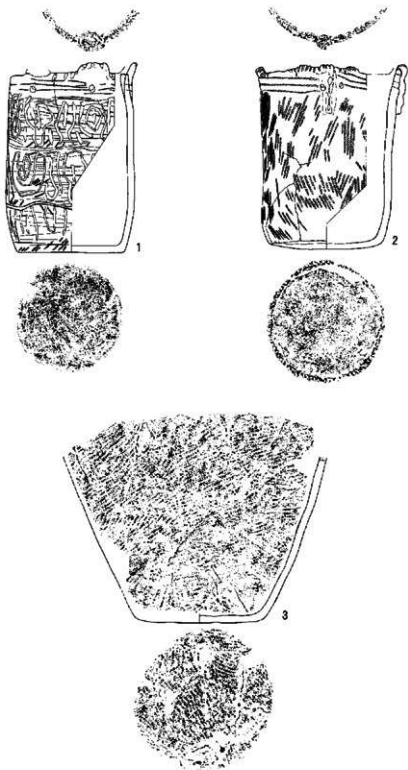
### 小 括

本ピットは縄文晩期幣舞式の土壌墓である。ピット上面に大型の角礫が16点ピットの周辺を囲むように配置されていることから配石墓と考えられる。 (佐々木 寛)

常呂川河口遺跡

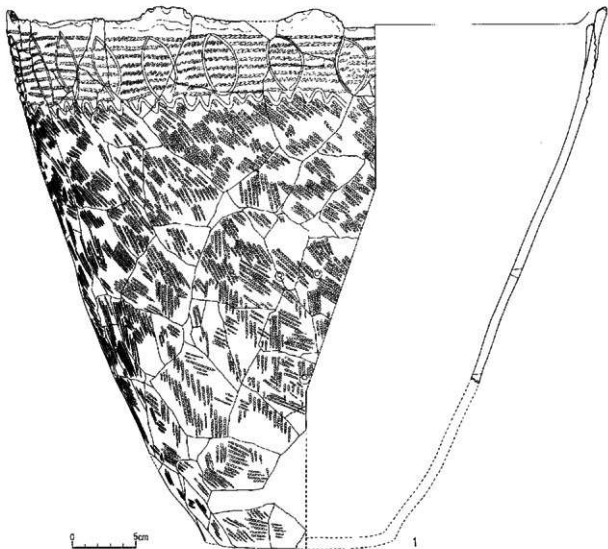


第174図 ヒット783, 786, 786a 平面図



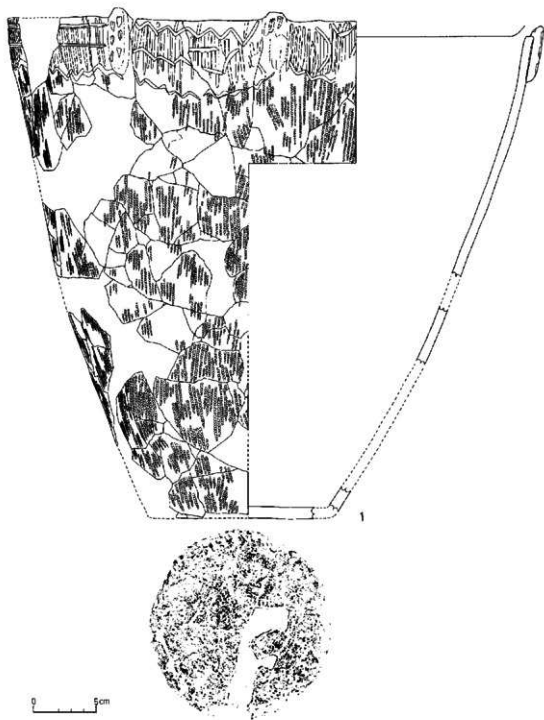
0 5cm

第175圖 ピット783床面(1)・床面直上(2)・埋土(3)出土土器

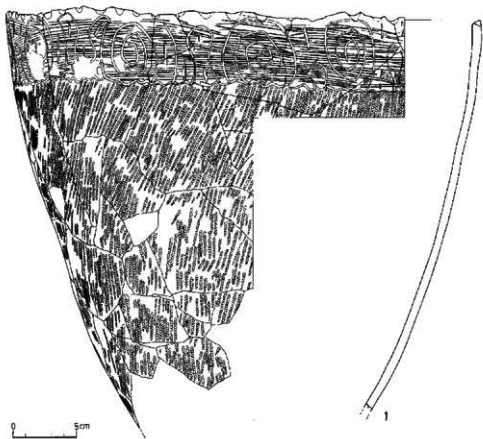


第176圖 ビット783周辺(1)出土土器

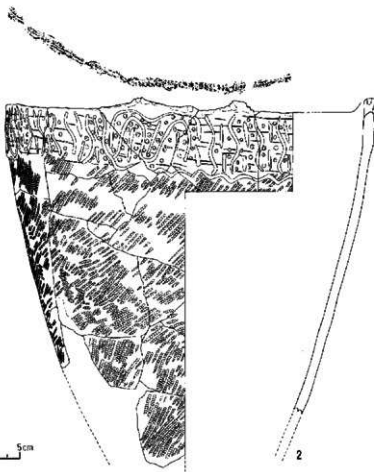
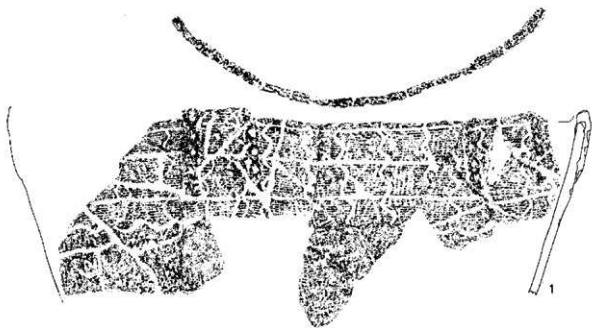




第177図 ビット783周辺(1)出土土器



第178図 ビット783周辺(1)出土土器



第179図 ビット783周辺(1・2)出上上器

## ピット 784

### 遺構 (第180図)

本ピットはD'93グリッドに位置する。規模は長軸約2.20m、短軸約1.80mの不整楕円形を呈し、壁高は確認面から36cmを測る。埋土上面には大小8点の礫が検出されている。また埋土中から第181図-2の土器の底部が伏せた状態で出土しており、土器の中から貝殻が2点検出された。ピット中央よりやや南側の床面から径約20cmの範囲でベンガラが検出されている。

### 遺物 (第181図-1~8, 第172図-18)

土器はすべて埋土出土。第181図-1・2は統縄文の底部。3は統縄文初頭。4は後北C<sub>2</sub>・D式。5・6は縄文晩期中葉。6は口縁部に5条の縄線文を巡らせた浅鉢であろう。7は統縄文初頭。8は縄文後期堂林式。

石器は第172図-18が黒曜石製の石鏃。 (佐々木 寛)

## ピット 784a・784b

### 遺構 (第222図)

ピット784aはピット784の東側にあるが、規模、形態は不明である。壁高は確認面から12cmを測る。遺物は出土していない。

ピット784bはピット784の西側にある。長軸は不明であるが、短軸約0.76mの長円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から20cmを測る。埋土中から黒曜石のフレーク・チップの集積が検出された。 (佐々木 寛)

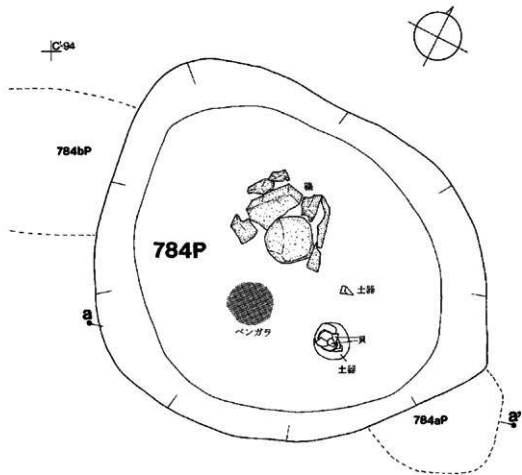
## ピット 785

### 遺構 (第222図)

本ピットはピット784の南側にあり、規模は長軸約0.93m、短軸0.60mの楕円形を呈する。壁高は確認面から47cmを測る。ピットの上層からベンガラを含む赤褐色砂層と遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂層が検出されたことから本来はもう少し上の層から掘り込まれていたものと考えられる。ベンガラを含んだ赤褐色砂中から石鏃が1点出土している。

### 遺物 (第172図-19, 図版39-4)

石器は第172図-19の黒曜石製の無茎石鏃。 (佐々木 寛)



第180図 ビット784平面図

## ピット 786

## 遺構 (第174図)

本ピットはピット783の北西約0.30mにあり、ピットの確認面からは第181図-9の土器が出土しており、ピットの南側からは縄文晩期の土器が数個一括出土している。規模は長軸1.37m、短軸0.90mの楕円形を呈する。壁高はほぼ垂直に立ち上がり、確認面から約50cmを測る。床面には遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出された。西側の床面からナイフが出土しており、東側の床面直上からは石斧が出土している。

## 遺物 (第181図-9~14, 第184図-1~5, 図版39-5~10)

第181図-9はピット上面から出土した舟形土器。口径は長軸18.0cm、短軸10.1cm、器高8.1cm。長軸上の両端に小突起があり、小突起から隆帯が垂下する。隆帯には横から小孔が穿たれている。短軸上両端にも小突起があり、突起の下にも小孔が穿たれている。胴上部には波状の沈線文が施されている。胴部にはくびれをもたない。底部は丸底である。縄文晩期縁々岡式である。10~14は縄文晩期。14は底部。

石器は第184図-1が床面から出土したナイフ。5は床面直上から出土した安山岩製の石斧。埋土からは2がナイフ。3・4は削器。4は玄武岩製。1~3は黒曜石製。

## 小括

本ピットの長軸は東-西方向であり、歯骨は検出されていないが遺存体の形態から西方向と思われる。時期は出土土器が縄文晩期縁々岡式のものであるためこの時期のものとも考えられるが、ピット上面からの出土であるため断定はできない。(佐々木 寛)

## ピット 786a

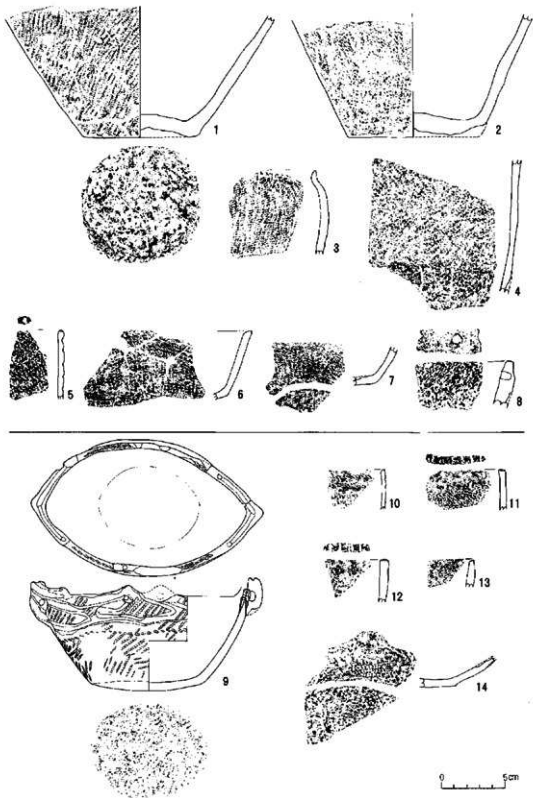
## 遺構 (第174図)

本ピットはピット786の北側に検出されたピットで規模は径約0.70mの円形を呈する。壁高は確認面から約55cmを測る。埋土中には礫が数点検出された。床面には遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出されている。

## 遺物 (第183図-1~3, 第184図-6・7, 図版40-1・2)

第183図-1は続縄文後北C<sub>2</sub>・D式。2・3は縄文晩期。

石器は第184図-6が両面加工ナイフ。7が削器。いずれも黒曜石製。(佐々木 寛)



第181図 ビット784埋土(1~8)、786埋土(9~14)出土土器

## ピ ッ ト 787

### 遺 構 (第182図)

本ピットはC' 91, D' 91グリッドにあり、一部擾乱を受けているが規模は径約1.70mの円形を呈する。壁高は確認面から約45cmを測る。

### 遺 物 (第183図-4・5)

第183図-4は縄文晩期常舞式。5は統縄文初頭。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 788

### 遺 構 (第182図)

本ピットはC' 92グリッドに位置し、規模は長軸約1.30m、短軸約1.20mの不整形を呈する。壁高は確認面から約35cmを測り、斜めに立ち上がる。ピット東側の床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出された。

### 遺 物 (第183図-6~10, 第184図-8, 図版40-3・4)

第183図-6は口径長軸23.0cm、短軸11.5cm、器高10.5cmの船形土器。長軸の両端に突起をもち、突起の下に小孔を穿つ。突起の横から垂下させた隆帯を途中から横走させ、向い合うように突起へと連結する。胴部には沈線を横走させ、縦方向の山形沈線と短沈線を配する。縄文晩期常舞式。7・8も同じ。9・10は縄文晩期。

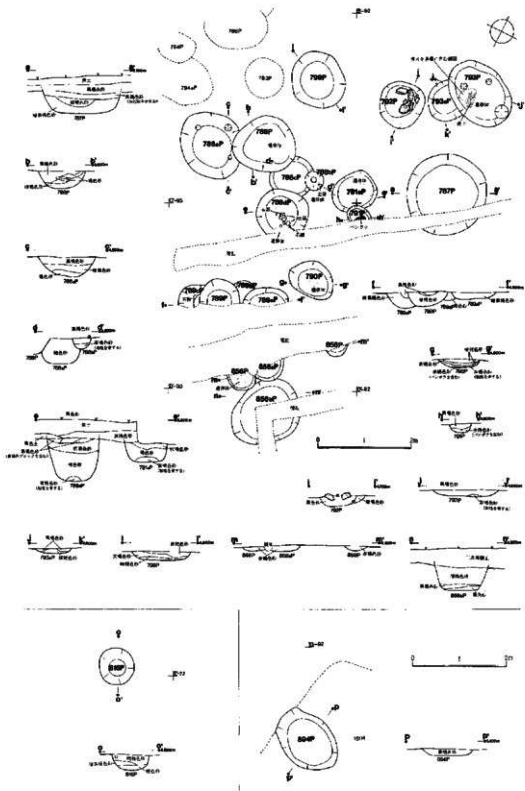
石器は第184図-8が黒曜石製の削器。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 788a

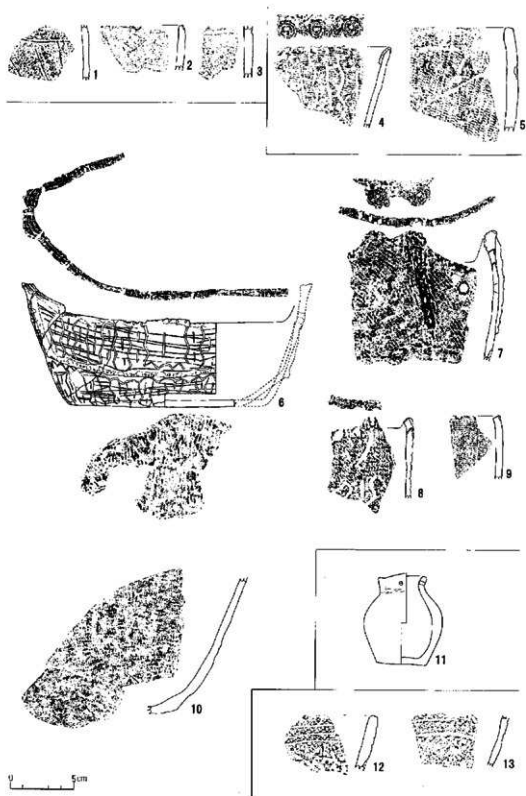
### 遺 構 (第182図)

本ピットはピット788の南西側に検出された。規模は長軸約1.50m、短軸約1.30mの楕円形を呈し、壁高は確認面から約45cmを測る。床面の壁際から径8~16cm、深さ9~16cmの柱穴が3本検出された。 (佐々木 寛)

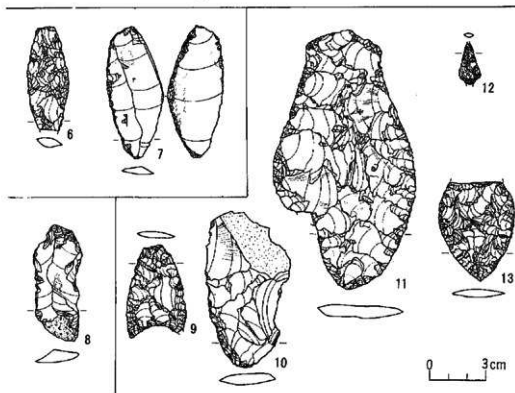
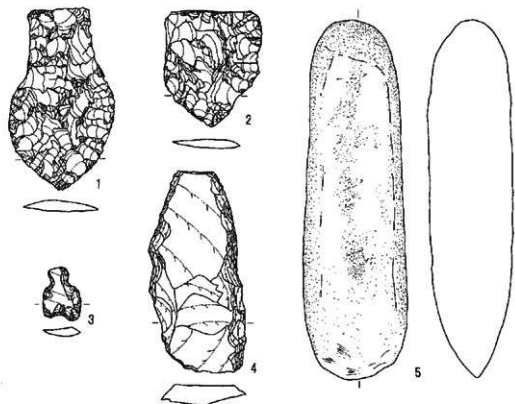




第182図 ピット787、788、788a、788b、788c、788d、789、789a、789b、789c、790、791、791a、792、793、793a、799、816、856、856a、856b、858、894平面図



第183図 ビット786a埋上(1~3)、787埋上(4・5)、788埋上(6~10)、788b埋上(11)、788c埋上(12・13)出土土器



第184圖 ピット786床面(1)・埋土(2~4)・床面直上(5)、786a埋土(6・7)、788埋土(8)、  
788d床面(9・10)・遺体上(11)・埋土(12・13)出土石器

## ピ ッ ト 788b

### 遺 構 (第182図)

本ピットはピット788の東側0.40mに検出された。規模は約0.37mの円形を呈し、壁高は確認面から約25cmを測る。ピットの上面から第183図-11の土器が出土している。床面は遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂に覆われている。

### 遺 物 (第183図-11, 図版40-5)

第183図-11は口径3.9cm、器高7.4cm、胴部径6.1cmの壺形土器。口縁部直下に相対して小孔を穿ち、頸部は狭丸。胴部は膨らみをもち、底部は平底である。統縄文初頭の興津式土器と考えられる。

### 小 括

本ピットの時期は統縄文初頭興津式系の土器が検出されているのでこの時期と考えられるがピット上面からの出土であるため断定はできない。(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 788c

### 遺 構 (第182図)

本ピットはピット788の東側に検出された。規模は径約0.90mのほぼ円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から約60cmを測り、壁は垂直に立ち上がる。床面はわずかに遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められた。

### 遺 物 (第183図-12・13)

第183図-12・13は埋土出土の縄文後期。(佐々木 覚)

## ピ ッ ト 788d

### 遺 構 (第182図, 図版40-7)

本ピットはピット788cの南側に検出された。北側をピット788cに切られており、南側に攪乱を受けているが、規模は径約1.10mのほぼ円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から90cmを測り、壁は垂直に立ち上がる。埋土の黒褐色砂層の上層から第185図-1の土器が出土している。床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出され、頭位は遺存体の形態から東と考えられる。遺存体の上面から第184図-11のナイフが出土し、頭部から9の石鏃が検出されている。床面からは黒曜石の削器が出土している。

### 遺 物 (第185図-1~4, 第184図-9~13, 図版40-6, 図版41-1~5)

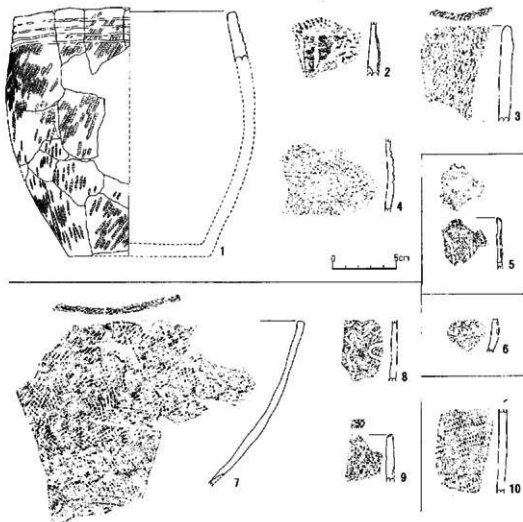
第185図-1は口径16.8cm、器高19.8cm。口縁部に4条の沈線を巡らせ、胴部は縄文のみで

ある。統縄文初頭砂沢式相当の土器と考えられる。2・4は縄文晩期。3は縄文中期。

石器は第184図-9・10は床面出土。9は頭部から出土した石鎌。10は削器。11は遺存体の上面から出土したナイフ。埋土からは12が有茎石鎌。13はナイフ。すべて黒曜石製。

### 小 括

本ビットの時期は出土土器から統縄文初頭砂沢式相当で、ビット788bより多少古いものと考えられる。 (佐々木 寛)



第185図 ビット788d 埋土(1~4)、789埋土(5)、791埋土(6)、795埋土(7~9)、797埋土(10)出土土器

## ピ ッ ト 789・789a

### 遺 構 (第182図)

ピット789はD'92グリッドに検出された。南東側半分が攪乱を受けているため規模は不明であるが、壁高は確認面から30cmを測る。

ピット789aはピット789の東側に検出された。南東側半分が攪乱を受けているため規模は不明であるが、壁高は確認面から14cmを測る。

### 遺 物 (第185図-5)

ピット789の埋土からは第185図-5の縄文晩期。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 789b・789c

### 遺 構 (第182図)

ピット789bはピット789と789aの間に位置する。南東側半分が攪乱を受けているため規模は不明であるが、壁高は確認面から17cmを測る。

ピット789cはピット789の西側に位置し、南東側半分が攪乱を受けているため規模は不明であるが、壁高は確認面から32cmを測る。

### 遺 物 (第186図-1, 図版41-6)

ピット789Cからは第186図-1が埋土から出土した黒曜石製のナイフ。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 790

### 遺 構 (第182図)

本ピットはピット789aの北東側約0.20mに検出され、規模は長軸1.00m、短軸0.75mの楕円形を呈する。壁高は確認面から18cmを測る。床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出され、遺存体の上面から琥珀製の平玉が1点出土している。遺存体の一部にはベンガラが含まれている。

### 遺 物 (第186図-2)

第186図-2は琥珀製の平玉。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 791

## 遺 構 (第182図)

本ピットは788bの北東側約0.80mに位置する。規模は南東側が攪乱を受けているため長軸は不明であるが短軸約0.40mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から20cmを測る。床面からはベンガラを含む赤褐色砂が検出された。

## 遺 物 (第185図-6)

第185図-6は埋土出土の縄文土器をもつ縄文晩期。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 791a

## 遺 構 (第182図)

本ピットはピット791の北西側に位置する。規模は長軸0.95m、短軸0.80mの楕円形を呈する。壁高は確認面から40cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土から炭化したクルミが出土している。床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出された。

## 遺 物 (第186図-3・4)

第186図-3は有茎石鏃。4は削器。いずれも黒曜石製。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 792

## 遺 構 (第182図)

本ピットはC'91グリッドに位置する。規模は長軸約1.00m、短軸約0.95mの不整形を呈する。壁高は確認面から24cmを測る。埋土の黒褐色砂層上層からは礫が6点検出されている。

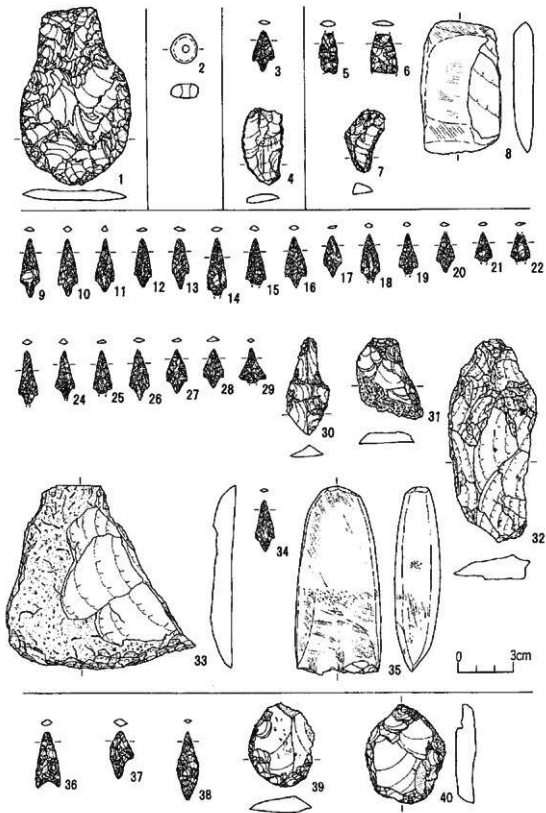
(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 793

## 遺 構 (第182図)

本ピットはC'91グリッドにあり、規模は長軸約1.55m、短軸約1.10mの楕円形を呈し、壁高は13cmを測る。ピットの上から骨片の集積が認められ、その下から焼土が検出された。床面の中央よりやや東側から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出されている。床面には径12~26cm、深さ11~22cmの柱穴が3本検出された。

(佐々木 寛)



第188圖 ビット789c 埋土(1)、790遺体上(2)、791a 埋土(3・4)、797床面(5~8)、797a  
 床面(9~33)・埋土(34・35)、797b 埋土(36~40)出土石器・琥珀玉



## ピ ッ ト 793a

## 遺 構 (第182図)

本ピットはピット793の南西側にあり、規模は長軸は不明であるが短軸約0.84mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から10cmを測る。

遺物は出土していない。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 794・794a

## 遺 構 (第222図)

ピット794はピット786の南側0.30mに検出され、規模は長軸約0.82m、短軸約0.63mの楕円形を呈する。壁高は確認面から24cmを測る。遺物は出土していない。

ピット794aはピット794の南側に検出され、規模は長軸約1.75m、短軸約1.00mの長円形を呈する。壁高は確認面から25cmを測る。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 795

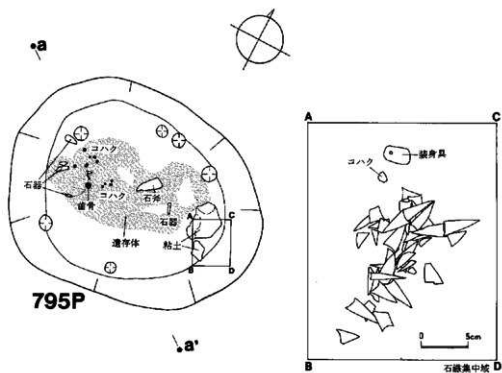
## 遺 構 (第187図、図版41-7、図版42)

本ピットはG' 87グリッドに位置し、規模は長軸約1.40m、短軸約1.10mの楕円形を呈し、壁高は確認面から約65cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピット上面には粘土が検出された。東側の床面直上より白色粘土塊2点が認められ、その間から第188図-1~45の無茎石鏃44点と有茎石鏃1点、石鏃片4点が検出されている。石鏃の横から琥珀製の平玉1点、未完成の装飾品1点が出土している。床面には遺存体と思われる粘性をもちた茶褐色砂が認められた。中央部の遺存体の上から50の石斧1点が検出され、その東側から黒曜石の棒状原石1点が出土している。遺存体の西側からは歯骨が検出されていることから西頭位と考えられる。頭部の上から48の削器が1点と黒曜石のフレークが1点検出され、頭部の北側と南側からは46・47のナイフがそれぞれ1点ずつ検出された。頭部の北側から東側にかけて琥珀製の平玉14点と石鏃1点が出土している。床面の壁際から径12~16cm、深さ6~11cmの柱穴が7本検出された。

## 遺 物 (第185図-7~9、第188図、図版43)

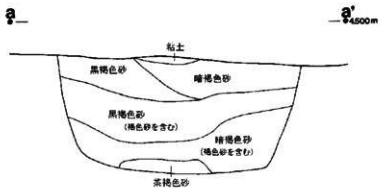
第185図-7~9は縄文晩期。いずれも埋土出土。

床面からの石器は第188図-1~44が無茎石鏃。45は有茎石鏃。46・47は両面加工のナイフ。48は削器。49は棒状原石。50は緑色泥岩製の磨製石斧。51は泥岩製の未完成の装飾品。両側から削窩されているが貫通していない。52~54は琥珀製の平玉。55~57は埋土出土の削器。50以外の石器すべて黒曜石製である。この他に白色粘土が出土している。

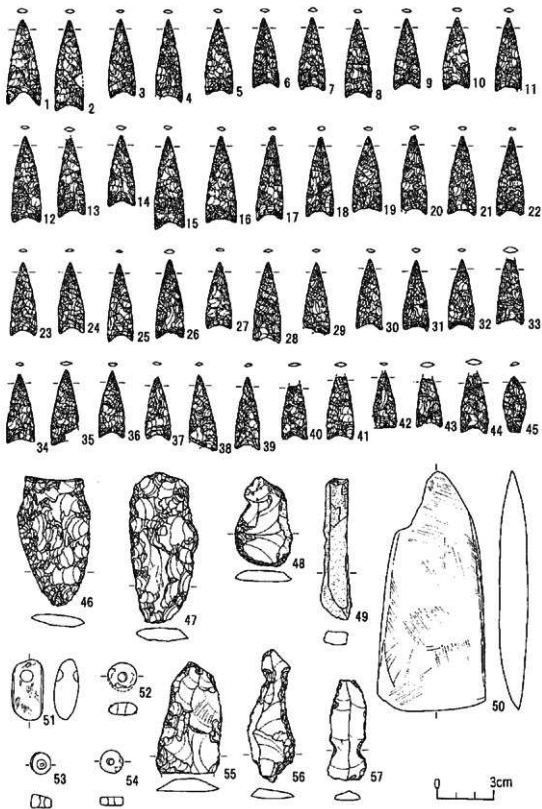


G-88 ←

0 1 m



第187圖 ビット795平面図



第188圖 ビット795床面(1~54)・埋土(55~57)出土石器・石製品・琥珀玉

## 小 括

本ピットの長軸は東-西方向であり、頭位は西方位である。時期はピット内から土器は出土していないが床面から無茎石鏃が出土。琥珀玉が出土していることから縄文期のもと考えられるが、詳細な時期は不明である。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 796

### 遺 構 (第112図)

本ピットはC'94グリッドに位置し、規模は長軸約0.92m、短軸約0.87mの不整形を呈する。壁高は確認面から15cmを測る。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 797

### 遺 構 (第189図)

本ピットはD'94グリッドに位置し、規模は長軸約1.30m、短軸約1.14mの不整形を呈し、壁高は確認面から35cmを測る。ピットの上面には礎が配され、埋土中からも大型礎が6点認められた。床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出されている。遺存体の形態から南頭位と考えられる。遺存体の上からは石斧1点、石鏃2点、削器1点が出土した。

### 遺 物 (第185図-10、第186図-5~8、図版44-1~4)

第185図-10は縄文晚期。埋土出土。

床面から第186図-5・6は黒曜石製の無茎石鏃。7は頁岩製の削器。8は青色泥岩製の磨製石斧。

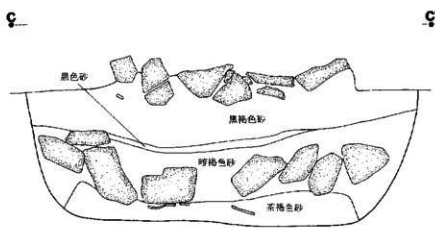
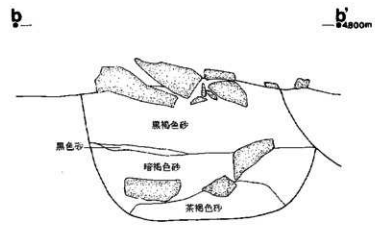
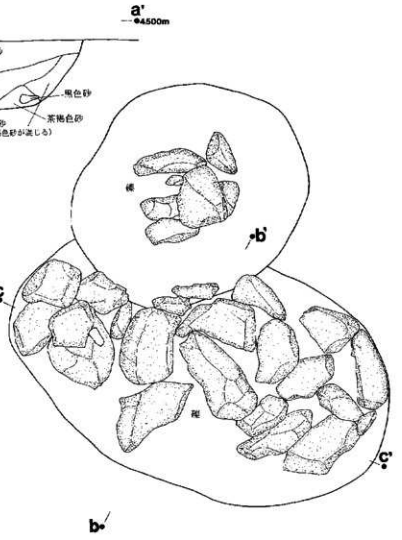
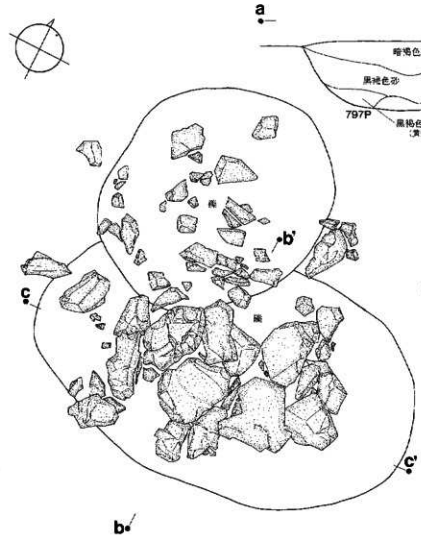
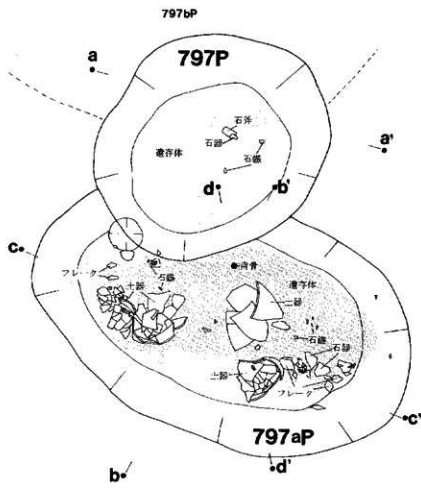
## 小 括

本ピットの長軸は北-南方位にある、頭位は南である。時期は不明である。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 797a

### 遺 構 (第189図、図版44-5・6、図版45-1)

本ピットはピット797の南東側に位置する。上面に大型の角礎14点が配設されている。規模は長軸約2.10m、短軸約1.25mの楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面から約75cmを測る。床面には遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出されているが、遺存体の直上には大型の礎が24点認められた。これらの礎は遺体の上に置かれていたものと思われる。長軸は東-西方位であるが、北壁際の中央付近から歯骨が検出されている。歯骨の出土位置が中央であるので2体合葬の可能性も考えられる。礎の上から第186図-35の石斧が出土してい



第189圖 ピット797、797a平面図

る。床面の西側から第191図-1の土器が遺存体の中から出土しており、この土器の東側に接して第190図-1の土器が出土し、中央から第192図-1の土器が、南東側の床面からは第190図-2の土器が出土している。遺存体の中から石鏃21点、削器13点が認められた。第190図-2の土器の北東側からは黒曜石のフレークが一括出土。他にも黒曜石のフレーク2点、玄武岩製のフレーク9点が出土している。西壁際の床面から径36cm、深さ12cmの柱穴が1本検出された。

**遺物** (第190図, 第191図, 第192図, 第186図-9~35, 図版45-2~25, 図版46-1~27)

第190図-1は床面出土。口径23.0cm、器高20.0cm。上面観は五角形でそれぞれの角にはV字形に円形刺突文を施した隆帯が垂下する。同上部は横方向の沈線と縦方向の波状の沈線が施されている。底部は円形で丸底になっている。大きな突起の下には小孔が2個穿たれ、内側から穿孔されている。縄文晩期常舞式。2も床面から出土した縄文晩期の底部。3は埋土から出土した口径9cm、器高5.5cmの縄文晩期。

第191図-1は床面出土の縄文晩期常舞式。上面観は菱形を呈する。口径の長軸18.0cm、短軸10.7cm、器高25.8cmの異形土器。口唇部の長軸上に大きな突起があり、その下には小孔が穿たれ、外側から穿孔されている。短軸上にも小突起がある。胴部中央は大きくくびれており、くびれている部分は無文帯となっている。胴上部は沈線と円形刺突文が渦巻き状に施され、円形刺突文を施した隆帯によって無文帯と区画された胴下部には沈線を渦巻き状に施している。埋土からは2・3も縄文晩期常舞式。4・5が縄文晩期。

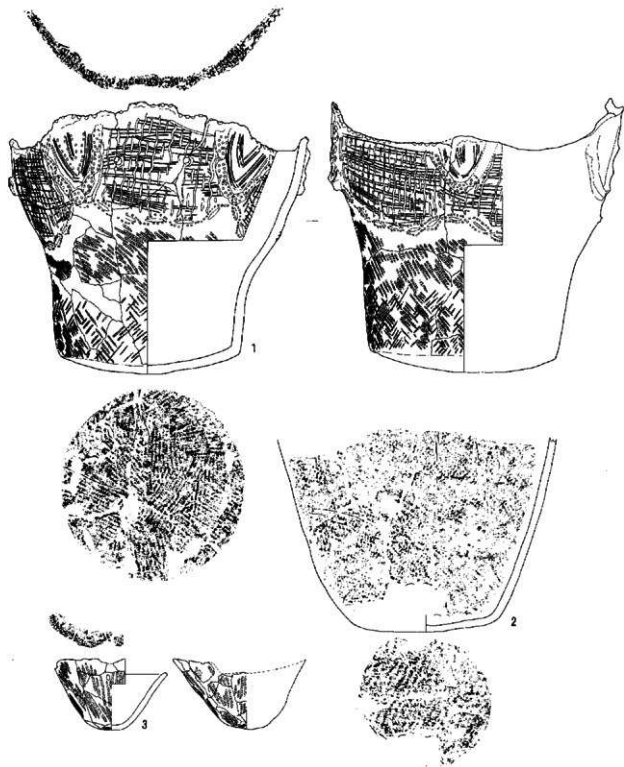
第192図-1は床面出土の縄文晩期常舞式。口径27.5cm、器高23.0cmの鉢形土器。口唇部に刻みをもつ。胴部は地文の縄文のみである。2・3は縄文後期経濶式。

石器は第186図-9~29が石鏃。30・31は第190図-2の土器の下から出土したもので30はナイフ、31は削器。32・33は玄武岩製の削器。34は茶褐色砂を含む褐色砂層から出土した有茎石鏃。35は礫の上面から出土した緑色泥岩製の磨製石斧。32・33・35以外は黒曜石製。

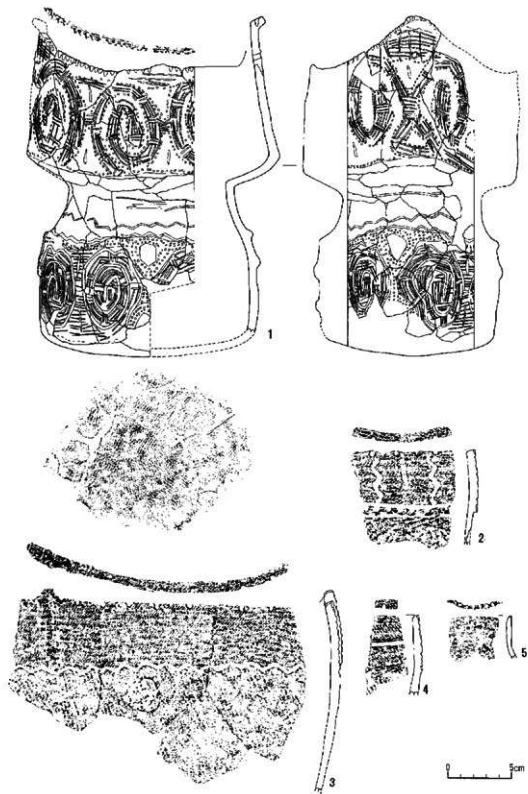
## 小 括

本ピットは縄文晩期常舞式の土壌墓である。ピット上面に大型の角礫が14点配置されていることから配石墓と考えられる。歯骨の出土状態から2体合葬の可能性も考えられる。

(佐々木 寛)

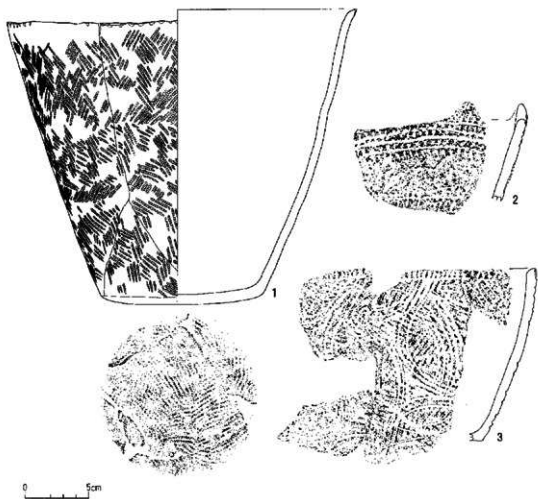


第190圖 ピット797a 床面(1・2)・埋土(3)出土土器



第191圖 ピット797a床面(1)・埋土(2~5)出土土器





第192圖 ビット797a 床面(1)・埋土(2・3)出土土器

## ピット 797b

## 遺構 (第222図)

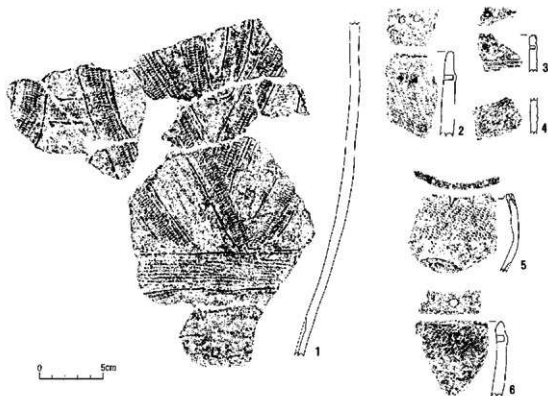
本ピットはピット797の北側に位置し、規模は長軸約3.30m、短軸約3.10mの不整形形を呈し、壁高は確認面から90cmを測る。

## 遺物 (第193図、第186図-36~40、図版46-28~32)

すべて埋土出土。第193図-1は統編文後北C<sub>1</sub>・D式。2・3は統編文字津内Ⅱa式。4・5は縄文晩期。6は縄文後期堂林式。埋土出土。

石器は第186図-36~38は石鏃。39・40は槌器。いずれも黒曜石製。

(佐々木 覚)



第193図 ピット797b 埋土(1~6)出土石器

## ピ ッ ト 798

### 遺 構 (第222図)

本ピットはピット797bの東側に位置し、規模は径約0.70mの不整形円形を呈する。壁高は確認面から50cmを測る。遺物は出土していない。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 799

### 遺 構 (第182図)

本ピットはピット788の北側約0.60mに検出され、規模は長軸約1.24m、短軸約1.12mの不整形円形を呈する。壁高は確認面から20cmを測る。

### 遺 物 (第202図-1・2, 図版46-33・34)

第202図-1は搔器。2は刮器。いずれも黒曜石製。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 800

### 遺 構 (第194図)

本ピットはE'74, F'74グリッドにまたがって位置する。規模は直径約0.80mの円形を呈する。壁は丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から約35cmを測る。

詳細な時期は不明である。(武田 修)

## ピ ッ ト 801

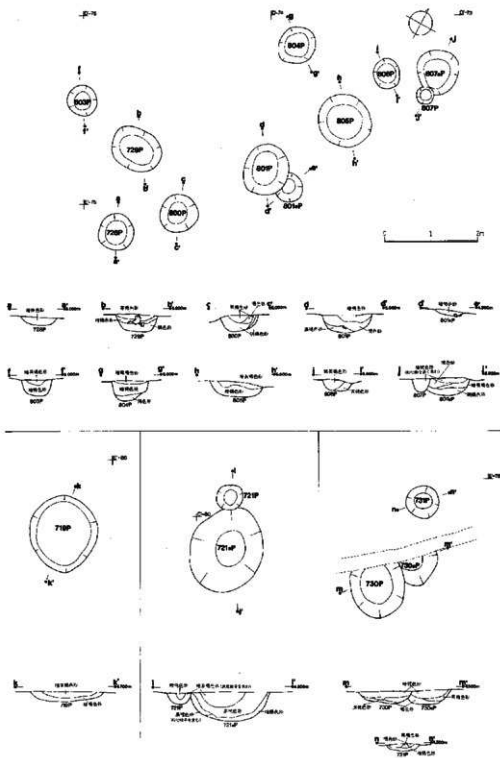
### 遺 構 (第194図)

本ピットはE'74, F'74グリッドにまたがって位置する。規模は長軸約1.05m、短軸約0.95mの円形を呈する。壁は丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から約35cmを測る。

詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第195図-1~3)

第195図-1~3は埋土出土である。1・2は縄文文字津内Ⅱb式。3は1条の縄線文が施される。縄文晩期中葉であろう。(武田 修)



第194図 ビット719、721、721a、728、729、730、730a、731、800、801、801a、803、804、805、806、807、807a平面図

## ピ ッ ト 801a

### 遺 構 (第194図)

本ピットはE'73グリッドに位置する。ピット801に西壁側を切られるものの規模は直径約0.62mの円形を呈する。壁高は確認面から約10cmを測る。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 802

### 遺 構 (第199図)

本ピットはE'77グリッドに位置する。規模は直径約0.73mの円形を呈する。床面から丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から約29cmを測る。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 803

### 遺 構 (第194図)

本ピットはE'74・75グリッドにまたがって位置する。規模は直径約0.60mの円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約30cmを測る。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 804

### 遺 構 (第194図)

本ピットはE'73グリッドに位置する。規模は直径約0.78mの円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、東壁は段を有する。高さは確認面から約42cmを測る。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 805

### 遺 構 (第194図)

本ピットはE'73グリッドに位置する。規模は直径約1.10mの円形を呈する。壁高は確認面から約30cmを測る。

詳細な時期は不明である。

## 遺 物 (第195図-4~6)

第195図-4~6は埋土出土である。4は半截状施文具の刺突文を口唇部と胴部に施す。縄文晩期中葉であろう。5・6は縄文晩期の胴部片である。(武田 修)

## ピ ッ ト 806

## 遺 構 (第194図)

木ビットはE 73グリッドに位置する。規模は直径約0.68mの円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から西壁約18cm、東壁約10cmを測る。

詳細な時期は不明である。

## 遺 物 (第195図-7・8)

第195図-7・8は埋土出土である。7は曲線的な縄線文、8は縄文を施す。縄文晩期中葉であろう。(武田 修)

## ピ ッ ト 807

## 遺 構 (第194図)

木ビットはE 73グリッドに位置する。規模は直径約0.35mの小円形を呈する。壁高は確認面から約28cmを測る。

詳細な時期は不明である。

## 遺 物 (第195図-9~12)

第195図-9~12は埋土出土の縄文晩期の上器。9は口唇部に刻み、10は口唇部に短刻線が施される。11は無文。器形は碗である。(武田 修)

## ピ ッ ト 807a

## 遺 構 (第194図)

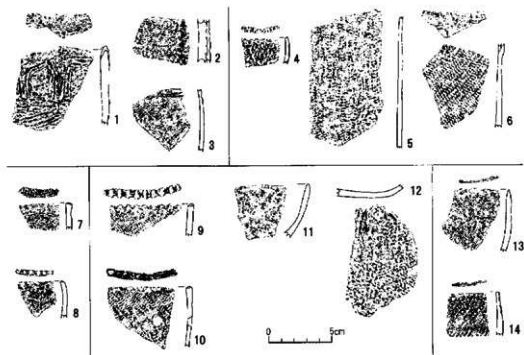
木ビットはE 73グリッドに位置する。規模は東壁制がすばまった直径約0.95mの不整円形を呈する。南壁をビット807によって切られるものの、各壁ともほぼ垂直に立ち上がる。壁高は確認面から約30cmを測る。

詳細な時期は不明である。

## 遺 物 (第195図-13・14, 第202図-3・4)

第195図-13・14は埋土出土である。13は縄文。14は下方から刺突文が施される。縄文晩期中葉であろう。

石器は第202図-3は先端部と基部が欠失するものの有蓋石鏃であろう。4は楕円状の泥岩の先端部と両側縁の一部に粗い調整を加えて刃部を作出した石斧。(武田 修)



第195図 ビット801埋土(1~3)、805埋土(4~6)、806埋土(7・8)、807埋土(9~12)、807a埋土(13・14)出土石器

## ピ ッ ト 808

## 遺 構 (第196図, 図版47-1)

本ピットはB'88グリッドに位置する。表土を剥した段階で黒褐色砂の落ち込みがあり、西側中心に第197図-4に示す後北C<sub>2</sub>・D式が破砕された状態でみられ、東側からは同形式の注口土器が出土した。南北に走る攪乱溝によって北壁と南壁及び床の一部は破壊を受けている。規模は直径約1.40mの円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約45cmを測る。床面には粘性を有した暗茶褐色土があり、北壁近くから歯骨も検出されたので遺存体であることが確認できた。頭部や大腸部の箇所では土質は硬く起伏がある。

## 遺 物 (第197図, 第198図-1~4, 第202図-5~7, 図版47-2~6)

第197図-1・2は撥文土器。3は口径10.0cm、器高5.5cmの注口土器。口縁下部に1条の擬繩隆帯が横走する後北C<sub>2</sub>・D式。4は口径35.0cm、器高45.0cmの大型鉢形土器。口縁下部に2条の擬繩隆帯が横走し、胴部は帯繩文を縦位に区画し、横位の帯繩文を直線・弧線に施した後北C<sub>2</sub>・D式。

第198図-1は口径32cmの大型鉢形土器。胴下部は欠失する。胴部は微隆起線を方形、「へ」状に施し、帯繩文を施した後北C<sub>2</sub>・D式。2は船形状の浅鉢。端部に幅広の取手をもつ後北C<sub>2</sub>・D式。3・4は字津内Ⅱb式。

石器は第202図-5は右下端部に急斜な刃部をもつ搔器。6・7は削器であるが、7の裏面側の刃部は僅かに主要剥離面が残され、大部分は調整薄離が行われている。3点とも黒曜石製である。

## 小 括

本ピットは統繩文後北C<sub>2</sub>・D式の土壌墓である。頭位は北頭位である。これまでの調査では東頭位の頭部に近接して正立の状態出土した土器が副葬された例が最も多く、北頭位の場合は破砕されたものが数例ある。  
(武田 修)

## ピ ッ ト 809

## 遺 構 (第199図)

本ピットはF'76グリッドに位置する。規模は長軸約0.90m、短軸約0.73mの楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約50cmを測る。

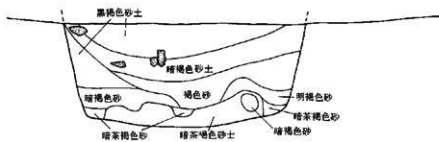
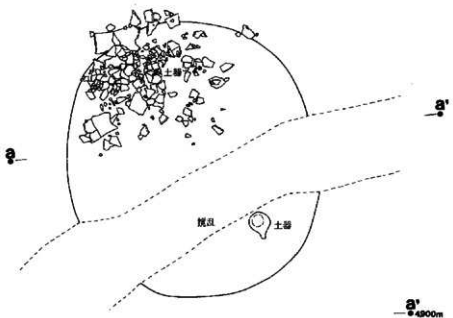
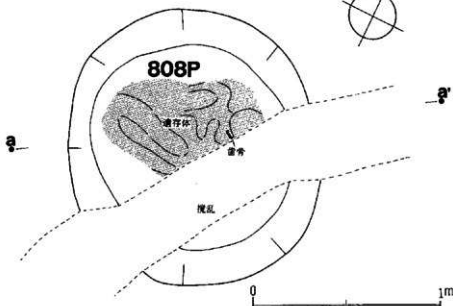
詳細な時期は不明である。

## 遺 物 (第198図-5)

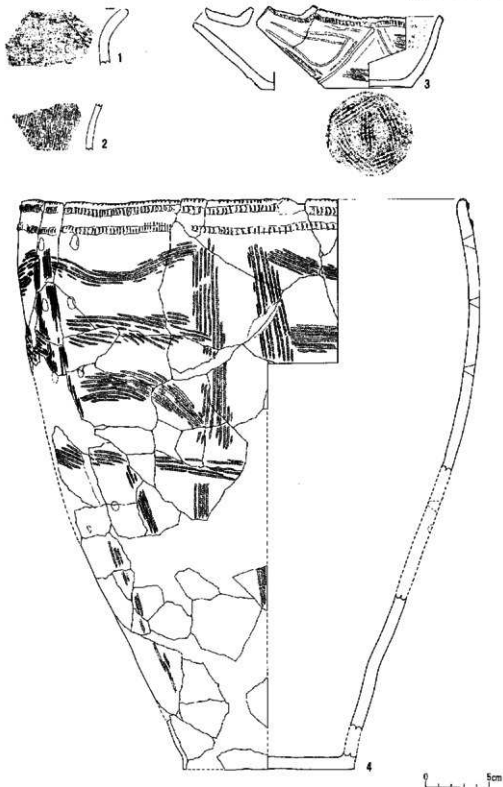
第198図-5は埋土から出土した縄文晩期の胴部片。  
(武田 修)



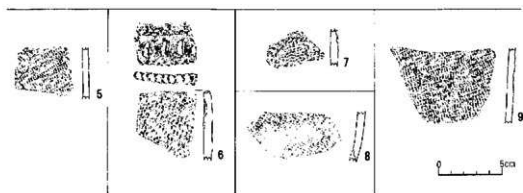
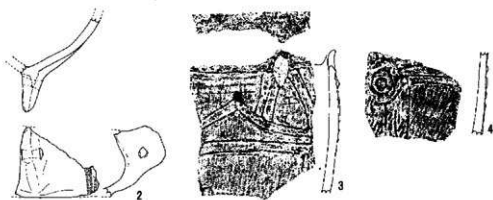
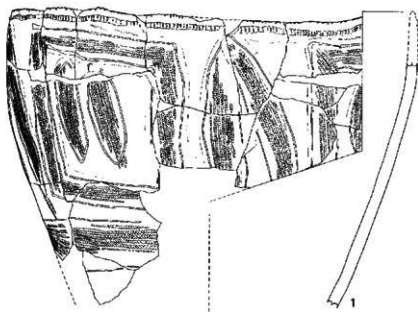
A-89



第196図 ビット808平面図



第197図 ビット808埋土(1~4)出土土器



第198図 ビット80R埋上(1~4)、809埋土(5)、810埋土(6)、812埋上(7)、813埋土(8)、814埋土(9)出土土器

## ピ ッ ト 810

## 遺 構 (第199図)

本ピットはF'76グリッドに位置する。規模は直径約0.95mの円形を呈する。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約30cmを測る。

詳細な時期は不明である。

## 遺 物 (第198図-6, 第202図-8, 図版48-1)

第198図-6は埋土出土である。口縁部の内面に篋状施工具による刺突文と縄線文をもつ。縄文晩期中葉であろう。

第202図-8は搔器。右側縁辺部が尖鋭化する。黒曜石製。 (武田 修)

## ピ ッ ト 811

## 遺 構 (第199図)

本ピットはF'76グリッドに位置する。規模は長軸約1.05m、短軸約0.85mの楕円形を呈する。壁は垂直に立ち上がり、高さは確認面から約40cmを測る。

詳細な時期は不明である。 (武田 修)

## ピ ッ ト 812

## 遺 構 (第199図)

本ピットはE'75グリッドに位置する。規模は直径約0.40mの小円形を呈する。壁高は確認面から約15cmを測る。

## 遺 物 (第198図-7)

第198図-7は埋土出土である。1条の縄線文が施される。縄文晩期中葉であろう。

(武田 修)

## ピ ッ ト 813

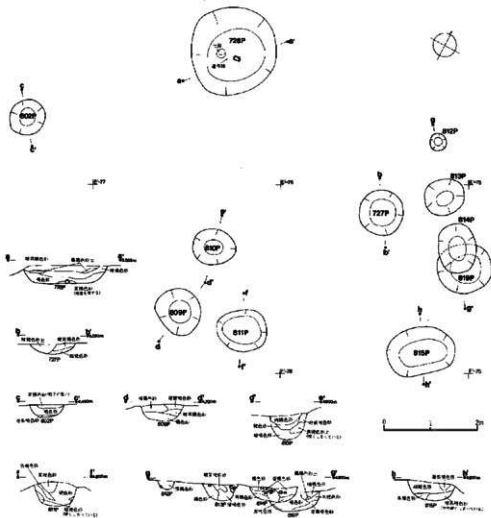
## 遺 構 (第199図)

本ピットはE'75グリッドに位置する。規模は直径約0.75mの円形を呈する。壁は開口部約10cmのところできく開き、高さは確認面から約31cmを測る。上部に角礫がまばらに混入する。

詳細な時期は不明である。

遺物 (第198図-8)

第198図-8は埋土出土である。土器の割れ面に沿って幅5mm程の筧状の施文具を押し付けている。  
(武田 修)



第199図 ピット726、727、802、809、810、811、812、813、814、815、819平面図

## ピ ッ ト 814

## 遺 構 (第199図)

本ピットはF'75グリッドに位置する。規模は直径約0.40mの小円形を呈する。壁高は確認面から約15cmを測る。

詳細な時期は不明である。

## 遺 物 (第198図-9, 第202図-9, 図版48-2)

第198図-9は埋土から出土した縄文晩期の胴部片である。

石器は第202図-9は柄部が作出された片面加工ナイフ。黒曜石製。 (武田 修)

## ピ ッ ト 815

## 遺 構 (第199図)

本ピットはF'75グリッドに位置する。規模は長軸約1.93m、短軸約1.00mの楕円形を呈する。床面は丸みを帯び、壁は緩く立ち上がる。高さは確認面から約30cmを測る。埋土は角礫混じりの暗茶褐色砂が堆積する。

詳細な時期は不明である。

## 遺 物 (第200図-1~7)

第200図-1~7は埋土出土である。1は左側から2は下方から円形刺突文を施す。3は内側からの突瘤文がある。4は短い隆帯が貼り付けられる。3は縄文晩期前葉。1・2・4・5は同中葉であろう。6・7は縄文後期。 (武田 修)

## ピ ッ ト 816

## 遺 構 (第182図)

本ピットはE'72, F'72グリッドにまたがって位置する。規模は直径約0.75mの小円形を呈する。壁高は確認面から約30cmを測る。

詳細な時期は不明である。

## 遺 物 (第200図-8~10)

第200図-8~10は埋土出土である。3点とも器面には縄文が施され、9の口唇部には刺突文がある。 (武田 修)

## ピット 817

### 遺構 (第140図)

本ピットはB79・80グリッドにまたがって位置する。規模は長軸約1.60m、短軸約1.40mの楕円形を呈する。壁は床面から垂直に立ち上がり、高さは確認面から約84cmを測る。

詳細な時期は不明である。(武田 修)

## ピット 818

### 遺構 (第205図)

本ピットはO'92グリッドに位置する。規模は長軸約1.10m、短軸約0.90mの楕円形を呈する。埋土内は黒褐色砂が堆積し、中央部から第200図-11に示す土器がやや西側に倒れているものの正立の状態出土した。皿状に浅く立ち上がった壁高は確認面から約15cmを測る。

### 遺物 (第200図-11, 図版48-3)

第200図-11は床面出土である。口縁部の3分の1は欠失している。口径約18cm、器高約26cmの中型土器である。口縁部には内側からの突瘤文が施され、小波状部の下部に1対の吊り耳をもつ。吊り耳間は縄端圧痕文と擬縄貼付文によって「ハ」状に施文される。胴中央を中心に煤が付着する。統縄文字津内Ⅱa式である。

### 小括

本ピットは統縄文字津内Ⅱa式のピットである。掘り方が大きく、土器も小型であるため通常の埋壙とは別の機能をもつピットと考えられる。(武田 修)

## ピット 819

### 遺構 (第199図)

本ピットはF74・75グリッドに位置する。規模は直径約1.15mの円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約35cmを測る。

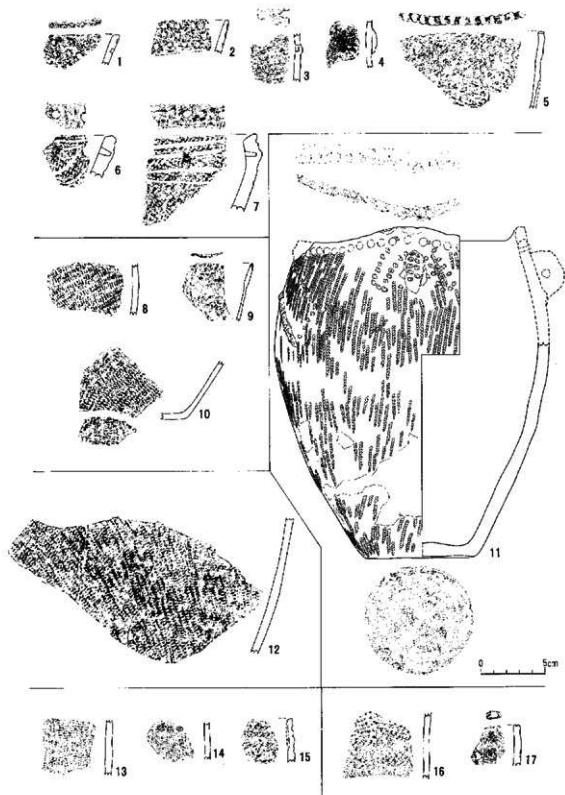
詳細な時期は不明である。

### 遺物 (第200図-12, 第202図-10)

第200図-12は縄文晩期の胴部片。

石器は第202図-10は両側縁の刃部が弧状化した削器。黒曜石製。埋土出土。

(武田 修)



第200図 ビット 815埋土(1~7)、816埋土(8~10)、818床面(11)、819埋土(12)、820埋土(13~15)、821埋土(16・17)出土土器



## ピ ッ ト 820

### 遺 構 (第137図)

本ピットはQ'93グリッドに位置する。大半を縄文期の8号小竪穴によって切られているため正確な形態・規模は不明である。短軸は0.60mを測る。壁は皿状に浅く立ち上がり、高さは確認面から約18cmである。

詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第200図-13~15)

全て埋土出土。第200図-13は縄文、14は細い円形刺突文、15は縄線文が施される。この3点は縄文晩期であろう。(武田 修)

## ピ ッ ト 821

### 遺 構 (第137図)

本ピットはQ'93グリッドに位置する。規模は長軸約1.00m、短軸約0.80mの不整楕円形を呈する。皿状に浅く立ち上がり、高さは確認面から約16cmである。

詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第200図-16・17, 第202図-11)

第200図-16は縄文、17は円形刺突文が施される。2点とも縄文晩期であろう。全て埋土出土。

石器は第202図-11は有茎石鏃。黒曜石製であるが表裏面は火熱を受けているため発泡ステロール化している。(武田 修)

## ピ ッ ト 822

### 遺 構 (第137図)

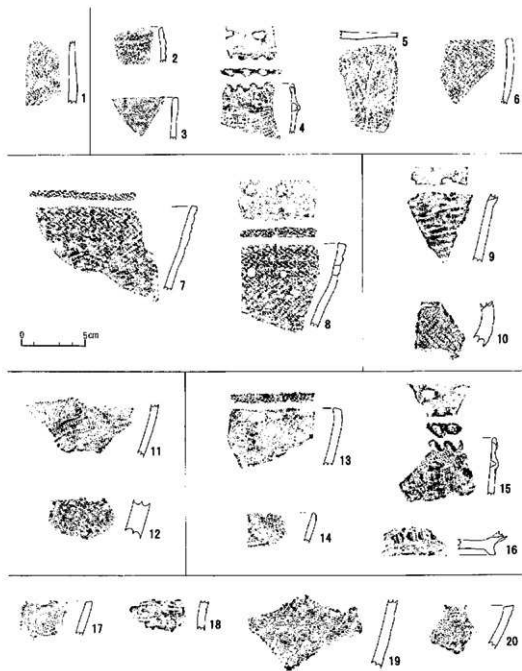
本ピットはP'93グリッドに位置する。規模は長軸約0.82m、短軸約0.54mの小楕円形を呈する。壁高は確認面から約15cmを測る。

詳細な時期は不明である。

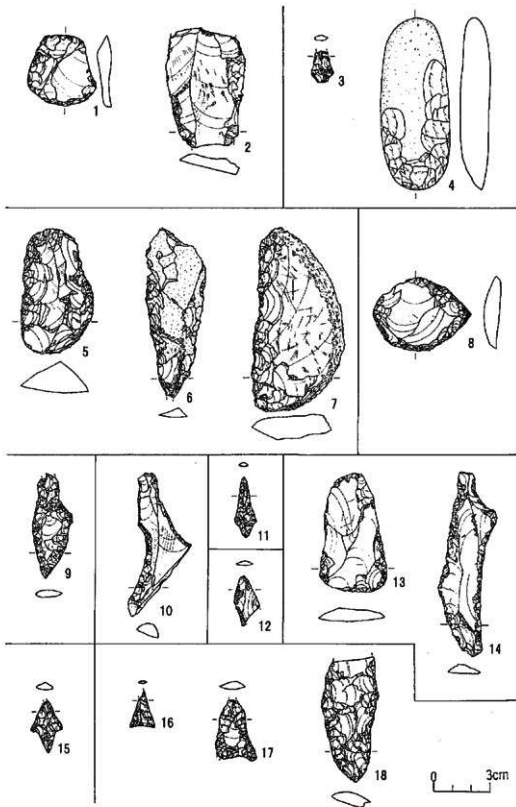
### 遺 物 (第201図-1)

第201図-1は縄文晩期の胴部片である。

(武田 修)



第201圖 ビット 822埋土(1)、823埋土(2~6)、824埋土(7・8)、825埋土(9・10)、826埋土(11・12)、827埋土(13~16)、828埋土(17~20)出土土器



第202図 ビット799埋土(1・2)、807a埋土(3・4)、808埋土(5~7)、810埋土(8)、814埋土(9)、819埋土(10)、821埋土(11)、823埋土(12)、829埋土(13・14)、835埋土(15)、836埋土(16~18)出土石器

## ビ ッ ト 823

## 遺 構 (第137図)

本ビットはP'93グリッド枕下部に位置する。規模は長軸約1.05m、短軸約0.70mの楕円形を呈する。壁は床面から墳口部にかけて緩く立ち上がり、高さは確認面から約40cmを測る。

詳細な時期は不明である。

## 遺 物 (第201図-2~6, 第202図-12)

第201図-2は縄線文、3は縄文が施される。縄文晩期中葉であろう。4は内側からの突瘤文が施される。縄文晩期前葉。5は底部に弧線、直線の沈線文をもつ。縄文晩期中葉であろう。6は縄文後期。全て埋土出土。

石器は第202図-12の先端部は尖り、表裏の縁辺部に加工を施した削器。黒曜石製。

(武田 修)

## ビ ッ ト 824

## 遺 構 (第137図)

本ビットはQ'92グリッドに位置する。規模は直径約0.90mの円形を呈する。皿状に浅く立ち上がり、高さは確認面から約20cmである。

詳細な時期は不明である。

## 遺 物 (第201図-7・8)

埋土出土である。2点とも口縁部直下に3条の縄線文をもち、第201図-7の内側には煤が多量に付着する。8には2個の貫通した小孔をもつ。補修口とは異なるもので別の用途をもつのであろう。2点とも縄文晩期中葉と思われる。

(武田 修)

## ビ ッ ト 825

## 遺 構 (第205図)

本ビットはO'92グリッドに位置する。規模は長軸約1.60m、短軸約1.00mの楕円形を呈する。埋土は暗黒褐色砂が堆積し、墳上部から中位にかけて直径約3~20cmの角礫が多量に混入する。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約25cmである。

詳細な時期は不明である。

## 遺 物 (第201図-9・10)

埋土出土である。第201図-9は内側からの突瘤文をもつ。縄文晩期前葉であろう。10は縄文後期。横位の沈線文が施されている。

(武田 修)

## ピ ッ ト 826

### 遺 構 (第205図)

本ピットはO'92グリッドに位置する。規模は直径約0.70mの円形を呈する。埋土はピット825同様の暗黒褐色砂が堆積し、墳上部から中位にかけて直径約3～15cmの角礫が多量に混入する。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約20cmである。

詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第201図-11・12)

埋土出土である。第201図-11は縄文晩期の胴部片であろう。12は器面に磨耗しているため不鮮明であるが、縄文が施される。胎土には僅かに纖維を含む。縄文中期トコロ六類。

(武田 修)

## ピ ッ ト 827

### 遺 構 (第205図)

本ピットはO'93グリッドに位置する。規模は直径約0.70mの円形を呈する。埋土はピット825、826同様の暗黒褐色砂が堆積し、中位部に直径約10cmの角礫8点と直径約30cmの大型角礫が1点混入する。壁は床面から丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から約25cmである。

詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第201図-13～16)

埋土出土である。第201図-13は無文。器面に煤がこびりついている。14は縄線文。15は内側からの突瘤文の下部に刺突文が施される。16は揚げ底の底部に盛り上がる爪形文が施される。13・14は縄文晩期中葉、15・16は同前葉であろう。

(武田 修)

## ピ ッ ト 828

### 遺 構 (第205図)

本ピットはN'89、M'89グリッドにまたがって位置する。規模は長軸約1.30m、短軸約1.00mの不整形円形を呈する。壁高は確認面から約10cmを測る。

詳細な時期は不明である。

### 遺 物 (第201図-17・20)

埋土出土である。第201図-17は無文。18は横位の沈線文、19は縄文、20は口縁部に横位と斜位の沈線文が施される。17は縄文晩期。18～20は縄文後期。

(武田 修)

## ピ ッ ト 829

## 遺 構 (第203図, 図版48-4)

本ピットはO'91・92グリッドにまたがって位置する。統縄文字津内Ⅱa式期の109b号竈穴に北壁側と床面の一部を切られている。規模は長軸約1.30m、短軸約0.70mの不整形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約20cmを測る。南壁側の上部からベンガラを含む僅かに粘性をもった赤褐色砂を呈した遺存体にかけて直径約15cmの角礫6点がまとまって検出された。石器はこの角礫間に挟まれた状態で出土している。土器は歯骨が検出された西壁側から第204図-1と、遺存体のほぼ中央部から2の小型土器が出土している。いずれも倒れた状態で出土している。

## 遺 物 (第204図-1~7, 第202図-13・14, 図版48-5~8)

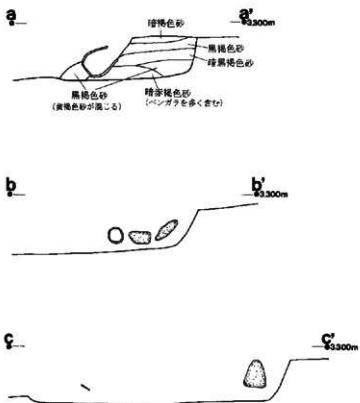
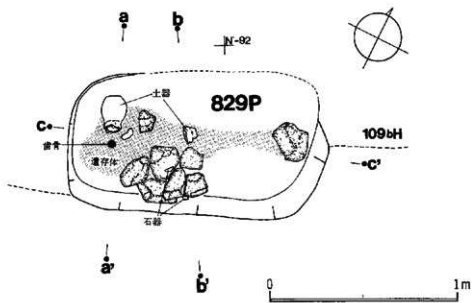
第204図-1は遺存体上部から出土した口径約9cm、器高20cmの中型土器。縄線文を多用した口縁部は縹約し胴部は壺状に丸みをもつ。1対の吊り耳から斜位・縦位の縦縄隆帯が円形貼付文に伸びて連結する。内外面に煤が付着する。2は口径7cm、器高6cmの小型土器。口縁部に並行して突瘤文と端端疋痕文が施され、1対の吊り耳から縦縄隆帯が垂下し連結する。2点とも統縄文字津内Ⅱa式(古)である。

3は口唇部に縄文が押捺され、内側からの突瘤文が施される。字津内Ⅱa式であるが胎土も比較的胎くやや異質な土器である。4は無文部に比較的大きい円形文が施される。5は下方からの刺突文が加わる。6は横走縄文の上部に半載状施文具による刺突文が施される。

石器は第202図-13と14は黒曜石製の削器。

## 小 括

本ピットは西頭位の統縄文字津内Ⅱa式(古)の土墳墓である。 (武田 修)



第208図 ピット829平面図

## ピ ッ ト 830

## 遺 構 (第205図)

本ピットはJ'96グリッドに位置する。規模は長軸約0.64m、短軸約0.50mの小楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約20cmを測る。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 831

## 遺 構 (第154図)

本ピットはD'83グリッドに位置する。規模は直径約1.50mの不整形円形を呈する。壁は西壁から北壁にかけて緩く立ち上がる。高さは確認面から約48cmを測る。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 832

## 遺 構 (第205図)

本ピットはH'91グリッドに位置する。規模は直径約0.70mの不整形円形を呈する。高さは確認面から約24cmを測る。

詳細な時期は不明である。

## 遺 物 (第204図-8・9)

埋土出土である。第204図-8は円形刺突文が施される。9は無文。2点とも縄文晩期中葉であろう。

(武田 修)

## ピ ッ ト 833・833a・833b

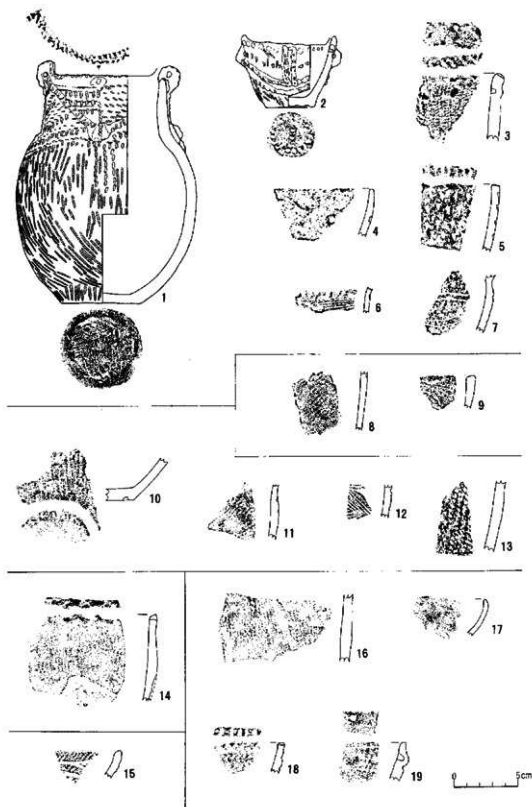
## 遺 構 (第205図)

これらのピットはH'90グリッドに位置する。ピット833の規模は長軸約1.37mの楕円形を呈する。高さは確認面から約23cmを測る。

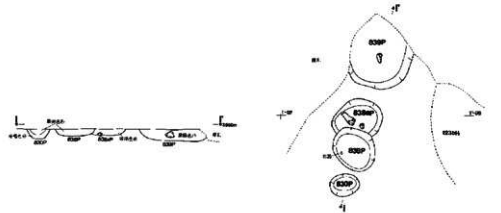
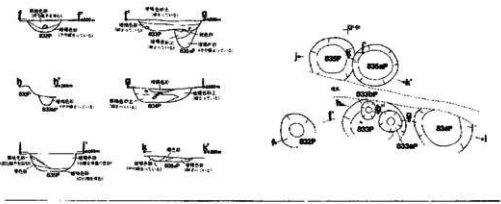
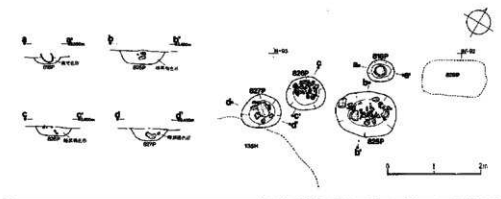
ピット833aと833bはピット833の北壁側を切り込んで構築されている。ピット833aの規模は直径約0.50mの小円形を呈する。壁高は確認面から約37cmを測る。833bの規模は直径約0.35mの小円形を呈し、壁高は確認面から約18cmを測る。

これらのピットの詳細な時期は不明である。





第204図 ビット829床面(1・2)・埋土(3~7)、832埋土(8・9)、833埋土(10~13)、833a埋土(14)、833b埋土(15)、834埋土(16~19)出土土器



第205図 ビット818、825、826、827、828、830、832、833、833a、833b、834、835、835a、838、838a、839平面図

遺物 (第204図-10~15)

全て埋土出土である。ピット833は第204図-10が縄文文字津内系の底部。11は口縁直下が無文となり、胴部は縄文と細い円形刺突文が施される。12は直線状の沈線文が施される。11・12は縄文晩期中葉であろう。13は縄文後期。

ピット833aは14が口唇部に刺突文、胴部は縦走縄文が施される。縄文晩期中葉であろう。

ピット833bは15が縄文後期。 (武田 修)

## ピット 834

遺構 (第205図)

本ピットはH'90グリッドに位置する。北壁側を掘乱による破壊を受けているものの規模は長軸約1.25mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約30cmを測る。

遺物 (第204図-16~19)

埋土出土である。第204図-16は懸糸文が施される。縄文文字津内系であろう。17は無文。器形は浅鉢と思われる。18は縄線文。19は内側からの突瘤文と2条の横位沈線文が施される。17・18は縄文晩期中葉であろう。19は縄文後期堂林式。 (武田 修)

## ピット 835・835a

遺構 (第205図)

ピット835はH'91グリッドに位置する。南壁側を掘乱による破壊を受けているものの規模は直径約0.94mの円形を呈する。

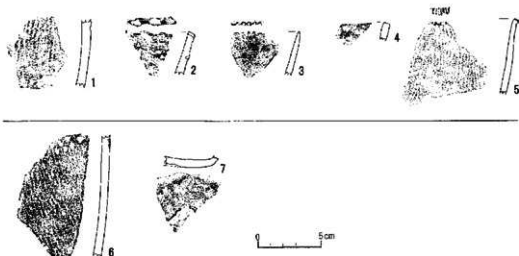
ピット835aはピット835と西壁上部で僅かに重複している。規模は直径約0.85mの円形を呈する。切り合いはピット835aが新しい。

遺物 (第206図-1~7, 第202図-15)

ピット835の埋土からは第206図-1・2の縄線文、3・4の無文、5の縦走縄文の土器が出土している。全て縄文晩期中葉であろう。

石器は第202図-15が有茎石鏃。黒曜石製。

ピット835aの埋土からは第206図-6が縄文に円形刺突文が施される。7は底部。2点とも縄文晩期であり、6は中葉であろう。 (武田 修)



第206図 ビット835埋土(1~5)、835a埋土(6・7)出土土器

## ビット 836

### 遺構 (第207図, 図版49-1)

本ビットはG'91グリッドに位置する。105号堅穴によって上部の大部分が削られている。規模は直径約1.10mの不整円形を呈し、壁は緩く立ち上がる。高さは確認面から約50cmを測る。埋土の大半は小角礫を含む暗茶褐色砂が堆積しており、これを取り除く段階で第208図-1に示す土器がまとまって出土した。上器は北側から中央部に向かって傾斜する様に出土した。この土器は平面図に示すとおり小破片も多く意識的に破壊されている様に見受けられる。

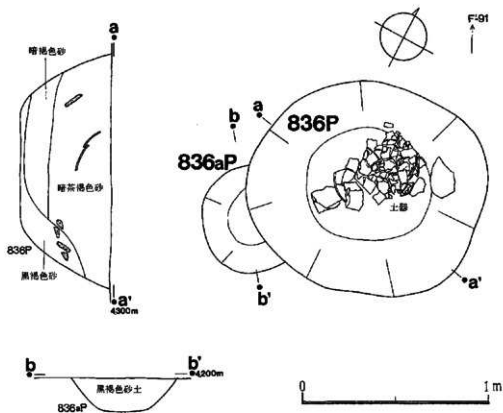
### 遺物 (第208図, 第209図-1~5, 第202図-16~18, 図版49-2・3)

第208図-1は埋土出土である。口径37cm、器高43cmの大型鉢形土器。口縁部に9条の縄線文があり、部分的に円形刺突文を横位、円形に配列する。口唇部は施文具による刻みが施され、小波状を呈する。

第209図-1は口径約34.3cmの大型鉢形土器。口縁部に6条の縄線文が施された縄文晩期後葉の弊舞式。2は無文、3は縄線文が施される。縄文晩期中葉であろう。4は沈線文、5は沈線文と突瘤文が施された縄文後期堂林式。

石器は第202図-16・17は無蓋石鏝。18は両面加工ナイフ。3点とも黒曜石製。

(武田 修)



第207図 ピット836、836a 平面図

## ピット 836a

### 遺構 (第207図)

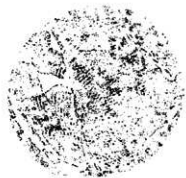
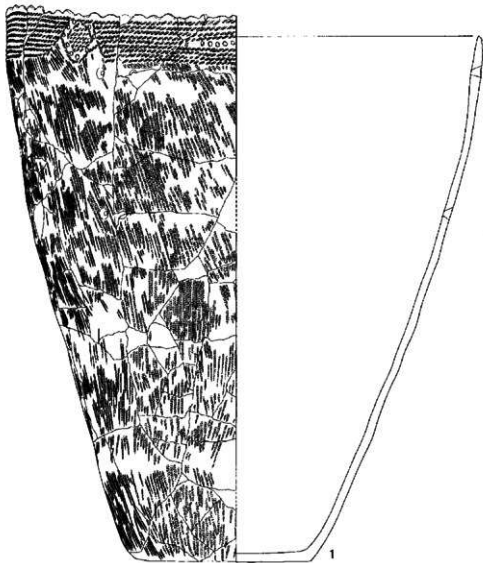
本ピットは G' 91 グリッドに位置する。ピット836に北壁の大半を切られている。直径約0.55 mの円形を呈し、壁高は確認面から約20cmを測る。

詳細な時期は不明である。

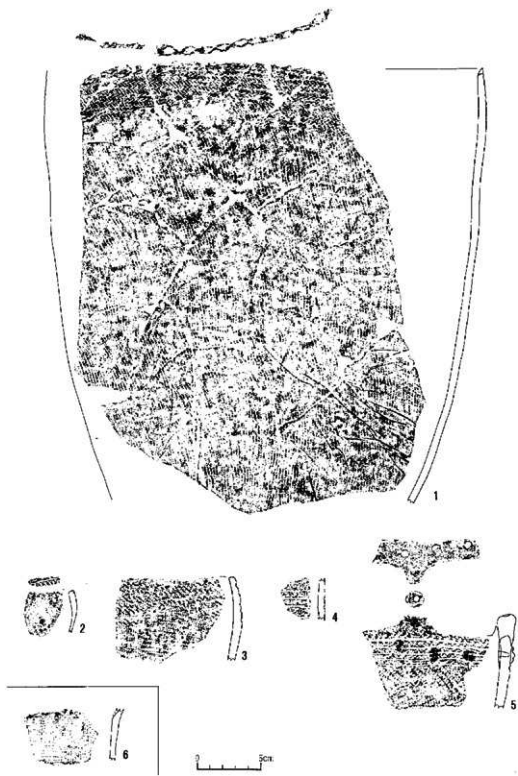
### 遺物 (第216図-1, 図版49-4)

第216図-1は表表面、右側縁と下端部が窪む。砂岩製。

(武田 修)



第208図 ビット836埋土(1)出土土器



第209図 ピット836埋土(1~5)、839埋土(6)出土土器

## ピ ッ ト 837

## 遺 構 (第210図)

本ピットはJ'93グリッドに位置する。第Ⅱ層の茶褐色砂を下げた段階で第210図の平面図に示す通り、角礫で構成された配石を検出した。配石は墳上部を覆う様に配置され、内部の遺存体と思われる暗赤褐色砂の上部まで及んでいる。角礫は最小のもので5cm、最大のもので幅約17cm、長さ約35cmのものがある。20~25cmのものを比較的多く使用している。規模は長軸約1.05m、短軸約0.73mの楕円形を呈する。壁は緩く立ち上がり高さは角礫上部から約25cmを測る。

歯骨は北壁側から検出され、白色粘土は東壁中央部から出土している。

## 小 括

上部に配石をもつ北頭位の土墳墓である。出土遺物が無く詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 838・838a

## 遺 構 (第205図)

ピット838はJ'96グリッドに位置する。規模は長軸約1.00m、短軸約0.80mの楕円形を呈する。壁は皿状に浅く立ち上がり、高さは確認面から約11cmを測る。

ピット838aはピット838に南壁側を切られている。規模は長軸約1.10m、短軸約0.90mの楕円形を呈する。ピット838同様の浅い掘り込みをもつもので、高さは確認面から約10cmを測る。床面から径10cmと30cmの角礫が出土している。

これら2基のピットの詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 839

## 遺 構 (第205図)

本ピットはI'96グリッドに位置する。南壁を除く大半が攪乱により破壊を受けているため全体の規模は不明であるが、形態は楕円形を呈すると思われる。埋土から径20cmの角礫が出土している。

詳細な時期は不明である。

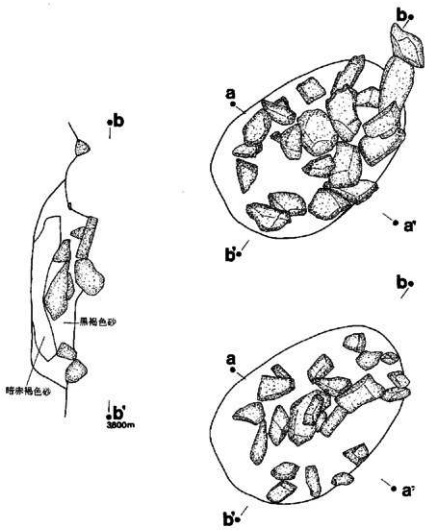
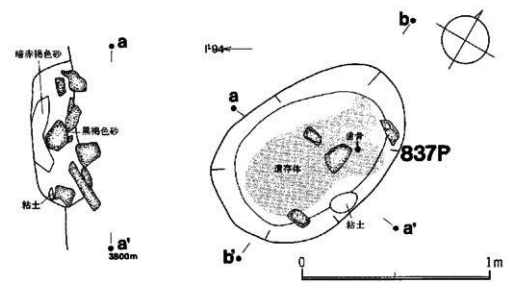
## 遺 物 (第209図-6, 第216図-2)

第209図-6は縄文晩期後葉の幣舞式。

石器は第216図-2は黒曜石製の搔器。

(武田 修)





第210図 ビット837平面図

## ピ ッ ト 840

## 遺 構 (第73図)

本ピットはH' 92, I' 92グリッドにまたがって位置する。南壁側が攪乱により破壊されているものの、形態は直径約0.70mの円形を呈する。壁は床面から丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から約35cmを測る。埋土は黒褐色砂と暗褐色砂が交互に堆積しており、暗褐色砂には5cmから10cm程の角礫が多量に混入する。

詳細な時期は不明である。

(武田 修)

## ピ ッ ト 841

## 遺 構 (第73図)

本ピットはH' 92グリッドに位置する。西壁側を130号堅穴によって切られているため正確な形態・規模は不明である。短軸は0.70mを測る。高さは確認面から約38cmを測る。

詳細な時期は不明である。

## 遺 物 (第211図-1~3, 第216図-3, 図版49-5)

第211図-1は宇津内系の底部。2は縄文後期堂林式。3も縄文後期。

石器は第216図-3は文式岩製の両面加工ナイフ。

(武田 修)

## ピ ッ ト 842

## 遺 構 (第73図)

本ピットはG' 92グリッドに位置する。130号堅穴により南壁側を切られるものの規模は直径約0.90mの円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり高さは確認面から約40cmを測る。

## 遺 物 (第211図-4・5)

第211図-4は横位の沈線文間に刺突文が施される。統縄文初頭であろう。5も胴部に2条の横位の沈線文をもつ。縄文晩期中葉であろう。埋土出土。

(武田 修)

## ピ ッ ト 842a

## 遺 構 (第73図)

本ピットはG' 92グリッドに位置する。ピット842と130号堅穴により大半を切られるものの規模は推定1.00mの円形を呈すると思われる。上部に直径約8~20cmの角礫が集中している。検出状況から本ピットに伴うものと判断された。壁は緩く立ち上がり高さは確認面から約40cm

を測る。

遺物 (第211図-6・7)

第211図-6は縄文晩期後葉の葬舞式。7は口唇部に縄文が施される。縄文晩期であろう。埋土出土。(武田 修)

## ピット 842b

遺構 (第73図)

本ピットはG'92グリッドに位置する。ピット842に西壁の一部と近代の掘乱により北東壁を切られるものの規模は約0.70mの円形を呈すると思われる。壁は浅く立ち上がり高さは確認面から約15cmを測る。

遺物 (第211図-8)

第211図-8は埋土から出土した縄文後期エリモB式である。(武田 修)

## ピット 843

遺構 (第73図)

本ピットはG'93グリッドに位置する。規模は長軸約1.40m、短軸約1.20mの不整形円形を呈する。床面は皿状である。高さは確認面から約10cmを測る極めて浅いピットである。

遺物 (第211図-9・10)

第211図-9は横位の縄文を地文とし、無文の凹帯をもつ。10は2条の筋をもつ施文具を用いた沈線文が施される。この2点は縄文晩期であろう。埋土出土。(武田 修)

## ピット 844

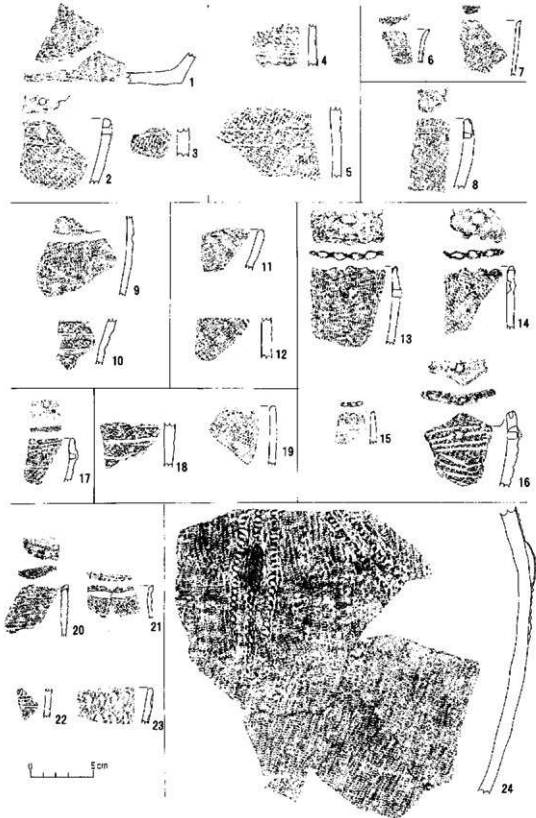
遺構 (第13図)

本ピットはI'93グリッド杭下部に位置する。規模は直径約1.10mの円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約60cmである。各埋土層には数cmから数十cmの角礫を多量に含む。

遺物 (第211図-11・12, 第216図-4~6, 図版49-6~8)

第211図-11の口唇部は内外から削り取って断面が三角形に仕上げている。口縁下部には2本単位の弧線文を施す。続縄文初頭であろう。12は縄文後期。全て埋土出土。

石器は第216図-4が有基石鏃。5は「X」字状の異形石器。6は片刃磨製石斧。4・5は黒曜石製、6は緑色泥岩製である。(武田 修)



第211回 ビット841埋土(1~3)、842埋土(4・5)、842a埋土(6・7)、842b埋土(8)、843埋土(9・10)、844埋土(11・12)、845埋土(13~16)、846埋土(17)、848埋土(18・19)、850埋土(20~23)、851埋土(24)出土土器

## ピ ッ ト 845

### 遺 構 (第73図)

本ピットはI' 91グリッドに位置する。大半を近代の攪乱により破壊されているため正確な規模・形態は不明である。埋土には小角礫を多く含む。壁高は確認面から約30cmを測る。

### 遺 物 (第211図-13~16)

第211図-13・14は内側から突瘤文が施される。縄文晩期前葉であろう。15は無文。内面の一部に赤色顔料が付着した縄文晩期の土器。16は口唇部の山形突起に刺突文が施され、口縁部に突瘤文と横位、山形沈線文をもつ縄文後期堂林式。埋土出土。(武田 修)

## ピ ッ ト 846

### 遺 構 (第73図)

本ピットはH' 91グリッドに位置する。南西壁側を近代の攪乱により破壊されているものの直径約0.80mの円形を呈する。床面は小さい。壁高は確認面から約50cmを測る。

### 遺 物 (第211図-17)

第211図-17は突瘤文と2本単位の横位、斜位沈線文をもつ。縄文後期堂林式。

(武田 修)

## ピ ッ ト 848

### 遺 構 (第73図)

本ピットはG' 93グリッドに位置する。西壁と北壁の一部を近代の攪乱により破壊されているものの直径約1.55mの円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり高さは確認面から約40cmを測る。埋土には数cmから数十cmの角礫を僅かに含む。

### 遺 物 (第211図-18・19)

第211図-18は横位の沈線文を施す。続縄文初頭であろう。19は縄文晩期。埋土出土。

(武田 修)

## ピ ッ ト 850

## 遺 構 (第212図, 図版50-1)

本ピットはG'95グリッドに検出された。攪乱を受けているため長軸、短軸とも不明であるが楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から33cmを測る。ピット上面から大型の礫が3点検出されていることから配石墓の可能性も考えられる。床面からは遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出された。遺存体の西側からは歯骨が検出され、歯骨の南側にはベンガラも検出されている。ベンガラの中から第216図-7の石器1点と琥珀玉1点が出土し、ベンガラの南側から黒曜石製のフレーク2点が出土している。

## 遺 物 (第211図-20~23, 第216図-7・8)

第211図-20~23は埋土出土である。20~22は縄文晩期中葉。20は縄線文、21・22は沈線文、23は瓜形文をもつ縄文晩期前葉。いずれも埋土出土。

石器は第216図-7はベンガラの中から出土した黒曜石の搔器。8は琥珀製の平玉。

## 小 括

本ピットは規模は不明であるが楕円形を呈する土墳墓である。長軸は東-西方向であり、頭位は西である。時期はピット内からの土器の出土は見られないが、ピットの形態と琥珀玉が出土していることから統縄文初頭か統縄文字津内Ⅱa式期と考えられるが断定はできない。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 851

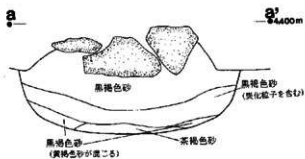
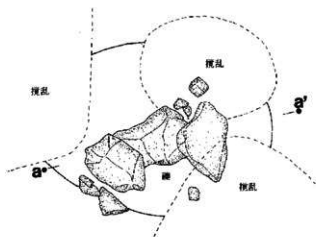
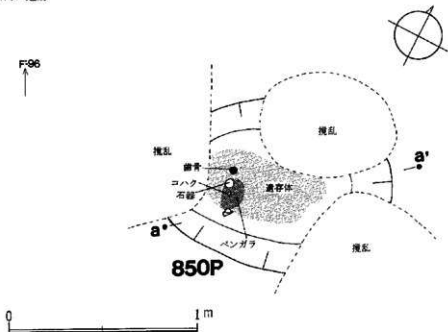
## 遺 構 (第214図, 図版50-2)

本ピットはG'95グリッドに検出された。規模は南側と西側に攪乱を受けているが径約0.80mの円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から38cmを測る。ピットの上面には礫が8点検出されていることから配石墓の可能性も考えられる。床面からは遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出された。

## 遺 物 (第211図-24)

第211図-24は埋土出土の統縄文字津内式。

(佐々木 寛)



第212図 ビット850平面図

## ピット 851a

## 遺構 (第214図)

本ピットはピット851の北側に検出された。規模は短軸は不明であるが、長軸0.60mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は53cmを測る。遺物は出土していない。(佐々木 寛)

## ピット 852

## 遺構 (第214図)

本ピットはピット850の北側約0.60mにあり、規模は長軸約0.88m、短軸約0.78mの楕円形を呈し、壁高は確認面から38cmを測る。

## 遺物 (第215図-1・2, 第216図-9)

第215図-1・2は埴土出土の縄文晩期中葉。

石器は第216図-9は黒曜石製の有茎石鏃。

(佐々木 寛)

## ピット 853

## 遺構 (第214図)

本ピットはE'94グリッドに位置し、規模は径約0.64mの円形を呈する。壁高は確認面から35cmを測る。(佐々木 寛)

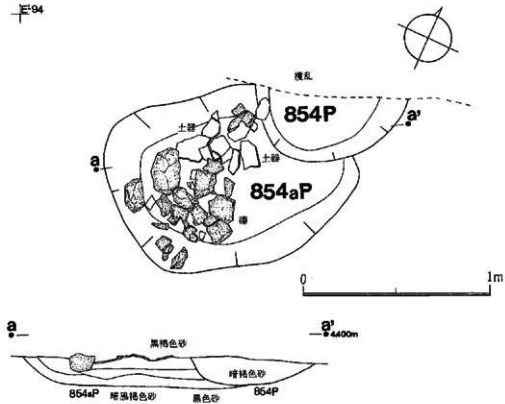
## ピット 854

## 遺構 (第213図)

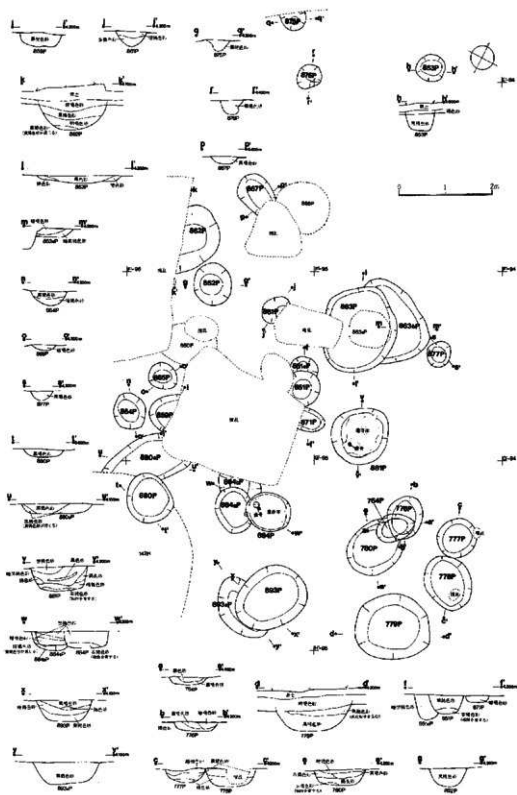
本ピット854はF'93グリッドに位置し、北側の大半が攪乱を受けているため規模、形態ともに不明である。壁高は確認面から15cmを測る。(佐々木 寛)



E-94



第213圖 ピット854、854a 平面図



第214圖 ①-1764, 776, 777, 778, 779, 780, 851, 851a852, 853, 859, 861, 862, 863, 863b, 864, 865, 867, 871, 875, 876, 877, 880, 880a, 881, 884, 884 a, 884b, 893, 893a 平面圖

## ピ ッ ト 854a

### 遺 構 (第213図)

本ピットはピット854の南側にあり、規模は長軸約1.25m、短軸約0.95mの不整形を呈する。壁高は確認面から18cmを測る。ピット上面には礫と第215図-5の土器が出土している。

### 遺 物 (第215図-3~8, 図版51-1・2)

第215図-3は統縄文字津内式。4は口縁部に縄線文を巡らし、逆「V」字状に降帯を垂下させた統縄文初頭。口径16.5cm、器高は不明。5は口縁部に円形刺突文を巡らし、口縁部と肩部にそれぞれ4個の貼瘤を配した統縄文初頭。口径15.0cm、器高は底部が欠失しているため不明。6は統縄文の底部。7は縄文晩期中葉。8は縄文後期。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 855

### 遺 構 (第222図)

本ピットはD'94グリッドに位置し、規模は長軸約1.32m、短軸約1.08mの楕円形を呈する。壁高は確認面から26cmを測る。ピット上面には礫が3点検出された。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 856

### 遺 構 (第182図)

本ピットはD'92グリッドに位置し、北側の大半が攪乱を受けているため規模、形態は不明である。壁高は確認面から7cmと浅いが、元来はもう少し上の層から掘りこまれたものと考えられる。埋土はベンガラを含んだ赤褐色砂層で、床面には遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出された。

### 遺 物 (第217図-1)

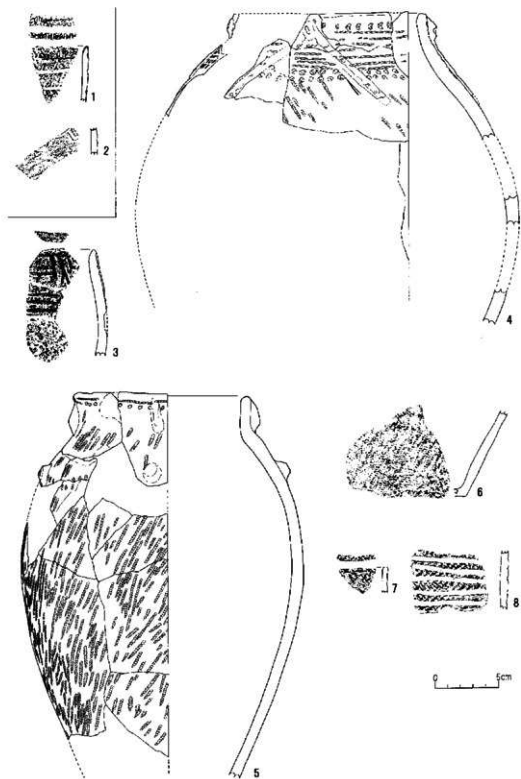
第217図-1は埋土出土の縄文晩期中葉。

(佐々木 寛)

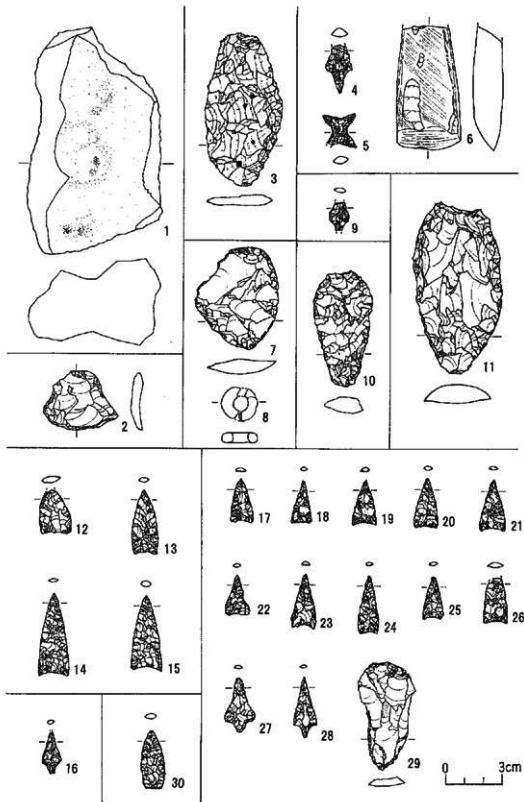
## ピ ッ ト 856a

### 遺 構 (第182図)

本ピットは856の北東側にあり、ピット856同様北側の大半が攪乱を受けているため規模、形態ともに不明である。壁高は確認面から12cmを測る。ピットの埋土はベンガラを含んだ赤褐色砂1層のみであることから土壌墓とも考えられる。



第215図 ビット 852埋土(1・2)、854a埋土(3~8)出土土器



第216図 ビット863a埋土(1)、839埋土(2)、841埋土(3)、844埋土(4~6)、850床面(7)・埋土(8)、852埴(9)、856a埋土(10)、856b埋土(11)、863a遺体上(12~15)、864埋土(16)、868埋土(17~29)、869埋土(30)出土石器

## 遺物 (第216図-10, 図版51-3)

第216図-10は黒曜石製のナイフ。

(佐々木 寛)

## ピット 856b

## 遺構 (第182図)

本ピットは856aの南東側にあり、規模約1.58m、短軸約1.30mの楕円形を呈し、壁高は確認面から50cmを測る。ピットの南東側から北東側へと攪乱を受けている。

## 遺物 (第216図-11, 図版51-4)

第216図-11は黒曜石製のナイフ。

(佐々木 寛)

## ピット 857

## 遺構 (第222図)

本ピットはD'94グリッドに検出された。規模は径約1.50mの不整形を呈し、壁高は確認面から27cmと浅い皿状を呈する。

## 遺物 (第217図-2)

第217図-2は埴土出土の統縄文。

(佐々木 寛)

## ピット 858

## 遺構 (第182図)

本ピットはD'92グリッドに位置するが、北西側の大半が攪乱を受けているため規模、形態ともに不明である。壁高は確認面から10cmと浅い、埋土はベンガラを含んだ赤褐色砂1層のみであることから土墳墓の可能性も考えられる。遺物は出土していない。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 859

### 遺 構 (第214図)

本ピットはG'95グリッドに検出された。東側の大半が攪乱を受けているため規模、形態ともに不明である。壁高は確認面から30cmを測る。埋土は黒褐色砂1層のみであるが、埋土上層からは第217図-3の土器が出土している。

### 遺 物 (第217図-3~5, 図版51-5)

第217図-3は口縁部に1対の突起をもち、突起から底部まで2条の微隆帯を垂下させる。その他に6箇所3条の微隆帯を口縁部から底部まで垂下させ横走する微隆帯でそれぞれを連結する。口径10.5cm、器高10.5cm。4・5は沈線を施した縄文晩期中葉。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 860・860a

### 遺 構 (第222図)

ピット860はピット857の北側0.40mに位置する。規模は径約0.56mの円形を呈し、壁高は確認面から18cmを測る。遺物は出土していない。

ピット860aはピット860の東側にあり、長軸は不明であるが、短軸0.32mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から10cmを測る。(佐々木 寛)

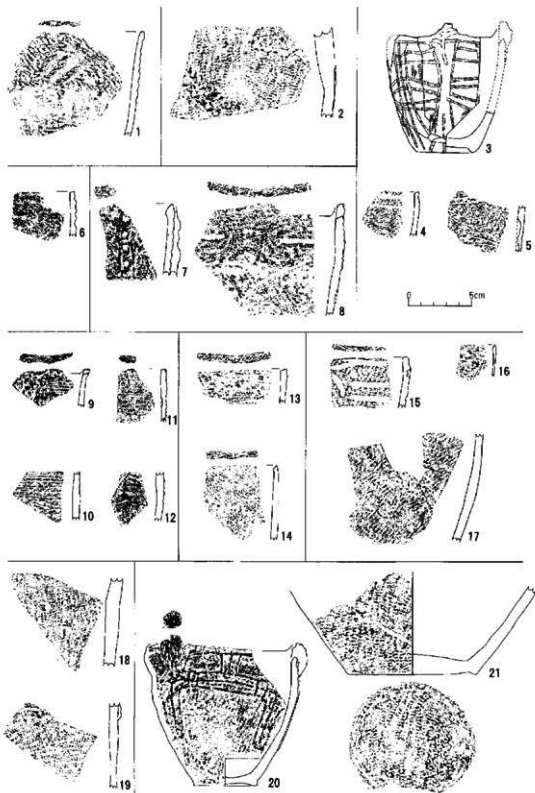
## ピ ッ ト 861

### 遺 構 (第214図)

本ピットはG'95グリッドに位置する。規模は短軸は不明であるが長軸約0.64mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から32cmを測る。埋土中には骨片が少量認められた。

### 遺 物 (第217図-6)

第217図-6は埋土出土の縄文晩期中葉。(佐々木 寛)



第217図 ビット 856埋土(1)、857埋土(2)、859埋土(3・5)、861埋土(6)、862埋土(7・8)、  
863埋土(9~12)、863a埋土(13・14)、863b埋土(15~17)、864埋土(18・19)、  
866埋土(20・21)出土土器



## ピット 862

### 遺構 (第214図)

本ピットはピット852の西側にあるが、西側の大半が川岸の崩落により欠失されているため規模、形態は不明である。壁高は確認面から62cmを測る。ピットの埋土には骨片が少量認められた。

### 遺物 (第217図-7・8)

第217図-7・8は縄線文を施した縄文晩期中葉。

(佐々木 寛)

## ピット 863

### 遺構 (第214図)

本ピットはG'94グリッドに位置し、規模は長軸約1.90m、短軸約1.56mの楕円形を呈する。壁高は確認面から15cmと浅い皿状である。埋土中には骨片が少量認められた。

### 遺物 (第217図-9~12)

第217図-9~12はいずれも縄文晩期中葉。9・10は沈線。11は縄線文。12は沈線と縄線文。

(佐々木 寛)

## ピット 863a

### 遺構 (第218図)

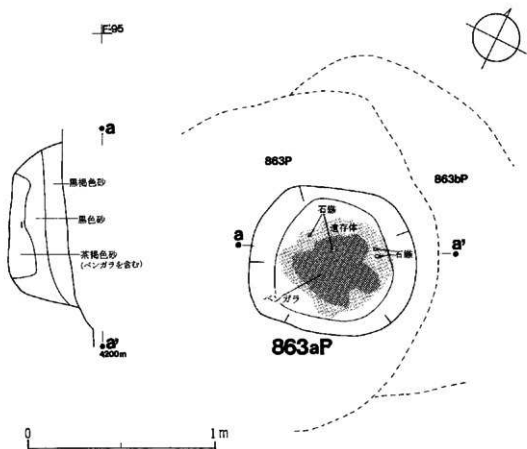
本ピットはピット863の床面精査中に検出された。規模は長軸約0.89m、短軸約0.77mの不整楕円形を呈する。壁高は確認面から31cmを測る。床面には遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出され、遺存体にはベンガラも認められた。遺存体の上からは第216図-12~15の石鏃が4点出土している。埋土中には骨片が少量認められた。

### 遺物 (第217図-13・14, 第216図-12~15, 図版51-6~9)

第217図-13・14は埋土出土の縄文晩期。

石器は第216図-12~15の無茎石鏃は黒曜石製。

(佐々木 寛)



第218図 ビット863a 平面図

## ピット 863b

### 遺構 (第214図)

本ピットはビット863の北東側に検出された。大部分がビット863に切られているため規模、形態は不明であるが、壁高は確認面から18cmを測る。埋土中には骨片が少量認められた。

### 遺物 (第217図-15~17)

第217図-15~17は埋土出土の縄文晩期。

(佐々木 覚)

## ピット 864

### 遺構 (第214図)

本ピットはピット859の西側0.10mにあり、規模は長軸約0.80m、短軸約0.68mの楕円形を呈する。壁高は確認面から30cmを測る。

### 遺物 (第217図-18・19, 第216図-16)

第217図-18は統縄文。19は縄文晩期。

石器は第216図-16は埋土出土の黒曜石製の有基石鏃。

(佐々木 寛)

## ピット 865

### 遺構 (第214図)

本ピットはピット864の北側0.40mに位置し、規模は径約0.60mの円形を呈する。壁高は確認面から11cmを測り、浅い皿状である。

遺物は出土していない。

(佐々木 寛)

## ピット 866

### 遺構 (第219図)

本ピットはF'95グリッドに検出された。規模、形態は南側が攪乱を受けているが、径約1.20mの円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から50cmを測る。埋土中から第217図-20の土器が出土している。床面には遺存体と思われる粘件をもった茶褐色砂が検出された。遺存体の上から白色粘土が1点出土している。

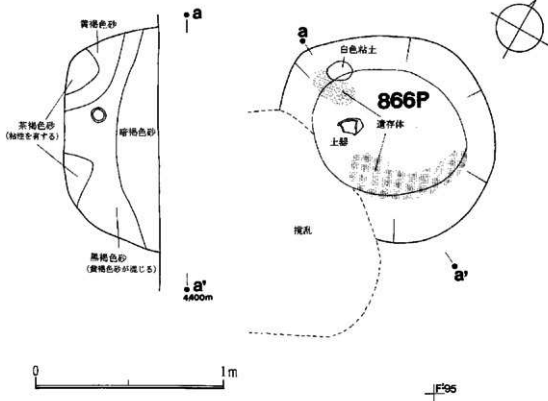
### 遺物 (第217図-20・21)

第217図-20・21は埋土出土。20は口径は不明であるが器高11.6cm。統縄文字津内Ⅱb式。21は統縄文字津内式の底部。

### 小括

本ピットは径約1.20mの円形を呈する土墳墓である。時期は出土土器から統縄文字津内Ⅱb式期と考えられる。

(佐々木 寛)



第219図 ビット 866平面図

## ピット 867

### 遺構 (第214図)

本ピットはビット866の西側に接して検出された。南東側が攪乱を受けているため、長軸は不明であるが短軸約0.68mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から16cmを測る。遺物は出土していない。(佐々木 寛)

## ピット 868

### 遺構 (第221図)

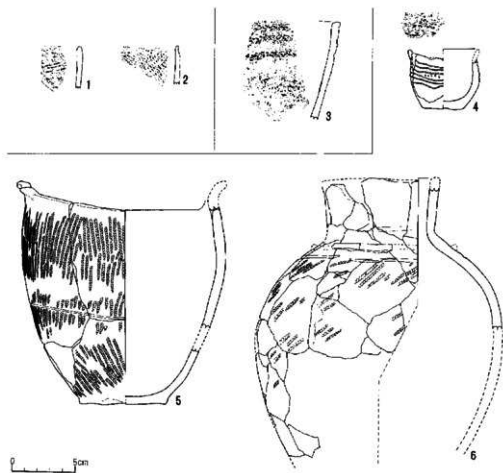
本ピットはF'93グリッドに位置する。規模は長軸約1.33m、短軸約1.09mの楕円形を呈し、壁高は確認面から40cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面には遺存体と思われる粘性を

もった茶褐色砂が見られた。遺存体の上層から石礫が出土している。

**遺物** (第220図-1・2, 第216図-17~29, 図版51-10~22)

第220図-1・2は縄文晩期。

石器は第216図-17~26は無茎石礫。27・28は有茎石礫。29は削器。26・28は頁岩製。それ以外は黒曜石製。 (佐々木 寛)



第220図 ビット868埋土(1・2)、869埋土(3)、872床面(4)・埋土(5・6)出土石器

## ピ ッ ト 868a

## 遺 構 (第221図)

本ピットはピット868の南西側に接して検出された。規模は径約1.05mの不整形を呈し、壁高は確認面から34cmを測る。床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出され、北側の遺存体から歯骨が検出された。遺物は黒曜石のフレークが出土したのみである。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 868b

## 遺 構 (第221図)

本ピットはピット868の西側に検出された。東側がピット868に切られているため長軸は不明であるが、短軸は約0.76mの楕円形と思われる。壁高は確認面から20cmを測る。床面の北西側から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出された。遺物は黒曜石のフレークが出土したのみである。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 869

## 遺 構 (第222図)

本ピットはC'93グリッドに位置し、径約0.90mの不整形を呈する。壁高は確認面から47cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土土層の暗褐色砂層から鏝が12点検出されている。床面には遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出された。埋土中から第216図-30の石鏝が出土している。

## 遺 物 (第220図-3, 第216図-30)

第220図-3は埋土出土の縄文晩期中葉。

石器は第216図-30は埋土出土の黒曜石製の無茎石鏝。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 870

## 遺 構 (第221図)

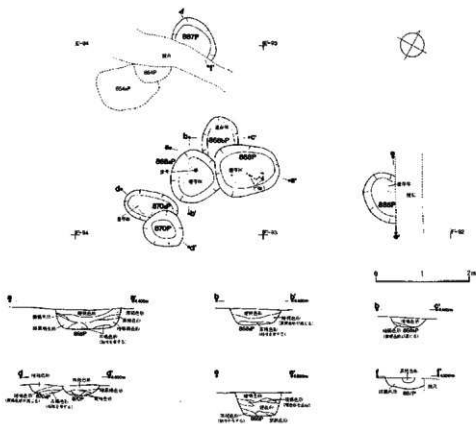
本ピットはピット868aの南側約0.30mに検出された。径約0.80mの不整形を呈する。壁高は確認面から23cmを測る。

(佐々木 寛)

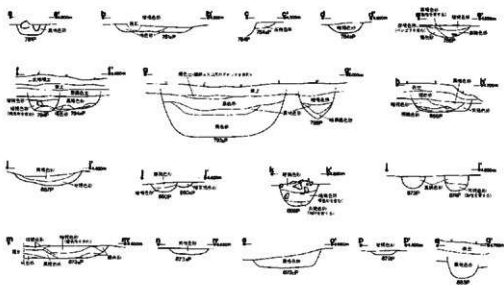
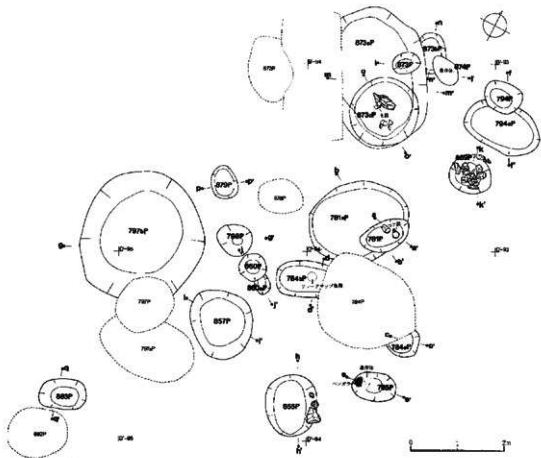
## ピット 870a

### 遺構 (第221図)

本ピットはピット870の北西側に位置し、規模は長軸約1.14m、短軸約0.63mの楕円形を呈する。壁高は確認面から20cmを測る。床面からは遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出された。  
 (佐々木 寛)



第221図 ピット868、868a、868b、870、870a、885、887平面図



第222図 ビット781, 781a, 784a, 784b, 785, 794, 794a, 797b, 798, 855, 857, 860, 860a, 869, 873, 873a, 873b, 873c, 874, 879, 883平面図



## ピット 871

## 遺構 (第214図)

本ピットはピット851の南東側にあり、規模は長軸の東側が攪乱を受けているため不明であるが短軸約0.46mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から14cmを測る。

遺物は出土していない。

(佐々木 寛)

## ピット 872

## 遺構 (第223図, 図版52, 図版53-1)

本ピットはB'94, C'94グリッドに検出された。規模は長軸約1.42m、短軸は東側が攪乱を受けているが約1.10mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から80cmを測り、壁は垂直に立ち上がる。埋土の北側上面から第220図-5の土器が一括出土しており、埋土上層の暗褐色砂層からは6の土器が出土している。床面には遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められ、遺存体のところどころに少量ではあるがベンガラが散布されている。北西側の遺存体の上から白色粘土塊1点と黒曜石のフレーク1点、棒状原石1点が出土している。遺存体の北西側から歯骨が検出されている。歯骨の東側と南側の遺存体の上から琥珀製の平玉と飾り玉が計11点出土している。床面の西壁際から黒曜石の搔器1点とフレークが1点出土し、南東壁際からは小型土器が2点出土している。床面の壁際から径10~14cm、深さ6~8cmの柱穴が5本検出された。

## 遺物 (第220図-4~6, 第226図-1~18, 図版53-2~13)

第220図-4は床面出土の小型土器。口径6.5cm、器高4.5cm。口縁部が外反し、口唇部下に5条の横走する沈線文を巡らし、その下に波状の沈線文を1条施す。土器の内側にも1本の沈線文を渦巻き状に3段巡らしている。図示していないが口径、器高共に約5.0cmの無文の小型土器は遺存状態が非常に悪いため復元は出来なかった。5は埋土出土。口縁部の上面観は楕円形で口径長軸16.0cm、短軸12.8cm、器高17.9cm長軸上の口唇部に1対の外反する突起をもつ。胴部は中央に横走する沈線文を1条巡らすが地紋の縦走する縄文のみである。6はピット上層から出土した口径8.8cm、胴部19.5cmの壺形土器。口縁部に沈線文を2条巡らす。胴部は斜行する地紋の縄文のみである。

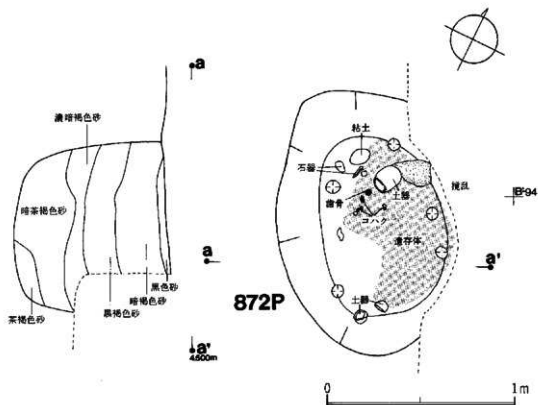
石器は第226図-1~13は床面出土。1は無基石鏃。2は搔器。3~6は琥珀製の飾り玉。7~13は琥珀製の平玉。埋土からは14・15が両面加工ナイフ。16・17は削器。18は磨製石斧。15は頁岩製、18は泥岩製、それ以外は黒曜石製。

## 小括

本ピットは長軸約1.42m、短軸約1.10mの楕円形を呈する土壌墓である。長軸は北西-南東

方向にあり、頭位は北西である。時期は統縄文初頭又は統縄文文字津内Ⅱa式期と考えられる。

(佐々木 寛)



第223図 ビット872平面図

## ピ ッ ト 873・873a

### 遺 構 (第222図)

ピット873はA'93, B'93グリッドにあり、規模は長軸約0.60m、短軸約0.42mの楕円形を呈し、壁高は確認面から26cmを測る。

ピット873aはピット873の周囲に検出され、規模は長軸3.00m、短軸は西側が攪乱を受けているため不明であるが、楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から25cmを測る。

### 遺 物 (第224図-1~5, 第226図-19)

ピット873aの埋土から出土。第224図-1は縄縄文。2~5は縄文晚期。

石器は第226図-19は黒曜石製の有基石鏃。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 873b・873c

### 遺 構 (第222図)

ピット873bは873aの北東側にあり、長軸約0.86m短軸は南西側がピット873aに切られていたため不明である。楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から14cmを測る。

遺物は出土していない。

ピット873cはピット873aの床面精査中に検出され、径約1.45mの円形を呈し、壁高は確認面から42cmを測る。床面直上から大型の砥石が検出され、砥石の上から第224図-6の土器が出土している。

### 遺 構 (第224図-6~9)

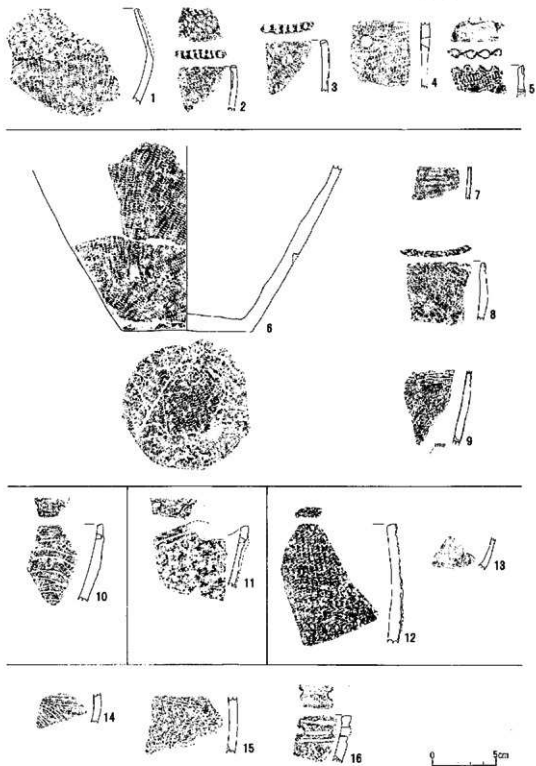
ピット873cの埋土からは第224図-6~9が出土している。6は縄縄文字津内Ⅱa式の底部。木葉痕が見られる。7・8は縄文晚期。9は縄文後期。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 874

### 遺 構 (第222図)

本ピットはピット873の東側約0.30mに検出され、規模は長軸約0.70m、短軸約0.46mの楕円形を呈する。壁高は確認面から33cmを測る。床面の上には遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出された。遺物は埋土中から黒曜石のフレイクが2点出土したのみである。

(佐々木 寛)



第224圖 ビット873a埋土(1~5)、873c埋土(6~9)、877埋土(10)、878埋土(11)、880a埋土(12・13)、881埋土(14~16)出土土器

## ピット 875

### 遺構 (第214図)

本ピットはE'95グリッドに検出され、北西側が攪乱を受けているが径約0.50mの円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から22cmを測る。(佐々木 覚)

## ピット 876

### 遺構 (第214図)

本ピットはピット875の南東側約0.75mにあり、規模は径約0.55mの円形を呈し、壁高は確認面から30cmを測る。

### 遺物 (第226図-20)

第226図-20は埋土から出土した黒曜石製の有茎石鏃。(佐々木 覚)

## ピット 877

### 遺構 (第214図)

本ピットはピット863bの東側にあり、径約0.50mの円形を呈する。壁高は確認面から20cmを測る。

### 遺物 (第224図-10)

第224図-10は埋土出土の縄文後期堂林式。(佐々木 覚)

## ピット 878

### 遺構 (第225図)

本ピットはC'94グリッドに位置し、規模は長軸約0.94m、短軸約0.74mの楕円形を呈する。壁高は確認面から40cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出され、遺存体の一部からはベンガラが検出された。南西側の遺存体の上からは石斧1点、琥珀製の飾り玉3点、琥珀製の平玉1点が検出され、北側の遺存体の上からは琥珀製の飾り玉1点が検出されている。北壁際の床面直上から削器1点が出土している。床面には径14~24cm、深さ6~7cmの柱穴が2本検出されている。

### 遺物 (第224図-11, 第226図-21~27, 図版54-1~7)

第224図-11は縄文晩期。埋土出土。

石器は床面直上から第226図-21は黒曜石の削器である。22は滑石製の磨製石斧。23~26は

琥珀の飾り玉。27は琥珀製の平玉。

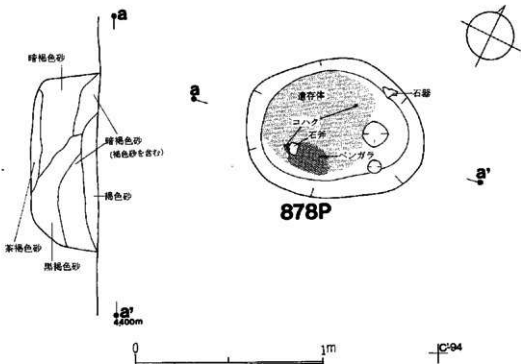
### 小 括

本ビットは長軸約0.94m、短軸約0.74mの楕円形を呈する土壇墓と思われる。長軸は北東—南西方位にあるが頭位、時期とも不明である。  
(佐々木 寛)

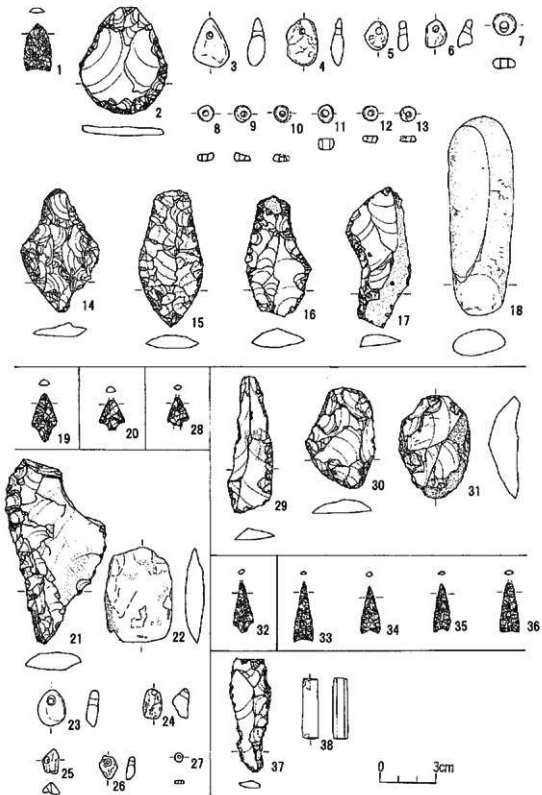
## ビット 879

### 遺 構 (第222図)

本ビットはビット878の西側約0.45mに位置し、規模は長軸約0.70m、短軸約0.54mの楕円形を呈する。壁高は確認面から9cmを測り、浅い皿状である。遺物は出土していない。  
(佐々木 寛)



第225図 ビット878P平面図



第226圖 ビット872床面(1~13)・埋土(14~18)、873a 埋土(19)、876埋土(20)、878床面直上(21)・遺体上(22~27)、880a 坪上(28)、882床面(29~31)、883埋土(32)、884遺体上(33~36)、884a 埋土(37・38)山土石器・琥珀玉・管玉

## ピ ッ ト 880・880a

## 遺 構 (第214図)

ピット880は142号竪穴の北壁上に検出された。規模は長軸約1.04m、短軸約0.94mの楕円形を呈する。壁高は確認面から15cmを測る。

ピット880aはピット880の北西側に位置し、規模は北東側が攪乱を受け、南西側を142号竪穴に切られているため長軸は不明であるが、短軸約1.00mの長円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から20cmを測る。

## 遺 物 (第224図-12・13, 第226図-28)

ピット880aからは第224図-12は縄文文字津内Ⅱb式。13は縄文晩期。

石器は第226図-28が埋土出土の黒曜石製の有茎石鏃。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 881

## 遺 構 (第214図)

本ピットはG'94グリッドに位置し、規模は径約1.30mの不整形を呈する。壁高は確認面から52cmを測る。床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出され、遺存体の南側からは歯骨が検出されている。

## 遺 物 (第224図-14~16)

第224図-14~16は縄文後期。16は堂林式。

## 小 括

本ピットの頭位は南方向である。時期は不明である。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 882

## 遺 構 (第227図, 図版54-8)

本ピットはC'95, D'95グリッドに検出された。規模は長軸約1.26m、短軸約1.05mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約75cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピット上面には大小の礫が16点検出された。ピット下層の暗褐色砂層からも礫が13点出土している。床面には遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が認められた。遺存体の中から完形土器が2点と石器7点、黒曜石原石1点が検出されている。土器下の遺存体の北西側の2箇所から歯骨が検出されている。

## 遺 物 (第228図, 第229図-1~9, 第226図-29~31, 図版54-9~13)

第228図-1は口縁部の長軸が36.0cm、短軸43.5cm器高17.5cmの角形浅鉢である。口縁部の



長軸上の一方に4個、もう一方に3個の突起をもち、短軸上に2個1対の突起をもつ。口唇部の内側と上には縄線文が施されている。4個の突起の下には2個の孔があり、内側から穿孔されている。縄文晩期常舞式。

第229図-1は上面観は楕円形で2個1対の突起を2対もち、底部は方形を呈する。口径は長軸11.8cm、短軸10.8cm、器高21.0cmを測る。長軸上の両方の突起の下には孔をもつが、これらは外から穿孔されている。くびれた胴部に磨消しによる無文帯があり、無文帯の上と下を列点文が区画している。無文帯の上は細い沈線と列点文が施され、無文帯の下は渦巻き状に細い沈線と列点文を施している。縄文は底部のみに施されている。縄文晩期常舞式。

石器は第226図-29～31が黒曜石製の石器。

### 小 括

本ピットの長軸は北東-南西方向であり、頭位は北西方位である。時期はピット内から出土した土器から縄文晩期常舞式と考えられる。 (佐々木 覚)

## ピ ッ ト 883

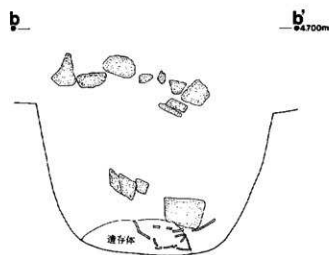
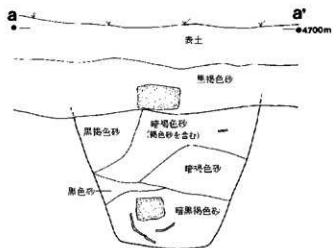
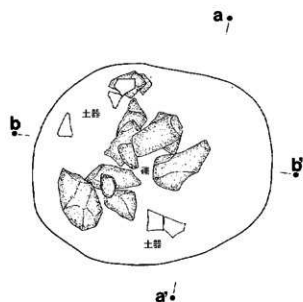
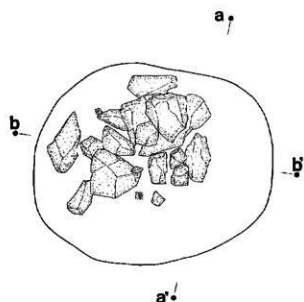
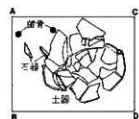
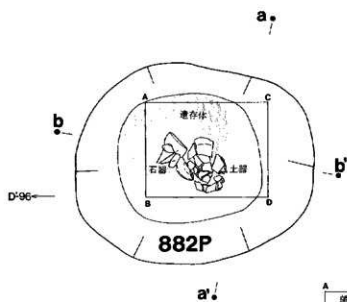
### 遺 構 (第222図)

本ピットはピット882の北側に検出された。規模は長軸約1.00m、短軸約0.63mの楕円形を呈する。壁高は確認面から30cmを測る。

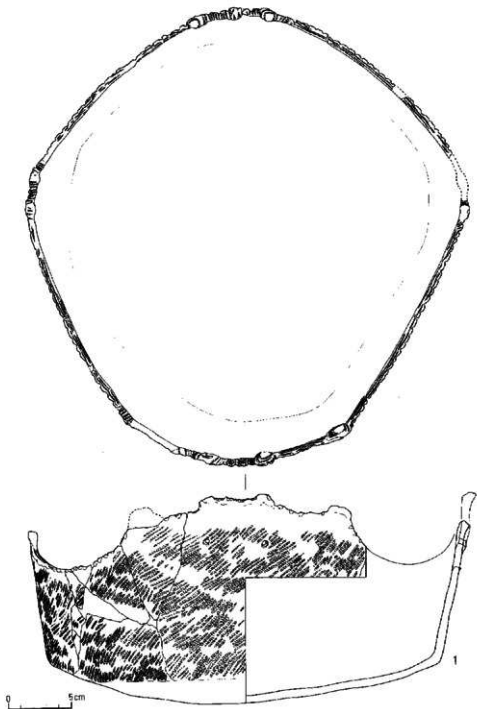
### 遺 物 (第229図-10～12, 第226図-32)

第229図-10～12は埋土出土。縄文晩期。

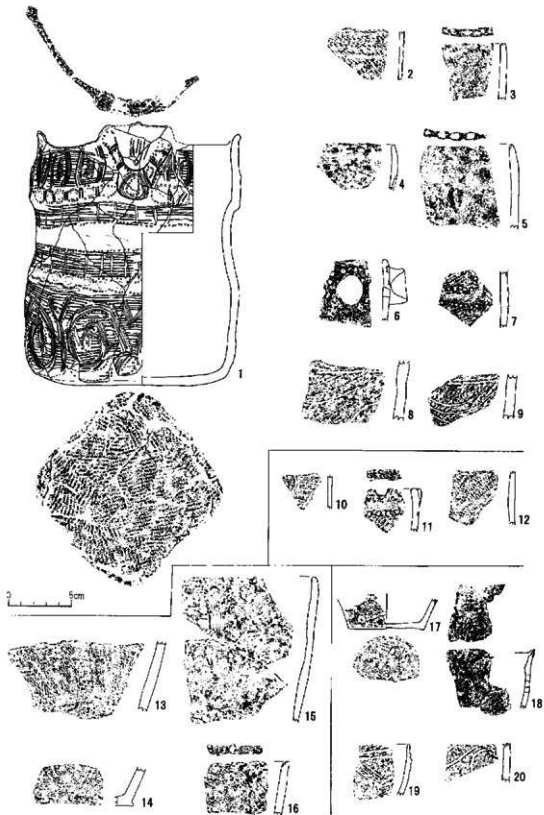
石器は埋土から第226図-32の黒曜石製の有茎石鏃が出土している。 (佐々木 覚)



第227図 ビット882平面図



第228圖 ビット882埋土(1)出上上器



第229図 ビット882床面(1~5)・埋土(6~9)、883埋土(10~12)、884埋土(13~16)、  
884a埋土(17~20)出土土器

## ビ ッ ト 884

## 遺 構 (第214図)

本ビット H' 95 グリッドに位置する。規模は長軸約0.97m、短軸約0.80mの楕円形を呈する。壁高は確認面から35cmを測る。床面から遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出された。遺存体の西側からは歯骨が検出され北東側の上面からは石鏡が4点出土している。西側の床面には径24cm、深さ12cmの柱穴が1本検出された。

## 遺 物 (第229図-13~16, 第226図-33~36)

土器はすべて埋土出土。第229図-13・14は統縄文。14は底部。15・16は縄文晩期。

第226図-33~36は遺存体の上面出土の黒曜石製の無蓋石鎌。

## 小 括

本ビットは楕円形を呈する土壌墓と考えられ、長軸は東-西方向で頭位は西である。時期は不明である。 (佐々木 寛)

## ビ ッ ト 884a・884b

## 遺 構 (第214図)

ビット884aはビット884の南西側に検出された。規模は長軸約0.96m、短軸約0.78mの楕円形を呈する。壁高は確認面から30cmを測る。北東側の床面から径20cm、深さ8cmの柱穴が1本検出された。

ビット884bはビット884の西側に検出された。規模は南側がビット884と884aに切られ、北側が攪乱を受けているため長軸、短軸ともに不明である。壁高は確認面から40cmを測る。

## 遺 物 (第229図-17~20, 第231図-1, 第226図-37・38, 図版55-1・2)

ビット884aの埋土からは第229図-17は統縄文の底部。18は縄文晩期。19・20は縄文後期。

石器は第226図-37が黒曜石製の削器。38はメノウ製の管玉。

ビット884bの埋土から第231図-1は縄文晩期中葉。 (佐々木 寛)

## ビ ッ ト 885

## 遺 構 (第221図)

本ビットはF' 92 グリッドに検出された。規模はビットの東側が攪乱を受けているため長軸は不明であるが短軸約0.90mの楕円形を呈するものと思われ、壁高は確認面から50cmを測る。床面からは遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出された。

遺物 (第231図-2)

第231図-2は埋土出土の縄文晩期。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 886

遺構 (第233図)

本ピットはA'93グリッドに検出された。規模は長軸約1.60m、短軸約1.46mの楕円形を呈する。壁高は確認面から43cmを測る。

遺物 (第231図-3・4)

第231図-3・4は埋土出土の縄文晩期。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 887

遺構 (第221図)

本ピットはピット854の北側に検出された。短軸は不明であるが、長軸約1.10mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は22cmを測る。

遺物 (第231図-5)

第231図-5は埋土出土の縄文晩期。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 888

遺構 (第233図)

本ピットはA'92、B'92グリッドにかけて検出された。規模は長軸約1.46m、短軸約1.36mの楕円形を呈し、壁高は確認面から44cmを測る。床面から少量であるが遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出されていることから土壌基と考えられる。

遺物 (第231図-6)

第231図-6は埋土出土の縄文晩期。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 889

## 遺 構 (第233図)

本ピットはピット888の北側に接している。規模は長軸約2.30m、短軸約1.96mの楕円形を呈する。壁高は確認面から68cmを測る。床面から壁かであるが遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出されていることから土壌基と考えられる。

## 遺 物 (第231図-7~10, 第232図-1・2, 図版55-3・4)

第231図-7は統縄文文字津内Ⅱa式。8・9は縄文晩期中葉。10は爪形文をもつ縄文晩期前葉。すべて埋土出土。

第232図-1は無茎石鏃。2は両面加工ナイフ。いずれも黒曜石製。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 890

## 遺 構 (第230図, 図版55-5)

本ピットは127b号堅穴の床面精査中に検出された。調査の結果127b号堅穴より新しく127b号堅穴とはほぼ同一の層から堅穴の壁を切って掘り込まれていたものと考えられる。規模は径約0.80mの円形を呈し、壁高は127b号堅穴床面から38cmを測る。埋土中の暗褐色砂層から第231図-11の土器が出土し、その下から礫が3点検出されている。床面には遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出されている。遺存体の南側かわ歯骨が出土している。頭部の上や周辺からは琥珀製の平玉が30点、遺存体の北側の床面から石器2点と黒曜石のフレークが2点出土している。石器とフレークの下からカワシンジュ貝が2点検出されている。

## 遺 物 (第231図-11, 第232図-3~8, 図版55-6~10)

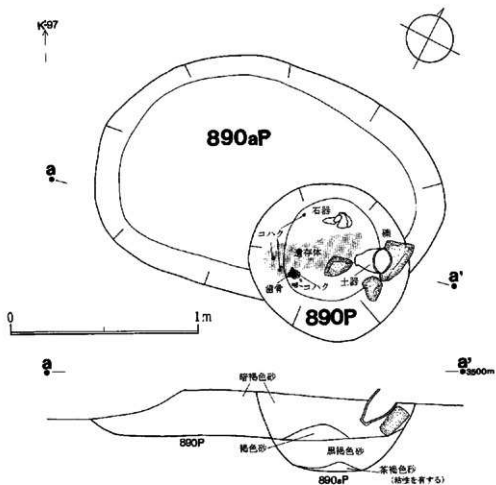
第231図-11は埋土出土の上器。口径13.2cm、器高17.8cm。口唇部に刻みをもち、1対の小突起と2個1対の小突起を配す。口縁部には2条の隆帯を巡らせ、突起の下には同心円文を施し、隆帯で連結している。胴上部は横走縄文を、胴下部は縦走縄文を地文としている。統縄文後北C<sub>1</sub>式。

石器は第232図-3がナイフ。4・7・8が削器。いずれも黒曜石製。5・6は琥珀製の平玉。

## 小 括

本ピットの頭位は南方方向である。時期は出土土器から統縄文後北C<sub>1</sub>式と考えられる。

(佐々木 寛)



第230図 ピット890、890a 平面図

## ピット 890a

### 遺 構 (第230図)

本ピットはピット890の北西側に位置し、127b号竪穴の床面精査中に検出された。規模は長軸約1.85m、短軸約1.25mの楕円形を呈し、壁高は127b号竪穴床面から15cmを測る浅い皿状である。埋土は暗褐色砂1層のみである。

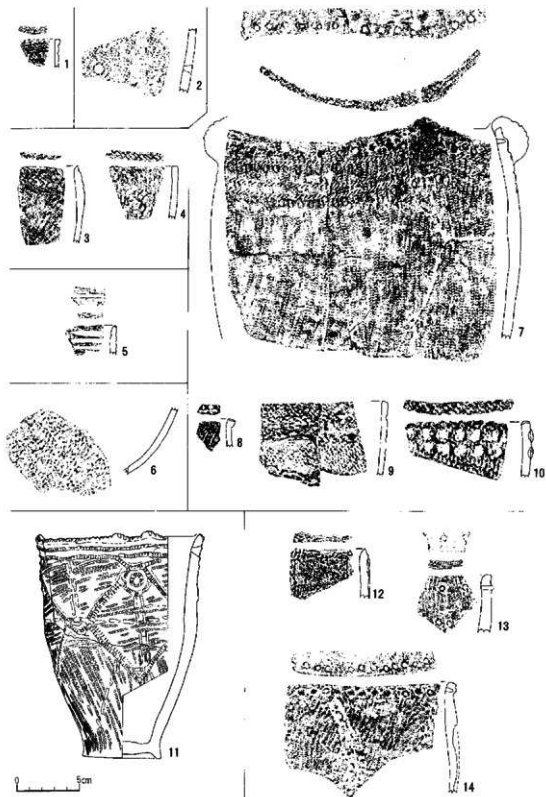
### 遺 物 (第231図-12~14, 第232図-9・10)

第231図-12は統縄文字津内Ⅱb式。13・14は突瘤をもつ統縄文字津内Ⅱa式。

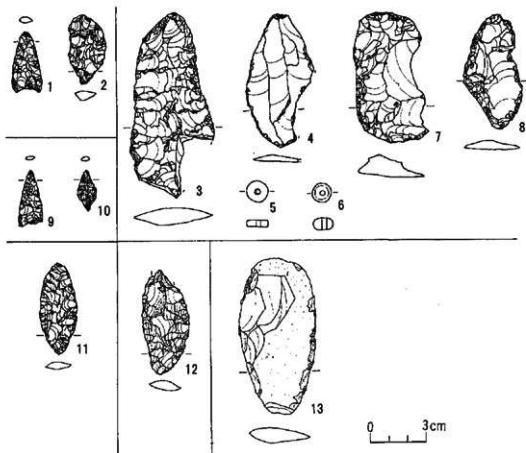
石器は第232図-9が無茎石鏃、10が有茎石鏃。黒曜石製。

(佐々木 寛)





第231図 ビット864b埋土(1)、885埋土(2)、886埋土(3・4)、887埋土(5)、888埋土(6)、889埋土(7~10)、890埋土(11)、890a埋土(12~14)出土土器



第232図 ビット889埋土(1・2)、890床面(3・4)・遺体上(5・6)・埋土(7・8)、890a埋土(9・10)、895埋土(11)、896a埋土(12)、897埋土(13)出土石器・琥珀玉

## ピット 891・891a

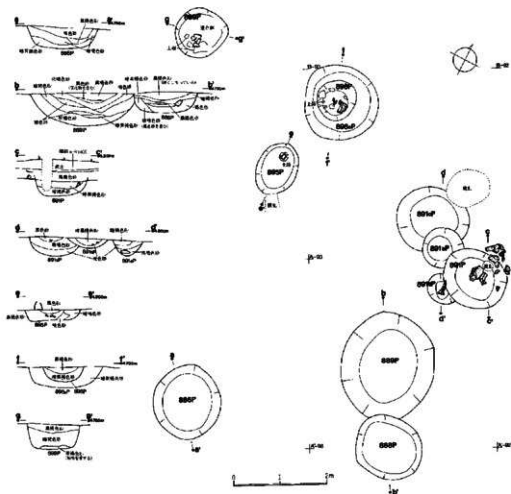
### 遺構 (第233図)

ビット891はA'92グリッドにある。規模は長軸約1.40m、短軸約1.18mの楕円形を呈する。壁高は確認面から32cmを測る。ビット上面には礫が5点出土している。

ビット891aはビット891の南西側に位置し、規模は径約0.60mの円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から33cmを測る。床面直上の黒褐色砂層から礫が2点出土している。

### 遺物 (第234図-1~4)

ビット891の埋土から第234図-1~4が出土。1は縄文後北C<sub>2</sub>・D式。2は縄文文字津内Ⅱb式。3・4は縄文晩期。4は底部。  
(佐々木 寛)



第233図 ビット886、888、889、891、891a、891b、891c、895、896、896a、899平面図

## ビット 891b・891c

### 遺 構 (第233図)

ビット891bはビット891の西側にあり、規模は径約0.85mの円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から18cmを測る。

ビット891cはビット891bの北西側にあり、規模は長軸約1.54m、短軸約1.30mの楕円形を呈し、壁高は確認面から40cmを測る。

遺物 (第234図-5~8)

ビット891bからは第234図-5・6は縄文晩期。

ビット891cからは第234図-7・8は縄文晩期。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 892

遺構 (第21図)

本ビットは123b号堅穴の床面精査中に検出された。規模は長軸約1.00m、短軸約0.90mの楕円形を呈し、壁高は123b号堅穴の床面から25cmと浅い皿状を呈する。 (佐々木 寛)

## ピ ッ ト 893・893a

遺構 (第214図)

ビット893はH'95グリッドに位置する。規模は長軸約1.56m、短軸約1.26mの楕円形を呈する。壁高は確認面から57cmを測る。

ビット893aはビット893の南西側に検出された。規模は短軸は不明であるが長軸約1.40mの楕円形を呈するものと思われる。埋土は黒褐色砂1層のみである。

遺物 (第234図-9-14)

ビット893から第234図-9~11は縄文晩期。12・13は縄文後期。13は堂林式。

ビット893aからは第234図-14が縄線文をもつ縄文晩期中葉。 (佐々木 寛)

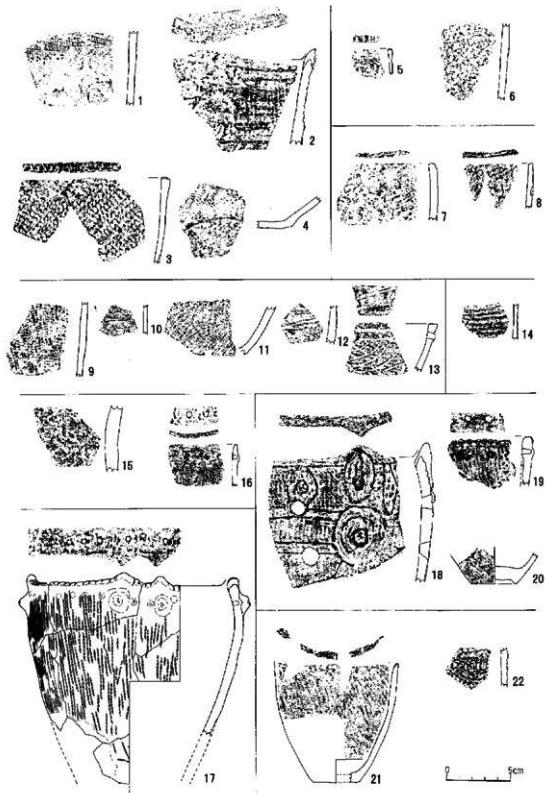
## ピ ッ ト 894

遺構 (第182図)

本ビットは151号堅穴の床面精査中に検出された。規模は長軸約1.46m、短軸約1.60mの楕円形を呈する。壁高は151号堅穴の床面から12cmを測る。埋土は黒褐色砂層1層のみである。

遺物 (第234図-15・16)

第234図-15・16は埋土出土。15は統縄文初頭。16は統縄文宇津内Ⅱa式。 (佐々木 寛)



第234圖 ビット891埋土(1~4)、891b埋土(5・6)、891c埋土(7・8)、893埋土(9~13)、  
893a埋土(14)、894埋土(15・16)、895埋土(17)、896埋土(18~20)、896a埋土  
(21・22)出土土器

## ピ ッ ト 895

### 遺 構 (第233図, 図版56-1)

本ピットはA93グリッドに位置する。規模は長軸約1.16m、短軸約0.83mの楕円形を呈し、壁高は確認面から24cmを測る。ピット上面から第234図-17の上器が伏せた状態で出土している。

### 遺 物 (第234図-17, 第232図-11, 図版56-2・3)

第234図-17はピット上面から出土した土器で底部を欠くため口径は15.8cmあるが器高は不明である。口唇部に2個1対の小突起があり、その中間にも1個1対の小突起がある。2個の突起の下には2個のボタン状貼付文があり、1個の突起の下にも1個のボタン状貼付文がある。口縁部には突瘤が施されている。統縄文字津内Ⅱa式である。

石器は第232図-11が黒曜石製の片面加工ナイフ。

### 小 括

本ピットはピット上面から統縄文字津内Ⅱa式の土器が出土していることからこの時期のものと考えられるが断定はできない。遺存体が検出されていないことから土壌葎よりも他の用途をもったピットの可能性がある。(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 896・896a

### 遺 構 (第233図)

ピット896はピット895の北側約0.60mに位置する。規模は径約0.85mの円形を呈し、壁高は確認面から27cmを測る。埋土中から土器と礫が出土している。

ピット896aはピット896の外側に検出された。規模は径約1.60mの円形を呈し、壁高は確認面から44cmを測る。埋土は暗茶褐色砂層1層のみである。

### 遺 物 (第234図-18~22, 第232図-12)

ピット896から第234図-18は統縄文字津内Ⅱb式。19は統縄文字津内Ⅱa式。20は統縄文初頭の底部。

ピット896aからは第234図-21は統縄文初頭。22は縄文晩期中葉。

石器は第232図-12がメノウ製のナイフ。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 897

## 遺 構 (第93図)

本ピットは153号堅穴の西壁上に検出された。規模は北側が攪乱を受けているが長軸約1.40m、短軸約1.10mの楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から34cmを測る。埋土の部には少量ではあるがベンガラが認められ、床面からは遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出されている。

## 遺 物 (第232図-13, 図版56-4)

石器は第232図-13が玄武岩製の削器。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 898

## 遺 構 (第93図)

本ピットは153号堅穴の床面精査中に検出された。南側の大半が攪乱を受けているため規模、形態ともに不明である。壁高は153号堅穴の床面から35cmを測る。

遺物は出土していない。

(佐々木 寛)

## ピ ッ ト 899

## 遺 構 (第233図)

本ピットはB93グリッドに位置する。規模は径約1.10mの不整円形を呈し、壁高は確認面から53cmを測る。埋土の暗褐色砂から第235図-2の土器が出土している。床面には遺存体と思われる粘性をもった茶褐色砂が検出され、頭位は東方向と思われる。

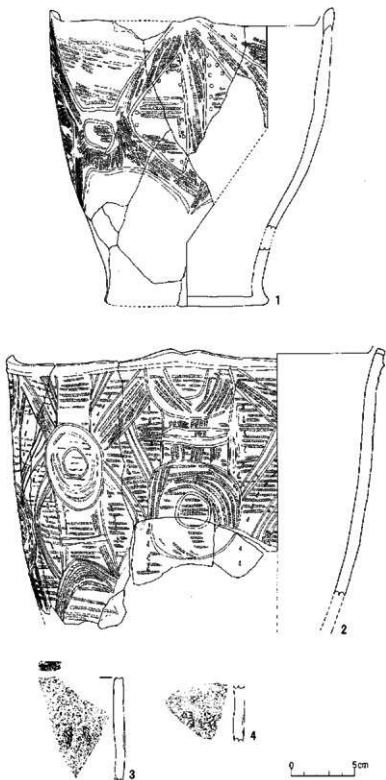
## 遺 物 (第235図, 図版56-5・6)

土器すべて埋土出土。第235図-1は口縁部に4個の突起をもち、突起から真下と逆「V」字状に2本1組の微隆帯を垂下させ、途中で連結する。微隆帯の横に円形刺突文を配し、胴上部は横方向の縄文を施す。2は胴部には同心円文が施され、微隆帯で連結されている。胴上部は縄文が施されている。1・2ともに統縄文後北C<sub>1</sub>式。3・4は縄端匠痕文を施した縄文晩期中葉。

## 小 括

本ピットの頭位は遺存体の状況から東方向と考えられる。時期は埋土から統縄文後北C<sub>1</sub>式の土器が出土していることからこの時期のものと考えられる。

(佐々木 寛)



第235図 ビット899埋土(1~4)出土土器



## 埋 甕 7

## 遺 構 (第236図, 図版57-1)

本埋甕はJ'92, K'92グリッドにある。掘り方の規模は径約0.65mの円形を呈する。壁高は確認面から約30cmである。埋甕と思われる土器の口縁部は欠失している。土器の中からは遺存体は検出されていない。

## 遺 物 (第237図)

口縁部と底部は欠失しているため口径、器高ともに不明である。胴部は縦位の縄文のみである。統縄文字津内系の特人土器。

## 小 括

出土土器から統縄文字津内式期と考えられる。 (佐々木 寛)

## 埋 甕 8

## 遺 構 (第236図, 図版57-2)

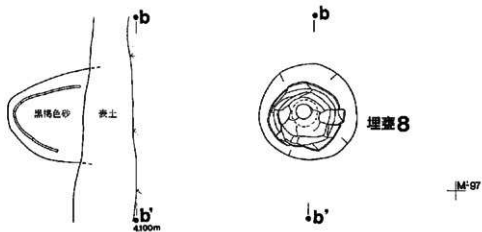
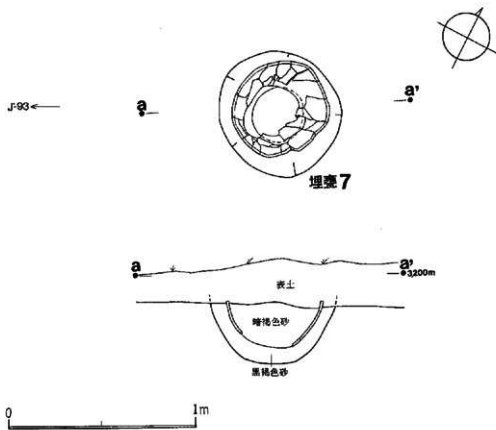
本埋甕はM'97グリッドにあり、掘り方の規模は径約0.50mの円形を呈する。壁は丸みをもって立ち上がり、壁高は確認面から40cmを測る。埋甕と考えられる土器の口縁部は欠われており、胴部の一部は内側に倒れた状態で検出された。

## 遺 物 (第238図)

口縁部は欠失しているため口径、器高ともに不明であるが、胴部に隆帯が見られる。

## 小 括

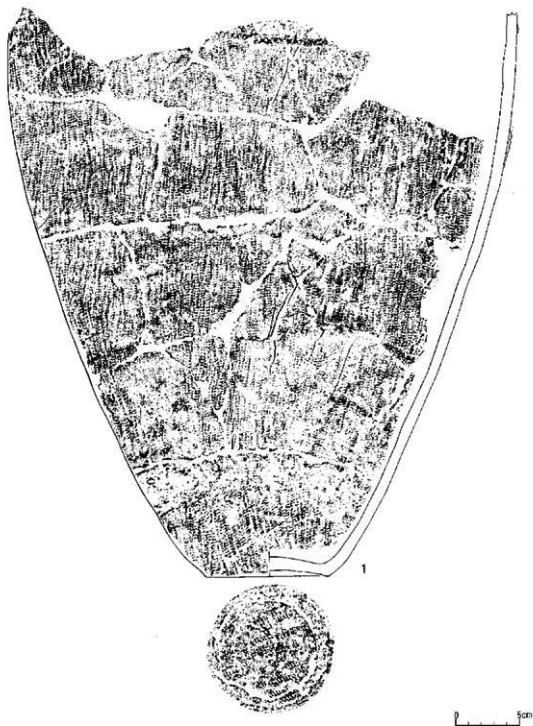
時期は統縄文字津内式期と考えられる。 (佐々木 寛)



第236圖 埋壙7・8平面図



第237圖 埋莖7



第238圖 坪臺 6

## 第Ⅵ章 まとめ

### 1. アイヌ文化期

本時期の遺構には擦文期の121号と138号堅穴の埋土上層から検出された送り場がある。138号の送り場は樽前a火山灰の降下直後のものである。121号堅穴上層はカワシンジュ貝を主体としたもので骨製の中柄が出土。138号堅穴上層は魚骨を主体に数点のタマ貝類、カワシンジュ貝、ウバ貝で構成されている。この様な堅穴の窪みを利用した送り場は小規模で構成物も限定され、15世紀頃から指摘されている。本遺跡ではさらに未報告であるが159号堅穴も樽前a火山灰の降下直後の送り場である。121号、138号、159号堅穴は南側の常呂川岸に近く魚類の捕獲とも関連するのであろう。

### 2. 擦文文化期

本時期の堅穴は121号、122号、124号、125号、131号、138号、139号の7軒とカマドをもたない134号、8号小堅穴の2軒を調査した。焼失住居は122号、124号、125号の3軒である。各堅穴の時期は概ね宇田川編年後期に比定される。139号からはフィゴの羽口が出土している。

### 3. トビニタイ文化期

137号堅穴は長方形を呈し、中央部に長方形の石囲み炉をもつ。近接したグリッドから出土した第125図-2の土器はトビニタイⅡ群のもので、この堅穴はこの時期と思われる。炭化材、焼土が認められ焼失住居と判断される。埋土からフィゴの羽口が出土しているが本堅穴に伴うものか不明である。本遺跡からはこれまでトビニタイⅡ群とⅠ群の中間的土器が14号堅穴、51号堅穴埋土と未報告であるが擦文期の168号堅穴カマド内から出土している。トビニタイⅡ群の出土は無く遺構の検出もはじめてのことである。トビニタイⅡ群は擦文中期の段階で接触したと考えられるが、これまで擦文中期土器の出土は僅かである。

### 4. 続縄文文化期

本時期の堅穴は宇津内Ⅱa式が128a号、129c号、130号、132号、133号、133a号、135号の7軒。宇津内Ⅱb式は126号、126a号、127号、127a号、128号、129、129a号の7軒。時期不明の堅穴11軒である。

ピットで続縄文初頭と思われるのは床面に小柱穴と大型の琥珀玉をもつ718、上部から土器が出土している788b、788dと大型の琥珀玉をもつ702などは興津系と思われる。宇津内Ⅱa式は床面に小柱穴をもつ705。床面出土の818、829。上部から土器が出土した719、895。琥珀

玉をもつ850、872。の5基。宇津内Ⅱb式は埋土から土器が出土した701、866。遺存体上部から出土した722、766。床面出土の737の5基。後北C<sub>1</sub>式相当は琥珀玉30点出土した890。埋土から土器が出土した899の2基。後北C<sub>1</sub>・D式は704、709、738a、772、808の5基。5基とも東頭位であり頭部に土器が正立の状態で見られる。709からはガラス玉が出土。時期不明のピット199基である。他に時期不明であるがメノウ製の管玉が出土した884aが特筆される。

## 5. 縄文晩期

縄文晩期後葉のものは土器が出土していないものの翡翠製の勾玉2点と丸玉6点、漆製の櫛を副葬する782。翡翠製の勾玉は大洞A式が出土した213がある。大型角礫を使用した配石をもちピット内部と配石の周辺に弊舞式の土器をもつ783。同じく配石と内部に土器をもつ797a、882の4基である。他に786が縄文晩期の可能性がある。

常呂川河口遺跡発掘調査報告書は今回の上梓で5巻目となる。長期間の発掘調査及び遺物整理期間には国学院大学教授（東京大学名誉教授）藤本強、東京大学大学院人文社会系研究科教授宇田川洋、北海道教育委員会釧路市幸生、大沼忠春の各氏をはじめ多くの方々からご指導、助言を頂きました。記して感謝の意を表するしだいで。

(武田 修)

## 文 献

- 1) 宇田川 洋『アイヌ文化成立史』1988年 北海道出版企画センター

圖 版



1. 121号墓穴



2. 121号墓穴床面出土土製品



3. 121号墓穴床面出土土製品



4. 121号墓穴埋土出土土器



5. 121号墓穴埋土出土土器





1. 122号竪穴



2. 122号竪穴床面出土土器



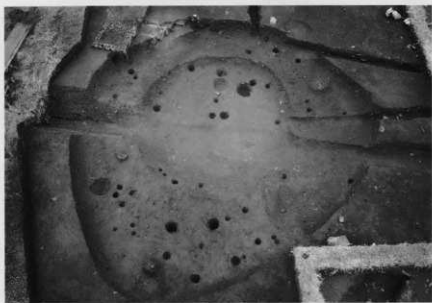
3. 122号竪穴床面出土土器



4. 122号竪穴カマド出土土器



5. 122号竪穴埋出土土器



1. 123号墓穴·123a号墓穴



2. 123号墓穴埋土出土土器



3. 123a号墓穴埋土出土土器



4. 123a号墓穴埋土出土土器



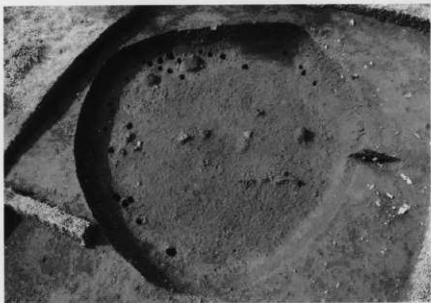
1. 124号整穴



2. 124号整穴埋土出土土器



3. 125号整穴



1. 126号整穴



2. 126号整穴床面出土土器



3. 126号整穴埋土出土土器



4. 126号整穴埋土出土土器



5. 126号整穴埋土出土土器



6. 126号整穴埋土出土土器



1. 126号墓穴出土土器



2. 126号墓穴出土土器



3. 126a号墓穴



4. 127号墓穴



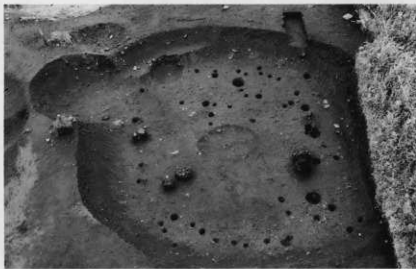
1. 127a 号整穴



2. 127a 号整穴埋土出土土器



3. 127a 号整穴埋土出土土器



4. 127b 号整穴



1. 127b 号整穴埋土出土土器



2. 128号整穴床面出土土器



3. 128号整穴



4. 128a 号整穴



1. 128a 号竖穴床面出土土器



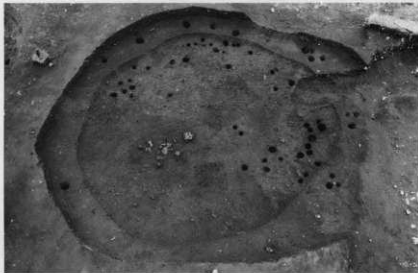
2. 129号竖穴床面出土土器



3. 129a 号竖穴床面出土土器



4. 129号竖穴



5. 129a 号竖穴





1. 129b号整穴床面直上出土土器



2. 129c号整穴床面出土土器



3. 129c号整穴床面直上出土土器



4. 130号整穴



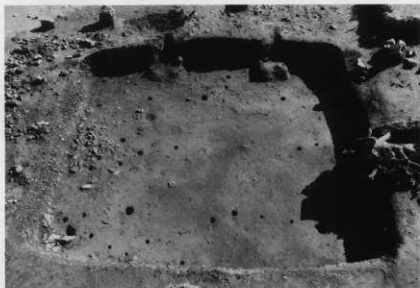
5. 130号整穴埋出土土器



6. 130号整穴埋出土土器



1. 131号竖穴遗物出土状况



2. 131号竖穴



1. 132号墜穴



2. 132号墜穴床面出土土器



3. 133号墜穴埋土上出土器



4. 133号墜穴



1. 133a 号窑穴



2. 133a 号窑穴床面出土土器



3. 133b 号窑穴



1. 134号竖穴



2. 134号竖穴床面直上出土土器



3. 135号竖穴埋土出土土器



4. 135号竖穴



1. 135a 号整穴



2. 135a 号整穴埋土出土土器



3. 135a 号整穴埋土出土土器



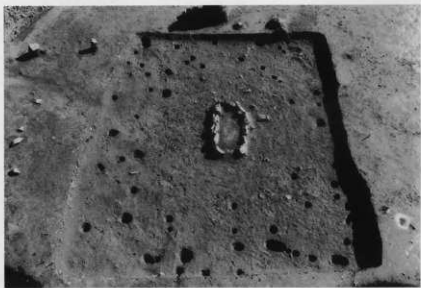
4. 135a 号整穴埋土出土土器



6. 135a 号整穴埋土出土土器



7. 136号整穴埋土出土土器



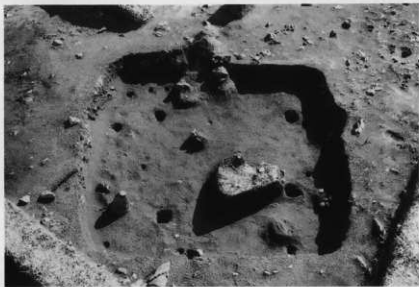
1. 137号整穴



2. 137号整穴床面出土土器



3. 137号整穴堆土出土土器



4. 138号整穴



1. 138号竪穴アイヌ彫透り場魚骨等出土状況



2. 138号竪穴土器出土状況



3. 138号竪穴床面出土土器



4. 138号竪穴カマド出土土器



5. 138号竪穴埋土出土土器



6. 138号竪穴埋土出土土製品

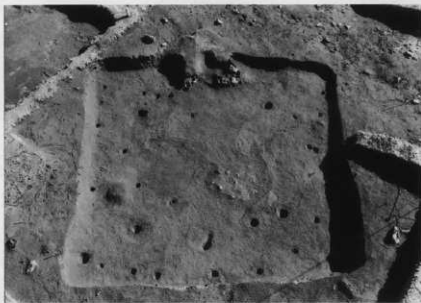


7. 138号竪穴埋土出土土製品



8. 138号竪穴埋土出土鉄製品





1. 139号竖穴



2. 139号竖穴遺物出土狀況



1. 139号竪穴床面出土土器



2. 139号竪穴床面出土土器



3. 139号竪穴床面出土土器



4. 139号竪穴埋土出土土器



5. 139号竪穴埋土出土土器



6. 139号竪穴埋土出土土器



7. 139号竪穴埋土出土土製品



8. 139号竪穴床面出土土製品



9. 139号竪穴床面出土土製品



10. 139号竪穴床面出土土製品



11. 139号竪穴カマド出土土製品



12. 139号竪穴煙道上出土土製品



13. 139号竪穴煙道上出土土製品



14. 139号竪穴埋土出土土製品



1. ビット701埋土出土土器



2. ビット701埋土出土土器



3. ビット701埋土出土土器



4・5. ビット702埋土出土石器



6. ビット702埋土  
出土琥珀玉



7. ビット704埋土出土土器



1. ビット705



2. ビット705床面出土土器



3. ビット705床面出土土器



4. ビット705床面出土土器



5. ビット705床面出土土器



1. ビット711配石



2. ビット711



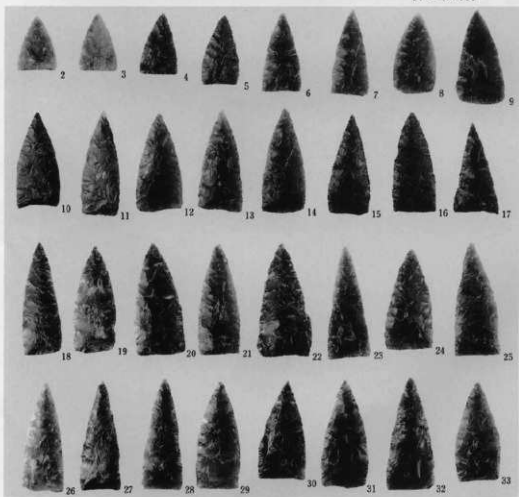
1. ビット711遺物出土状況



2～6. ビット711床面出土石器  
 7. ビット711床面出土琥珀玉  
 8. ビット711埋土出土石器



1. ビット714



2～33. ビット714床面出土石器



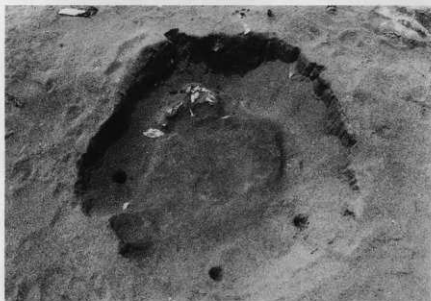




1. ビット716



2. ビット716埋土出土石器



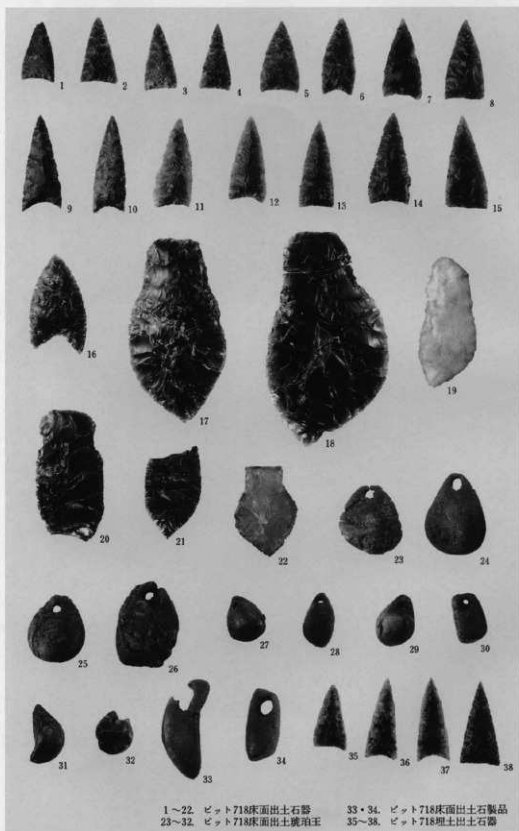
3. ビット718



1. ビット718遺物出土状況



2. ビット718遺物出土状況



1～22. ビット718床面出土石器  
 23～32. ビット718床面出土琥珀玉  
 33・34. ビット718床面出土石製品  
 35～38. ビット718埋土出土石器



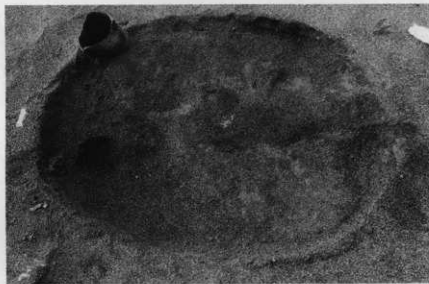
1. ビット719



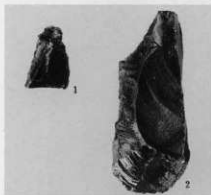
2. ビット719埋土出土土器



3. ビット722床面出土土器



4. ビット722



1・2. ビット726埋土出土石器



3. ビット736埋土出土石器



4. ビット737埋土出土石器



5. ビット737



6. ビット737床面出土土器



7. ビット737床面直上出土土器



1. ビット738a



2. ビット738a 床面直上出土器



3. ビット738a 床面直上出土器



4. ビット738a 床面直上出土器



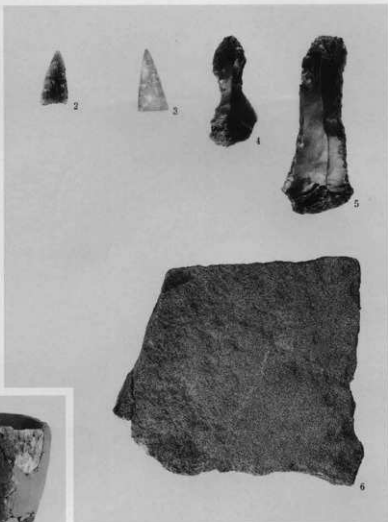
1. ビット749b 埋土出土石器



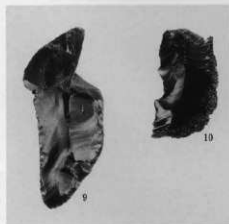
7. ビット754埋土出土石器



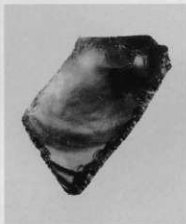
8. ビット754a 埋土出土土器



2～6. ビット752埋土出土石器



9・10. ビット756埋土出土石器



11. ビット760埋土出土石器



12. ビット762埋土出土石器



1. ビット764埋土出土土器



2. ビット766



3. ビット766埋土出土土器



4. ビット769



5. ビット769床面直上  
出土土器





1. ビット772



2. ビット772埋土出土土器



3. ビット772埋土出土土器



4. ビット772埋土出土土器



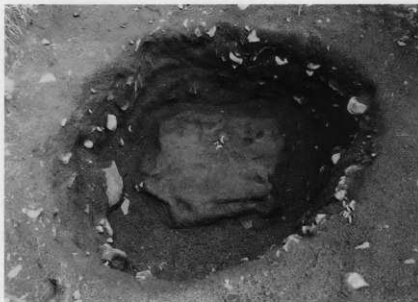
1. ビット781



2. ビット781床面直上出土土器



3. ビット781床面直上出土土器



1. ビット782



2・3. ビット782遺体上出土勾玉



4～9. ビット782遺体上出土石製品



10. ビット782遺体上出土漆製品



1. ビット783配石・周辺出土土器



2. ビット783周辺土器出土状況



1. ビット783



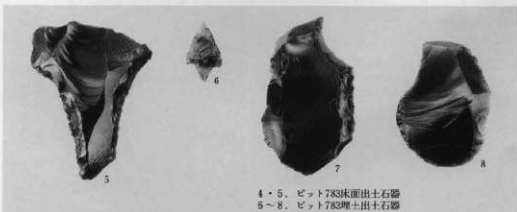
2. ビット783床面出土土器



3. ビット783床面直上出土土器



4



4・5. ビット783床面出土石器  
6～8. ビット783埋土出土石器



1. ビット783周辺出土土器



2. ビット783周辺出土土器



3. ビット783周辺出土土器



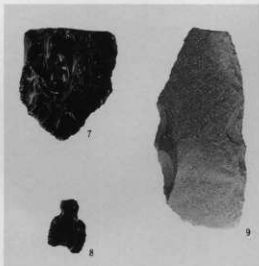
4. ビット785埋土出土石器



5. ビット786埋土出土土器



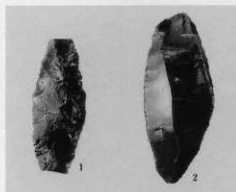
6. ビット786床面出土石器



7～9. ビット786埋土出土石器



10. ビット786床面直上出土土器



1・2. ビット786a 埋土出土石器



3. ビット788埋土出土土器



4. ビット788埋土出土土器



5. ビット788b 埋土出土土器



6. ビット788d 埋土出土土器



7. ビット788d



1・2. ビット78&d  
床面出土石器



3. ビット78&d 遺体上出土石器



4・5. ビット  
78 d 埋  
土出土石  
器



6. ビット789c 埋土出  
土石器



7. ビット795

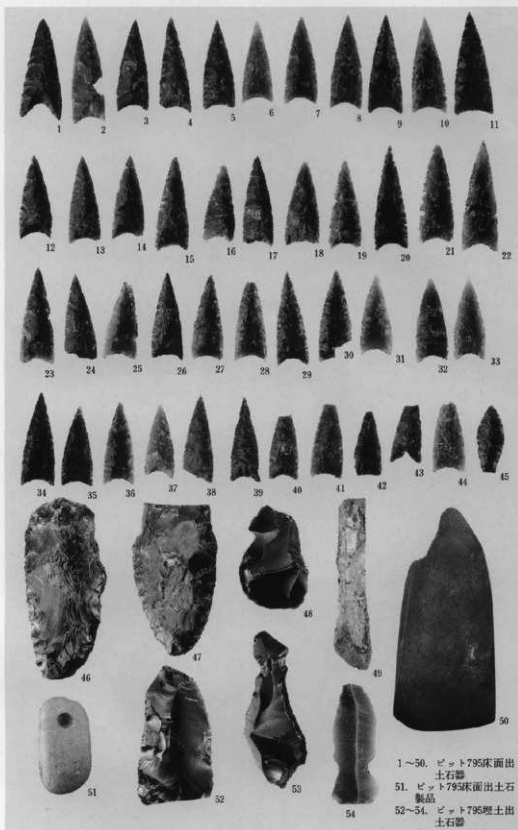




1. ビット795遺物出土状況



2. ビット795遺物出土状況





1～4. ビット797床面出土石器



5. ビット797a 配石



6. ビット797a



1. ビット797a 遺物出土状況



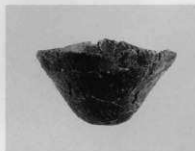
2. ビット797a 床面出土土器



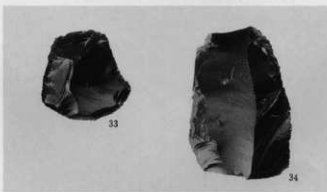
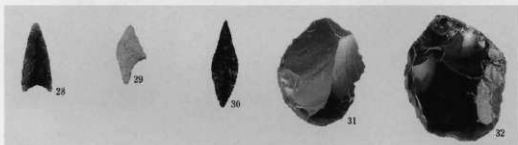
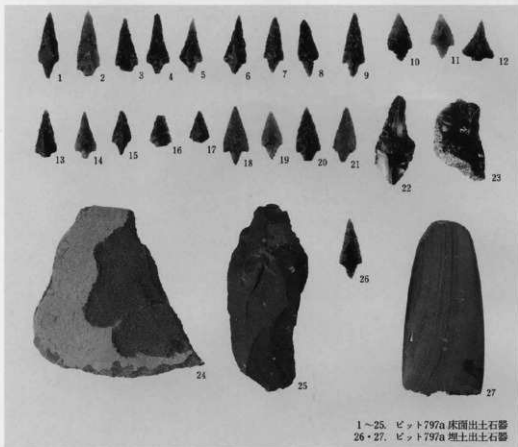
3. ビット797a 床面出土土器



4. ビット797a 床面出土土器



5. ビット797a 埋土出土土器





1. ビット808



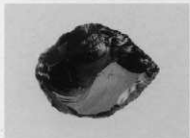
2. ビット808埋土出土土器



3. ビット808埋土出土土器



4～6. ビット808埋土出土石器



1. ビット810埋土出土石器



2. ビット814埋土  
出土石器



3. ビット818床面出土石器



4. ビット829



5. ビット829床面出土石器



6. ビット829床面出土石器



7・8. ビット829埋土出土石器



1. ビット836



2. ビット836埋土出土石器



3. ビット836埋土出土石器



4. ビット836a 埋土出土石器



5. ビット841埋土出土石器



6~8. ビット844埋土出土石器





1. ピット850



2. ピット851



1. ビット854a 埋土出土土器



2. ビット854a 埋土出土土器



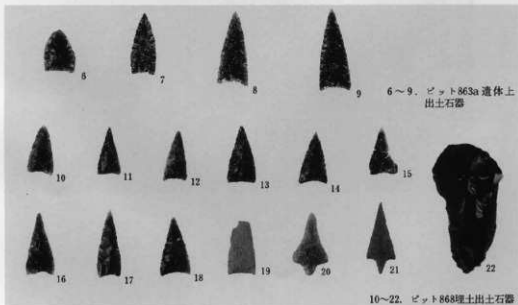
3. ビット856a 埋土出土石器



4. ビット856b 埋土出土石器



5. ビット859埋土出土土器

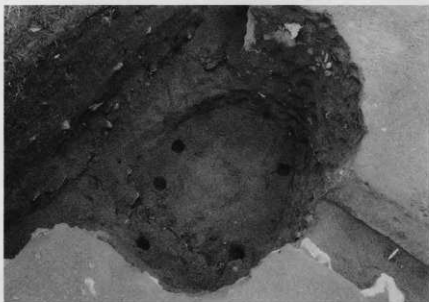


6~9. ビット863a 遺体上出土石器

10~22. ビット868埋土出土石器



1. ヒット872



2. ヒット872



1. ビット872遺物出土状況



2. ビット872床面出土土器



3. ビット872埋土出土土器



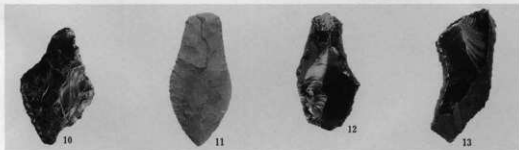
4. ビット872埋土出土土器



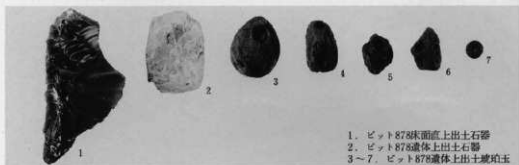
5. ビット872床面出土石器



6～9. ビット872床面出土琥珀玉



10～13. ビット872埋土出土石器



8. ビット882



9. ビット882床面出土石器



10. ビット882埋土出土石器





1. ビット884a埋土出土石器



2. ビット884a埋土出土管玉



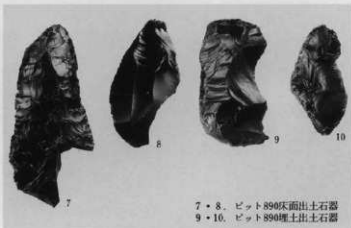
3・4. ビット889埋土出土石器



5. ビット890



6. ビット890埋土出土土器



7・8. ビット890床面出土石器  
9・10. ビット890埋土出土石器



1. ビット895



2. ビット895埋土出土土器



3. ビット895埋土出土石器



4. ビット897埋土出土石器



5. ビット899埋土出土土器



6. ビット899埋土出土土器



1. 埋窆7出土狀況



2. 埋窆8出土狀況



## 報告書抄録

ふりがな	ところがわのこういせき				
書名	常呂川河口遺跡(5)				
副書名	常呂川河口右岸掘削護岸工事に係る発掘調査報告書				
シリーズ名					
シリーズ番号					
編著者名	武田 修				
編集機関	常呂町教育委員会				
所在地	〒093-0209 北海道常呂町字土佐2-1				
発行年月日	西暦2005年3月25日				
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経
		市町村	遺跡番号		
ところがわのこういせき 常呂川河口遺跡	ところがわのこういせき 北海道常呂町字常呂	01553	I-16-128	44° 06' 58"	144° 04' 42"
調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因	所収遺跡名	種別	主な時代
平成8年～平成9年	10,200	河川改修	常呂川河口遺跡	集落包蔵地	アイヌ 捺文 トビニタイ 続縄文 縄文
主な遺構		主な遺物		特記事項	
送り場 住居跡 土壌墓		土器・石器・琥珀玉・ガラス玉など		続縄文初頭の興津式相当、宇津内Ⅱa式の土壌墓には多量の副葬品が見られる。後北C <sub>2</sub> ・Dの土壌墓は東頭位であり、ガラス玉をもつものがある。	

2005年3月24日 印刷  
2005年3月30日 発行

## 常呂川河口遺跡 (5)

—常呂川河口右岸掘削護岸  
工事に伴う発掘調査報告書—

発行者 北海道常呂町教育委員会  
印刷所 株式会社 小林印刷  
北海道北見市本町5丁目